ちくま学芸文庫

原典訳 マハーバーラタ I

第1巻（1-138章）

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

聖地サマンタパンチャカの由来　72

全百巻の内容　73

まえがき

この翻訳の出版まで

かなり前のことである。ある出版社の編集者の方から、インドの大叙事詩『マハーバーラタ』を全訳して欲しいとの依頼を受けた。『マハーバーラタ』は十八巻よりなり、十万詩節(二十万行)を含むとされる厖大な叙事詩である。ちなみに、ホメロスの二つの叙事詩を合わせても二万七千行余りである。プーナから出版された『マハーバーラタ』の「批判版」によれば、七万五千詩節弱であるが、「付録」とされる『ハリヴァンシャ』をつけ加えると九万詩節を越える。一日に十詩節ずつ訳したとして、本編を訳了するまで七千五百日かかることになる。仮りに一年間で三百日仕事できるとしても、二十五年かかる、途方もない訳業である。実際には、一年に三百日をこの仕事にあてることは不可能であろうから、四、五十年かかる恐れもある。しかし、もし一日に二十詩節、三十詩節訳すことができれば、その二分の一、三分の一の年月で訳了することにはなるが……。

その仕事は途方に暮れるような規模のものであった。それは私が四十一歳で、東京大学東洋文化研究所の助教授に着任して、間もないころのことであったと記憶している。確かにそれは、インド古典研究者として魅力的な仕事であった。四十代の初めであるから、時間的に

は全訳は可能である。もっとも健康状態が許せばの話である。現に、『マハーバーラタ』の英訳者（van Buitenen）は、三冊目の訳書を出版したところで亡くなっている。『マハーバーラタ』と並ぶ叙事詩『ラーマーヤナ』を翻訳されていた岩本裕先生は、二冊を出版されただけでこの世を去られた。この種の仕事は寿命をちぢめるものなのかも知れない。

それに、この仕事にかかりきりになったら、他の研究活動はほとんどできないであろう。いわばこの翻訳と心中しなければならないのであった。他にやりたいこともあったので、大いに迷った。しかしながら、『マハーバーラタ』は、心中の相手としては不足ない超大作であり、その翻訳を出版する機会に恵まれることは稀有のことなので、私は可能な限りこの仕事に専念しようという、並々ならぬ決意をした。

ところが、第一巻目の訳出がかなり進み、後半部を訳していたころのことであったと思う。翻訳を依頼した編集者の方が突然やって来られ、会社の方針として、全訳を出版することはとても無理で、出せるとしても、ダイジェスト版で一、二冊のみであると、沈痛な面持ちで伝えられた。会社で決定したことであるから、どうしようもなかった。しかし、『マハーバーラタ』と心中する覚悟で始めた仕事であり、気分が乗っていた時なので、何とか訳業を継続したいと考え、以前から親しくしていた筑摩書房の平賀孝男氏に相談した。そして山崎利男先生のお口ぞえもあって、筑摩書房がこの採算を度外視した出版を引き受けて下さるということになった。

私は気力を取りもどし、一気に第三巻の前半までを訳し終えたが、種々の事情で出版が遅れた。その間、ピーター・ブルック演出の『マハーバーラタ』の日本公演があり、この大叙事詩の名は、日本でより一般的に知られるようになった。そして、おそらくその公演に触発されて、山際素男氏が、一つの英訳に基づいて、全体の日本語訳を出版された（全九巻、一九九一—九八、三一書房）。この訳は原典に忠実な訳ではないが、それだけに読みやすく、この叙事詩の全体像を知るためには有益であった。この書の出版によっても、『マハーバーラタ』の知名度は高まったと思われる。

そのころ、私は自訳の出版を諦めかけていた。やはり、現在の日本の出版事情では、必ずしも利益を期待できない、このような大部の古典の原典訳を出版することは無理なのであろうかと考えた。そこで一時、この叙事詩の訳出の仕事を中断し、その一部である有名な聖典『バガヴァッド・ギーター』の訳（岩波文庫）を出版したり、インドの古典詩論についての研究論文をまとめたりする仕事に没頭した。『ギーター』の翻訳は、私に一大転機をもたらし、また、古典詩論の研究は大部の研究書として結実し、平成十一年の春に出版されたから、私にとって、『マハーバーラタ』の翻訳の出版が延び延びになったということは、結果として望外の幸せであった。そして、『マハーバーラタ』の翻訳の方も、ここについに出版されることになった。しかも、ちくま学芸文庫として刊行されるということで、比較的安価で一般の読者に購読していただけるということは、まことに喜ばしいことである。

『マハーバーラタ』について

インド古典において、『マハーバーラタ』は最も有名な作品の一つであり、『ラーマーヤナ』とともに、二大叙事詩として知られている。この叙事詩は、前述のように、十八巻十万詩節（実際には約七万五千詩節）よりなる大作で、約一万六千詩節よりなる『ハリヴァンシャ』（ハリの系譜）がその付録とされる。作者は聖者ヴィヤーサであると伝えられる。成立年代は定かではないが、一般に、紀元前四世紀ごろから紀元後四世紀ごろにかけて、次第に現在の形を整えていったと推定されている。バラタ族に属する、パーンドゥの五王子（パーンダヴァ）とクルの百王子（カウラヴァ）との間の確執と、それに続く戦争が主筋となっている。戦争の結果、五王子側が一応の勝利をおさめるが、勝者の側も、最後には死んで天界へ赴く。後代の詩論家は、この叙事詩は寂静の情趣（シャーンタ・ラサ）と解脱（モークシャ）を主題にしていると説いた。

ところがその主筋は全巻の五分の一ほどにすぎない。その主筋の間に、おびただしい神話、説話、物語、論説が挿入されている。有名な『バガヴァッド・ギーター』のような、宗教的思想的な文献が編入されている場合もある。むしろこの叙事詩の魅力はそうした挿入部分にあると言えるかも知れない。本書は、当時の宗教、思想、文化、社会などに関するありとあらゆる情報を伝える百科全書的な書である。そして、そこにはまさにインドそのものの混沌とした世界が存する。まさにこの叙事詩の中に、ありとあらゆる情報を含むこの作品の性格を示す一詩節が存する。

「ここに存するものは他にもある。しかし、ここに存しないものは、他のどこにも存しない。」（一・五六・三三）

マハーバーラタの梗概

以下に、叙事詩『マハーバーラタ』の梗概をやや詳しく紹介する。主として拙訳『バガヴァッド・ギーター』（岩波文庫）の「まえがき」と、C. V. Narasimhan, *The Mahābhārata* (New York : Columbia University Press, 1965) とを参照した。

バラタ王の孫であるクル王の後裔をクル族（カウラヴァ）という。クル王の息子であるプラティーパ王の息子シャンタヌ王は、森で美しい娘を見かけて求婚した。娘は承知したが、自分が何をしても決して咎めないように、という条件をつけた。彼女は七人の息子を生んだ。しかし彼女は、生まれて来る息子たちを次々とガンガー川（ガンジス）に投げ込んだ。王は約束を守って何も言わなかったが、八番目の息子が生まれた時、ついに彼女を制止した。彼女は、自分はガンガーの女神であると明かし、息子を連れて立ち去った。後に女神は王の願いを聞き入れ、その八番目の息子（デーヴァヴラタ）を王に渡した。

ある日、シャンタヌ王はヤムナー河畔で美しい漁師の娘サティヤヴァティーに出会った。王が娘の父親に娘を妃にしたいと頼むと、父親は、娘との間に生まれる息子を王位継承者にすることを条件とした。王が悩んでいるのを知り、息子のデーヴァヴラタはその条件を受け

入れて、父のために娘を連れて来た。そして彼は、子孫を作らないことを約し、一生独身を通す誓いを立てた。それ以来、彼はビーシュマ（恐るべき人）と呼ばれるようになった。

やがてシャンタヌ王とサティヤヴァティーの間に、チトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤという二人の息子が生まれた。シャンタヌが死んだ時、ビーシュマは長男を王位につけたが、彼は力を誇り、ガンダルヴァ（半神の一種）の王と戦って殺された。そこでビーシュマはヴィチトラヴィーリヤを王位につけた。ビーシュマはこの王の妃を得ようと、カーシ国へ行き、婿選び式の会場において、三人の王女を強奪した。長女のアンバーはシャールヴァ王の妻になると決めていたので、ビーシュマは彼女を去らせ、他の二人の王女、アンビカーとアンバーリカーを王妃とした。七年後にこの王は夭逝した。

王母サティヤヴァティーは、王家の存続のために二人の寡婦を妻にすることをビーシュマに頼んだが、彼は独身の誓いを立てていたので承知しなかった。彼は故事にのっとり、高徳のバラモンを招待して寡婦たちに子孫を作らせることを進言した。するとサティヤヴァティーは、自分の過去の秘密を告白した。

かつて彼女がヤムナー川で父親の舟に乗っていた時、パラーシャラという聖者が舟に乗った。聖者は欲情して彼女と交わり、聖仙ヴィヤーサが生まれた。

サティヤヴァティーはこのヴィヤーサを呼び出して、息子の寡婦たちに子を作らせようと考えたのであった。ヴィヤーサはまずアンビカーの寝室を訪れた。彼女は彼の恐ろしい姿を見て眼を閉じたので、彼女の生んだ息子ドリタラーシトラは盲目であった。次にヴィヤーサ

はアンバーリカーの寝室を訪れた。彼女は恐怖のあまり青ざめた。そのため、彼女の生んだ息子は蒼白となり、パーンドゥ（蒼白）と名づけられた。

やがてサティヤヴァティーは、再びアンビカーを聖仙のもとにやった。しかし彼女は聖仙の醜さと悪臭に耐えられず、召使女を派遣した。召使女はうやうやしく聖仙に仕え、高徳な賢者ヴィドゥラを生んだ。

ビーシュマは、ガーンダーリーを盲目のドリタラーシトラの妻に迎えた。彼女は夫に忠実であろうと望み、その両眼を布で覆った。やがて彼女は妊娠したが、二年の間、出産することはなかった。その間、パーンドゥの妻クンティーは長男を生んでいた。ガーンダーリーが自分の腹を強く打つと、鉄の球のような肉の塊が生まれた。ヴィヤーサの指示により、肉の塊は百に分けられ、ギー（バター状の乳脂）を満たした容器の中に二年間保存された。その結果、ドゥルヨーダナをはじめとする百人の息子たちが生まれた。

ヤドゥ族の長シューラには、ヴァスデーヴァという息子と、プリターという娘がいた。シューラはプリターを、従兄弟のクンティボージャの養女とした。そこで彼女はクンティーと呼ばれるようになった。

ある時、クンティーはあるバラモンを満足させたので、バラモンは彼女に神々を呼び出す呪文を教えた。彼女は好奇心から太陽神を呼び出した。太陽神は彼女に息子を授けたが、彼女は人々の目を恐れ、生まれた子を川に投じた。その子は御者（スータ）に拾われて育てられた。それが勇士カルナである。その後、クンティーはパーンドゥの妻となった。

パーンドゥには、クンティーの他に、マードリーという妻がいた。ある日、彼は鹿の姿をして妻と交わっていた隠者を、鹿と間違えて射た。隠者は、「お前も妻と交わった時に死ぬであろう」と呪って死んだ。

クンティーは息子を作れないパーンドゥの指令に従い、呪文を用いてダルマ神を呼び出して息子を授かった。それがユディシティラである。彼女は更に、風神を呼び出してビーマセーナを生み、続いてインドラ神を呼び出してアルジュナを生んだ。彼女はまた、夫の要請により、マードリーのためにも神を呼ぶことにした。マードリーはアシュヴィン双神から、ナクラとサハデーヴァという双子を授かった。

ある日、パーンドゥはマードリーと交わろうとして、隠者の予言通り死んだ。マードリーは双子をクンティーに託して火葬の火に入った。パーンドゥの息子たちは、ドリタラーシトラの息子たちとともに成長したが、あらゆる点で彼らを凌駕した。ドリタラーシトラの長子ドゥルヨーダナは、パーンドゥの息子たちに対して敵意を抱いた。

聖者バラドゥヴァージャの息子ドローナは武術に秀でていた。ビーシュマは彼をクル族の武術師範にした。勇猛な王子たちのうちでも、アルジュナが最も武芸に優れていた。ある時、王子たちは師の命により、ドリタラーシトラ王の御前で武技を披露していた。アルジュナが卓越した武技を示していた時、カルナ（実はアルジュナたちの兄）が現われ、アルジュナに挑戦した。パーンドゥの五王子に嫉妬していたドゥルヨーダナは喜び、カルナと永遠の友情を誓い、彼をアンガ国の王とした。

ドゥルヨーダナとその一味は、パーンダヴァ（パーンドゥの息子）たちを殺す機会をうかがっていた。彼は燃えやすい材料（ラック）で宮殿を作らせ、パーンダヴァたちがそこで寝ている間に火をつけさせた。しかし彼らはヴィドゥラを通じてすでに危険を察知し、地下道を通って退避した。人々は彼らが焼死したものと思いこんでいた。彼らは一時身を隠すことにし、南方に向った。

パーンチャーラ国王ドルパダは、娘のドラウパディー（クリシュナー）のために婿選び式を行った。ドルパダは剛弓を作らせ、空中に金の的を作り、その弓で的を射抜いた者に娘を与えると告げた。諸王が挑戦したが、誰もその弓を引くことができなかった。その時、バラモンに変装していたアルジュナが登場し、弓を引き絞って的を射抜いた。

アルジュナたちはドラウパディーを得て母のもとに帰り、「この施物を得ました」と告げた。母は見ないで、「みなで分けなさい」と命じた。こうして、ドラウパディーは五王子共通の妻となった。

パーンダヴァ兄弟がドラウパディーを妻としたという知らせは、ドリタラーシトラ王のもとに伝わった。ドゥルヨーダナやカルナは、パーンダヴァと戦うことを主張したが、ビーシュマやドローナの忠告により、ドリタラーシトラはパーンダヴァの長子ユディシティラに王国の半分を与えた。ユディシティラはインドラプラスタの都にすばらしい宮殿を建てて弟たちとともに統治した。

アルジュナは結婚に際しての規定を破ったので、十二年間の巡礼に出た。旅も終わりに近

づいた頃、彼はプラバーサでヴァスデーヴァの息子である英雄クリシュナに会った。クリシュナは彼を歓迎し、ドゥヴァーラカーにある自分の家に招待した。ある日アルジュナは、クリシュナの妹のスバドラーを見初めた。彼はクリシュナの助言に従い、彼女を強奪して妻とし、彼女とともにインドラプラスタに帰国した。やがてスバドラーはアビマニユという息子を生んだ。（以上、第一巻）

偉大な建築家である阿修羅マヤは、ユディシティラのために、前代未聞の宮殿を造った。ユディシティラはそこに諸王を招待した。ドゥルヨーダナはそこで数々の失敗をして嘲笑され、怨恨を抱くとともに嫉妬に苦しんだ。叔父のシャクニの助言により、彼はユディシティラと賭博をして彼を滅ぼそうと企て、ためらう父王ドリタラーシトラを説得した。ドリタラーシトラは集会場を作らせ、パーンダヴァ兄弟を招待した。

賭博の達人であるシャクニがユディシティラと勝負をした。ユディシティラは負け続け、全財産と王国を取られ、弟たち、自分自身、ドラウパディーをも賭けて取られた。ドゥルヨーダナの弟のドゥフシャーサナは、ドラウパディーの髪を引っぱって集会場に連れて来て、奴隷と呼んで嘲った。それから彼は、彼女の衣服をはぎ取った。

ビーマは怒って、戦闘においてドゥフシャーサナの胸を引き裂き、血を飲むことを誓った。そしてまた、ドラウパディーの面前で左腿を露出して嘲ったドゥルヨーダナに対しても、戦闘においてその腿を砕くことを誓った。老王のドリタラーシトラは、ドラウパディーの願い

をかなえ、パーンダヴァを解放し、王国と財産を返した。

ドゥルヨーダナたちは老王の処置を不満とし、再度ユディシティラに賭博を挑んだ。今度は、敗者は十二年間森で暮らし、十三年目には人に知られぬように生活しなければならない、という条件であった。ユディシティラはまたもシャクニに敗れ、妻や弟たちとともに苦行者の身なりをして森へ出発した。老いたクンティーはヴィドゥラの家に残ることとなった。（以上、第二巻）

アルジュナは兄の命により、インドラ神（帝釈天）から武器を入手するためにヒマーラヤに行った。彼はインドラキーラにおいて一人の苦行者に出会った。それはインドラであった。すべての武器の秘密を教えて欲しいと頼む彼に対し、インドラはまずシヴァ神に会えと指示した。

アルジュナがシヴァを探していた時、巨大な猪が走って来た。アルジュナが猪を射ようとすると、キラータ（山岳民）が現われて、「自分が最初に猪を見つけたから、これは自分の獲物である」と告げた。アルジュナはかまわずに射た。同時にキラータも射た。二本の矢は同時に猪に命中した。猪は悪魔ムーカの姿を現わして死んだ。アルジュナとキラータは戦闘状態に入った。アルジュナは勇敢に戦ったが、ついにキラータに打たれて気を失った。キラータ、実はシヴァ。シヴァは、彼の勇気に満足し、パーシュパタという兵器と、神弓ガーンディーヴァを与えた。シヴァの祝福を受けた後、アルジュナはインドラの都アマラーヴァティーに行

った。インドラは彼を歓迎し、種々の強力な武器を授けた。
一方、他のパーンダヴァたちはカーミヤカの森に滞在した。聖者ブリハダシュヴァは、失意のユディシティラのために、賭博で王国を失ったナラ王の物語をして慰めた。ある日、聖者ローマシャが訪れ、アルジュナの消息を伝えるとともに、諸聖地を巡礼するように勧めた。ユディシティラたちが多くの聖地を巡礼し、ヒマーラヤ山中を旅していた時、アルジュナが一行に合流し、自分の冒険をすべて語った。（以上、第三巻）

パーンダヴァは十二年間の亡命生活を終え、協約通り、十三年目を人に知られずに過ごすことになった。彼らはマツヤ国のヴィラータ王の宮殿に、素姓を隠して住むことにした。ユディシティラは賭博師に、ビーマは料理人になった。アルジュナはブリハンナダーという名の女形となり、王女ウッタラーなどに音楽や舞踊を教えた。ナクラは馬番となり、サハデーヴァは牛飼になった。ドラウパディーは王妃の召使となった。

ある日、将軍のキーチャカがドラウパディーに言い寄ったが拒絶され、姉である王妃にとりなしを頼んだ。王妃の命によりドラウパディーがキーチャカのもとに使いに行くと、彼は交際を迫り、彼女の腕をつかんだ。彼女は宮廷に逃げ込んだが、キーチャカは彼女の髪をつかみ、みなの前で足蹴にした。彼女は怒り、ビーマにキーチャカを殺すように依頼した。翌日、キーチャカは再びドラウパディーに言い寄った。彼女は舞踊場で夜中に会う約束をした。彼が舞踊場に来た時、そこに隠れていたビーマは彼を殺した。

トリガルタ国王は、将軍キーチャカが死んだことを聞いて、マツヤ国に戦争をしかけて来た。ビーマは敵王を捕えた。ヴィラータ王はトリガルタ軍に奪われた牛を取りもどすために、アルジュナを除く四名のパーンダヴァを連れて、トリガルタ軍を追跡した。その間、ドゥルヨーダナに率いられたクル軍はマツヤ国を攻囲し、多数の牛を捕えた。ウッタラ王子は敵軍と対決する覚悟をし、女形のブリハンナダーに変装したアルジュナを御者として出陣した。アルジュナは正体を明かし、脅える王子を励まして御者とし、自ら勇敢に戦って牛を取りもどし、クル族の軍を敗走させた。

パーンダヴァ兄弟の正体を知ったヴィラータ王は、数々の非礼を詫び、娘のウッタラーをアルジュナに与え、ユディシティラに全王子と財産を捧げた。アルジュナは王女を息子アビマニユの妻とした。（以上、第四巻）

クリシュナは、パーンダヴァの十三年の亡命生活が完了したので、カウラヴァ（クル族）に対し、王国の半分の返還を要求するように提案した。協議の結果、和戦両様の態勢で臨むことになった。ドゥルヨーダナとアルジュナは、クリシュナのもとをたずねて、それぞれ援助を依頼した。クリシュナは、自分の強力な軍隊か、あるいは非戦闘員として参加する自分か、どちらか一方を選べと告げた。アルジュナはクリシュナ本人を選び、ドゥルヨーダナは軍隊を選んだ。クリシュナはアルジュナの御者となった。

やがてパーンダヴァ側は使節を派遣して、カウラヴァに王国の半分を返還するように要請

した。ドリタラーシトラやビーシュマ等は、一族を全滅させる戦争を避けようとしたが、ドゥルヨーダナやカルナは聞き入れなかった。

クリシュナはユディシティラと相談して、自ら使節としてカウラヴァ方へ行った。ドリタラーシトラは彼を歓迎し、息子を説得してくれるように頼んだ。クリシュナはドゥルヨーダナを説得しようとしたが、相手は聞く耳を持たなかった。それどころか、彼はカルナ等とともに、クリシュナを捕えようとした。クリシュナは偉大な神としての姿を現わしてから、宮廷を退出した。

和平の交渉が決裂した時、パーンダヴァは戦争の準備をした。ドゥルヨーダナの方も戦いの準備を整え、ビーシュマに軍司令官となるよう要請した。パーンダヴァ側は、ドリシタデュムナを軍司令官にした。

ビーシュマは、パーンチャーラの王子シカンディンはかつて女性であったから、彼を殺さないと誓った。ドゥルヨーダナに問われて、彼はシカンディンの秘密を語った。

前述のように、ビーシュマはカーシ国王の婿選び式において、三人の王女を強奪し、ヴィチトラヴィーリヤの妻にしようとした。しかし、長女のアンバーは、シャールヴァ国王の妻になりたいと望んだので、ビーシュマは彼女をシャールヴァ国王のもとに送りとどけた。だがシャールヴァ国王は、すでに他人によって受け入れられた女を受けることはできないと言って、彼女を捨てた。そこで彼女は、自分の不幸の原因であるビーシュマに復讐をしようと考えた。

アンバーはヤムナー河畔で激しい苦行を行ない、シヴァ神を満足させた。シヴァは、彼女が戦場でビーシュマを殺すであろうと予言した。

ドルパダ王はシヴァを崇拝して、シカンディニーという娘を授った。これがアンバーの生まれ変わりである。息子を望む王は、彼女を男として育てた。そして成長した時、彼女をダシャールナの王女と結婚させた。やがて王女は夫が女であると気づき、父に知らせた。ダシャールナ国王は怒って賠償を要求した。シカンディニーは恥じて森に住んだ。その時、ストゥーナカルナという夜叉（ヤクシャ）が現われ、彼女の頼みに応じて、一定の期間、性を交換してくれた。かくて、シカンディニーは、シカンディンという名の男子となった。（以上、第五巻）

戦闘に先立ち、戦いにおける幾つかのルールが決められた。ヴィヤーサ仙は盲目のドリタラーシトラ王に戦争の状況を報告させるために、サンジャヤ（御者、吟誦者）を千里眼にした。

こうして戦闘が始まった時、アルジュナはこの同族の戦いの意義について疑惑を抱いて戦意を喪失した。クリシュナは彼のために教えを説いて、その気持を鼓舞した。これが『バガヴァッド・ギーター』である。アルジュナの迷いは消失した。

戦争の第一日目からのビーシュマの戦いぶりはめざましかった。アルジュナも勇敢に戦った。壮絶な戦闘が続いた。第八日目の夜、ドゥルヨーダナはカルナの意見をいれて、ビーシュマの代りにカルナを軍司令官にしようとした。ビーシュマは、翌日の戦いにおいて、後代

に永く伝えられるような働きをすると誓った。その誓いの通り、第九日目に、ビーシュマは鬼神のように戦って、多数のパーンダヴァ軍の兵を殺した。

第十日目、ビーシュマがかつて女性であったシカンディンとは戦わないと誓ったことを利用して、アルジュナはシカンディンを先に立て、その後ろからビーシュマにおびただしい矢を浴びせかけた。ビーシュマは全身に矢を受けて大地に倒れた。

ビーシュマが倒れると、両軍の戦士たちは、戦いを中断してビーシュマのまわりに集まった。アルジュナは三本の矢を大地に射かけて、ビーシュマの枕にした。それから、水を所望されて、ビーシュマの横たわっている南側の地面を射た。清水が湧き出てビーシュマの渇きを癒した。ビーシュマは一同に種々の教説を述べ、戦争を中止するように勧めたが、ドゥルヨーダナたちは承知しなかった。 （以上、第六巻）

ドゥルヨーダナは、ドローナを軍司令官にした。第十一日目、ドローナはユディシティラを生け捕りにしようとしたが、アルジュナに阻まれた。第十二日目、ドローナの指示により、特攻隊（サンシャプタカ）がアルジュナを攻撃して、戦列から引き離した。そしてドローナは、難攻の輪円の陣形で軍を進めた。

アルジュナがいないので、その息子アビマニユが、父に教わった方法で輪円の陣を破ろうとした。アビマニユは敵陣を破って勇敢に戦ったが、後に続くべきパーンダヴァ軍は、ジャヤドラタに食い止められてしまった。カウラヴァの勇士たちは、アビマニユを取り囲んで殺

した。その日の夕方にアルジュナは特攻隊を撃破して帰営し、息子の死を知って悲嘆に暮れ、ジャヤドラタを殺すことを誓った。

第十三日目、アルジュナは息子の復讐をしようと、ジャヤドラタを求めて敵陣深く攻め込み、その日の夕方、ジャヤドラタの首をはねた。

第十四日目も激戦が続いた。クリシュナは、カルナがインドラから得た必殺の槍――一回しか使えない――を、アルジュナと戦う前に使わせてしまおうと企て、ガトートカチャ（ビーマと羅刹女の息子）を用いて、カルナに挑戦させた。カルナはガトートカチャに圧倒されて、ついに必殺の槍を用いてその勇士を殺した。

第十五日目、ドローナに恨みを抱くドルパダの軍はドローナを攻撃したが、その敵ではなくドルパダも殺された。その息子ドリシタデュムナはドローナに対し復讐を誓った。

クリシュナはドローナを倒すために一計を案じた。ドローナの息子アシュヴァッターマンと同じ名の巨象を殺して、「アシュヴァッターマンが殺された」と叫ばせたのである。真実の人ユディシティラも、「アシュヴァッターマンが殺された」と告げたが、ただし小声で、「象の」とつけ加えた。それを聞いてドローナは悲嘆に暮れ、生きる意欲を失い、すべての武器を捨て、車上でヨーガに専心した。その時、ドリシタデュムナがドローナを殺した。

（以上、第七巻）

ドゥルヨーダナはカルナを軍司令官にした。第十六日目は激戦のうちに暮れた。第十七日

目の戦いが始まる前に、カルナはアルジュナと雌雄を決することを誓い、シャリヤを御者にしたいと願った。シャリヤは嫌がったが、ドゥルヨーダナが説得した。
ビーマはドゥフシャーサナを倒し、かつてドラウパディーが辱しめられた時に誓った通り、その胸を裂いて血を飲んだ。カルナは激しくアルジュナを攻撃したが、彼の戦車の車輪が穴に落ちたり、彼の神的な武器は肝心なところで使用できなくなった。アルジュナはガーンディーヴァ弓でカルナを殺した。（以上、第八巻）

カウラヴァはシャリヤを軍司令官にした。第十八日目、シャリヤはめざましい戦いをしたが、ユディシティラに殺された。サハデーヴァはシャクニとその息子を殺した。
こうしてカウラヴァ軍は潰滅した。ドゥルヨーダナは逃亡して、湖水に入り、魔術により水を凝結させて隠れていたが、やがてパーンダヴァ側は彼の行方を知り、そこに集結した。ドゥルヨーダナは疲れ果て、森に隠棲したいと望んだが許されず、ビーマと一対一で戦うことになった。
両雄は棍棒を持って激しく戦った。ドゥルヨーダナは棍棒戦に長けていたので、アルジュナはクリシュナの勧告に従い、自分の左腿をたたいた。ビーマはその意味を理解して、棍棒を投じてドゥルヨーダナの腿を砕いた。臍から下を攻撃することは反則であったので、英雄バララーマ（クリシュナの兄）はビーマを非難した。
アシュヴァッターマン（ドローナの息子）は、瀕死のドゥルヨーダナのもとに来て、敵軍をみな殺しにすると誓った。ドゥルヨーダナは彼を軍司令官に任命した。（以上、第九巻）

アシュヴァッターマンは、森で梟が夜中に鴉たちを殺すのを見て、夜襲で敵を殺す計画をたて、クリパとクリタヴァルマンを説得した。彼らはパーンチャーラの軍営を夜襲して、ドリシタデュムナ、ドラウパディーの息子たち、シカンディンなどを殺した。ドゥルヨーダナは彼らの報告を聞き、満足して息をひきとった。
パーンダヴァ軍は怒ってアシュヴァッターマンを攻撃した。彼は父から得た全世界を滅亡させる兵器を使用した。クリシュナも恐るべき兵器を使用しようとした。ナーラダ仙とヴィヤーサ仙の要請により、アルジュナはその兵器を回収したが、アシュヴァッターマンは回収できず、それをパーンダヴァの女たちの胎内に向けて放った。こうしてパーンダヴァの子孫は全滅したが、アルジュナの息子の妻ウッタラーの息子だけは蘇生した。それがパリクシットである。
クリシュナはアシュヴァッターマンを呪って、「汝は三千年間、孤独で地上をさまようであろう」と告げた。アシュヴァッターマンは頭頂の宝石をパーンダヴァに渡して、森へ去った。（以上、第十巻）

息子たちを失ったドリタラーシトラとガーンダーリーの嘆きと怒りは非常なものであった

が、怒りを鎮め、パーンダヴァ兄弟を息子として受け入れた。兄弟と息子たちを失ったドラウパディーも悲嘆に暮れ、クンティーやガーンダーリーに慰められた。ガーンダーリーは、この同族同士の殺し合いを放置していたクリシュナに対して怒り、彼を呪って、三十六年後、彼の親族は互いに殺し合って滅亡し、そして彼は森で不名誉な最期を遂げると告げた。（以上、第十一巻）

パーンダヴァ兄弟は、ドリタラーシトラたちとともに、死者たちの葬儀を行なった。ユディシティラは自分が一族の滅亡の原因であると自責の念にかられた。ヴィヤーサは、すべて運命であると彼を慰め、王族の義務を説いた。やがてパーンダヴァは都に入り、ユディシティラの即位式が行なわれた。

その間、英雄ビーシュマは矢の床に横たわったまま死なないでいた。彼はユディシティラに、法（ダルマ）に関する多くの教えを説いた。そしてビーシュマは、ヨーガにより自ら息を引き取った。（以上、第十二巻、第十三巻）

アシュヴァッターマンが放った兵器により殺された、ウッタラーの胎児（パリクシット）は、クリシュナの力により蘇生した。その後、パーンダヴァとヴリシュニたちは、ハースティナプラの都に入り、罪を浄化するために馬祀（アシュヴァメーダ）を行なった。（以上、第十四巻）

戦争の十五年後、ドリタラーシトラは、ガーンダーリーとクンティーをともなって森に隠棲した。ユディシティラたちはドリタラーシトラを訪問した。ヴィヤーサ仙は、ガーンダーリーの要請により、死んだ戦士たちを天界から呼び出した。敵も味方も、恨みを捨てて、団欒のうちに一夜を過ごした。その二年後、ドリタラーシトラは、ガーンダーリーとクンティーとともに、森火事によりこの世を去った。（以上、第十五巻）

戦争の三十六年後、ユディシティラは多くの不吉な前兆を見た。ある日、ヴィシュヴァーミトラをはじめとする偉大な聖者たちがヴリシュニ族の都ドゥヴァーラカーを訪れた。ヴリシュニの人々は聖者たちをからかおうとして、男を女装させ、彼女（彼）は男を生むか女を生むかとたずねた。聖者たちは彼らを呪い、その者は一族を滅ぼす鉄の棒を生むであろうと告げた。

不吉な前兆が続き、クリシュナはガーンダーリーの呪いが実現することを知り、ヴリシュニの人々に聖地巡礼を勧めた。

すべてのヴリシュニ族とアンダカ族の人々は巡礼に出発し、プラバーサで盛大な酒宴を行なった。勇士たちは口論を始め、互いに殺し合った。クリシュナは息子たちが殺されたのを見て、エーラカ草を取って、それを鉄棒に変え、そこにいた人々をみな殺しにした。

バララーマはヨーガに専念し、肉体を捨てた。クリシュナも森でヨーガを行なったが、そ

の時、ジャラーという猟師に、鹿と間違えられて、足のうらを射られてこの世を去った。
(以上、第十六巻)

ヴリシュニ族が滅亡したことを聞いて、ユディシティラはこの世を捨てる決意をした。彼はパリクシットを即位させてから、四人の弟、ドラウパディー、一匹の犬をともない、都を出発して北方へ向った。彼らはヒマーラヤを過ぎ、メール山に達し、ヨーガに専念して天界に達しようとした。途中で妻や弟たちは次々と挫折し、ユディシティラと犬だけが残った。その時、インドラが戦車に乗って、彼を迎えに来た。しかし彼は、弟たちや妻が行けないなら自分も天界へ行かないと言った。しかしインドラは、彼らは人間の体を捨て、すでにそこに行っていると告げた。そして、犬を捨てるように命じたが、ユディシティラは、自分を愛しているものを捨てられないと答えた。それを聞くと犬は、ダルマ神の姿を現わし、彼を称讃した。彼は神々に導かれて天界に行った。
(以上、第十七巻)

天界に昇ったユディシティラは、そこに妻と弟たちを見出すことができなかった。ドゥルヨーダナがいて、繁栄を享受していた。ユディシティラは弟たちのところに行きたいと望んで、神の使者に案内されて進んで行った。彼は長いこと悪臭のする難路を進んで、引き返そうとして、弟たちや一族の人々の引き止める声を聞いた。ドゥルヨーダナのような邪悪な者が天界にいて、弟たちが地獄で苦しんでいるのは不公平だと考え、彼は神の使者を帰らせて、自らはそこにとどまった。

しかしすぐに神々がやって来て、そこは地獄から天界へと変じた。すべてはインドラの作り出した幻影(マーヤー)であった。あらゆる王族は、少なくとも一度は地獄を見なければならなかったのである。ユディシティラは天界のガンジスで沐浴し、人間の体を捨てて、一族の人々と再会した。
(以上、第十八巻)

翻訳にあたって

今回の『マハーバーラタ』の和訳にあたっては、プーナのバンダルカル研究所から出版されたいわゆる「プーナ批判版」(19 Vols., 1933-66)を底本として用いた。特に第一巻の翻訳の底本としては、*The Mahābhārata*, Vol.1, Critically edited by V. S. Suktankar (Poona, 1933)を用いた。その他のテクストとしては、主として、ニーラカンタ(Nīlakaṇṭha)の注釈が付いた「ボンベイ版」の系統の刊本(Ed. by R. Kinjawadekar, 6 Vols. Poona, 1929-1933; Reprint, New Delhi, 1979)を参照した。『マハーバーラタ』のテクストの問題は複雑である。詳しくはプーナ批判版の「序文」(Suktankar, Prolegomena)を参照されたい。

翻訳としては、*The Mahābhārata*, 3 Vols., Translated by J. A. B. van Buitenen (Chicago, 1973, 75, 78)及び *The Mahabharata*, 12 Vols., Translated by K. M. Ganguli (Calcutta, 1884-96; 4th ed. New Delhi, 1981)の英訳を参照した。前者は定評ある英訳であるが、原典の第五巻の訳までしか出版されていない。後者はプーナ批判版を底本にしたもので

はないが、なかなかよい訳で、時として前者よりも適切な解釈を示していることもある。M. N. Dutt の英訳（7 Vols., Calcutta, 1895-1905 ; Reprint, Delhi, 1988）は、全面的に Ganguli 訳を参照したと思われる。

その他のテクスト、翻訳、研究書は無数にあり、主なものをあげるだけでも至難の業である。この日本語訳を開始したころ、横地優子氏に協力していただき、比較的近年に出版された参考書のリストを作成したが、厖大な量になり、また年々多数の関連書が諸外国で出版されるので、網羅的なリストを作成する仕事を断念した。それに、最近のインターネットの発達により、東京大学やハーバード大学などの図書館のウェブサイトを参照すれば、たちどころに情報が得られるようになった。『マハーバーラタ』で検索するだけで、何百という図書情報が得られるのである。『マハーバーラタ』の場合に限らず、最近の古典研究においては、詳細なビブリオグラフィーが以前ほど重要でなくなったことは確かである。しかし、インド古典研究者にとって、次のようなビブリオグラフィーはやはり非常に有用である。

Epic and Purāṇic Bibliography (up to 1985), ed. by H. v. Stietencron, etc., 2 Parts (Wiesbaden, 1992).

一般の読者で、『マハーバーラタ』に関する日本語で書かれた参考書を一冊という方には、ヴィンテルニッツ著、中野義照訳『叙事詩とプラーナ――インド文献史第二巻』（一九六五、高野山）をお勧めする。『マハーバーラタ』の研究史としては、ドゥ・ヨング著、塚本啓祥訳『インド文化研究史論集』（一九八六、平楽寺書店）が有益である。二大叙事詩に関する最新の大部の参考書としては、J. Brockington, *The Sanskrit Epics* (Leiden : Brill, 1998) がある。『マハーバーラタ』を読むために、可能ならば次の二つを座右に備えていれば便利である。S. Sörensen, *An Index to the Names in the Mahābhārata* (1 st ed. 1904 ; Reprint Delhi, 1978). V. Mani, *Purāṇic Encyclopaedia* (Delhi, 1975).

この日本語訳にあたっては、可能な限り速く訳すことを最優先した。そのため、訳文は平明を宗とした。原文では、しばしば同一人物が種々の異名で呼ばれたり、物語の聞き手に対する呼びかけが頻出することがあるが、訳文においては、読者が迷うことのないように簡略化した。かなりの速度で訳したので、問題のある個所も多いと思う。改訂の際に訂正できるので、積極的に意見を寄せていただければ幸せである。

本訳においては、大多数の読者にとって不必要と思われる個所は、省略した場合がある。例えば蛇の名前の列挙や聖地の名前の列挙などは、特殊な研究者には意味があっても、一般の読者にとっては単なる片仮名の長い羅列にすぎないから、省略した。同じような記述の冗長な繰り返しも省略した。長文を省略した場合、その個所は明示してある。しばしば省略しているようであるが、全体におけるその比率は極めて低い。プーナ批判版の読みが不適切と思われる場合は、異本の読みを採用した。訳注において「異本」とは、「ボンベイ版」と呼ばれるものか、プーナ批判版にヴァリアントとしてあげられたもののいずれかを指す。

この日本語訳の出版にあたっては、多くの方々にお世話になった。特に、長年の間不肖の

弟子を導いて下さった中村元、原實、山崎利男先生をはじめとする恩師の先生方に心から御礼申し上げたい。同僚の永ノ尾信悟氏には、しばしば有益な助言をいただいた。ルイス麻穂氏には、校正、地図作成、「主要登場人物」の作成などの作業をしていただいた。また、この困難な出版を快く引き受けて下さった筑摩書房に対し、そして訳者を常に励まして下さった、編集部の平賀孝男氏に対して深謝したい。

原典訳

マハーバーラタ1

［家系図］

太陽神 — タパティー
バラターサンヴァラナ
クル — プラティーパ
ガンガー女神
シャンタヌ
サティヤヴァティー
パラーシャラ
ビーシュマ
チトラーンガダ
ヴィチトラヴィーリヤ
アンバー
アンビカー
アンバーリカー
ヴィヤーサ
スバラ
ガーンダーリー
シャクニ
クリピー
ドローナ
アシュヴァッターマン
太陽神
カルナ
ドリタラーシトラ
マードリー
パーンドゥ
ヴィドゥラ
クンティー
ヤドゥ — ヴリシュニ……シューラ
ヴァスデーヴァ
ドゥルヨーダナ
ドゥフシャーサナ
（百王子）
ヴィカルナ
ナクラ
サハデーヴァ
ユディシティラ
ビーマセーナ
アルジュナ
（マツヤ国王）
ヴィラータ
スバドラー
クリシュナ
バララーマ
ドルパダ
ドラウパディー（クリシュナー）
ドリシタデュムナ
シカンディン
ウッタラー
アビマニユ
パリクシット — ジャナメージャヤ

パーンダヴァ　カウラヴァ

主要登場人物

アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。

アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。

アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。

アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。

ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。

ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。

ヴァースデーヴァ→クリシュナ

ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。

ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。

ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの実父。

ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。

カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。

ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。

ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。

クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。

クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。

サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。

サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの息子。ナクラとは双子の兄弟。

サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行うナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物語をウグラシュラヴァスから聞く。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。夫アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王の娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの息子。サハデーヴァとは双子の兄弟。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの異母弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

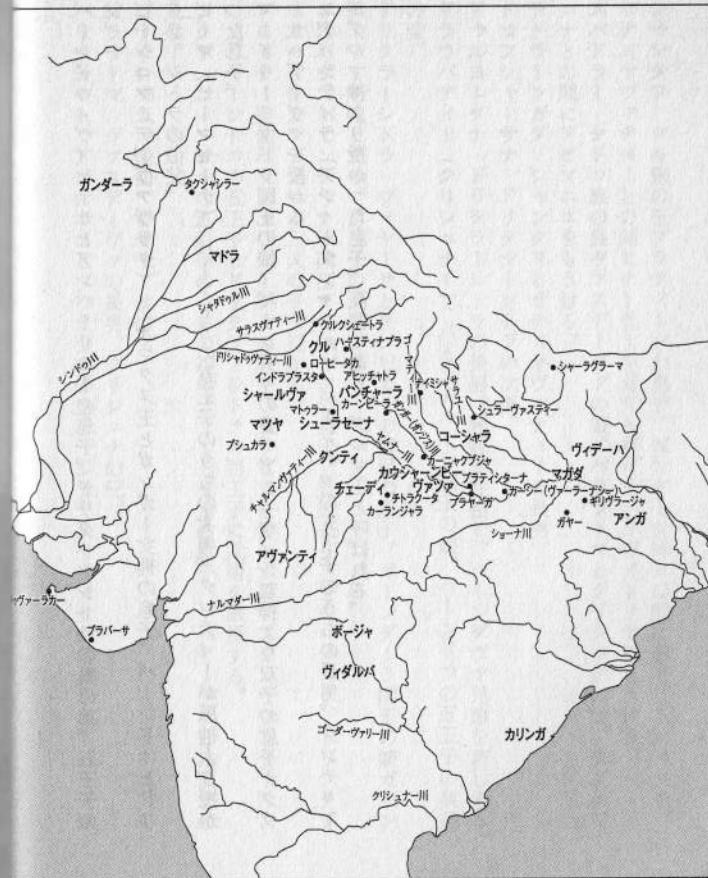
マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

第1巻　最初の巻（アーディ・パルヴァン）

第一章～第百三十八章

マハーバーラタ関連地図

(1) 筋書き（第一章）

最高の叙事詩

最高の人ナーラーヤナとナラ（クリシュナとアルジュナがこの両神の化身とされる）とに敬礼してから、サラスヴァティー女神（弁才天）に「勝利《ジャヤ》」（『マハーバーラタ』をも意味する）を唱えるべきである。

ローマハルシャナの息子で、ウグラシュラヴァスという、古《いにしえ》の伝説を語る吟誦詩人がいた。その頃、ナイミシャの森では、シャウナカ（偉大な聖仙の名）という族長の十二年の祭祀が行なわれていた。ある時、この吟誦詩人は、その祭祀に集まった、誓いを固持する梵仙（バラモンの聖仙）たちに近づいて、礼儀正しく挨拶した。ナイミシャの森に住む苦行者たちは、珍しい物語を聞こうとして、隠棲所を訪れた彼をとり囲んだ。彼は合掌して、すべての聖者たちにおじぎをしてから、苦行が進展しているかどうかたずねた。聖者たちも彼を歓迎した。（一―四）

さて、すべての苦行者が座った時、ウグラシュラヴァスは、指示された座席に、礼儀正しく座った。（五）彼が快適に座り、疲れもとれたのを見て、ある聖仙が話の口火を切って、次のようにたずねた。（六）

「吟誦詩人よ、どこから来たか。また、どこで時を過ごしたか。蓮弁の眼をした者よ、私の問いに答えてくれ。（七）」

吟誦詩人は言った。

「パリクシット王の息子である、偉大な王仙（王族の聖仙）ジャナメージャヤの蛇供（蛇を犠牲にする儀式）において、ヴァイシャンパーヤナは、その王中の王の前で、いとも神聖なる種々の物語を、形のごとく正しく語った。それは、前にクリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）によって語られたものである。（八―九）

私はその『マハーバーラタ』に含まれる、多彩な内容の物語を聞いてから、多くの聖地や霊場をまわって、再生者（上位三階級。特にバラモン）に崇められる、サマンタパンチャカという神聖なる地方に行った。そこは、かつて、パーンダヴァ族とクル族の、そしてすべての王たちの戦争があった地方だ。（一〇―一一）あなた方に会いたいと思って、そこから、ここ、あなた方のもとに来た。あなた方はみな、ブラフマン（梵、最高原理）と合一していると私は考えるから。（一二）この祭祀において、あなたたち偉大な人々は太陽や火のように光り輝き、灌頂《かんじょう》を行ない、清らかで、祈禱を唱え、火に供物を投じ、安楽に座っておられる。再生者たちよ、私は何を語ろうか。（一三）古伝説《プラーナ》にもとづく、あるいは法《ダルマ》にもとづく、神聖なる物語をしようか。また、偉大な王や聖仙たちの事績を語ろうか。（一四）」

聖仙たちは言った。

「最高の聖仙ドゥヴァイパーヤナが語った古伝説を聞きたい。神々や梵仙たちがそれを聞いて称讃したという。その叙事詩《イティハーサ》『（マハー）バーラタ』は、最上の物語であり、多彩な語句と巻とを含み、微妙な内容と道理をそなえ、ヴェーダ聖典の趣旨により飾られている。この叙事詩の本集《サンヒター》は、神聖であり、構成と意味をそなえ、完成の域に達し、聖なる語で書かれ、

種々の学説を伴う。（一五—一七） ドゥヴァイパーヤナの指示により、聖仙ヴァイシャンパーヤナは、ジャナメージャヤ王の祭祀において満足して、それを正しく語ったのである。（一八） 驚異的な業をなすヴィヤーサ仙が編纂したこの本集は、四種のヴェーダ聖典（リグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダ）に匹敵するもので、法にかない、悪と恐怖を除去する。我々は、その本集を聞きたいのだ。（一九）」

吟誦詩人は語った。——

原初の神人、主、幾多の人々に祈念され讃えられる神、真実であり一音節（聖音「オーム」を指す）のブラフマン（梵、最高原理）、顕現しまた非顕現の永遠なる神、（二〇） 非存在でありまた存在であり、存在・非存在の一切である最高のもの、高いものの低いものの創造者、古の神、最高に不滅のもの、（二一） 吉祥にして吉祥そのものであるヴィシュヌ、最上・無垢・清浄なる神、フリシーケーシャ（ヴィシュヌ・クリシュナの異名）、動不動のもの（すべての被創造物）の尊師ハリ、このヴィシュヌ、ハリに敬礼する。（二二） それから私は、全世界で尊敬されている、無量の威光を有する、偉大なる大仙ヴィヤーサの説くところを、すべて語るであろう。（二三） 地上において、かつてある詩人たちはこの叙事詩を説いた。また、ある人々は、現在説いている。また、他の人々は、未来において説くであろう。（二四） これは三界（全世界）において確立した偉大なる知識であり、バラモンたちにより、詳細に、また要約して、保持されている。（二五） それは、美しい語に飾られ、神界と人間界の約束ごと、韻律を多様にともない、識者たちに愛されている。（二六）

宇宙紀の開闢

この世が輝かず、光なく、すべて暗黒におおわれていた時、生類の不滅の種子である、一つの巨大な卵が生じた。（二七） それは、宇宙紀の最初における、非常に神聖なる原因であると言われる。そこに、真実なる光明、永遠なるブラフマン（梵、最高原理）が存するという。（二八） それは驚異であり、不可思議であり、いたるところ平等であり、非顕現の微妙なる原因であり、存在と非存在を本性とする。（二九）

その卵から、唯一の造物主である神、祖父梵天が生じた。彼は神々の尊師であり、支柱であり、マヌ（人類の祖先）であり、「カ」（「誰？」という意）であり、最高神である。（三〇） それから、プラチェータスの息子ダクシャ、ダクシャの七人の息子たち、それから、二十一名の造物主たちが生じた。（三一） そして、計り知れない本性を有し、聖仙たちにこの一切（宇宙）であると知られるところの神人、また、一切諸神、アーディティヤ神群、ヴァス神群、アシュヴィン双神、また、夜叉、サーディヤ神群、ピシャーチャ（鬼神の類）、グヒヤカ（半神の類）、祖霊たちが、それから、学識ある汚れなき梵仙（バラモン出身の聖仙）たちが生じた。そして、すべての徳をそなえた、多数の王仙（王族出身の聖仙）たちが生じた。また、水、天、地、風、空間、方位、年、季節、月、半月、昼夜が、順次に生じた。そしてその他、この世に存在するありとあらゆるものが生じた。動不動のもの、存在するものは何でも。宇宙紀の終末が訪れたら、全世界は再び帰滅す

る。（三二—三六） 季節の変り目に種々の季節の特徴が現われるように、宇宙紀の始まりにも種々の特徴が現われる。（三七） このように、始まりも終わりもない、生類の帰滅をもたらす、無始にして不滅のこの輪（チャクラ）が、この世において回転している。（三八）
三万三千、三千三百、三十三の神々が存する。以上が創造に関する略説である。（三九）
太陽は天の息子であり、眼であり本質（アートマン）である。太陽神ヴィヴァスヴァットのすべての息子たちのうちで、末の息子がマヒヤである。彼の息子は神々しく輝いた。それ故、スブラージ（美しく輝く者）と呼ばれる。（四〇—四一） スブラージの三人の息子たち、ダシャジョーティ、シャタジョーティ、サハスラジョーティは、子孫に恵まれ、博識で、自制心があった。（四二）
偉大なダシャジョーティには一万人の息子がいた。シャタジョーティにはその十倍、サハスラジョーティにはそのまた十倍の息子がいた。彼らから、このクルの家系、ヤドゥとバラタの家系、ヤヤーティとイクシュヴァーク、及びすべての王仙の家系など、多くの家系が生じた。生類の創造を詳説すれば以上のようである。（四三—四五）

偉大なる知識

一切の生類の住処、また種々の秘密、ヴェーダ聖典とヨーガとそれに関する知識、そして、法（ダルマ）・実利（アルタ）・享楽（カーマ）。（四六） 聖仙は、法と享楽と実利に関する学説、及び種々なる学説を、そして多くの世間の営みに関する規定を見た。（四七） 叙事詩とその解説、そして種々の天啓聖典（シュルティ）

……。ここに、本書のすべての特徴が列挙されている。（四八）
この偉大なる知識を詳しく説いてから、聖仙は要約して語った。というのは、賢者らにとって、世間において、要約してまた詳細に保持することは望ましいことであるから。（四九）
あるバラモンたちは、マヌ（または最初のマントラ）から始めて『バーラタ』を学ぶ。また、他の人々は、「アースティーカ」の物語から、また、他の人々は、「ウパリチャラ」の物語から学ぶ。（五〇） 賢者たちは、この本集（サンヒター）の多様な知識を明らかにする。ある人々は本書を解説することに巧みで、他の人々はそれを保持することに巧みである。（五一）
サティヤヴァティーの息子（ヴィヤーサ）は、苦行と梵行（禁欲）の力により、永遠なるヴェーダ聖典を分離（ヴィヤス）して、この神聖なる叙事詩を作った。（五二） パラーシャラの息子クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）は、賢明なる梵仙で堅く誓戒を守っていたが、かつて、母の指令（ニヨーガ）、及び賢者ビーシュマの指令により、この徳性ある精力的な男は、ヴィチトラヴィーリヤの田地（クシェートラ）（未亡人）に、三つの火のようなクル族の三人を生ませた。（五三—五四） すなわち、ドリタラーシトラと、パーンドゥと、ヴィドゥラとである。この三人を作ってから、賢者は、苦行を行なうために再び隠棲所へ帰った。（五五） 彼らが生まれ、老い、最後の帰趨に達した時、偉大な聖仙は『バーラタ』をこの人間界において語った。（五六） ジャナメージャヤに、またバラモンたちに、幾度も請われて、彼はかたわらに座っている弟子のヴァイシャンパーヤナにそれを教示した。（五七） この弟子は、祭官たちと座っている時、何度も懇願されて、祭祀を行なう間に『バーラタ』を朗誦した。（五八）

クルの家系の詳細、ガーンダーリー夫人が徳性あること、ヴィドゥラの叡知、クンティー夫人の平静さ。ドゥヴァイパーヤナはこれらを正しく語った。（五九）ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の偉大さ、パーンダヴァ一族が真実を守ること、ドリタラーシトラの息子たちの悪行。尊い聖仙はこれらを語った。（六〇）

バーラタ本集の作成と朗誦

彼はまず、副次的な物語を含まない、二万四千詩節の『バーラタ本集』を作った。賢者たちは、これを〔本来の〕『バーラタ』と呼んでいる。（六一）それから、聖仙は更に、百五十詩節の要約を作った。すなわち、諸々の出来事とそれらの巻の「筋書き」の章である。（六二）

ドゥヴァイパーヤナは、まず、息子のシュカにそれを教えた。それから師は、ふさわしい他の弟子たちに伝授した。（六三）ナーラダは神々にそれを朗誦した。アシタ・デーヴァラは祖霊たちに、シュカはガンダルヴァ（半神の一種）と夜叉と羅刹たちに朗誦した。（六四）

ドゥルヨーダナは怨恨よりなる大樹である。カルナはその幹である。シャクニはその枝である。ドゥフシャーサナは豊かな花と果実である。無思慮なドリタラーシトラ王はその根である。（六五）

ユディシティラは法よりなる大樹である。アルジュナはその幹である。ビーマセーナはその枝である。マードリー夫人の二人の息子（ナクラとサハデーヴァ）は豊かな花と果実である。クリシュナとブラフマン（絶対者）とバラモンたちはその根である。（六六）

パーンドゥの息子たち

パーンドゥは、戦争と武勇により多くの国々を征服した。それから、狩猟を好む彼は、おつきの人々とともに森林に住んだ。（六七）彼は鹿になって交尾している〔聖者〕を殺した時に、ひどい災禍に陥った。

そこで、プリター（クンティーの別名。パーンドゥの第一妃）の息子たちの、誕生以来の生活を順次述べる。（六八）

パーンドゥの二人の妻は、秘密の法にもとづいて、ダルマ（正義の神）、ヴァーユ（風神）、シャクラ（帝釈天、インドラ）、アシュヴィン双神の子を宿した。（六九）

彼ら（パーンドゥの息子たち）は二人の母に保護され、神聖で清浄な森で、偉大な人々の隠棲所において、苦行者たちとともに成長した。（七〇）これら美しい子供たちは、学生期に入り、髪を編んだ。聖仙たちは自ら、彼らをドリタラーシトラの一族のもとに連れて行った。（七一）

「このパーンダヴァ（パーンドゥの息子）たちは、あなた方の息子、兄弟、弟子、友人である」と言って、聖者たちは消え失せた。（七二）聖者たちに託されたパーンダヴァ兄弟を見て、カウラヴァ（クルの一族）、識者たち、四姓の人々、市民たちは、歓喜のあまり大声で叫んだ。

(七三)ある人々は、「彼らは彼（パーンドゥ）の息子ではない」と言った。他の人々は、「彼らは彼の息子だ」と言った。また他の人々は、「パーンドゥはずっと前に死んだのに、どうして彼の息子たちか」と言った。(七四)

「いずれにせよ、よく来た。幸いなことに、パーンドゥの後継ぎに会えた。ようこそと言うべきである」という声がいたるところで聞かれた。(七五)

すべての方角を鳴り響かせて、その音がやんだ時、隠れた生物たちの喧騒が起こった。(七六)彼らが都に入った時、花の雨、芳香、螺貝と太鼓の音が生じた。それは奇瑞のようであった。(七七)そして、それを愛でて、すべての市民に歓喜が生じた。天にとどく大音声があがり、彼らの名声を喧伝した。(七八)パーンドゥの息子たちは、すべてのヴェーダ聖典を学び、種々の学問を学びつつそこに滞在した。人々に尊敬され、何の危険もなく。(七九)人々はユディシティラの清浄さに喜んだ。また、ビーマセーナの志操堅固、アルジュナの勇猛さ、クンティー夫人の目上に対する尊敬の念、双子（ナクラとサハデーヴァ）の修養に喜んだ。すべての世人は、彼らの勇気に満足した。(八〇―八一)

その後、アルジュナは諸王の集会において、非常になしがたい行為を行なって、婿選び式（スヴァヤンヴァラ）を行なった少女クリシュナー（ドラウパディー）を得た。(八二)それ以来、彼はこの世ですべての弓取りに尊敬され、戦場においても、太陽のようにまばゆい存在となった。(八三)

賭博と戦争

アルジュナはすべての王、すべての大きな共同体（ガナ）を征服してから、王のために皇帝即位式（ラージャスーヤ）の大祭を行なった。(八四)その即位式の大祭では、多くの食物が出され、祭官たちに対する謝礼も豊富であった。それはすべての要件をそなえていた。ユディシティラはこの即位式の大祭を受けた。(八五)ヴァースデーヴァ（クリシュナ）のすぐれた政策と、ビーマとアルジュナの武力とにより、ジャラーサンダと、力に慢心したチェーディ王（シシュパーラ）とを滅ぼしてから。(八六)

〔王の即位式の祝いの品を受け付けた〕ドゥルヨーダナのもとには、宝珠、黄金、宝物、牛、象、馬、財物というような、高価なものがあちこちから集まって来た。(八七)パーンダヴァたちのこのような華々しい繁栄を見ると、嫉妬から彼に非常に大きな怨恨が生じた。(八八)マヤ（建築に秀でた阿修羅）によりみごとに造られた、天宮（ヴィマーナ）のような集会場（サバー）がパーンダヴァたちに贈られた時、それを見て彼は苦しんだ。(八九)彼は生まれのよくない男のように、うろたえて失態を演じ、クリシュナの眼前でビーマに嘲笑された。(九〇)

彼は種々の快楽と種々の宝物を享受しつつも、蒼白く痩せていると、ドリタラーシトラに報告された。(九一)それから、ドリタラーシトラは、息子を愛するあまり、賭博〔の開催〕を承認した。それを聞いてクリシュナは大いに怒った。(九二)彼は心ならずも争いを受け入

れ、賭博を始めとするおぞましい不正が増大することを見過ごした。(九三)　ヴィドゥラ、ドローナ、ビーシュマ、シャラドヴァットの息子クリパ(の忠告)を無視して、その激しい戦闘において、王族は互いに殺しあった。(九四)

ドリタラーシトラ王の悲嘆

パーンドゥの息子たちが勝利した時、ドリタラーシトラは、非常に悲しい知らせを聞き、また、ドゥルヨーダナの考え、カルナやシャクニの考えを知り、長らく思案してから、サンジャヤ(彼の御者)に次のように言った。(九五)

「サンジャヤよ、私の言うことをすべて聞いてくれ。私を非難しないでくれ。お前は博識で叡知と知性があり、知者たちに尊敬されている。(九六)　私は戦争を望まぬし、クル族の滅亡を願わない。そして、私は自分の息子とパーンドゥの息子を差別しない。(九七)　息子たちは怨みにかられて、年老いた私を非難する。しかし、盲目の私は、息子への愛ゆえに、不憫に思いそれに耐えている。心ないドゥルヨーダナが迷っているのを見て、私もまた迷うのである。(九八)　彼は強大なパーンダヴァ兄弟の皇帝即位式における繁栄を見て、また、集会場に昇っている間に(失態を演じたのを)見られ、嘲笑されて怒ったが、自分では、合戦においてパーンダヴァ(パーンドゥの息子)たちを破ることはできず、気力が無いので、自分で繁栄を得ることができず、ガーンダーラの王(シャクニ)とともに、武人にふさわしからず、いかさま賭博を謀

議した。(九九―一〇〇)　サンジャヤよ、それについて私の知っていることをすべて聞け。真に知性をそなえた私の言葉を聞いて、お前は私が智慧の眼(心眼)を有することを知るであろう。(一〇一)

稀代な弓が引かれ、的が射貫かれて地に落ちたことを、そしてクリシュナー(ドラウパディー)が、すべての王たちの見ている中で獲得されたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(一〇二)

ドゥヴァーラカーにおいて、アルジュナがヤドゥ族(ヤーダヴァ)の娘スバドラー(クリシュナの妹)を力ずくで娶ったことを、そしてヴリシュニ族(クリシュナ)とその勇士とがインドラプラスタ(パーンダヴァの首都)に行ったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(一〇三)

神々の王(インドラ、帝釈天)が雨を降らせるのを、アルジュナが神聖な矢で防いだことを、そしてカーンダヴァ(の森)においてアグニ(火神)を喜ばせたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(一〇四)

ユディシティラが賭博においてスバラの息子(シャクニ)に敗れ、王国を奪われたことを、しかし、無比の弟たちに従われていることを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(一〇五)

ドラウパディーが涙で喉をつまらせ、苦悩し、一枚の布のみ着けて、生理期間中に、夫たちがいるのに身寄りがないもののように、集会場に連れて来られたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(一〇六)

徳性あるパーンダヴァたちが森林へ行き、長兄のために辛苦し、様々な偉業を行なったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二〇七)

森に住むダルマ王(ユディシティラ)が、多数のヴェーダ修得者に従われ、施食で生活する偉大なバラモンたちに従われていることを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二〇八)

アルジュナが戦闘において、山岳民(キラータ)の姿をとった三眼の偉大な神(シヴァ)を満足させ、パーシュパタという強力な武器を得たことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二〇九)

天界にいるアルジュナが、インドラ(帝釈天)から直々に、神的な武器を正しく学んだことを、彼が約束に忠実なものと称えられたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一〇)

ビーマやその他のパーンダヴァたちが、人間に到達されがたい地(カイラーサ山)で、ヴァイシュラヴァナ(クベーラ、毘沙門天)と会ったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一一)

自分の息子たち(ドゥルヨーダナ等)がカルナの悪知恵にそそのかされ、牧場視察に行ったが、ガンダルヴァ(半神の一種)たちに捕えられ、アルジュナに救われたということを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一二)

ダルマ(ユディシティラ)が、夜叉(ヤクシャ)の姿をとったダルマ・ラージャと会い、出された質問に正しく

答えたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一三)

ヴィラータ王の国に滞在する偉大なる勇士アルジュナが、私の息子たちの精鋭を破ったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一四)

マツヤ国王(ヴィラータ)がアルジュナに、大切な娘のウッタラーを与えたこと、そしてアルジュナが息子のために彼女を受けたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一五)

ユディシティラは敗れ、一文無しになり、流浪し、自己の身内からも捨てられたのに、その彼が七つの軍団を得たことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一六)

『私は常に梵界における目撃者である』と言うナーラダの口から、クリシュナとアルジュナがナラとナーラーヤナであることを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一七)

この地上は彼の一歩にすぎないと言われるヴァースデーヴァ・マーダヴァ(ヴィシュヌ・クリシュナ)が、パーンダヴァ側を全身全霊で支援するということを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一八)

カルナとドゥルヨーダナがクリシュナを捕えようと決意したこと、そして彼が多様に自己を示したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二一九)

クリシュナが出発する時、一人で車の前に立ち苦悩しているプリター(クンティー夫人)を慰めたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。(二二〇)

クリシュナが彼ら（パーンダヴァ）の参謀となり、シャンタヌの息子ビーシュマとバーラドゥヴァージャ（ドローナ）とが彼らを祝福したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二一）

カルナがビーシュマに、『あなたが戦っている間は、私は戦わない』と告げ、軍を捨てて去った時、それを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二二）

クリシュナとアルジュナと無比の強弓ガーンディーヴァ。この三つの強力なものが合体したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二三）

アルジュナが意気消沈して、戦車の座席に座りこんだ時、クリシュナが自己の体のうちに全世界を示したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二四）

敵を粉砕するビーシュマが、戦闘において何万もの戦車を撃破しながら、彼ら（パーンドゥの息子たち）のうちの誰も実際に殺されないことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二五）

最高の英雄ビーシュマは、諸々の戦闘において無敗であったが、アルジュナが、シカンディンを先に立てて彼を討ったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二六）

老いた英雄ビーシュマが、ソーマカ族をほとんど全滅させてから、多彩な矢を受けて倒れ、矢の寝台に横たわったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二七）

ビーシュマが横たわって、水を所望した時、アルジュナが大地を貫き、〔水を流出させて〕ビーシュマを満足させたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二八）

シュクラ（金星）とスーリヤ（太陽）とが、パーンダヴァの勝利のために好意的に合したことを聞いて、そして、野獣どもが常に我々に向かって吠えている時に、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二二九）

めざましく戦うドローナが、戦場において、多様な武道を披露しつつも、最も主要なパーンダヴァたちを殺せない時に、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三〇）

特攻隊（サンシャプタカ）という味方の勇士たちが、アルジュナを殺す決意をしたが、アルジュナに殺されたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三一）

他の者によっては破られぬ布陣、しかも武器をとるドローナによって守られる布陣を破って、勇敢なスバドラーの息子（アビマニユ、アルジュナの息子）がただ一騎で侵入したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三二）

味方の勇士たちが、少年アビマニユを取り囲んで殺し、みなして喜んだ時、しかもアルジュナを破れない時、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三三）

アビマニユを殺して、ドリタラーシトラの息子たちが、喜びのあまり我を忘れて喝采したこと、またアルジュナがシンドゥ王（ジャヤドラタ）に対し怒りを爆発させたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三四）

アルジュナがシンドゥ王を殺すと誓ったこと、そして、敵の中でその誓いを成就したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三五）

アルジュナの馬たちが疲れた時、クリシュナが馬たちを放ち、水を飲ませ、回復した彼らを再び戦車につないで前進したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三六）

馬たちが回復した時、アルジュナが戦車の座席に立ち、ガーンディーヴァ弓によりすべての戦士を防ぎ止めたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三七）

象軍により対抗しがたいドローナの軍隊を、ヴリシュニ族のユユダーナ（サーティヤキ、クリシュナの親族）が粉砕して、クリシュナとアルジュナがいるところへ行ったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三八）

ビーマはカルナを攻撃したにもかかわらず、カルナがこの勇士を言葉で侮辱して、弓の端で打っただけで、殺すことはひかえたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二三九）

ドローナ、クリタヴァルマン、クリパ、カルナ、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）、マドラ国王（シャリヤ）たちの英雄がいながら、シンドゥ王（ジャヤドラタ）の殺されるのを阻止できなかった時、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四〇）

神々の王（インドラ）から〔カルナが〕与えられた神聖な槍（一度しか使えない）が、クリシュナの計により、恐ろしい姿の羅刹ガトートカチャ（ビーマの子）のために浪費されてしまったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四一）

カルナとガトートカチャとの戦いにおいて、カルナがアルジュナを殺すのに使われるべき

槍を放ったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四二）

ドリシタデュムナが法（ダルマ）にそむき、戦車の座席で一人で死に臨んでいるドローナ師を殺したと聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四三）

マードリーの息子ナクラが、衆人の中で、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）と戦車で一騎討ちを行ない、互角の戦いをしたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四四）

ドローナが殺された時、ドローナの息子がナーラーヤナという神的な武器を濫用したが、パーンダヴァの滅亡を達成できなかった時に、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四五）

合戦において無敵の最強の勇士カルナが、あの神々のみぞ知る兄弟の戦闘において、アルジュナに殺されたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四六）

ドローナの息子、クリパ、ドゥフシャーサナ、恐ろしいクリタヴァルマンたちが、孤立したユディシティラを殺害できなかったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四七）

マドラ国王（シャリヤ）は、常時は合戦においてクリシュナに匹敵する勇士であるが、その彼がダルマ王（ユディシティラ）に殺されたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四八）

不和と賭博の根源である、幻力を有する邪悪なサウバラ（シャクニ）が、パーンドゥの息子サハデーヴァによって殺されたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（二四九）

ドゥルヨーダナが戦車を失い、誇りを砕かれ、疲れ、一人で池に行き、〔幻術により〕水を硬化させて横たわっていたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（一五〇）

パーンダヴァ一族が、クリシュナとともに、ガンガー（ガンジス）の池の辺に立ち、私の短気な息子（ドゥルヨーダナ）を侮辱したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（一五一）

ドゥルヨーダナが、棍棒戦において、多彩な術を縦横に展開しつつも、クリシュナの計略により不正に殺されたことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（一五二）

ドローナの息子（アシュヴァッターマン）などが、眠っていたパーンチャーラ人とドラウパディーの息子たちを殺し、恐ろしくも破廉恥な行為を行なったことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（一五三）

ビーマセーナに追跡されたアシュヴァッターマンが怒って、最高の武器アイシーカを用いて、それで〔ウッタラーの〕胎児を殺したことを聞いた時、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（一五四）

アルジュナが放ったブラフマシラスという武器を、吉慶（スヴァスティ）と言って、自分の武器で鎮めたこと、そして、アシュヴァッターマンが〔頭を飾る〕宝玉を引き渡したことを聞いて、サンジャヤよ、私は勝利の希望を失った。（一五五）

アシュヴァッターマンが、偉大な武器をヴィラータの娘（ウッタラー）の胎児に投じた時、ドゥヴァイパーヤナとクリシュナとが、相互に、彼にひどい呪詛をかけたことを聞いて、〔サン

ジャヤよ、私は勝利の希望を失った。〕（一五六）

息子や孫たちを失ったガーンダーリーは哀れだ。また、父や兄弟を失った婦人たちは哀れだ。パーンダヴァたちにより、なしがたい仕事が達成された。彼らは無敵の王国を再び得た。（一五七）

ああ、私の聞くところ、戦闘において十名のみ残ったという。味方の三名、パーンダヴァ方の七名。王族（クシャトリヤ）の戦い、あの合戦において、十八軍団が滅亡した。（一五八）

闇（タマス）に満ちた迷妄が私に入り込むかのようだ。私は分別を失った。私の心は動揺する。（一五九）」

ドリタラーシトラは以上のように述べて、大いに嘆き、苦しんで失神した。そして再び正気づくと、サンジャヤに次のように言った。（一六〇）

「サンジャヤよ、このような次第であるから、私は速やかに命を捨てたいのだ。生きながらえても何の成果も望めないから。（一六一）」

哀れな王が嘆いてこのように言った時、賢者サンジャヤは、彼に次のような意義に満ちた言葉を告げた。（一六二）

「ドゥヴァイパーヤナと賢者ナーラダとが話した際、あなたは偉大な気力を有する強力な諸王について聞いた。（一六三）彼らは諸々の美質をそなえた偉大な王の家系に生まれ、神的な武器に通じ、シャクラ（帝釈天、インドラ）のような威力を有する。（一六四）彼らは法（ダルマ）により地上を征服し、〔祭官に対する〕十分な謝礼をともなう祭祀を行ない、この世で名声を得て、それから死ん

だのである。（二六五）ヴァイニヤ、マハーラタ（あるいは、「勇士」）、最高の勝利者である勇士スリンジャヤ、スホートラ、ランティデーヴァ、カクシーヴァット、アウシジャ、バーフリーカ、ダマナ、シャイビヤ、シャリヤーティ、アジタ、ジタ、敵を破壊する（あるいは、「アミトラグナ」）ヴィシュヴァーミトラ、勇者アンバリーシャ、マルッタ、マヌ、イクシュヴァーク、ガヤ、バラタ、ダシャラタの息子ラーマ、シャシャビンドゥ、バギーラタ、善行のヤヤーティ——神々自身も彼の祭祀を助け、森林や鉱脈をともなうこの地上の各所に彼の聖域と祭柱が存する。かつて神仙ナーラダは、息子を失って嘆き苦しむシビ国王に対し、以上の二十四名の王に言及した。（二六六―二七〇）彼らよりも強力な他の王たちも、以前に去った。一切の美質を有する偉大な勇士たちも。（二七一）プール、クル、ヤドゥ等の人々（中略）、その他無数の王たちが知られている。（二七二―二七九）これらの強力で賢明な王たちも、多大の享楽を捨てて死去した。あなたの息子よりもずっと偉大な王たちも。（二八〇）その神のような行為、武勇、捨離、偉大さ、信仰、真実性、清潔さ、廉直が、古の賢い大詩人たちにより讃えられているところの、一切の富貴と美質をそなえている人々も死去した。（二八一―二八二）

あなたの息子たちは邪悪で、怨恨のために苦しみ、貪欲であり、概して悪事を行なったのであるから、彼らのことを悲しむ必要はない。（二八三）あなたは学識あり、叡知と知性をそなえ、賢者たちに尊敬されている。教典に従う知性を持つ人々は迷妄に陥ることがないのだ。（二八四）王よ、あなたは〔運命のもたらす〕罰と恩寵とを知っているはずだ。息子を守ることばかり考えてはいけない。（二八五）そうなるべきことを嘆いてはならぬ。何人が優れた叡知に

より運命を退けることができるか。（二八六）創造神が定めた道を誰も乗り越えることはない。この一切は時間（運命）に基づく。生ずるにせよ滅するにせよ、幸福にせよ不幸にせよ。（二八七）時間は生類を熟させる（異本「創造する」）。時間は生類を帰滅させる。時間は、生類を燃やす時間を、再び鎮める。（二八八）時間はこの世における善悪のすべての状態を創り出す。時間は一切の生類を帰滅させ、また再び創り出す。時間はすべての生類の中を、妨げられることなく、平等に歩きまわる。（二八九）過去・未来・現在の事象は、時間により創られたものと理解し、正気を失ってはなりませぬ。（二九〇）」

バーラタ読誦の功徳

吟誦詩人は語った。——

ここにおいて、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）は、神聖なるウパニシャッド（奥義書、秘説）を述べた。聖なる『バーラタ』の学習により、たとえ四分の一詩節でも唱え、信仰すれば、その者の一切の罪は残らず浄められる。（二九一）本書において、善行をなす清浄な神仙、梵仙、王仙たちや、夜叉、大蛇たちが称讃されている。（二九二）そして、ここでは、永遠なる聖ヴァースデーヴァ（クリシュナ）が称讃される。というのは、彼は真実であり、正義であり、神聖であり、清浄である。（二九三）彼は常住なるブラフマン（梵、最高原理）であり、最高の不動（最高我）であり、永遠の光である。賢者たちは彼の神聖な行為を語る。（二九四）その神から、非存在の

存在と存在する非存在とが展開する。連続性と活動性、生と死と再生とが……。（一九五）五元素と構成要素よりなる「個物に関するもの」と呼ばれるもの、及び非顕現などと呼ばれる最高の存在、それはこの神に他ならないと歌われる。（一九六）禅定とヨーガの力をそなえ、専心した最高の苦行者たちは、鏡の中の像を見るように、自己に存するそれを見る。（一九七）常に精励であり、信仰し、真実と法に専念し、この章を唱える人は、罪悪から解放される。（一九八）常にこの『バーラタ』の「筋書き」の章を始めから聞く信仰者は、苦境に沈むことはない。（一九九）黎明と黄昏に、この「筋書き」のいくつかの詩句を唱えれば、速やかに、昼と夜に積んだ罪過から解放されるであろう。（二〇〇）これは真実であり甘露であって、『バーラタ』の体（主要な部分）である。ちょうどバター（ナヴァニータ）が凝乳（ヨーグルト状の乳製品）の体であり、バラモンが二足動物（人間）の体であるように。（二〇一）湖水の中では海が最上であり、四足動物の中では牛が最上である。『バーラタ』もこれら最上のものと同様であると言われる。（二〇二）そして、祖霊祭において、バラモンたちにほんの四分の一詩節でもそれを聞かせるならば、その人の祖霊に不滅の飲食物がもたらされる。（二〇三）叙事詩と古伝説とで、ヴェーダ聖典を補強するべきだ。ヴェーダは学識の少ないものを恐れるから。それが私を導くであろう。（二〇四）賢者はこのクリシュナのヴェーダを聞かせれば利益を得る。疑いもなく、胎児殺しの罪をも離れるであろう。（二〇五）清らかな人が節日（月相の変り目）ごとにこの章を読誦するならば、彼は『バーラタ』すべてを学習したことになると私は考える。（二〇六）人が信仰をもって常にこの神聖なる章を聞くならば、彼は長寿、名声を得て、天界に赴くであろう。（二〇七）

かつて神々や聖仙たちは、集合して、四ヴェーダを秤の一方の側にのせ、『バーラタ』一冊を他方の側にのせて計ったところ、大きさ重さともに『バーラタ』の方が多かった。（二〇八）大きい（マハー）から、重さ（バーラ）を有するから、『マハーバーラタ』と呼ばれる。この語源を知る人は、一切の罪悪から解放される。（二〇九）

苦行は罪悪ではない。ヴェーダの学習は罪悪ではない。本来のヴェーダの教令は罪悪ではない。苦労して財産を得ても罪悪ではない。まさにそれらが意向によって汚された時、それらは罪悪である。（二一〇）

（第一章）

(2) 各巻の要約（第二章）

聖地サマンタパンチャカの由来

聖仙たちは言った。

「吟誦詩人よ、サマンタパンチャカ（クルクシェートラ付近の聖地の名）と言われたが、我々はそれに関することをすべて正しく聞きたい。（一）」

吟誦詩人は語った。——

最高のバラモンたちよ、私が美しい物語を語っている時、サマンタパンチャカという地について聞きたいと望むのなら、どうかお聞きなさい。（二）

トレーター期（四ユガのうちの第二の時期）からドゥヴァーパラ期（第三のユガ）へ移行する時期のことであった。最高の戦士ラーマ（パラシュラーマ）は、怒りにかられ、繰り返し地上の王族を殺した。（三）彼はその力によって火のように輝き、すべての王族を滅ぼして、サマンタパンチャカに五つの血の湖を作った。（四）彼は怒りにかられ、その血の池で、血を供えて祖霊たちを満足させたということである。（五）その時、リチーカ等の祖霊が、この雄牛のようなバラモン（パラシュラーマ）に近づいて、「許してあげなさい」と彼を制止したので、彼はこの行為を中断した。（六）それらの〔五つの〕血の湖の付近の地は、神聖なるサマンタパンチャカ（「周辺に五つ〔の湖〕がある地」の意）と呼ばれるようになった。（七）その土地が何らかの特徴をそなえている場合、それによって土地の名をつけるべきである、と賢者たちは述べる。（八）

そして、ドゥヴァーパラ期からカリ期（第四のユガ、末世）へ移行する時、このサマンタパンチャカにおいて、クル軍とパーンダヴァ軍との戦いがあった。（九）この何ら欠陥のない土地、最高に法にかなった土地において、十八の軍団は戦うべく集結した。（一〇）バラモンたちよ、その地の名の由来は以上の通りである。そして、その地が神聖で心地よいことが汝らに告げられた。（一一）最高の聖者たちよ、私はすべてをあなた方に語った。その地方が三界（天界、地上界、地底界）において有名になったわけを。（一二）（一三—二八略）

全百巻の内容

シャウナカの祭祀において語られた『バーラタ』の物語を、プローマンの物語から始めて、私は詳しく語るであろう。（二九）この物語は、多彩な意味の語に満ち、多くの約束ごとをそなえ、離欲が解脱を求める人々に受け入れられるように、賢者たちに受け入れられている。（三〇）知られるべき対象のうちのアートマン（真我）のように、好ましいもののうちの生命のように、すべての聖典のうちで、最も重要な内容を含むこの叙事詩は最上である。（三一）実にこの最高の叙事詩の中に、最高の知性が、母音と子音〔よりなる〕世間とヴェーダとに依存するすべての言葉が含まれているのである。（三二）叡知に満ちた、多彩な語と巻よりなる、この叙事詩『バーラタ』の、「各巻の要約」を聞きなさい。（三三）

(1)全巻の筋書き、(2)各巻の要約、(3)パウシャ王、(4)プローマン、(5)アースティーカ、(6)最初の家系の降下、(7)起源――神々に作られた驚異、(8)ラック（可燃物）の家の火災、(9)ヒディンバ殺し、(10)バカ殺し、(11)チトララタ、(12)神々しいパーンチャーラの娘（ドラウパディー）の婿選び式、(13)王族の作法により勝利し、結婚、(14)ヴィドゥラの到着、(15)王国の獲得、(16)アルジュナ、森に住む、(17)スバドラーの掠奪、(18)引出物の授与、(19)カーンダヴァ森炎上、そこでマヤと出会うこと、(20)集会場、(21)協議、(22)ジャラーサンダ殺し、(23)世界制覇、(24)皇帝即位式、(25)客人への贈物を取ること、(26)シシュパーラ殺し、(27)賭博、(28)第二の賭博、(29)森林の教え、(30)キルミーラ殺し、(31)山岳民――シヴァ神とアルジュナとの戦い、(32)アルジュナ、インドラの世界へ行く、(33)賢明なクル族の王の聖地巡礼、(34)ジャタースラ殺し、(35)夜叉との戦闘、(36)大蛇、(37)マールカンデーヤとの会合、(38)ドラウパディーとサティヤバーマーとの会話、(39)牧場視察、(40)鹿の夢、(41)一枡の米、(42)シンドゥ王、森からドラウパディーを掠奪する、(43)耳環の奪取、(44)火鑽棒、(45)ヴィラータ、(46)キーチャカ殺し、(47)牛の略奪、(48)アビマニユとヴィラータの娘との結婚、(49)努力――驚異に満ちた巻、(50)サンジャヤの使節、(51)ドリタラーシトラ、心労による不眠、(52)サナツジャータ――アートマンに関する秘説、(53)進軍か和平か、(54)クリシュナの使節、(55)偉大なるカルナとの対話、(56)クル軍とパーンダヴァ軍との進軍、(57)戦士と超戦士の列挙、(58)使節ウルーカの到着――（パーンダヴァの）怒りを増大させる、(59)アンバーの物語、(60)驚異的な、ビーシュマの（軍司令官）任命、(61)ジャンブー大陸の創造、(62)地上界――諸大陸に関する詳説、(63)バガヴァッド・ギーター、(64)ビーシュマ殺害、(65)ドローナの（司令官）就任、(66)特攻隊の殺戮、(67)アビマニユの死、(68)誓約、(69)ジャヤドラタの死、(70)ガトートカチャの死、(71)総毛立たせる、ドローナの死、(72)ナーラーヤナの武器の発射、(73)カルナ、(74)シャリヤ、(75)（ドゥルヨーダナ）湖に入る、(76)棍棒合戦、(77)サラスヴァティー――聖地と家系、(78)恐ろしい、眠る戦士の殺戮、(79)恐怖の兵器アイシーカ、(80)水を与える、(81)女性、(82)祖霊祭――クル族の葬式、(83)賢明なるダルマ王（ユディシティラ）の即位式、(84)チャールヴァーカ――バラモンに変装した羅刹――を退治する、(85)家の分配、(86)寂静――王の義務を説く、(87)窮迫時の法、(88)解脱の法、(89)教説、(90)賢者ビーシュマの昇天、(91)馬祀（アシュヴァメーダ）――一切の罪過の消失、(92)アヌ・ギーター――アートマンに関する教説、(93)隠棲、(94)息子と出会うこと、(95)ナーラダの到着、(96)戦慄の棍棒合戦、(97)偉大なる旅立ち、(98)昇天、(99)付録「ハリの家系」（ハリヴァンシャ）、(100)非常に驚異的な、未来の巻。（三四―六九）

以上、全百巻が、偉大なヴィヤーサによって説かれた。それは再び、吟誦詩人ローマハルシャナの息子（ウグラシュラヴァス）により、ナイミシャの森で、十八巻の書として適切に語られた。そこで、『バーラタ』の梗概、「各巻の要約」が次のように説かれる。（七〇―七一）

第1巻「最初の巻」の要約

「パウシャ王の巻」において、ウッタンカの偉大さが述べられる。「プローマン」において、ブリグの家系の詳細が説かれる。（七二）「アースティーカ」において、一切の蛇族とガルダ鳥

の誕生、及び、乳海の攪拌、ウッチャイヒシュラヴァス（乳海の攪拌から生じた神馬）の誕生が語られる。(七三) そして、蛇供（蛇を犠牲にする儀式）を行なうジャナメージャヤ王に対し、この偉大なバラタ族の物語が始まる。(七四)「起源の巻」において、諸王、聖仙ドゥヴァイパーヤナ、その他のバラモンたちの種々の起源が述べられる。(七五) そして、そこに、神々の部分的降臨と、ダイテイヤ、ダーナヴァ（いずれも悪魔の一種）、強力な夜叉(ヤクシャ)、竜(ナーガ)、蛇、ガンダルヴァ（半神の一種）、鳥類、及びその他の種々の生物の起源が説かれている。(七六―七七) 偉大なるヴァス神群が、ガンガー女神の子としてシャンタヌの家に再生する。更に、彼らは天に昇る。(七八) 彼らの集合した精液からビーシュマが生まれる。そして、彼は王位を辞退し、禁欲を保ち、誓約を守って、チトラーンガダを守護する。チトラーンガダが死んだ時、その弟のヴィチトラヴィーリヤを守護し、彼を王位につける。アニーマーンダヴィヤの呪詛により、ダルマ神は人間(じんかん)に生まれる。(七九―八一) そして、恩寵により、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）からドリタラーシトラとパーンドゥが生まれ、そして［パーンドゥから］パーンダヴァ兄弟が生まれる。(八二) ドゥルヨーダナの計画。ヴァーラナーヴァタへの旅。ヴィドゥラの忠告により地下壕を掘る。(八三) パーンダヴァたちは、恐ろしい森でヒディンバと会う。そして、ガトートカチャ（ビーマとヒディンバの妹の息子）の誕生が語られる。(八四) パーンドゥの息子たちは隠れて生活する。彼らはバラモンの家に住む。バカ（ビーマに殺された羅刹）の死。市民の驚き。(八五) ガンガー（ガンジス）の岸でアンガーラパルナ（チトララタ、ガンダルヴァ王）に勝利してから、アルジュナはすべての兄弟たちとともに、パーンチャーラに向かって発つ。(八六) ここで、タパティー、ヴァシシタ、アウルヴァのすば

らしい物語、五名のインドラの驚くべき物語が語られる。(八七) ドラウパディーが五王子の共通の妻になることに対するドルパダ王の葛藤。神が定めた神聖な結婚。(八八) ヴィドゥラの到着。クリシュナとの面会。カーンダヴァの森に住むこと。王国の半分を統治すること。(八九) ナーラダの命令により、ドラウパディーに関する約定を決める。そこで、スンダとウパスンダとの物語が話される。(九〇) アルジュナは森に住む。途中、ウルーピー（竜王の娘）と会う。聖地巡礼。バブルヴァーハナ（アルジュナの息子）の誕生。(九一) アルジュナはドゥヴァーラカーにおいて恋愛し、クリシュナの同意を得て、愛するスバドラー（クリシュナの妹）を手に入れる。(九二) デーヴァキーの息子クリシュナが到着した時、結婚の贈物を得ること。［クリシュナとアルジュナが、アグニ（火神）から］円盤(チャクラ)と［ガーンディーヴァ］弓とを得ること。カーンダヴァ［の森］を焼くこと。(九三) スバドラーに、威力に満ちたアビマニユが生まれる。火中からマヤ（建築や諸技術に優れた阿修羅）を救出する。蛇（アシュヴァセーナ）の脱出。大仙マンダパーラとシャールンガの雌鳥との間に息子が生まれる。(九四)

以上が非常に長い「最初の巻」という第一巻である。至高の威光を持つ最高に偉大な聖者ヴィヤーサは、そこに二百十八章、七千九百八十四詩節をあてた。(九五―九六)

第2巻「集会の巻」の要約

第二巻は「集会の巻」と呼ばれ、多くの出来事を含む。パーンダヴァたちは集会を催す。

キンカラたち（羅刹の一族）と出会う。（九七）ナーラダ仙による世界守護神の集会場の物語。皇帝即位式《ラージャスーヤ》の企画。〔ビーマは〕ジャラーサンダ（マガダ国王）を殺す。（九八）クリシュナはギリヴラジャで監禁されていた諸王を解放する。即位式の際、贈物に関する論争において、〔クリシュナは〕シシュパーラ（チェーディ国王）を殺す。（九九）祭祀における偉容を見て、ドゥルヨーダナが苦しみと妬みを抱いた時、ビーマは集会場で彼を嘲笑する。（一〇〇）そこで彼に怒りが生じ、賭博を行なわせる。そこで、賭に巧みなシャクニは、賭博においてユディシティラを破る。（一〇一）ドラウパディーは、賭博という海に沈んだパーンダヴァたちを、海中から人を救出する舟のように救出する。彼らが救われたことを知って、ドゥルヨーダナ王は、再び彼らを賭博に招待する。（一〇二）

以上が「集会の巻」である。最高の聖仙は、そこに七十七章、二千五百十一詩節をあてた。（一〇三―一〇四）

第3巻「森林の巻」の要約

その次が大部の第三巻「森林の巻」である。賢明なユディシティラに市民がつき従うこと。（一〇五）ヴリシュニ族とパーンチャーラ族がこぞって到着する。サウバ（都市名）の滅亡の物語。キルミーラ（羅刹の名）殺し。無量の威力を有するアルジュナは、武器を求めて遍歴する。（一〇六）山岳民《キラータ》の姿をとったシヴァとの戦闘。世界守護神たちとの出会い。天界に昇ること。苦しむユディシティラは、聖なる大仙ブリハッダシュヴァに出会い、そして自己の災禍について嘆く。（一〇七―一〇八）ここで、敬虔にして憐みをさそう「ナラ王物語」が語られる。そこでは、ダマヤンティーは、ナラが災難に陥っても、毅然としている。（一〇九）ローマシャは、森に住む偉大なパーンダヴァたちに、天界におけるアルジュナの活動を語る。（一一〇）偉大なパーンダヴァたちの聖地巡礼。まさにそこで、ジャタースラ殺しが語られる。（一一一）ドラウパディーはビーマセーナをガンダマーダナ山へ派遣する。そこにおいて彼は、マンダーラ華を求めて蓮池を侵害する。（一一二）そこで彼は、マニマットをはじめとする強力な羅刹《ラークシャサ》や夜叉《ヤクシャ》たちと戦う。（一一三）アガスティヤの物語。この聖仙はヴァーターピを食べ、息子を得るためにローパームドラーと交わる。（一一四）続いて、鷲と鳩の物語。そこでは、インドラとアグニとダルマ神が、シビ王を試す。（一一五）童貞のリシュヤシュリンガ（一角仙人）の物語。ジャマッダグニの息子である、威力に満ちたラーマ（パラシュラーマ）の物語。（一一六）そこでは、カールタヴィーリヤ殺しとハイハヤ家の滅亡が語られる。スカニヤーの物語。そこではブリグの息子チャヴァナが、ナーサティヤ（アシュヴィン双神）に、シャリヤーティの祭祀においてソーマ酒を飲ませる。また、双神はこの聖者に若さをとりもどさせる。（一一七―一一八）ジャントゥの物語。そこで、ソーマカ王は多くの息子を求めて、一人息子（ジャントゥ）を犠牲にして祭祀を行ない、百人の息子を得る。（一一九）アシターヴァクラ物語。そこでは、この聖仙は論争においてバンディンを破り、海に沈んでいた父を取りもどす。（一二〇）アルジュナは長兄のために神聖な武器を得て、ヒラニヤプラのニヴァータカヴァチャスと戦う。（一二一）アルジュナ、ガンダマーダナ山において、兄

弟たちと再会する。牧場視察。そこで、アルジュナはガンダルヴァ（半神の一種）と戦う。（二二二）彼らはドゥヴァイタヴァナ湖に帰る。ジャヤドラタ、隠棲所からドラウパディーを誘拐する。（二二三）そこで、ビーマは風のような速さで彼を追う。マールカンデーヤと出会って、少しずつ物語が続く。（二二四）クリシュナ、サティヤーと出会い対話する。一枡（ドローナ）の米に関する物語。インドラデュムナの物語。（二二五）「サーヴィトリー物語」。アウッダーラキ物語。ヴァイニヤ物語。まさにここに、非常に長い「ラーマーヤナ物語」がある。（二二六）カルナの耳環、インドラによって奪われる。火鑽棒の物語。そこで、ダルマ神は息子（ユディシティラ）を教える。そこで、パーンダヴァは、願望がかない、西方に行く。（二二七）

以上が「森林の巻」という第三巻である。最高の聖仙は、そこに二百六十九章、一万一千六百六十四詩節をあてた。（二二八―二二九）

第4巻「ヴィラータの巻」の要約

次が、長い「ヴィラータの巻」である。パーンダヴァはヴィラータ王の都に行き、墓地で大きなシャミー樹を見出し、そこに武器を隠す。（二三〇）そこで彼らは都に入り、変装して住む。そこで、ビーマにより邪悪なキーチャカが殺される。（二三一）牛の略奪に際し、アルジュナは戦闘においてクル一族を破る。そしてパーンダヴァは、ヴィラータの牛の財産を解放する。（二三二）ヴィラータは、アルジュナに、彼とスバドラーの息子である勇猛なるアビマニユの妻として、娘のウッタラーを与える。（二三三）

ここで大部の第四巻「ヴィラータの巻」が終わる。最高の聖仙は、そこに六十七章、二千五十詩節をあてた。（二三四―二三五）

第5巻「努力の巻」の要約

次は、「努力の巻」という第五巻である。パーンダヴァがウパプラヴィヤに滞在している時、勝利を願って、ドゥルヨーダナとアルジュナとがクリシュナのもとに行く。（二三六）この戦争において、「あなたはわが軍を援助して下さい」と要請された時、思慮深いクリシュナは答える。（二三七）「勇者たちよ、戦わない顧問官として私をとるか、私の兵士たちの軍団をとるか、どちらかを選べ」と。（二三八）そこで、愚かなドゥルヨーダナは軍隊を選び、アルジュナは戦わない顧問官としてクリシュナを選ぶ。（二三九）威厳ある大王ドリタラーシトラは、和平のために、パーンダヴァに対し、サンジャヤを使節として派遣する。（二四〇）パーンダヴァ軍がクリシュナに指導されていることを聞いて、ドリタラーシトラは心労のあまり眠れなくなる。（二四一）ヴィドゥラは多彩でまた有益な言葉を、賢明なるドリタラーシトラ王に語る。（二四二）また、サナツジャータは、悲嘆に暮れ心痛を抱く王に、至高のアートマン（真我）に関することを語る。（二四三）翌日、サンジャヤは諸王の集会において、主君に、クリシュナとアルジュナが一体なることを告げる。（二四四）クリシュナは憐憫にかられ、和平を望んで、講和の

ために自ら象の都（ハースティナプラ）に来る。（二四五）クリシュナが両者の側によかれと思い講和を求めた時、ドゥルヨーダナ王子は拒絶する。（二四六）カルナとドゥルヨーダナたちが悪しき謀議をなしたことを知って、クリシュナは諸王に神通力を示す。（二四七）クリシュナはカルナを車に乗せて、〔離間〕策を前提として勧誘したが、カルナは誇りをもって拒絶する。（二四八）それから、ハースティナプラの都から、戦車・騎兵・歩兵・象隊が出陣する。そして、両軍の列挙。（二四九）ドゥルヨーダナ王子は、翌日の大戦に際し、パーンダヴァ軍に対しウルーカを派遣し、乱暴な使者の口上を述べさせる。勇士と超勇士の列挙。アンバーの物語。（二五〇）

以上が多くの出来事を含む『バーラタ』の第五巻であり、和平と戦争に関する「努力の巻」と呼ばれている。（二五一）広大な叡知を有する偉大なヴィヤーサは、この巻に百八十六章、六千六百九十八詩節をあてた。（二五二—二五三）

第6巻「ビーシュマの巻」の要約

次は、多彩な内容を含む「ビーシュマの巻」である。そこで、サンジャヤはジャンブー大陸における創造を述べる。（二五四）そして、非常に残酷で恐ろしい十日間の戦闘が行なわれる。そこで、ユディシティラの軍は非常に悲惨な状態に陥る。（二五五）偉大な叡知を有するクリシュナ・ヴァースデーヴァは、迷妄より生じたアルジュナの気遅れを、条理を尽くして解脱（げだつ）を示すことにより除去する。（二五六）偉大な弓取りアルジュナは、シカンディンを先頭に立てて、

鋭い矢で射て、ビーシュマを戦車から落とす。（二五七）

以上が『バーラタ』における、大部の第六巻である。ヴェーダを知るヴィヤーサは、そこに百十七章、五千九百八十四詩節をあてた。（二五八—二五九）

第7巻「ドローナの巻」の要約

次は、多くの出来事を含む、多彩な「ドローナの巻」である。特攻隊（サンシャプタカ）がアルジュナを戦場から退却させる。（二六〇）戦闘においてインドラに匹敵する大王バガダッタは、象のスプラティーカとともに、アルジュナに成敗される。（二六一）ジャヤドラタをはじめとする多数の勇士たちは、成人に達しない勇猛な少年アビマニュを殺す。（二六二）アビマニュが殺された時、怒ったアルジュナは、戦闘において七軍団を撃破し、ジャヤドラタ王を殺す。そして彼はまた、戦闘において、特攻隊の残りを全滅させる。（二六三）「ドローナの巻」において、アランブサ、シュルターユス、勇猛なジャラサンダ、サウマダッティ、ヴィラータ、勇士ドルパダ、ガトートカチャ等、その他の人々が死ぬ。（二六四）ドローナが戦いで倒れた時、怒ったアシュヴァッターマンは、恐ろしい兵器ナーラーヤナを放つ。（二六五）

以上が『バーラタ』における大部の第七巻である。この「ドローナの巻」において、これまで言及された雄牛のように勇敢な諸王は、ほとんど死ぬ。（二六六）聖者ヴィヤーサは、そこに百七十章、八千九百九詩節をあてた。（二六七—二六八）

第8巻　「カルナの巻」の要約

次は、非常に驚異的な「カルナの巻」である。聡明なマドラ国王（シャリヤ）が御者に任じられる。三都（トリプラ）の住民の破滅が語られる。（二六九）出陣に臨み、カルナとシャリヤは激しく口論する。非難と結びついた、鷲鳥（ハンサ）と烏の物語。（二七〇）ユディシティラとアルジュナの、相互に対する怒り。勇士カルナ、戦車戦でアルジュナに殺される。（二七一）『バーラタ』を学ぶ者たちは、以上を第八巻と呼ぶ。この「カルナの巻」には、六十九章、四千九百詩節が含まれる。（二七二）

第9巻　「シャリヤの巻」の要約

次は、多彩な内容を含む「シャリヤの巻」である。クル軍の英雄たちが死んだ時、マドラ国王（シャリヤ）が司令官となる。（二七三）そこで生じた戦車戦が次々と語られる。この「シャリヤの巻」において、クル軍の主要人物たちの滅亡が語られる。（二七四）シャリヤは勇士ユディシティラにより殺される。かくて、激しい棍棒戦が語られる。サラスヴァティー川の諸聖地の神聖さが語られる。（二七五）以上が驚異的で内容に富む第九巻である。誉れあるクル族の聖者は、そこに五十九章、三千二百二十詩節をあてた。（二七六―二七七）

第10巻　「眠る戦士の殺戮の巻」の要約

次は、残酷な「眠る戦士の殺戮の巻」を述べるであろう。パーンダヴァ軍が引きあげた時、夜間、血にまみれた三人の戦士、クリタヴァルマン、クリパ、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は、腿を砕かれて恨みを抱いているドゥルヨーダナ王子のもとに近づいた。（二七八―二七九）そこで、勇士アシュヴァッターマンは、怒り狂い、ドリシタデュムナに率いられたすべてのパーンチャーラ軍とパーンダヴァを従者もろとも殺さないうちは鎧を脱がないと誓う。（二八〇）そして、アシュヴァッターマンに率いられたこれらの勇士は、夜間、安心して眠っているパーンチャーラ軍を、従者もろとも虐殺する。（二八一）パーンダヴァの五王子及び勇士サーティヤキは、クリシュナの力によって救われたが、残りの人々は死んだ。（二八二）ドラウパディーは、息子たちの死を嘆き悲しみ、父や兄弟たちの死に苦しみ、五人の夫のそばに来て、断食の決意をする。（二八三）ドラウパディーの言葉を聞いて、勇猛なビーマは怒って、師（ドローナ）の息子アシュヴァッターマンを追跡する。（二八四）ビーマセーナを恐れ、運命にかりたてられて、アシュヴァッターマンは怒り、「パーンダヴァが全滅するように」と呪って武器を放つ。（二八五）クリシュナは、「そのようになるな」と言ってその彼の呪詛を鎮める。そしてアルジュナは武器によりその武器を鎮める。（二八六）アシュヴァッター

マンとドゥヴァイパーヤナ等は、お互いに呪詛をかけあう。死者に水を供える葬儀において、すべての王に水を供えた時、プリター（クンティー夫人）は、息子カルナの出生の秘密を語る。

以上が第十巻の「眠る戦士の殺戮の巻」（サウプティカ）である。（一八七—一八八）そして、無量の知性を有する偉大なる聖仙は、「サウプティカ」と「アイシーカ」を合わせたこの巻に、十八章、八百七十詩節をあてた。（一八九—一九〇）

第11巻「女性の巻」の要約

次は、哀れみを誘う「女性の巻」である。非常に哀れな、英雄の妻たちの嘆きの描写。ガーンダーリーとドリタラーシトラの怒りと鎮静。（一九一）彼らは戦場で殺された、死を恐れない勇敢な武士たち、息子や兄弟や父たちを見る。（一九二）一切の法（ダルマ）を守る人々のうちで最高の、非常に聡明な王は、論書にのっとって、諸王の遺体を焼かせる。（一九三）

以上が非常に哀れな、大部の第十一巻である。この巻には、二十七章、七百七十五詩節が含まれる。偉大な作者は、善人の心に悲しみと涙をもたらすこの『バーラタ』の物語を作った。（一九四—一九五）

第12巻「寂静の巻」の要約

次は、知性を増進させる第十二巻「寂静の巻」である。ダルマ王ユディシティラは、父、兄弟、息子、親類縁者を殺したことで、厭世の気持に陥る。（一九六）「寂静の巻」においては、矢の床に横たわるビーシュマが、正しい政策を知りたいと願う諸王が知るべき、諸々の法（ダルマ）について説く。（一九七）また、時間や原因を例示して、窮迫時の法が、まさにそこで説かれる。それを知ることにより、人は正しく一切知者となるであろう。また、多彩な解脱の法も、詳しく説かれている。（一九八）

以上が、知者に愛好される第十二巻である。この巻には、三百三十九章、一万四千五百二十五詩節が含まれる。（一九九—二〇〇）

第13巻「教説の巻」の要約

次は、最も重要な「教説の巻」である。クルの王ユディシティラは、ガンガー（ガンジス）女神の息子ビーシュマから法を確定する教えを聴いて、本来の状態をとりもどす。（二〇一）法と実利（アルタ）に関する規定が詳細に説かれる。また、諸々の布施の種々の果報が説かれる。（二〇二）また、諸々の布施の有資格者の種類と、その規定、及び善行の規定、真実の最高の帰趣が説かれる。（二〇三）

以上が、多くの事柄を含む、最も重要な「教説の巻」である。この巻において、ビーシュマの昇天が語られる。（二〇四）これが法の確定を説く第十三巻である。そこには、百四十六章、

六千七百詩節が含まれる。（二〇五）

第14巻　「馬祀の巻」の要約

次は、第十四巻、「馬祀の巻」である。ここには、最高のサンヴァルタとマルッタの物語がある。（二〇六）黄金の宝庫の獲得、パリクシットの誕生が語られる。〔アシュヴァッターマンの〕武器の火で焼かれたパリクシットは、クリシュナにより蘇生させられる。（二〇七）アルジュナは、放たれた馬を追って遍歴する間、恨みを抱く諸王子と戦う。（二〇八）アルジュナは、指定女（プトリカー）の息子バブルヴァーハと戦って危機に陥る。盛大な馬祀におけるマングースの物語。（二〇九）

以上が非常に驚異的な「馬祀の巻」である。真理を見る聖仙は、そこに百三十三章、三千三百二十詩節をあてた。（二一〇―二一一）

第15巻　「隠棲の巻」の要約

次は、「隠棲」という第十五巻である。そこで、ドリタラーシトラ王は、ガーンダーリーとともに、王国を捨てる。ヴィドゥラもドリタラーシトラの隠棲所に行く。（二一二）彼が発ったのを知って、目上に喜んで従う貞節なるプリター（クンティー）は、息子たちと王国を捨てて、

彼らについて行く。（二一三）そこで王は、聖仙クリシュナ（ヴィヤーサ）の恩寵により、死んであの世に行っていた息子、孫、その他の王、英雄たちが戻って来たのに出会う。この最高の驚異を見て、彼は妻とともに悲しみを捨て、最高の成就に達する。（二一四―二一五）ヴィドゥラも法（ダルマ）を守って、至福に達する。そして、ガヴァルガナの息子である、賢明で自己を制御した大臣サンジャヤも、同様である。（二一六）ダルマ王ユディシティラはナーラダと会い、彼からヴリシュニ族の全滅を聞く。（二一七）

以上が、非常に驚異的な「隠棲の巻」である。真理を見る聖仙は、そこに四十二章、千五百六詩節をあてた。（二一八―二一九）

第16巻　「棍棒合戦の巻」の要約

次は、残酷な「棍棒合戦の巻」である。そこで、戦闘において武器の打撃に耐え得る勇士たちが、梵杖（ブラフマダンダ）（詛呪）に押しつぶされる。彼らは海辺で酒宴を開いて酒に酔い、運命にかりたてられ、エーラカー草が変化した金剛杵によって、お互いに殺しあう。（二二〇―二二一）ラーマ（バララーマ）とクリシュナの両者は、一族の全滅を図ってから、一切を平等に奪う時間（カーラ）（死神、運命）を甘んじて受け入れる。（二二二）勇士アルジュナは、ドゥヴァーラヴァティーに行き、ヴリシュニ族が全滅したことを知って非常に嘆き悲しむ。（二二三）彼の母方の叔父である、ヤドゥ（ヴリシュニ）の長シャウリ（ヴァスデーヴァ）を供養してから、ヤドゥの勇者たちが酒宴の席でお互いに殺

しあった大殺戮の現場を見る。(二二四) そして彼は、偉大なるクリシュナとラーマ(バララーマ)、及びヴリシュニ族の主要人物たちの葬式をとり行なわせる。(二二五) 彼は老人や子供たちをドウヴァーラヴァティーから連れ出し、ひどい災難に遭遇した時、強弓ガーンディーヴァが役に立たないことを知る。(二二六) そして、すべての神的な武器が役立たぬこと、ヴリシュニの女たちが奪われること、力の無常なることを経験する。(二二七) それから、ヴィヤーサの言葉にかりたてられて、ダルマ王(ユディシティラ)に会い、世を捨てる決意をする。(二二八)

以上が第十六巻「棍棒合戦の巻」である。八章、三百詩節を含む。(二二九)

第17巻「偉大なる旅立ちの巻」の要約

次は、第十七巻の「偉大なる旅立ち」である。パーンダヴァ兄弟は、ドラウパディー妃をともなって王国を捨て、窮極の成就に達する。(二三〇) 真理を見る聖仙は、そこに三章、百二十詩節をあてた。(二三一)

第18巻「天界の巻」の要約

次は、超人的で神的な「天界の巻」である。そこには、五章、二百詩節が含まれる。(二三二)

以上、合計十八巻である。付録として、「ハリの家系」(ハリヴァンシャ)と「未来の巻」(バヴィシュヤット)が語られる。(二三三)

各巻の要約を聞くことの効能

以上のように、「各巻の要約」により、すべての『バーラタ』の内容が説かれた。十八の軍団が戦おうとして集結し、残酷な十八日間の大戦争が行なわれた。(二三四)

四ヴェーダとその補助学とウパニシャッドを知るバラモンでも、この物語を知らないものは、決して賢者とは言えないだろう。(二三五) この聞くに価する物語を聞いた後は、他の物語は面白くなくなるだろう。ちょうど、雄の郭公(コーキラ)の鳴き声を聞いたら、烏の声が聞くに堪えないのと同じように。(二三六) この最高の叙事詩から、詩人の知性が生ずる。五元素から三つの世界の形成が生ずるように。(二三七) バラモンたちよ、古伝説(プラーナ)はこの物語の領域に存する。四種の生類が空間の領域に存するように。(二三八) この物語はすべての行為と美質の依所である。多彩な心作用がすべての感官の依所であるように。(二三九) この物語に依存せずして、いかなる物語も地上に存在しない。食事に依存せずして、身体の維持があり得ないように。(二四〇) この物語はすべての優れた詩人により利用されている。高い生まれの主人が栄達を望む従者たちに利用されるように。(二四一)

ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)の唇から発せられた『バーラタ』は、無比であり、清らかで

神聖であり、罪悪を払い、吉祥なるものである。それが唱えられるのを聴聞する人は、プシュカラ（聖地の名）の水で沐浴する必要がない。（二四二）この「各巻の要約」に導かれて、この偉大にして無上なる重要な物語を最初に聞けば、人々はそこに容易に入ることができる。舟に導かれて、大海に容易に入れるように。（二四三）（第二章）

(3) パウシャ王（第三章）

神犬サラマー

吟誦詩人は言った。——

パリクシットの息子ジャナメージャヤは、兄弟たちとともに、クルクシェートラにおいて、長期の祭祀を主催していた。彼には、シュルタセーナ、ウグラセーナ、ビーマセーナという三人の弟がいた。（一）彼らが祭祀を行なっていた時、サラマー（神々に属する雌犬の名）の息子である犬がやって来た。その犬は、ジャナメージャヤの弟たちに打たれて、ひどく泣きながら、母のそばに行った。（二）母犬はひどく泣いている彼にたずねた。「どうして泣いているの。誰にぶたれたの」と。（三）そう問われて、彼は母に答えた。「ジャナメージャヤの弟たちにぶたれた」と。（四）母は彼に言った。「きっとあなたはそこで悪いことをしたのでぶたれたのでしょう」と。（五）彼は答えた。「何も悪いことなんかしないよ。ぼくは供物を舐めるどころか、見もしなかった」と。（六）それを聞くと母親サラマーは息子に同情して、ジャナメージャヤが弟たちと長期の祭祀を行なっている場所にやって来た。（七）彼女は怒って彼に言った。「私の息子は何も悪いことをしないのに、どうしてぶたれたのか。彼は罪もないのにぶたれたのだから、見えざる危険があなたにふりかかるであろう」と。（八）神犬サラマーによりこのように告げられて、ジャナメージャヤはひどくうろたえて、意気消沈した。（九）

祭祀が終了した時、彼はハースティナプラにもどり、誰か自分の悪行の報いを鎮（しず）めてくれ

るような人はいないかと、非常に苦労してふさわしい司祭を捜し求めた。（一〇）

ある日、ジャナメージャヤは狩に出かけ、自国内のとある場所に隠棲所を見出した。（一一）そこに、シュルタシュラヴァスという聖仙と、彼の愛息のソーマシュラヴァスという者が座っていた。（一二）ジャナメージャヤはその息子に近づいて、彼を司祭として選んだ。（一三）彼はおじぎをして、聖仙に言った。

「尊者よ、あなたの御子息に、私の司祭になってもらいたい。（一四）」

聖仙は答えた。

「ジャナメージャヤよ、この息子は私と雌蛇の間に生まれた。彼は大苦行者であり、ヴェーダ聖典の学習を完了し、私の功徳（苦行）の力をそなえている。彼は私の精液を飲んだ雌蛇の腹で成長した。彼はあなたのすべての悪行の報いを鎮めることができる。ただし、偉大な神（シヴァ）に対する悪行を除いて。ところが、彼は密かに一つの誓戒を守っている。誰かあるバラモンが彼に何かのものを要求したら、彼はそれを相手に与えなければならない。もしあなたがそれに耐えられるなら、彼を連れて行きなさい。（一五）」

ジャナメージャヤは、「尊者よ、承知しました」と彼に答えた。（一六）彼は聖仙の息子を司祭として受け入れると、引き返し、弟たちに言った。

「私は彼を師として選んだ。お前たちは、彼の言うことは何でもためらわずにやりなさい。（一七）」

彼にそう言われて、弟たちはその通りにした。彼は弟たちにそう命じて、タクシャシラー

（タクシラ）に向けて進攻し、その地方を支配下に置いた。（一八）

ウッダーラカの語源

その頃、アーヨーダ・ダウミヤという聖仙がいた。彼に、ウパマニユ、アールニ（ウッダーラカ）、ヴェーダという三人の弟子がいた。（一九）彼はパーンチャーラ出身のアールニを、「行って水路の裂け目をふさいでくれ」と言って遣わした。（二〇）師に派遣されたアールニは、そこへ行ったが、水路の裂け目をふさぐことができなかった。（二一）彼は悩んだが、ある方法を考えついた。「よし、このようにしてやろう」と。（二二）彼は水路の裂け目に入りこんだ。彼が横たわった時、水は止まった。（二三）

それからしばらくして、師のアーヨーダ・ダウミヤは弟子たちにたずねた。

「アールニはどこへ行ったか。（二四）」

彼らは答えた。

「先生が、行って水路の裂け目をふさげと言われて遣わしたのです。（二五）」

そこで彼は弟子たちに告げた。

「それでは、みなで彼がいるところへ行こう。（二六）」

彼はそこに行ってアールニを呼んだ。

「おおい、アールニよ、どこにいるのか。わが子よ、来なさい。（二七）」

アールニは師の言葉を聞くと、水路の裂け目から急いで立ち上ると、師の近くにやって来て、師に言った。

「水がどうしても止まらず流れ出るので、私は水をせき止めるために水路の裂け目に入りこんでいましたが、先生の声を聞いて、急いで水路の裂け目を開けて、先生のそばに来たのです。先生、お久し振りです。何でもお命じ下さい。何をしたらよいでしょうか。（二八）」

師は彼に言った。

「お前は水路の裂け目を開いて立ち上ったから、ウッダーラカ（「立ち上って開く」と通俗語源解釈される）と名のるがよい。（二九）」

師は彼に恩寵を与えた。

「お前は私の命令を遂行したから、至福を得るであろう。そして、一切のヴェーダ聖典と一切の法典とが、お前に顕現するであろう。（三〇）」

師にそのように言われてから、アールニは望みのままの場所に行った。（三一）

師に仕える苦しみ

さて、このアーヨーダ・ダウミヤには、ウパマニユという別の弟子がいた。（三二）師は、「なあ、ウパマニユよ、牛の世話をしてくれ」と言って遣わした。（三三）彼は師の命に従って牛の世話をした。彼は昼間に牛の世話をしてから、夕方に帰って来て、師の前に立ちおじぎ

をした。(三四) 師は、彼が太ったのを見て言った。
「なあ、ウパマニユよ、どうやって生活しているのか。お前は大そう太ったなあ。(三五)」
彼は師に答えた。
「私は施食により生活しております。(三六)」
師は言った。
「私にさし出さないで施食を食べてはならぬ。(三七)」
彼は「わかりました」と言って、再び牛の世話をした。それから帰って来て、前と同じように師の前に立っておじぎをした。(三八) 師は彼が相変わらず太っているのを見てたずねた。
「なあ、ウパマニユよ、私はお前の施食を残らず受け取った。今はどうやって生活しているのか。(三九)」
このように師に問われて彼は答えた。
「まず先生に施食をさしあげて、再び行乞するのです。私はそれで生活しています。(四〇)」
師は彼に言った。
「それは師に対するふさわしいやり方ではない。そのようにしていれば、他の人々の生活を妨げることにもなる。お前は欲ばりだ。(四一)」
彼は「わかりました」と言って、牛の世話をした。それからまた師の家にもどり、師の前に立って挨拶した。(四二) 師は彼が相変わらず太っているのを見て、再びたずねた。
「私はお前の施食をすべて受け取ったし、お前は他に行乞していないのに、太っている。どうやって生活しているのか。(四三)」
彼は師に答えた。
「牝牛たちの乳により生活しているのです。(四四)」
師は彼に言った。
「私が承知しないのに乳を飲むのは適当ではない。(四五)」
彼は、「わかりました」と約束して、牛の世話をしてから再び師の家に帰り、師の前に立って挨拶した。(四六) 師は彼が相変わらず太っているのを見て、彼にたずねた。
「お前は施食を食べないし、他に行乞もしていないし、乳も飲んでいないのに、太っている。どうやって生活しているのか。(四七)」
そう言われて、彼は師に答えた。
「師よ、仔牛たちが母牛の乳を飲んでから吐き出す泡を飲んでおります。(四八)」
師は彼に言った。
「よい性質の仔牛たちは、お前を哀れんで多くの泡を吐いてくれるのだ。そのようにしていれば、仔牛たちの生活を妨げるであろう。泡も飲んではいかん。(四九)」
彼は「わかりました」と約束して、何も食べないで牛の世話をした。このように禁じられたので、彼は施食を食べず、他に行乞もせず、乳も飲まず、泡も飲まなかった。(五〇) ある時、森の中で、彼は飢えに苦しみ、アルカ樹の葉を食べた。(五一) 彼は猛烈に刺激的な味のアルカの葉を食べて目をやられ、盲目となった。彼は盲目になっても歩きまわっていて、井

戸に落ちてしまった。(五二)

さて、彼が戻らないので、師は弟子たちに言った。

「私はウパマニユにあらゆることを禁じた。きっと彼は怒ったのだ。だから長いこと帰って来ないのだ。(五三)」

彼はそう言って、森に行ってウパマニユを呼んだ。

「おおい、ウパマニユよ、どこにいるのか。出て来なさい。(五四)」

彼は師が呼ぶのを聞くと、大声で答えた。

「先生、私はここにいます。井戸に落ちたのです。(五五)」

師は彼に「どうして井戸に落ちたのか」とたずねた。(五六) 彼は師に答えた。

「私はアルカの葉を食べて盲目になり、それで井戸に落ちたのです。(五七)」

師は彼に言った。

「アシュヴィン双神を讃えなさい。彼ら神々の医師は、お前の目をなおしてくれるだろう。(五八)」

師にそう言われて、彼は『リグ・ヴェーダ』の文句によりアシュヴィン双神を讃え始めた。(五九)(六〇—七〇略)

彼にこのように讃えられて、アシュヴィン双神はやって来て、彼に言った。

「我々は満足した。この菓子をお前にやる。これを食べろ。(七一)」

彼は答えた。

「あなた方は決して偽りをおっしゃいません。しかし、師にこの菓子をさし出さずにそれを食べることはできません。(七二)」

するとアシュヴィン双神は彼に言った。

「我々は以前、お前の師によって同様に讃えられて満足し、彼に菓子を与えた。彼は師にさし出さずにそれを食べた。お前も師と同じようにしなさい。(七三)」

このように言われても、彼はまた双神に言った。

「どうかお許し下さい。師にさし出さないで食べることはできません。(七四)」

アシュヴィン双神は彼に告げた。

「お前の師に対する献身に満足したぞ。お前の師の歯は黒い鉄製になり、お前の歯は黄金製になるであろう。また、お前は視力を取りもどすであろう。そしてお前は至福を得るであろう。(七五)」

アシュヴィン双神からこのように言われ、彼は視力を取りもどし、師のもとに帰り、おじぎをしてから報告した。師は彼に満足した。(七六) そして彼に言った。

「アシュヴィン双神が告げたように、お前は至福を得るであろう。また、すべてのヴェーダ聖典がお前に顕われ出るであろう。(七七)」

以上がウパマニユの試練である。(七八)

さて、このアーヨーダ・ダウミヤには、ヴェーダという別の弟子がいた。(七九) 師は彼に命じた。

「なあ、ヴェーダよ、ここにいなさい。お前は私の家で、少しの間、私に仕えていなければならぬ。そうすればお前に至福がおとずれるであろう。（八〇）」

彼は「わかりました」と言って、師の家で、長い間、師にひたすら仕えて住んでいた。いつも重いくびきにつながれている牛のように、彼はあらゆる場合に反抗することなく、寒さ、暑さ、飢え、渇きの苦しみに耐えた。（八一）長い時が過ぎて、師は彼に満足した。そして、師の満足により、彼は至福と一切知性に達した。以上がヴェーダの試練である。（八二）

彼は師に許されて、師家に住む生活から離れ、家長の生活に入った。自分の家に住んでいる彼に三人の弟子ができた。（八三）彼は弟子たちには、「この仕事をなせ」とか、「師に仕えよ」などということは何も言わなかった。彼は師の家に住むことの苦しみを知っていたから、弟子たちにめんどうをかけることを望まなかったのである。（八四）

聖者ウッタンカと師の妻

さて、しばらくして、ジャナメージャヤ王とパウシャ王がやって来て、バラモンのヴェーダを王師として選んだ。（八五）ある日、彼は祭官の仕事で出かける時に、ウッタンカという弟子に家の仕事を頼んだ。

「おい、ウッタンカよ、わが家で何かが足りない時は、お前がそれを満たしてもらいたい。（八六）」

ヴェーダはウッタンカにこのように命じて、旅に出た。（八七）

そこでウッタンカは、忠実に師の命を守って、師の家に住んでいた。（八八）その間、師の家に住む女たちが集まって、彼を呼んで言った。

「あなたの先生の妻が受胎可能期です。しかし先生は留守です。受胎期が無駄にならないようにして下さい（受胎期を無駄にすることは罪とされる）。彼女は（異本の読み）嘆いております。（八九）」

彼はこのように言われて、女たちに答えた。

「私は婦人たちの言葉により、このすべきでない行為をすることはできない。師は『すべきでないことをもなせ』とは命じなかった。（九〇）」

やがて、彼の師が旅を終えて帰宅した。彼は一部始終を聞いて満足した。（九一）彼は弟子に告げた。

「なあ、ウッタンカよ、お前にどのようなお礼をしたらよいか。お前は法に従って私に奉仕したのだから。その結果、我々は益々お互いに満足し合っている。そこで、お前がここを出ることを許す。お前は一切の成就を得るであろう。行きなさい。（九二）」

そう言われて、彼は答えた。

「あなたにどのようなお礼をしたらよいか。次のように言われている。（九三）『一人が法に背いて（謝礼を受けないで）説明し（教育し）、もう一人が法に背いて（謝礼を払わないで）学ぶならば、二人のうちの一人は死に、怨みを抱く』と。（九四）今、私は先生にここを出ることを許可されました。そこで先生のお望みの、師に対する謝礼を払いたいのです。（九五）」

そう言われて、師は答えた。
「なあ、ウッタンカよ、それでは少しの間ここにいなさい。(九六)」
ある日、ウッタンカは師に言った。
「先生、お命じ下さい。師に対する謝礼を払います。何がお望みですか。(九七)」
師は彼に答えた。
「なあ、ウッタンカよ、お前は師に対する謝礼を払うと何度も私をせきたてた。そこで、私の妻のもとに行って、何を贈ろうかとたずねなさい。彼女がいいつけたものを贈りなさい。(九八)」
師にそう言われて、彼は師の妻にたずねた。
「奥様、私は家へ帰る許可を師にいただきました。そこで、あなたのお望みのものを師に対する謝礼としてさし上げて、恩返しをしてから帰りたいのです。ですから、奥様、お命じ下さい。師に対するどんな謝礼を払いましょうか。(九九)」
師の妻はそう言われて、ウッタンカに答えた。
「パウシャ王のもとへ行きなさい。彼の王妃がつけている耳環を乞うて、それを持ってきなさい。今から四日目に祭礼があります。私はその耳環をつけて、バラモンたちを接待したいのです。その日に私がその耳環で輝いているようにして下さい。それをかなえて下されば、あなたは幸福になれるでしょう。(一〇〇)」

ウッタンカとパウシャ王

師の妻にこのように言われて、ウッタンカは出発した。彼は途中で、異常に大きい雄牛と、それに乗っている異常に大きい男を見た。(一〇一) その男はウッタンカに言った。
「ウッタンカよ、この雄牛の糞を食べろ。(一〇二)」
そう言われて、彼は拒絶した。(一〇三) すると男は再び彼に言った。
「ウッタンカよ、食べろ。ためらうな。お前の師も以前に食べた。(一〇四)」
そこでウッタンカは「よろしい」と言って、その雄牛の糞を食べ尿を飲んでから、パウシャ王のもとへ行った。(一〇五)
ウッタンカは近づいて、座っている王を見た。彼は王のそばに行くと、祝福の言葉とともにおじぎをして言った。
「私は請願者としてあなたのもとに来ました。(一〇六)」
王は彼に挨拶してからたずねた。
「尊者よ、私は他ならぬパウシャだ。何でもしよう。(一〇七)」
ウッタンカは彼に言った。
「師に対する謝礼として、耳環を請うために来ました。王妃様がつけている耳環を下さい。(一〇八)」

パウシャ王は彼に答えた。
「後宮に入って、王妃に要求しなさい。（二〇九）」
王にそう言われて、彼は後宮に入ったが、王妃を見出さなかった。（二一〇）彼はパウシャに再び言った。
「嘘をついてはいけません。王妃は後宮にはおられなかった。私は彼女を見ませんでした。（二一一）」
そう言われて、パウシャは彼に答えた。
「あなたは今、汚れている。ちょっと思い出してみなさい。彼女は汚れた者や不浄な者には見られない。彼女は夫に貞節であるから、不浄な者の眼にはとまらないのだ。（二一二）」
そこでウッタンカは思い出して言った。
「私は食べた後、あわてて歩きながら口をゆすいだ。（二一三）」
パウシャは彼に答えた。
「きっとそのせいだ。歩きながら、または立ったままで口をゆすいではいけない。（二一四）」
そこでウッタンカは「わかりました」と言って、東を向いて座り、手足と顔をよく洗い、音をたてずに胸の方まで水でゆすぎ、三度飲み、二度洗浄して、体中の孔（口、耳孔、両眼等の九つの孔）を水でゆすいでから、後宮に入って王妃を見出した。（二一五）
彼女はウッタンカを見ると立ち上って、おじぎをして言った。
「ようこそ、尊者様、お命じになって下さい。何をしたらよいでしょうか。（二一六）」

彼は彼女に答えた。
「その耳環を、私の師のためにいただきたいのです。どうか私に下さい。（二一七）」
彼女は彼のよい性質に満足して、彼は受けるにふさわしい人だ、なおざりにしてはいけないと考え、その耳環を取って彼にさし出した。（二一八）そして彼に言った。
「竜王タクシャカがこの耳環を欲しがっていました。油断せずに持って行きなさい。（二一九）」
彼は王妃に答えた。
「王妃様、御心配には及びません。竜王タクシャカは私を害することはできません。（二二〇）」
彼はそう言って王妃に別れを告げ、パウシャのもとにもどった。（二二一）彼は王を見て、「おお、パウシャよ、私は満足しました」と言った。（二二二）パウシャは彼に答えた。
「聖者よ、久しぶりで尊敬に価する人に出会った。あなたは高徳の客人である。それ故、私は祖霊祭（シュラーッダ）を行ないたい。ちょっと待っていただきたい。（二二三）」
ウッタンカは彼に答えた。
「私は少し待とう。ありあわせの食物をすぐに出して下さい。（二二四）」
王は「よろしい」と言って、ありあわせの食物を彼に食べさせた。（二二五）
さて、ウッタンカは冷い食物に毛が入っているのを見て、これは不浄であると考えてパウシャに、「あなたは私に不浄な食物を出したから、盲目となるであろう」と告げた。（二二六）
パウシャは彼に、「あなたは欠陥のない食物を非難したから、子孫を持てないだろう」と答えた。（二二七）

ところがパウシャは、その食物が不浄であることを知った。（二二八）その食物が髪を解いた女によって用意されたので、毛が入って不浄であると知り、ウッタンカをなだめた。
「聖者よ、知らないで、毛の入った冷い食物をさし上げてしまいました。あなたにお許しを乞います。私が失明しませんように。（二二九）」
ウッタンカは彼に答えた。
「私は徒らには語らない。しかし、あなたは失明しても、遠からず視力をとりもどすであろう。あなたが私にかけた呪いも実現しないようにして下さい。（二三〇）」
パウシャは彼に答えた。
「私は呪詛を撤回できない。私の怒りは今も静まっていないから。それに、あなたは次のことを知らないのか。（二三一）『バラモンの心はバターでできている。言葉には鋭利な剃刀が託されていても……。王族（クシャトリヤ）の場合は、両方とも逆だ。言葉はバターよりなり、心は鋭利な刃よりなる』ということを。（二三二）だからして、私は鋭利な心を持っているから、呪いを変えることはできない。行きなさい。（二三三）」
ウッタンカは彼に答えた。
「あなたは食物が不浄であることを知って私をなだめた。そして、あなたはその前に言ったのだ。『あなたは欠陥のない食物を非難したから、子孫を持てないであろう』と。だが、食物は汚れていたのだから、私に対するこの呪いは実現しないであろう。（二三四）これで私は失礼する。」

そう言ってウッタンカは、例の耳環を持って出発した。（二三五）

タクシャカ竜王、耳環を奪う

途中で彼は、一人の裸行の沙門（シュラマナ）（修行者）が幾度も見え隠れしながらついて来るのを見た。さて、ウッタンカは耳環を地面に置いて、水を求めようとした。（二三六）その間、例の沙門は急いで近づき、耳環を取って走り去った。ウッタンカは彼に追いついてつかまえた。すると彼は沙門の姿を捨てて、タクシャカ竜王の姿にもどり、突然大地に開いた大きな穴に入った。（二三七）そしてその住処である竜の世界に行った。ウッタンカは同じ穴を通ってそこへ入りこんだ。そして、そこに入ると、詩節を唱えて竜（蛇）たちを讃えた。（二三八）（二三九―二四六略）
このように竜たちを讃えても、彼は耳環を得ることができなかった。その時、彼は二人の女が織機で布を織っているのを見た。（二四七）その織機には、黒と白の糸がかかっていた。そして、六人の童子によって回されている輪を見た。また、見目麗しい男を見た。（二四八）彼は彼らすべてを、次のような聖典の詩句によって讃えた。（二四九）
「この常に回る恒久なる輪は二十四の区分（半月）を有し、その中に、三百六十（の黒白の糸の末）がかけられており、それを六人の童子（六季節）が回している。（二五〇）
二人の若い女が、この遍在する織機を織って常に糸を動かしている。黒糸と白糸とを交互に用いながら。絶えず生類と世界とを開展しつつ。（二五一）

金剛杵（ヴァジュラ）を持つ者、世界の守護者、ヴリトラ（悪竜の名）を殺す者、ナムチ（悪魔の名）を殺す者、
黒衣をまとう偉大なる神、この世における真実と不真実とを分別する神。（二五二）
水から生じた古（いにしえ）の馬、すなわちヴァイシュヴァーナラ（火神アグニ）を乗物とする者、その世界主、三界の主、プランダラ（インドラ、帝釈天）に常に敬礼する。（二五三）」

するとその男は彼に言った。

「私はお前のこの讃歌に満足した。何でもお前の望みをかなえてやろう。（二五四）」

彼はその男に言った。

「竜（蛇）たちが私の支配下に帰すように。（二五五）」

その男は、「この馬の尻に息を吹きこめ」と言った。（二五六） 彼はその馬の尻に息を吹きこんだ。すると息を吹きこまれた馬のすべての体の穴から、煙をともなう火炎が噴出した。（二五七） その火炎によって竜の世界は煙でいっぱいになった。（二五八） すると、竜王タクシャカは、火炎を恐れ、意気消沈し、狼狽して、耳環を持って急いでその住処から出ると、ウッタンカに「どうぞこの耳環をお受け取り下さい」と告げた。（二五九） ウッタンカはそれを受け取った。

彼は耳環を受け取ると、考えた。

「今日、師の奥さんの祭礼がある。だが、私は遠くまで来てしまった。どうにかして帰らなければならぬ。（二六〇）」

彼が考えこんでいると、その男が言った。

「ウッタンカよ、この馬に乗れ。これはあっという間にあなたを師の家に連れて行くであろう。（二六一）」

彼は「承知しました」と言ってその馬に乗り、師の家にもどった。

師の妻は水浴し、髪をくしけずりつつ座っていたが、ウッタンカが帰って来ないので、彼を呪おうと決意していた。（二六二） その時、ウッタンカが入って来て、師の妻に挨拶し、彼女に耳環を渡した。（二六三） そこで彼女は彼に言った。

「ウッタンカよ、ちょうどよい所に、よい折に帰って来た。お帰りなさい。少しのところで私に呪われずにすんだ。あなたは今や至福を得るでしょう。目的を成就しなさい。（二六四）」

織機の謎

かくて、ウッタンカは師に挨拶した。師は彼にたずねた。

「なあ、ウッタンカよ、よくぞもどった。長いこと何をしていたのか。（二六五）」

ウッタンカは彼に答えた。

「はい。竜王タクシャカが私の仕事を妨害したのです。彼は私を竜の世界に引き入れました。（二六六） そこで、私は二人の女が織機で布を織っているのを見ました。その織機には黒糸と白糸がかかっていました。あれは何ですか。（二六七） また、そこで、私は十二の幅（や）を持つ輪を見ました。六人の童子がそれを回していました。あれは何ですか。（二六八） それから、私は一人

の男を見ました。彼は誰ですか。（二六九）また、異常に大きい馬を見ましたが、あれは何ですか。（二七〇）それから、途中、私は雄牛を見ました。そしてある男がそれに乗っていました。彼はうやうやしく私に言いました。『ウッタンカよ、この雄牛の糞を食べなさい。お前の師もそれを食べた』と。そこでその言葉に従って、私は雄牛の糞を食べました。あれは何か、お教え下さるようお願いいたします。（二七一）」

彼がそうたずねると、師は答えた。

「その二人の女は配置者（ダートリ）（創造者）と制定者（ヴィダートリ）（運命を割り当てる者）とである。黒糸と白糸は、夜と昼とである。（二七二）また、六人の童子が回す十二の輻を持つ輪の場合、童子たちが六季節（春、夏、雨季、秋、冬、寒季）で輪が一年である。その男はパルジャニヤ（雨神）である。その馬は火神アグニである。（二七三）途中でお前が見た雄牛は、象の王アイラーヴァタ（インドラの乗る象）である。それに乗っている男はインドラ（帝釈天）である。お前が食べた雄牛の糞は甘露（アムリタ）である。（二七四）そのために、お前はあの竜宮において死ななかったのだ。そして、インドラは私の友人である。（二七五）お前は彼のおかげで、耳環を持って帰って来たのである。親愛なる者よ、出発しなさい。さらばじゃ。お前は至福を得るであろう。（二七六）」

タクシャカ竜王への復讐

師から行くことを許されたウッタンカは、竜王タクシャカに対して怒り、復讐したいと思

いつつ、ハースティナプラ（都市名）に向けて発った。（二七七）最高のバラモンであるウッタンカは、ほどなくしてハースティナプラに着くと、ジャナメージャヤ王に面会した。（二七八）この無敵の王は、少し前にタクシャシラー（タクシラ）から凱旋したところであった。ウッタンカは大臣たちに取り巻かれている勝利者を見て、まず適切に勝利を祝福してから、その場にふさわしいみごとな言葉で、彼に次のように述べた。（二七九―二八〇）

「最高の王よ、あなたは他の仕事をしなければならないのに、無邪気な子供のように、別の仕事をしております。（二八一）」

バラモンにそう言われて、温和なジャナメージャヤ王は、その聖者をよくもてなしてからたずねた。（二八二）

「これらの臣民を守護して、私は自分の王族（クシャトラ）の法（ダルマ）をよく守っている。偉大なバラモンよ、言ってくれ。何をしたらよいか。今、私はあなたの言葉に従う。（二八三）」

偉大な王にそうたずねられて、善行者のうちで最高の偉大なバラモンは、その気力あふれる王に、自分と王がなすべきことを告げた。（二八四）

「王よ、あなたの父君はタクシャカによって殺害された。あの邪悪な蛇に復讐しなさい。（二八五）運命に定められた行為をなすべき時であると私は思います。そこで王よ、あの偉大な父王の復讐を果たしなさい。（二八六）あの王は、罪もないのに、あの邪悪な蛇に咬まれて、五元素に帰した（死んだ）のであるから。雷に撃たれた樹のように。（二八七）最低の蛇であるタクシャカは、自己の力に驕りたかぶり、邪にもあなたの父を咬むという、やってはいけないこと

を行なった。(二八八) あの悪党は、王仙の家系の守護者である、神にも似た王を殺し、カーシヤパ（解毒に長じたバラモン）をも退散させた。(二八九) 偉大な王よ、あの悪党を蛇供において、燃え盛る火の中で焼かれるがよい。それはあなたの役目である。(二九〇) このようにすれば、あなたは父の復讐をとげることになるでしょう。そして王よ、私に多大なる恩恵を与えることになるでしょう。(二九一) 非の打ち所なき大王よ、あの悪党は、師に対する謝礼のために行動した私の仕事の妨害をしたのです。(二九二)」

それを聞くと、王はタクシャカに対して怒った。火が供物（バター）によって燃え上がるように、彼はウッタンカの言葉という供物によって燃え上った。(二九三) そこで王は、非常に苦しみつつも、ウッタンカの前で、自分の大臣たちに父が他界したいきさつについてたずねた。(二九四) 偉大な王は、父に起こったことをウッタンカから聞いた時、苦しみと悲しみにひたったのである。(二九五)

（第三章）

(4)　プローマン（第四章―第十二章）

吟誦詩人ウグラシュラヴァス

古(いにしえ)の伝説を語る吟誦詩人、ローマハルシャナの息子ウグラシュラヴァスは、ナイミシャの森で、族長シャウナカの十二年間の祭祀に集まった聖仙たちのもとに行った。(一) その古伝説(プラーナ)に専念する語り手は、合掌して彼らにたずねた。

「あなたがたは何を聞きたいのか。私は何を語りましょうか。(二)」

聖仙たちは彼に答えた。

「ローマハルシャナの息子よ、よろしい、我々はあなたに最も重要なことをたずねるであろう。あなたは我々が聞きたいと願う時に、物語を物語るであろう。ところで今、尊者シャウナカが聖火室に座っておられる。(三) このお方は神聖な物語、神々や阿修羅(アスラ)たちの物語を知っている。人間や蛇やガンダルヴァ(半神の一種)の物語をすべて知っている。(四) 吟誦詩人よ、この祭式における族長であるこの博識のバラモンは、〔祭式に〕巧みであり、聡明であり、教典(シャーストラ)と森林書(アーラニヤカ)に通じている。(五) 彼は真実を語り、静寂に専念し、苦行を積み、誓戒を守り、我々すべてに尊敬されている。まずその彼に敬意を表さなければならぬ。(六) その師が最上の席に座ってから、その最高のバラモンがあなたにたずねたことについて語れ。(七)」

吟誦詩人は言った。

「承知しました。その偉大な師が座った時、彼にたずねられたら、私は種々の内容を含む神聖な物語を語りましょう。(八)」

さて、そのバラモンの雄牛(シャウナカ)は作法に従ってすべての儀式をすませ、神々を言葉により、祖霊たちを水により満足させてから、目的を成就し誓戒を守る梵仙たちが、吟誦詩人とともに祭場に座っているところにやって来た。(九―一〇) 祭場にいる祭官たちが座っている間に、家長シャウナカは座し、次のように述べた。(一一)

(第四章)

ブリグの妻と羅刹

シャウナカは言った。

「なあ、ローマハルシャナの息子よ、あなたの父はかつてすべての古伝説(プラーナ)を学んだ。あなたもそのすべてを学んだか。(一) 実に古伝説においては、神的な物語や賢者たちの最初の系譜が語られている。我々はかつて、ずっと以前に、それらをあなたの父から聞いた。(二) そのうちで、まず第一に、ブリグの系譜について聞きたいと思う。その物語を語ってくれ。あなたから聞きたいのだ。(三)」

吟誦詩人は語った。——

最高のバラモンよ、かつてヴァイシャンパーヤナなどの偉大なバラモンたちによって正し

く学ばれ語られた、また私の父により正しく学ばれ、それから私によって学ばれたことを聞きなさい。その最高のブリグの系譜は、インドラ（帝釈天）、アグニ（火神）、マルト（風神）などの神々に尊敬されております。ブリグの子孫よ。（四―五）バラモンよ、偉大な聖者よ、私はこのブリグの系譜をあなたに語ります。種々の物語を伴い、古伝説に依存する。（六）

ブリグには、チャヴァナという非常に愛しい息子がいた。そして、チャヴァナにも、プラマティという敬虔な後継ぎがいた。プラマティにも、妻グリターチーとの間に、ルルという息子が生まれた。（七）あなたの父祖であるこのルルから、プラマッドヴァラーとの間に、ヴェーダに通じた徳性ある息子シュナカが生まれた。（八）彼は功徳を積み、誉れ高く、博識で、最高にブラフマン（ヴェーダ）を知る者である。法（ダルマ）を守り、真実を語り、自制し、感官を制御していた。（九）

シャウナカはたずねた。

「吟誦詩人よ、その偉大なブリグの息子がチャヴァナとして有名になった由来を聞きたい。私に語ってくれ。（一〇）」

吟誦詩人は語った。——

ブリグにはプローマーという最愛の妻がいた。ブリグの精を受けて彼女は妊娠した。（一一）そして、この誉れ高い人の正式な妻、夫と等しい徳性を有するプローマーの内に、胎

児が宿った時、法を守る人々の最上者ブリグは、沐浴のために外出した。その時、羅刹のプローマンが彼の隠棲所を訪れた。（一二―一三）

彼は隠棲所に入り、ブリグの非の打ち所がない妻を見て、愛欲にかられて我を忘れた。（一四）一方、美しいプローマーは、訪れた羅刹を、森でとれる木の実や根などで接待した。（一五）しかし羅刹は、彼女を見ると愛に苦しめられ、喜び、非の打ち所がない彼女を誘拐したいと思った。（一六）その時、羅刹は聖火の間で燃えている火（火神アグニ）を見て、その燃える火にたずねた。（一七）

「火よ、彼女は誰の妻であるか、俺に告げてくれ。真実にかけてたずねる。あなたは真実である。たずねている俺に真実を告げてくれ。（一八）俺は、以前、その美しい女を妻として選んだが、後で、父親が真実にもとるブリグに彼女を与えてしまった。（一九）もしこの隠れて住んでいる美しい腰つきの女がブリグの妻であるなら、本当のことを言ってくれ。彼女を隠棲所から連れ出したいのだ。（二〇）今でも怨恨が俺の心を焼き続けている。ブリグは、前に俺の妻であったその美しい腰の女を取ったのだから。（二一）」

羅刹は燃える火にこのように言って、ブリグの妻ではないかと疑って、何度もたずねた。（二二）

「火よ、あなたは常に一切の生類の内に存し、善行にせよ悪行にせよ目撃している。見者よ、真実を述べよ。（二三）もし、ここにいる彼女が、真実にもとるブリグによって奪われた俺の前の妻なら、どうか俺に本当のことを言ってくれ。（二四）あなたから聞いたら、俺は隠棲所

からブリグの妻を奪うであろう。火よ、あなたが見ている前で、俺に真実を告げてくれ。（二五）」

彼の言葉を聞いて、火はひどく苦しんだ。「不真実と、ブリグの呪詛とを恐れる」と、彼はおずおずと告げた。（二六）　（第五章）

チャヴァナの誕生

吟誦詩人は語った。——

アグニ（神火）の言葉を聞くや、羅刹は猪の姿をとって、思考か風のように速く彼女をさらった。（一）すると彼女の腹に宿る胎児は、怒って母の腹から落ちた（チュタ）。そこで彼はチャヴァナと呼ばれるようになった。（二）母の腹から落ち、太陽のような威力を持つ彼を見て、羅刹は彼女を放し、灰になって倒れた。（三）美しい尻のプローマーは苦しみでいっぱいになったが、ブリグの息子チャヴァナを抱いて立ち去った。（四）

ブリグの非の打ち所のない妻が眼に涙をためて泣いていた時、他ならぬ全世界の祖父梵天（ブラフマー）が彼女を見かけた。尊い祖父梵天は彼女を慰めた。（五）彼女の涙の滴から大きな川ができた。その川は、有名なブリグの妻の行く道につき従った。（六）その川が彼女の行く道につき従うのを見て、尊い世界の祖父は、その川にヴァドゥーサラー（「婦人につき従うもの」の意）という名をつけた。それはチャヴァナの隠棲所の方に向かって〔流れた〕。（七）

威光に満ちた、ブリグの息子チャヴァナは、このようにして生まれた。父親（ブリグ）は、そのチャヴァナと、美しい妻を見た。（八）それからブリグは怒って、妻プローマーにたずねた。

「お前を奪いたいと望む羅刹に、誰がお前について話したのか。羅刹は美しい微笑のお前が私の妻であると知らなかったのに。（九）言ってくれ。私は怒って今そいつを呪ってやる。誰が私の呪詛を恐れないだろうか。誰がこの罪を犯したのか。（一〇）」

プローマーは言った。

「御主人様、アグニ（神火）が羅刹に私のことを告げ口しました。それで羅刹は、鶚（みさご）のように泣き叫ぶ私をさらったのです。（一一）ところが私は、あなたの息子の威力によって解放されました。そしてその羅刹は、私を放し、灰になって倒れたのです。（一二）」

吟誦詩人は語った。——

プローマーからこのように聞いて、ブリグは非常に憤慨した。そして怒りにかられてアグニを呪った。「お前は何でも食らうものになれ」と。（一三）　（第六章）

浄化する火

吟誦詩人は語った。——

ブリグに呪われた火は怒って言った。

「バラモンよ、何という無謀なことをしてくれたのだ。（一）私は法に心を配り、公平に真実を述べたのに。私は問われて真実を告げたのである。それなのに、どうして私に罪があるのか。（二）問われた証人が事実を知りつつ虚偽を語れば、七代にわたる祖先と子孫を殺すことになる。（三）また、ものごとの真実を知る者が、知りつつも述べないならば、彼も同じ罪に汚されることは確実である。（四）私もあなたを呪うことができる。しかし、私はバラモンを尊敬する。あなたも知っているとは思うが、私はあなたに明瞭に話すから、それを聞きなさい。（五）

私はヨーガの力により自己を多様にして、諸々の体に存在する。火供やサットラ祭や、他の儀式や祭式において。（六）ヴェーダに説かれた作法に従って、私の中に供物が供えられると、神々や祖霊たちは満足するのである。（七）一切の神の群は水であり、祖霊の群も水である。（八）新月祭と満月祭は、祖霊とともに神々のためのものである。それ故、神々は祖霊たちであり、また祖霊たちは神々である。節日（月相の変り目）において、彼らは一つのものとして、また別々に供養される。（九）神々と祖霊たちは、私に供えられたものを食べる（異本による）ので、私は神々と祖霊たちの口であると伝えられる。（一〇）新月の日においては祖霊たちが、満月の日においては神々が、私の口を通じて供物を供えられ、供えられたものを食べる。私は彼らの口であるのに、どうして何でも食らうものになれるであろうか。（一一）」

かくて、火は考えてから、バラモンの火供、サットラ祭、その他の祭式から身を引いた。

（一二）火が無くなり、オームという音やヴァシャットという音が無くなり、スヴァダーやス

ヴァーハー（いずれも祭式に唱える文句）が無くなったので、すべての生類は非常に苦しんだ。（一三）

さて、聖仙たちは心配し、神々のところに行って告げた。

「火が無くなり、祭式が損なわれ、罪もない三界の者たちが困惑しています。なすべきことをして下さい。時間を浪費しないように。（一四）」

それから聖仙たちと神々は、梵天のところに行って、アグニ（神火）に対する呪詛と、彼が祭式から身を引いたこととを告げた。（一五）

「偉大な神よ、ある理由があって、アグニはブリグに呪われました。神々の口であり、祭祀の配分を最初に食べるものであり、全世界の供物を食べるものでありながら、どうして何でも食らうものになれましょう。（一六）」

彼らの言葉を聞いて、世界創造神はアグニを呼んで、生類を創造した不滅なる彼に優しい言葉をかけた。（一七）

「汝はすべての世界の創造者であり終末でもある。汝は三界を維持し、祭式を促進する者である。世界の主よ、祭式が滅びないようにしてくれ。（一八）汝は主なる火であり、浄める者であり、世界中ですべての生類に遍在しているのに、どうしてこれほど錯乱したのか。（一九）汝は全体としては何でも食らう者とはならぬであろう。火よ、摂取する時、汝の炎がすべてを焼き尽くすであろう。（二〇）太陽の光線に触れられたものがすべて浄らかになるように、汝の炎に焼かれたものはすべて浄らかになるであろう。（二一）アグニよ、汝は自己の力より生じた偉大な威力である。主よ、まさにその自己の威力により、聖仙の呪詛を真実の

ものとせよ。火神よ、汝は口に供えられた神々と自己の配分を受けよ。(二二)」

「そのようにします」と火は梵天に答えた。そして、最高の神の命令を行なうために出発した。(二三) 神々や聖仙たちは喜んで、来た道を引き返した。そして聖仙たちは、以前と同じように、すべての祭式を実行した。(二四) 天界では神々が喜び、地上の生類の群も喜んだ。そしてアグニも、罪障を滅し、最高の喜びに達した。(二五)

以上が、アグニに対する呪詛についての古い物語、及びプローマンの破滅とチャヴァナの誕生である。(二六)

(第七章)

ルル、寿命の半分を妻に与える

吟誦詩人は語った。――

バラモン(シャウナカ)よ、このブリグの息子チャヴァナは、スカニヤーに、輝やかしい威光を有する偉大な息子プラマティを生ませた。(一) そして、プラマティは、グリターチーにルルという息子を生ませた。ルルはプラマッドヴァラーにシュナカを生ませた。(二) バラモンよ、この威光に満ちたルルの一切の業績を詳細に語るであろう。残らずお聞きなさい。(三)

かつて苦行の力と学術をそなえた、有名なストゥーラケーシャという偉大な聖仙がいて、一切の生類の幸福を願っていた。(四) 梵仙よ、ちょうどその頃、ヴィシュヴァーヴァスという有名なガンダルヴァ(半神の一種)の王がいて、メーナカー(天女の名)に子を生ませた。(五) ブリグの

子孫(シャウナカ)よ、やがて天女メーナカーは、ストゥーラケーシャの隠棲所の近くで嬰児を生み落とした。(六) 彼女はその嬰児を川岸に捨てて去った。それは女の子で、神の子のようで、美しさで燃えるかのようであった。(七) 威光にあふれる大仙ストゥーラケーシャは、川岸の人気(ひとけ)のない所に捨てられたその身無し子を見つけた。(八) 彼はその女の子を見て可哀そうに思い、拾い上げて養育した。彼女は彼の隠棲所で美しい娘に成長した。(九) 彼女はすべての容姿の美しさをそなえ、他の女性(プラマダー)を凌駕していた(ヴァラー)から、大仙は彼女にプラマッドヴァラーという名をつけた。(一〇)

敬虔なルルは、大仙の隠棲所でプラマッドヴァラーを見て、恋の虜になった。(一一) そこでルルは、友達を通じて父にそのことを知らせてもらった。プラマティはそれを聞いて、有名なストゥーラケーシャのもとに行った。(一二) そこで父親は、娘プラマッドヴァラーをルルに与えることにして、次のバガ神(結婚を司る)の星宿において婚礼を行なうことに決定した。(一三)

さて、婚礼が幾日か後に近づいた時のことである。その美しい娘は友達と遊んでいて、長々と横たわって眠っている蛇に気づかなかった。そして、死ぬ運命にあった彼女は、カーラ(破壊神、運命)にせきたてられて、その蛇を踏んだ。(一四―一五) 蛇はカーラにかりたてられて、その不注意な娘の体に、有毒の牙を激しくふり下した。(一六) 彼女は咬まれるやいなや、意識を失って地面に倒れた。その生気を失った体は、見るに忍びないはずなのに、非常に美しい(見られるべき)ものであった。(一七) そのしなやかな娘は蛇の毒に冒されながらも、大地に眠ってい

るかのようで、いっそう魅力的であった。(一八) 父親と他の苦行者たちは、動かずに地面に倒れている、蓮花のように輝く彼女を見た。(一九) それから、すべての偉大なバラモンたちが(一部略す)、憐憫にかられて集まって来た。プラマティも息子とともにやって来た。その他の森に住む人々も集まった。(二〇―二一) 彼らは蛇の毒に冒され、生気の失せた娘を見て、不憫に思って泣いた。ルルは苦しんで外に出た。(二二) (第八章)

吟誦詩人は語った。——

バラモンたちがこぞってそこに座っている間に、ルルは大そう悲しんで、深い森に行って泣いた。(一) プラマッドヴァラーのことを思い、悲しみにうたれてひどく嘆きつつ、愛しい女(ひと)を悼んで悲痛な言葉を述べた。(二)

「このしなやかな女は大地に横たわる。私の悲しみをかきたてて。そしてすべての縁者たちの……。これ以上の苦しみはあろうか。(三) もし私が布施をし、苦行を行ない、目上を正しく敬っているなら、私の愛する女(ひと)が生き返って欲しい。(四) 生まれて以来、私が自制し、誓戒を守っている〔のが真実である〕ように、美しいプラマッドヴァラーも今すぐに立ち上ってくれ。(五)」

神の使者は告げた。

「ルルよ、お前が悲痛な言葉で述べたことは無駄である。敬虔なる者よ、寿命の尽きた人間

が生き返ることはない。(六) ガンダルヴァと天女の娘は、哀れにも寿命が尽きたのである。それ故、わが子よ、決して悲しみにひたっていてはならぬ。(七) だが、かつて偉大な神々は、ある方便を設けたのだ。もしお前がそれを行なおうと望むなら、あのプラマッドヴァラーを取りもどすであろう。(八)」

ルルは言った。

「神々はどのような方便を設けたのですか。飛天よ、ありのままにお告げ下さい。聞いた通りにいたします。どうか私をお救い下さい。(九)」

神の使者は告げた。

「ブリグの子孫よ、寿命の半分を娘に与えよ。ルルよ、そうすればお前の妻プラマッドヴァラーはよみがえるであろう。(一〇)」

ルルは言った。

「最高の飛天よ、私は寿命の半分を娘に与えます。私の愛する女が、恋にふさわしい姿と装飾とともによみがえりますように。(一一)」

吟誦詩人は語った。——

そこで最高のガンダルヴァ王(プラマッドヴァラーの父)と神の使者はダルマ王(死者の王ヤマ)のもとに赴いて言った。(一二)

「ダルマ王よ、もし御承知いただけるなら、ルルの寿命の半分と引きかえに、死んだ美しい

妻プラマッドヴァラーをよみがえらせて下さい。(二三)」

ダルマ王は告げた。

「神の使者よ、もし望むなら、ルルの妻プラマッドヴァラーが、ルルの寿命の半分を受けてよみがえるように。(二四)」

吟誦詩人は語った。――

このように告げられた時、少女プラマッドヴァラーは、ルルの寿命の半分を受けてよみがえった。その美しい少女は、まるで眠っていたかのようだった。(二五)

このことが経験された。未来世においても、最高の威光を有するルルの、非常に長い寿命の半分が、妻のために短くなるように。(二六)

それから、二人の父は喜んで、吉日に婚礼を行なった。そして二人は、お互いの幸せを望みつつ、楽しく日々を送った。(二七) ルルは蓮糸のような得がたい妻を得たが、蛇を滅ぼす誓いをたてた。必ず誓いを守る男である。(二八) 彼はあらゆる蛇を見ると、いつも激しい怒りにかられ、たまたま手近にある武器をつかんで殺すのであった。(二九)

蛇になった聖仙

ある時、バラモンのルルは、大きな森に行った。そして、そこで、年老いたドゥンドゥバ

（無害な蛇の一種）が横たわっているのを見た。(二〇) そこでバラモンは怒り、カーラ（破壊神）の杖にも似た杖を振り上げてそれを打った。するとドゥンドゥバは彼に言った。(二一)

「苦行者よ、私は今、あなたに対し何の罪も犯していない。それなのに、何故あなたは怒りにかられ、興奮して私を打ったのか。(二二)」　（第九章）

ルルは言った。

「私の生命にも等しい妻が、蛇に咬まれたのだ。蛇よ、そこで私は自ら恐ろしい誓いをたてた。(一) 常に蛇を見つけ次第殺そうという。だからお前を殺そうとした。お前は死ぬであろう。(二)」

ドゥンドゥバは言った。

「バラモンよ、人を咬むのは他の蛇たちだ。蛇に似ているということだけで、ドゥンドゥバを殺すのはよくない。(三) ドゥンドゥバは〔有害な蛇と〕利益（目的）は別なのに、同じ不利益をこうむることになり、楽しみは別なのに、同じ苦しみを受けることになってしまう。法（ダルマ）を知る人でありながら、ドゥンドゥバを殺すのはよくないことだ。(四)」

吟誦詩人は語った。――

その時、ルルは蛇の言葉を聞いて、これは誰か聖仙〔が姿を変えたもの〕にちがいないと

考え、恐怖にかられて、ドゥンドゥバを殺さなかった。(五) そして尊者ルルは、なだめるかのように彼にたずねた。

「蛇よ、もしよろしかったら答えて下さい。このように姿を変えたあなたは誰ですか。(六)」

ドゥンドゥバは答えた。

「ルルよ、私はかつてサハスラパートという名の聖仙であった。ところが私は、あるバラモンの呪詛により蛇になってしまったのだ。(七)」

ルルはたずねた。

「最高の蛇よ、どうしてバラモンは怒ってあなたを呪ったのか。また、あなたはどのくらいの期間、この姿でいるのか。(八)」 (第十章)

ドゥンドゥバは語った。

「かつて、私にはカガマというバラモンの友がいた。彼は言葉に厳格で、苦行の力をそなえていた。(一) 少年時代、私はふざけて草で蛇を作り、火供(アグニホートラ)に専念していた彼をおどして失神させた。(二) 意識をとりもどすと、その誓戒を厳守する苦行者は、怒りで燃えるかのようになって、私に告げた。彼の言葉は必ず実現する。(三)

『お前は私をおどすために無力な蛇を作ったから、私の怒りにより、お前は無力な蛇となるであろう。(四)』

苦行者よ、私は彼の苦行の力を知っていたので、非常に意気消沈して、その森に住む者に言った。(五) 恐れから慎重に、合掌して頭を下げつつ。

『友達だから、冗談のつもりで、私はふざけてあんなことをしたのだ。(六) バラモンよ、私を許してくれ。この呪詛を撤回して下さい。』

その苦行者は私がひどく意気消沈したのを見て、何度も熱いため息をついて、非常に当惑して言った。

『私が告げたことは、何としても不真実にはならないであろう。(七―八) だが、誓戒を厳守する者よ、私があなたに告げる言葉を聞け。苦行者よ、聞いたら、その言葉をあなたの心にとどめておきなさい。(九) プラマティの息子で、ルルという清らかな男が生まれるだろう。彼に会えば、すぐにあなたは呪いから解放されるであろう。(一〇)』

あなたは他ならぬプラマティの息子で、ルルという清らかな人です。本来の姿をとりもどしたら、私は今あなたに有益なことを告げるでしょう。(一一)

一切の生類にとって、不殺生は最高の法(ダルマ)である。それ故、あらゆる場合、バラモンは一切の生類を殺すべきではない。(一二) 友よ、この世でバラモンは、実に柔和なものとして生まれると、最高の聖典は説く。更に、彼はヴェーダ聖典とその補助学を知り、一切の生類に無畏(むい)(全安)を施す。(一三) そして、不殺生と不妄語と忍耐とは、バラモンにとって、疑いもなくヴェーダの保持よりも高い法である。(一四) しかるに、王族(クシャトリヤ)の法は、あなたにはふさわしくない。杖(ダンダ)を執ること(実力行使)、峻厳なること、臣民を守ること、これが王族の仕事であっ

た。ルルよ、私の言うことを聞きなさい。敬虔なる者よ、かつてジャナメージャヤが蛇たちを殺したことを。（一五―一六）そして、蛇供（蛇を犠牲にする儀式）において、恐れる蛇たちを、苦行の力と勇気をそなえ、ヴェーダとその補助学に通じた最高のバラモンであるアースティーカが救ったことを。（一七）」

（第十一章）

ルルはたずねた。

「最高のバラモンよ、ジャナメージャヤ王は何故蛇たちを殺したのか。あるいは、蛇たちは何故殺されたのか。（一）また、蛇たちは何故アースティーカにより救われたのか、私に話して下さい。残らず聞きたいのです。話して下さい。（二）」

聖仙は言った。

「ルルよ、あなたはバラモンたちが語っている間に、アースティーカの偉業をすべて聞くであろう」

そう告げると、彼は姿を消した。（三）

吟誦詩人は語った。――

ルルは森中をいたるところ走りまわり、聖仙を捜したが、疲れて地面に倒れた。（四）やがて正気づき、ルルは帰って父に告げた。そして彼の父は、たずねられて、すべての物語を語

ったのである。（五）

（第十二章）

(5) アースティーカ（第十三章―第五十三章）

先祖のために結婚する

シャウナカはたずねた。

「王中の虎であるジャナメージャヤ王は、どうして蛇供（蛇を犠牲にする儀式）により、蛇を滅ぼそうとしたのか。それを私に語ってくれ。（一）また、祈禱者のうちの最高者である優れたバラモンのアースティーカは、何故燃え上る火から蛇たちを救ったのか。そして、その優れたバラモンは誰の息子であるか。（二）蛇供を行なった王は誰の息子であるか。私に語ってくれ。（三）」

吟誦詩人は言った。

「最高に雄弁なバラモンよ、そのことは偉大なアースティーカの物語において語られる。その物語をすべて残らず私から聞きなさい。（四）」

シャウナカは言った。

「その魅力的な物語を残らず聞きたいと思う。その古（いにしえ）の有名なバラモンであるアースティーカの物語を。（五）」

吟誦詩人は語った。——

ナイミシャの森に住む人々よ、古老たちは、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）に語られたこの古い叙事詩を語り伝えている。（六）かつて私の父である吟誦詩人ローマハルシ

ャナは、ヴィヤーサの賢明な弟子であったが、バラモンたちにうながされてそれを物語った。（七）私は彼からそれを聞きました。シャウナカよ、あなたがたずねられるので、アースティーカの物語をありのままに語りましょう。（八）アースティーカの父は造物主（プラジャーパティ）のような立派な人であった。彼は禁欲を守り、断食し、常に激しい苦行に勤しんでいた。（九）その名をジャラトカールといい、ヤーヤーヴァラ家の上首の大仙であった。彼は精を漏らすことなく、法（ダルマ）を知り、誓戒を固持していた。（一〇）彼は遍歴しているうちに、ある時、自分の先祖たちを見た。彼らは大きな洞穴の中で、足を上に、顔を下にしてぶらさがっていた。（一一）

ジャラトカールは、顔を下にしてぶらさがっている先祖たちを見てすぐにたずねた。

「この洞穴で、顔を下にしてぶらさがっているあなた方はいったい誰ですか。（一二）あなた方は、この洞穴に隠れて住みついている鼠によっていたるところ食い尽くされたヴィーラナ草の束に結びついていますが。（一三）」

祖霊たちは言った。

「我々はヤーヤーヴァラという一族で、誓戒を固持する聖仙である。バラモンよ、後継者が絶えるので、地上に降りたのだ。（一四）我々には、ジャラトカールというただ一人の子孫がいるが、不幸なことに、その哀れな男は苦行にのみ専念している。（一五）その愚か者は、息子を生むために妻を求めない。それ故、後継者が絶えてしまうので、我々はこの洞穴でぶらさがっているのである。（一六）身寄りに見捨てられて、まるで罪人のように。立派なお方よ、

縁者のように我々のことを悲しんでくれるあなたは誰か。[二七] バラモンよ、そこにいるあなたは誰か、知りたいと思う。どうして哀れな我々に同情してくれるのか。[二八]」

ジャラトカールは言った。

「あなた方は私の父であり、祖父であり、御先祖です。今何をしたらよいか、おっしゃって下さい。私こそ他ならぬジャラトカールです。[二九]」

祖霊たちは言った。

「わが子よ、我々一族の存続のために、懸命に努力してくれ。自分のために、また我々のために。それが法（ダルマ）だ。立派な男よ。[二〇] というのは、わが子よ、この世では、法の果報によっても、苦行を積んでも、息子を持つ人が達するような帰趣に赴くことはできないのだ。[二一] それ故、わが子よ、我々の命令により妻を娶ることに努力し、子孫を得ることに心を砕け。それが我々にとって最高の幸せである。[二二]」

ジャラトカールは言った。

「私は決して妻を作らないと、いつも心に念じておりました。しかしあなた方の幸福のために、私は妻を娶りましょう。[二三] ただし条件があります。次のような取り決めに従って結婚しましょう。そのようなことになれば結婚するでしょう。さもなければしません。[二四] 私と同じ名で、親類たちが施物として私に与えたいと望むような娘を、取り決めに従って娶ります。[二五] 誰がよりによって貧しい私に妻をくれましょうか。しかし、もし誰かが施物としてくれるなら、受けましょう。[二六] このような取り決めにより、私は結婚のために努

力します。御先祖様。さもなければ決してしません。[二七] そして、あなた方を救うために、妻に息子が生まれるでしょう。私の先祖たちが、永遠なる状態に達して喜びますように。[二八]」

吟誦詩人は語った。――

それから、誓戒を固持するこのバラモンは、結婚するために、妻を求めて地上を遍歴したが、妻を見出すことはなかった。[二九] ある日、彼は森へ行き、祖霊の言葉を思い出しつつ、少女の施物を求めて、おもむろに三語（注釈によると、「娘を、施物として、与えよ」）を発した。[三〇] その時、ヴァースキ（竜王の名）がその妹をさし出して彼を受け入れようとした。しかし彼は、自分と同じ名でないと考えて、彼女を〔すぐには〕受けなかった。[三一] というのは、偉大なジャラトカールは、自分と同じ名の妻がさし出されたら受けようと、決心していたからである。[三二] 偉大な苦行者である大知者ジャラトカールは竜王にたずねた。

「あなたの妹は何という名であるか、蛇よ、真実を語って下さい。[三三]」

ヴァースキは答えた。

「ジャラトカールよ、私の妹はジャラトカールという名だ。前からあなたのために彼女をとっておいたのだ。最高のバラモンよ、彼女を妻にせよ。[三四]」

吟誦詩人は語った。――

最高のヴェーダ学者よ、かつて蛇たちは母親に呪われた。「ジャナメージャヤの祭祀において、火がお前たちを焼くであろう」と。(三五) その呪詛を鎮めるために、竜王は、誓戒を守るこの苦行者に自分の妹を与えたのである。(三六) そして彼は、取り決めに示された作法により彼女を妻にした。それから偉大な彼と彼女との間に、アースティーカという息子が生まれた。(三七) この息子は、偉大な苦行者であり、ヴェーダ聖典とその補助学に通達し、すべての世人に平等で、父母の不安を取り除いた。(三八) さて、長い期間が過ぎて、パーンドゥの子孫である王(ジャナメージャヤ)は、蛇供(蛇を犠牲にする儀式)という大きな祭祀を行なった、と聞いている。(三九) その祭祀が続いて蛇が全滅しそうになった時に、高名なアースティーカがその呪詛を解いた。(四〇) 彼は母方の叔父の蛇たちやその他の親類たちを救った。また祖霊たちを、苦行と子孫によって救った。種々の誓戒やヴェーダ学習により、彼は(神々、聖仙、祖先たちに対する)負債を払った。バラモンよ。(四一) 彼は種々の謝礼をともなう祭祀により神々を満足させた。清浄行(及び学習)により聖仙たちを、子孫により祖先を満足させた。(四二) 誓戒を守るジャラトカールは、祖先たちの重荷を取り除いてから、自分の祖先たちとともに天界へ行くこととなった。(四三) かくて、聖者ジャラトカールは、息子アースティーカと最高の功徳(ダルマ)とを得て、非常に長い期間が過ぎた後に天界へ行った。(四四)

私はこのアースティーカの物語を聞いた通りに語った。ブリグ家の虎(シャウナカ)よ、言って下さい。次は何を語りましょうか。(四五)

(第十三章)

カドルーとヴィナター

シャウナカは言った。

「吟誦詩人よ、その善良な聖者アースティーカの物語を更に詳(つまび)らかに語れ。我々はこの上なく聞きたいと思う。(一) 善き人よ、あなたは魅力的な音と語を優美に語る。我々は非常にうれしい。わが子よ、あなたは父親と同じように語る。(二) あなたの父は、常に我々のために尽くしてくれた。あなたの父があなたに語ったように、この物語を語ってくれ。(三)」

吟誦詩人は語った。――

私は長寿をもたらすこのアースティーカの物語をあなたに語りましょう。父が語っている時、そのそばで私が聞いた通りに。(四)

バラモンよ、かつて神々の時代(黄金時代)に、造物主(プラジャーパティ)の娘である美しい姉妹がいた。二人とも容姿に恵まれ、驚異的で、欠点がなかった。(五) このカドルーとヴィナターという姉妹は、カシャパの妻となった。造物主に等しい夫カシャパは、二人の正式な妻に対して非常に満足し、喜んで二人に願いをかなえてやると言った。(六) カシャパから何でも願いをかなえてやると言われて、二人の美女は喜びのあまりこよなく満足した。(七) カドルーは、等しい威光を有する千匹の竜(蛇)を息子として選んだ。ヴィナターは、力の点でカドルーの息子より

優れた、また、威力と威光と勇武にかけてより優れた、二人の息子を選んだ。(八) 夫は願いをかなえ、望みのような、「二人半」の(第一六詩節参照)息子を授けた。その時ヴィナターは、「そのようになりますように」とカシャパに言った。(九) ヴィナターは力において優れた二人の息子を得て満足した。カドルーも、等しい威光を持つ千匹の息子を得て満足した。(一〇) 偉大な苦行者カシャパは、願いがかない喜んでいる妻たちに、「胎児を注意深く守れ」と言ってから森林に入った。(一一)

最高のバラモンよ、長い期間が過ぎて、カドルーは千個の卵を生んだ。そしてヴィナターは二個の卵を生んだ。(一二) 喜んだ召使たちは、蒸し器の中に、両者の卵を五百年間貯蔵しておいた。(一三) 五百年後、カドルーの子供たちは孵化した。しかし、ヴィナターの二つの卵からは、子供が生まれなかった。(一四) そこで、息子を求めるあまり、哀れな女神ヴィナターは、〔ライバルに負けて〕恥ずかしく思い、一つの卵を割り、そこに息子を見出した。(一五) 彼は上半身はそなえていたが、下半身は現われていなかった。その息子は怒って彼女を呪ったということである。(一六)

「お母さん、あなたは貪欲にかられ、今日、私の体を不具にしたから、五百年間、あなたが競い合った女の奴隷となるでしょう。そしてもう一人の息子が、あなたを奴隷の状態から解放するでしょう。(一七―一八) もし卵をこわして、哀れにも、私と同じように彼を体無きものとするか不具にしなければ……。(一九) あなたは冷静に彼の誕生の時を待つべきです。もし彼が特別に優れた力を持つことを望むなら、五百年以上待ちなさい。(二〇)」

このように、その息子——アルナ(紅暁)よ——はヴィナターを呪ってから、空を行き、いつも黎明の時に見えるのである。バラモンよ。(二一)

やがて時至り、蛇を殺すガルダ鳥が生まれた。彼は生まれるやいなや、ヴィナターを捨てて空に行った。(二二) やがて、飢えて食べたいと思った時、創造者により定められた、自己の食うべき食物(すなわち蛇)を食べることになろう。ブリグ族の虎よ。(二三)(第十四章)

乳海の攪拌

吟誦詩人は語った。——

苦行者よ、ちょうどその時、姉妹はウッチャイヒシュラヴァス(神馬の名)が近づいて来るのを見た。(一) この最上の馬は、甘露(アムリタ)(不死の霊薬)を得るために海を攪拌した時に生じた。一切の神々は喜んで彼を讃えたものだった。(二) 彼は強力で、最高の馬で、最高に駿足であった。美しく、常に若く、神々しくて、すべての優れた特徴をそなえていた。(三)

シャウナカはたずねた。

「神々はどのようにして甘露を攪拌したか。またその強力で光り輝く馬の王が生じたのはどこか。私に語ってくれ。(四)」

吟誦詩人は語った。——

光り輝く最高の山メール（須弥山）は、おびただしい光を放ち、黄金で輝くその峰により太陽の輝きを凌駕する。（五）それは黄金で飾られ、多彩で、神々やガンダルヴァ（半神の一種）がそこに住んでいる。不徳の人々はそれを征服することも推し量ることもできない。（六）恐ろしい野獣どもが徘徊し、神的な薬草がそれを輝かせている。その大山は天空をおおってそびえ立っている。（七）通常のものは、そこに達することなど、想像することすらできない。それは河川や樹々に満ち、こよなく美しい種々の鳥たちの群がそこでさえずっている。（八）一切の強力な神々は、多くの宝に満ちた、ほとんど無限の高さにそびえるその頂に登り、そこに座って相談を始めた。苦行と自制に専念する神々は、甘露を求めてそこに集まったのである。（九―一〇）

そこで、神々が考えこんで色々と相談している時、ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）は、梵天に次のように言った。（一一）

「神々と阿修羅（悪魔）の群とで、海を攪拌すべきである。大海が攪拌されれば、甘露が生ずるであろう。（一二）神々よ、海を攪拌せよ。そうすれば一切の薬草と一切の宝を得てから、甘露を得るであろう。（一三）」（第十五章）

吟誦詩人は語った。——

マンダラ山という名山は、雲の頂かと見まがう峰々に飾られ、蔓草の群におおわれている。（一）種々の鳥たちが囀り、色々な野獣に満ちている。キンナラ（半神の一種）や天女や神々が住んでいる。（二）それは一万一千由旬（距離の単位）の高さにそびえ立っている。そして同じだけの距離、地下にもぐっている。（三）

その時、すべての神群はそれを根こぎにすることができず、ヴィシュヌと梵天が座っている所に行き、次のように言った。（四）

「お二方、何かよい方法を考えて下さい。我々のために、マンダラ山を引き抜くべく努力して下さい。（五）」

「よろしい」とヴィシュヌと梵天は言った。それから、梵天に要請されて強力なアナンタ竜が立ち上がった。ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）も彼にその任務を命じた。（六）そこで大力のアナンタは、その山の王を、森や森に住む生物もろとも、力まかせに引き抜いた。（七）それから、神々はそれを運んで海へ行き、海に言った。

「我々は甘露を得るために水を攪拌する。（八）」

すると、海は答えた。

「私も配分にあずかれるなら、マンダラ山の回転から生ずる大きな衝撃に耐えることができる。（九）」

それから、神々と阿修羅は、亀の王アクーパーラに言った。

「あなたはこの山の支点になりなさい。（一〇）」

亀は「よろしい」と答えて、その背中を提供した。そして、インドラ（帝釈天）はその山の先端を道具によって削った。（一一）このように、マンダラ山を攪拌棒にして、ヴァースキ竜王をそれに巻きつけて、神々と悪魔たち（ダイティヤとダーナヴァ）はこぞって、甘露を求めて海を攪拌し始めた。（一二）偉大な阿修羅たちは竜王の一方の端（頭部）を持ち、一切の神々は、そろってその尾の方に行って立った。（一三）アナンタは、聖なる神ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）のいるところで、竜の頭を何度も持ち上げては投げ下した。（一四）そして、ヴァースキ竜が神々に強く引っぱられると、煙と火を伴う風がその口から何度も出た。（一五）その煙の群は、稲妻を伴う雲の群となり、疲労と熱で弱っていた神の群に雨を降らせた。（一六）山頂からは花の雨が降り、神と阿修羅の群を花で一面におおった。（一七）神と阿修羅たちがマンダラ山で海を攪拌している間、雷鳴のような大音響が起こった。（一八）海中にいる種々の水棲動物は大山により砕かれ、幾百となく死滅した。（一九）そして山は、種々の海の生物、地底界に住むものたちを死滅させた。（二〇）その山がまわされている間、大きな樹々は相互にこすれあって、そこに住む鳥もろとも、山頂から落下した。（二一）樹々の摩擦から生じた火は、幾度も燃え上り、火焔でマンダラ山をおおい、山はあたかも稲妻におおわれた黒雲のようであった。（二二）それは逃げ出した象や獅子を焼いた。そして様々な生物はすべて死滅した。（二三）それから、神々の主インドラは、一面に雨を降らせて、あちこちで燃え上がる火を鎮めた。（二四）すると種々の大樹の樹液や多量の薬草のエキスが海水の中に流出した。（二五）その甘露のような力を持つエキスの乳液により、そして黄金が熔けた液によって、神々は不死になった。

（二六）かくてその海の水は乳となった。そしてその乳から、最高のエキスと混じった凝乳（バター状の乳製品、ギー）が生じた。（二七）

それから、神々は、座っている、願いをかなえる梵天に言った。

「梵天よ、我々は非常に疲れた。悪魔や最高の竜たちも疲れた。しかも甘露は現われない。ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）神（の助け）なしには……。そして、あまりにも長く海を攪拌し続けて来た。（二八―二九）」

そこで梵天はナーラーヤナ神に言った。

「ヴィシュヌよ、彼らに力を与えよ。あなたが頼みの綱である。（三〇）」

ヴィシュヌは言った。

「この仕事に従事しているすべての者に力を授ける。海を攪拌せよ。みなでマンダラ山をまわせ。（三一）」

吟誦詩人は語った。――

ナーラーヤナの言葉を聞いて彼らは力づき、こぞって再び海の乳を大いに攪拌した。（三二）すると、攪拌された（異本の読み）海から、百千の光線を持つ太陽が生じた。そして、清涼な光を放つ輝かしい月が生じた。（三三）引き続いて、白衣を着たシュリー（吉祥天女）が、凝乳から生じた。また、酒の女神と白馬が生じた。（三四）そして、甘露より生じた神々しい宝珠カウストゥバが現われた。それは燦然と輝き、美しく、ナーラーヤナの胸に懸けられた。（三五）シ

ユリー、酒、月、駿馬は、太陽の道にならい、神々の側に行った。（三六）
それから、美丈夫のダヌヴァンタリ神が、甘露の入った白壺を携えて現われた。（三七）この大いなる奇跡を見て、悪魔たちの間に、甘露を求めて、大騒ぎが起こった。「これは俺のものだ」とわめきながら。（三八）そこでナーラーヤナ神は、惑わせる幻術を用い、すばらしい女の姿をとり、悪魔のもとに行った。（三九）すると悪魔たちはみな彼女に魅了され、心を迷わされ、甘露を彼女（実はヴィシュヌ）に与えた。（四〇）

（第十六章）

甘露争奪戦

吟誦詩人は語った。――

さて、悪魔たちは集合して、最上の防具と様々な武器をとり、神々に対して攻撃をしかけた。（一）それから、〔女の姿をした〕強力なヴィシュヌ神は甘露をとって、ナラ（ナーラーヤナと一対の神格）とともに、悪魔の指導者たちからそれを奪った。（二）そこで一切の神群は、混乱と喧騒のさなか、ヴィシュヌからその甘露を受け取って飲んだ。（三）
神々が望んでいた甘露を飲んでいた時、ラーフという悪魔は、神の姿をとってそれを飲んだ。（四）甘露がその悪魔の喉まで達した時、神々の幸福を願って月と太陽とがそれを告げ知らせた。（五）そこで、円盤を武器とする神（ヴィシュヌ）は、甘露を飲んでいる彼の、飾りつけられた頭を、円盤で速やかに切った。（六）その悪魔の巨大な頭は、山頂にも似て、円盤で切られ

ると、落ちて大地を震動させた。（七）かくて、ラーフの顔と、月と太陽との間には、永遠の怨恨が生じた。そして今日でも、彼はその両者を呑むのである（日食・月食の起源）。（八）
聖なるハリ（ヴィシュヌ）は、無比の女の姿を捨てて、種々の恐ろしい武器により悪魔たちを震撼させた。（九）それから、海岸で、神々と阿修羅たちの最高に恐ろしい大戦闘が繰り広げられた。（一〇）非常に大きく鋭いプラーサ（投擲用の武器）や、鋭い先端のトーマラ（投槍の一種）や、様々な武器が、幾千となく落下した。（一一）そして阿修羅たちは円盤で切られて多量の血を吐き、刀、槍、棍棒で傷ついて大地に倒れた。（一二）恐ろしい戦場において、矛（パッティシャ）に切られた頭が、熔けた黄金の群のように、絶えずころがり落ちた。（一三）殺された巨大な阿修羅たちは、体中血にまみれ、鉱脈で赤くなった山々の頂のように横たわっていた。（一四）太陽が赤くなった時、互いに武器で切り合っている者たちの、ハーハーという叫びが、幾千となく、あちこちで起こった。（一五）戦場において、太い（異本による）鉄棒で、接近しては拳で、お互いに殺し合っている者たちの声は、天に達するかのようであった。（一六）「切れ。突け。走れ。倒せ。突撃」というような大いに恐ろしい声がいたるところで聞かれた。（一七）
このように、非常に騒がしい、恐怖の戦闘が行なわれている時、ナラとナーラーヤナの両神が戦闘に加わった。（一八）聖なるヴィシュヌは、ナラが神聖なる弓を持っているのを見て、悪魔を破壊する円盤のことを思い浮べた。（一九）すると、思い浮べるやいなや、広大な輝きを有する、敵を悩ます円盤、日輪にも似た鋭い輪を持つ、恐ろしく無敵で最上の円盤スダルシャナが、天空からやって来た。（二〇）それは燃え上る火のように輝き、恐怖を起させ、振

動し、恐ろしく速く、大いなる輝きをもって、敵の城砦を粉砕するものである。象の鼻のような腕を持つヴィシュヌは、到来したその円盤を放った。(二一) ヴィシュヌが戦場において、手からそれを発すると、それは終末の火災のような輝きを放ち、何度も激しく落下し、悪魔たちを幾千となく粉砕した。(二二) それは時に火のように〔敵を〕めらめらと燃やし、激しく阿修羅の群を断ち切った。何度も空や大地に投げられ、戦場においてそれは吸血鬼のように血を飲んだ。(二三)

さて、大力の阿修羅たちはくじけることなく、散乱した雲のように輝き、幾千となく空中に行き、山々により幾度も神々を攻撃した。(二四) そこで、空から恐ろしい大きな山々が、樹々もろとも、多彩な雲のように、その頂を失って、相互に音をたててぶつかりながら、急速に落下して来た。(二五) すると、大山の落下の衝撃を受けて、大地は森林とともに、いたるところ震動した。戦場の状況がいよいよ激化した時、互いに〔戦士たちが〕何度も大きく雄叫びをあげているうちに、ナラ神は、すばらしい金の先端に飾られた大きな矢により、空中を満たした。非常に恐ろしい、阿修羅と神群の戦いにおいて、彼は矢で山々の頂を砕いた。(二六—二七) それから、巨大な阿修羅たちは神々に攻撃されて、また、空中に燃え盛る火のように輝く、怒り狂うスダルシャナ（ヴィシュヌの円盤）を認めて、大地へ、海へと逃げ込んだ。(二八)

かくて神々は勝利を得て、マンダラ山を手あつく敬い、もとの場所にもどした。それから、雷雲のように、空や天をいたるところ鳴り響かせて、来た道を引き返した。(二九) そこで神々はこの上なく喜び、甘露を大切に保存した。そしてインドラ（帝釈天）は、神々とともに、甘露の貯蔵庫を守るべく、それをナラ（またはナーラーヤナ）にゆだねた。(三〇)

（第十七章）

神馬の色

吟誦詩人は語った。——

以上、甘露の攪拌、及び無比の勇猛さを有する栄光ある馬が生じた次第を語った。(一)

カドルーはその馬を見た時、ヴィナターに次のように言った。

「あなた、ウッチャイヒシュラヴァス（馬の名）は、どんな色をしているの。すぐに答えなさい。(二)」

ヴィナターは答えた。

「この馬の王は真っ白です。美しい女よ、あなたはどう思うの。あなたも馬の色を言いなさい。賭をしましょうよ。(三)」

カドルーは言った。

「美しい微笑の女よ、この馬は黒い尾をしていると私は思うの。さあ、私と賭をして、負けた方が奴隷になることにしましょう。美しい女よ。(四)」

吟誦詩人は語った。——

彼女たちはこのように、負けた方が奴隷となるという約束を交わして、翌日馬を調べよう

と決めて家へ帰った。(五) それから、カドルーは術策を行なおうと企て、千匹の子供たちに命じた。
「墨のような色の毛となって、速やかに馬に入り込みなさい。私が奴隷とならぬように。」
　彼女は、その命に従わなかった蛇たちを呪った。(六―七)
「パーンダヴァの家系の、聡明なる王仙ジャナメージャヤの蛇供(蛇を犠牲にする儀式)が行なわれる時、火がお前たちを焼くであろう。(八)」
　梵天自身が、カドルーが運命のいたずらから発したこのはなはだしく過酷な呪詛を聞いた。(九) 彼は、一切の神群とともに、蛇たちが多数であることを観察して、他の生類の安寧を望み、その呪詛を歓迎した。(一〇) というのは、彼らは激しい猛毒を持ち、咬みつき、強力である。彼らが激しい毒を有するからこそ、生類の安寧のために、偉大なカーシャパ仙に、毒を鎮める術を授けたのであった。(一一)

(第十八章)

吟誦詩人は語った。――

　夜が明け、朝、太陽が昇った時、カドルーとヴィナターの姉妹は怒って、負けた方が奴隷になるという賭をして、馬のウッチャイヒシュラヴァスを近くで見るために出かけて行った。(一―二) そこで彼女たちは、ティミンギラやジャシャ(大魚の一種)やマカラ(海豚、または鰐)に満ちた大海原を見た。(三) それはまた、幾千という多様な姿をした生物に満ち、常に、獰猛なものたちによっても侵されがたく、亀や鮫《グラーハ》にあふれている。(四) それは一切の宝物の鉱脈であり、ヴァルナ(水天)の住処である。竜《ナーガ》の心地よい最高の住処であり、河川の主人である。(五) 海中の火の住処であり、阿修羅《アスラ》たちの牢獄である。生類にとって恐怖であり、水の貯蔵所であり、絶えず動揺する。(六) それは美しく輝き、神々しく、神々の甘露《アムリタ》の最高の源泉である。無量であり、不可思議であり、こよなく清らかな水をたたえ、驚異である。(七) それは恐ろしく、水棲動物の咆哮で凄まじく、もの凄い音を立てる。深い渦巻きに満ち、すべての生物に恐怖を起こさせる。(八) 潮のうねり、風に動揺し、波立ちふるえ隆起する。それはあたかも、いたるところ波という手を動かして踊っているかのようである。(九) 月の満ち欠けに応じて高く波立ち近寄りがたい。パーンチャジャニヤ(ヴィシュヌ神の持つ螺貝)を生むものであり、最高の宝物の源泉である。(一〇) 無量の力を有する聖ゴーヴィンダ(ヴィシュヌ、クリシュナ)が猪の姿をとり、大地を持ち上げた時、そのためその水は動揺し濁った。(一一) 梵仙(バラモン出身の聖仙)アトリは、百年間苦行をしても、不滅なる海底の底に達することはできなかった。(一二) それは、無量の力を持つ、蓮華を臍とする(パドマナーバ)神ヴィシュヌが、アートマン(真我)に関するヨーガの眠りにつく時、宇宙紀《ユガ》の始めの時期の寝台となる。(一三) その河川の主は、底知れず向う岸も知られず、広大で測り知れず、神聖であって、雌馬《ヴァダヴァー》の口から出る火焔(海中火)に水の供物を与える。(一四)
　姉妹は、多くの大河が競い合うかのように幾千となく絶えず注ぎこむ大海原を見た。(一五) 恐ろしい鯨《ティミ》やマカラに満ち、水棲動物の獰猛な鳴き声が轟く、深くて広大な海を、空

を映して輝き、底知れぬ大きな水の貯蔵庫である無限の海を見た。(二六)

このように姉妹は、ジャシャとマカラと波に満ちた、深くて広大な、空を映して輝き、海中火の焰で輝く海を見つつ、速やかにそれを飛び越えて行った。(二七)

(第十九章)

ガルダ(金翅鳥(スパルナ))の誕生

吟誦詩人は語った。——

カドルーはヴィナターとともに、全速力で海を越えて行き、ほどなく馬のそばに降りた。(一)馬の尾に多くの黒い毛がついているのを見て、カドルーは、悲しい顔をしているヴィナターを奴隷にした。(二)それ以来、賭けに敗れたヴィナターは、奴隷の境遇に堕ちて非常に苦しんだ。(三)

その間、大威光を有するガルダは、時期が到来した時、母なしで、卵を破って生まれた。(四)その鳥は、火の群のように輝き、燃え上り、こよなく恐ろしく、すぐに成長して巨大な姿となり、空に飛び立った。(五)彼を見ると、すべての生類(異本は「神々」)は火神に庇護を求めた。そして、座っているその一切の形をとる神におじぎをしてから言った。(六)

「アグニ(火神)よ、これ以上拡がらないで下さい。我々を燃やそうとしないで下さい。この非常に大きいあなたの燃え上る(焰の)群は拡大している。(七)」

アグニは言った。

「阿修羅(アスラ)を挫く者たちよ、これはあなた方が考えているようなものではない。これは、その輝きにかけて私と等しい、強力なるガルダである。(八)」

吟誦詩人は語った。——

そのように言われて、神々は聖仙の群とともに、ほど遠からぬところに近づいて、ガルダを讃えた。(九)

「汝は聖仙であり、栄(はえ)ある者である。神であり、鳥の王である。汝は主であり、太陽のように輝く。我々の最高の守護者である。(一〇)汝は波のような力を持ち、善性であり、不滅の勇気を有する。繁栄し、無敵である。不朽の名声を持つ者よ、汝は一切の熱力(タパス)であり、未来と過去にあるものすべてであると聞いている。(一一)最上なる汝は、この動不動のものすべてに対し、太陽のように光線によって輝き出ている。汝は繰り返し太陽の輝きを凌駕し、この動不動のものを滅ぼす。(一二)怒った太陽が生類を焼くように、火のように輝く者よ、汝も生類を焼く。宇宙紀(ユガ)の巡りを終わらせ、終末に燃え上る恐ろしい火のように、(すべてを)帰滅させて。(一三)我々は鳥の王に庇護を求める。大なる威光を有し、闇を離れ、雲の道を行く、強力なガルダ鳥に近づいて……。原因と結果であり(この一切であり)、願望をかなえ、無敵の勇武を有する汝に。(一四)

神々と聖仙の群にこのように讃えられた金翅鳥(スパルナ)(ガルダ)は、自己の光熱を撤回した。(一五)

(第二十章)

ガルダ鳥の冒険

吟誦詩人は語った。——

それから、大なる威力を有する強力な鳥は、欲するがままに飛行し、海の向う岸の、母のもとに行った。（一）そこでは、賭に敗れて奴隷の境遇に堕ちたヴィナターが非常に苦しんでいた。（二）そしてある日、カドルーは、息子がそばにいるところで、ヴィナターを呼んで、おじぎをする彼女に次のように言った。（三）

「ねえ、ヴィナターよ。寂しい海岸に、ラマニーヤカという、非常に美しい蛇たちの住む場所がある。そこに私を連れて行っておくれ。（四）」

そこで金翅鳥（スパルナ）（ガルダ）の母は、蛇の母を運んだ。ガルダもまた、母に命じられて、蛇たちを運んだ。（五）ガルダ鳥は太陽のそばを飛行したので、蛇たちは太陽光線をあびて失神した。息子たちがそのような状態になったのを見て、カドルーはインドラ（帝釈天）を讃えた。（六）

（七―一七略）（第二十一章）

吟誦詩人は語った。——

カドルーに讃えられて、聖なるインドラは、黒雲の群により空全体をおおった。（一）雲た

ちは稲妻をきらめかせて多量の雨を降らせた。天空において絶えず、相互に、はなはだしく雷鳴を轟かせて。（二）非常に驚嘆すべき雲たちは、多量の雨を放ち、絶えず大きな音をたて、空中にひしめくかのようであった。（三）空は多くの波のような雨により踊るかのようであった。そして雲の轟きで騒がしくなった。（四）インドラが雨を降らせた時、竜たちは最高に喜んだ。そして大地はいたるところ、水でいっぱいになった。（五）（第二十二章）

吟誦詩人は語った。——

金翅鳥（スパルナ）に運ばれて、彼らは速やかにかの地に行った。そこは海の水に囲まれ、鳥の群がさえずっていた。（一）珍しい果実や花をつけた森の列におおわれていた。また、心地よい家々や蓮池に満ちていた。（二）清い水をたたえた色とりどりの湖に飾られていた。神々しい香を運ぶ清浄なる風が吹いていた。（三）空中に触れる（芳香を放つ）栴檀の木は、風で揺れ動き、花の雨を降らせてその地を飾った。（四）そこに住む竜たちに花の雨を降らせつつ。それは心を喜ばせ、ガンダルヴァ（半神の一種）と天女（アプサラス）たちに愛される清浄な地で、種々の鳥がさえずり、心地よく、カドルーの息子たちを喜ばせた。（五）彼ら蛇たちは、森に着くと喜んで遊び戯れ、強力な鳥の王、金翅鳥に言った。（六）

「水のたくさんある心地よい他の島へ我々を運んでくれ。鳥よ、お前は飛んでいるうちに多くの心地よい場所を見たであろうから。（七）」

ガルダ鳥は考えてから、母のヴィナターに言った。
「お母さん、私はどうして蛇の言うことをきかなければならないのか。(八)」
ヴィナターは言った。
「最高の鳥よ、私は卑しい姉(または妹)の奴隷となった。蛇たちは不正な賭けにより、いかさまで勝ったのだ。(九)」
吟誦詩人は語った。――
母がそのわけを述べた時、ガルダ鳥は悩んで、蛇たちに言った。(一〇)
「何を持って来たら、何を見出したら、いかなる努力をしたら、私は奴隷の状態から解放されるのか。蛇たちよ、本当のことを言ってくれ。(一一)」
それを聞くと蛇たちは彼に言った。
「全力をあげて甘露(アムリタ)を奪って来い。そうすれば、鳥よ、お前は奴隷の境遇から解放されるであろう。(一二)」

(第二十三章)

吟誦詩人は語った。――
ガルダは蛇たちにそう告げられて、母に言った。
「私は甘露を奪いに行きます。ところで何か食べるものが欲しいのですが。(一)」

ヴィナターは言った。
「辺鄙な海岸に大きなニシャーダ族のすみかがあります。彼らを何千と食べてから、甘露を取って来なさい。(二) しかし、決してバラモン(聖職者)を殺そうという気を起こしてはいけません。一切の生類のうちでも、バラモンは火のようであって、それを殺すべきではない。(三) 怒ったバラモンは、火であり、太陽であり、毒であり、武器である。バラモンは生類のうちで、第一に食事をする者であり、最上の種姓(ヴァルナ)であり、父であり、尊師である。(四)」
ガルダは言った。
「お母さん、どのような吉相によってバラモンを識別したらよいか、その根拠をお聞きしたい。話して下さい。(五)」
ヴィナターは言った。
「お前の喉を通る時に釣針を飲んだように感じられ、燠火(おきび)のように焼くもの、息子よ、それがバラモンの雄牛であると知りなさい。(六)」
吟誦詩人は語った。――
ヴィナターは、息子が無比の力を持っていることを知りつつも、息子に対する愛情から、次のような祝福をこめた言葉を述べた。(七)
「風がお前の両翼を守らんことを。息子よ、月がお前の背中を守らんことを。火がお前の頭を守らんことを。太陽がお前のすべてを守らんことを。(八) そして私は、息子よ、いつもお

前の平安と幸福を祈っている。わが子よ、安全な道を行きなさい。目的を成就するために。(九)」
彼は母の言葉を聞いてから、両翼を拡げて空に飛び立った。それから強力な鳥は、飢えて、ニシャーダ族を襲った。偉大なるカーラ(破壊神)、死神のように。(一〇)彼はニシャーダたちを滅ぼしつつ、空に達する多量の埃を立てて、海岸の水を干上がらせ、付近の山々を震動させた。(一一)それから鳥の王は、ニシャーダの逃げ道をふさいで、大きな口を開いた。そしてニシャーダたちは、急いでガルダ鳥の口に入った。(一二)彼らは大きく開いたその口に入った。驚いた鳥たちが空に舞い上るように。森の樹々が強風に揺り動かされる時、風のたてるほこりの雲に取り乱して、何千となく……。(一三)それから敵を苦しめる強力な鳥は、動きまわり、口を閉じた。飢えた鳥の王は、魚を食べるその一族を大量に殺戮した。(一四)(第二十四章)

吟誦詩人は語った。——
あるバラモンが、妻とともに彼の喉に入り、燃える炭のように喉を焼いた。ガルダ鳥は彼に言った。(一)
「最高のバラモンよ、速やかに開いた口から出なさい。私はバラモンを決して殺してはならないのだ。たとえ悪になじむ者でも。(二)」

ガルダがそう言うと、バラモンは答えた。
「私の妻であるこのニシャーダの女も、私といっしょに出して下さい。(三)」
ガルダは言った。
「そのニシャーダ女を連れて、早く出なさい。私の熱で消化されないうちに、速やかに自身を救いなさい。(四)」
吟誦詩人は語った。——
そこで、そのバラモンはニシャーダの妻を連れて脱出した。そして、ガルダを祝福してから、望むがままの土地へ去った。(五)バラモンが妻とともに去った時、鳥の王は両翼を拡げて、思考のように速やかに空に飛び立った。(六)それから、彼は父(カシャパ)に会った。父にたずねられて彼は答えた。
「私は蛇たちに派遣されて、ソーマ(甘露)を奪おうと企てております。母を奴隷の状態から解放するために、今日それを奪います。(七)私は母に、ニシャーダたちを食べよと指示されました。しかし、何千となく食べても、私は満腹になりません。(八)そこで父上、他の食物を私に教えて下さい。それを食べて、私が甘露(アムリタ)を奪う力を持てるような。(九)」
カシャパは語った。——
ヴィバーヴァスという非常に短気な大仙がいた。彼にはスプラティーカという苦行を積ん

だ弟がいた。(一〇) この偉大な聖者スプラティーカは、兄と財産を共有していることを好まず、いつもそれを分配しようと主張した。(一一) そこで兄のヴィバーヴァスはスプラティーカに言った。

「多くの人々は、常に、迷妄によって分配することを望む。そして分配した人々は、財産に迷わされて、お互いに尊敬しなくなる。(一二) それから、友の姿をした敵どもが、彼らが自分の財産に没頭し、迷って別々になったことを知って、自分の財物を用いて彼らを離間させる。(一三) そしてまた他の者たちが、彼らが離間したことを知って、その隙間につけ込む。かくて離間した者たちは、速やかに全滅する。(一四) それ故、賢者たちは、人々が目上の教えに従〔わないで〕、お互いに不信を抱いている時も、分配を承認しないのである。(一五) お前は自制することが出来ず、離間により財産を望んだから、スプラティーカよ、お前は象になるであろう。(一六)」

このように呪われて、スプラティーカはヴィバーヴァスに言った。

「あなたは、水中を動く亀になるであろう。(一七)」

このように相互の呪詛により、スプラティーカとヴィバーヴァスは、財物のために心が迷い、象と亀になってしまった。(一八) 二人は怒りという罪悪に執(とら)われたことにより畜生の胎に堕ちたにもかかわらず、大きさと力を誇って、お互いに憎みあってばかりいる。(一九) この湖において、巨大な体をした両者は、昔の恨みを抱き続けている。彼らの一方である美しい巨象がやって来る。(二〇) 彼の咆哮を聞いて、水中に住む巨大な亀も、湖すべてをふるわ

せて出て来た。(二一) 強力な象は彼を見るや鼻を巻いて、水に飛びこんだ。牙、鼻の先、尾、足を激しく動かして……。(二二) 多くの魚がひしめく湖をふるわせている彼に対し、強力な亀も頭をもち上げて、戦うべく接近した。(二三) 象は高さ六由旬(ヨージャナ)で、その二倍の長さである。亀は高さ三由旬で、周囲は十由旬である。(二四) お前は、お互いに勝とうとして戦いに狂っているこの二者を食べろ。それから望み通りの仕事を速やかに遂行せよ。(二五)

吟誦詩人は語った。――

父の言葉を聞くと、ガルダ鳥は恐ろしい速度で降下し、一方の爪で象を、他方の爪で亀をつかんだ。(二六) それから、ガルダ鳥は空高く飛び上った。彼は聖地アランバに着いて、神聖な樹々に近づいた。(二七) その時、神聖な黄金の樹々は、「我々を折ることのないように」と恐れ、彼の翼の風に打たれてふるえた。(二八) その鳥は願望をかなえる樹々(異本による)が身ぶるいしているのを見て、他の、無比の形状を持つ樹々に近づいた。(二九) それらの大樹は、海の水に囲まれ、瑠璃の枝を持ち、金と銀の果実により輝いていた。(三〇) その中の、非常に大きなバニヤン樹が、思考のように速く降下して来る鳥の王に語りかけた。(三一)

「私の大きな枝は、百由旬(ヨージャナ)の長さです。この枝にとまって、象と亀を食べなさい。(三二)」

そこで、無数の鳥が住みついている、その山のような樹をふるわせて、最高の鳥は、すぐに全速力で降りて、多数の葉でおおわれたその枝を折った。(三三)

(第二十五章)

強力なガルダが両足で樹の枝に触れるやいなや、それは折れた。彼は折れた枝をつかんだ。(一)そして、彼がその折れた大枝を、微笑しながら見ていると、そこにヴァーラキリヤ（親指大の聖仙）たちが頭を下にしてぶらさがっているのを認めた。(二)鳥の王は彼らを殺すことを恐れて飛び上り、彼らのことを気づかって、くちばしで枝を保持した。鳥は山々を砕きつつ、ゆっくりと飛びまわった。(三)このようにして、ヴァーラキリヤたちに対する慈しみから、彼は象と亀をつかんで、多くの国々を飛びまわったが、降りる場所を見出さなかった。(四)彼は不滅なる最高の山ガンダマーダナに行き、そこで苦行に専念している父のカシャパを見た。(五)父の方も、威光と精力と力をそなえた、思考や風のように速い、神々しい姿の鳥を認めた。(六)その鳥は山頂のように巨大で、ふり上げられた梵杖（ブラフマダンダ）（呪詛）のようであり、不可思議で認識されがたく、一切の生類に恐怖をもたらす。(七)幻力（マーヤー）と精力をそなえ、燃え上がる火神（アグニ）のようで、神や悪魔や羅刹に攻撃されず、うち負かされることもない。(八)山頂を断ち、河川の水を干上らせ、世界を動揺させ、恐ろしく、死神さながらの姿であった。(九)

尊者カシャパは彼の来るのを見て、そして彼の意向を知って、次のように言った。(一〇)

「息子よ、無謀なことをしてはならぬ。突然苦しみを受けることのないように。太陽光線を飲むヴァーラキリヤたちが、怒ってお前を燃やさないように。(一一)」

カシャパは息子のために、苦行を成就したヴァーラキリヤをなだめた。次のように理由を述べて。(一二)

「苦行者たちよ、ガルダの企ては生類の安寧のためである。彼は偉大な仕事を追求している。それ故、許してやって下さい。(一三)」

このように尊者に言われて、聖者（ヴァーラキリヤ）たちは枝を離れ、苦行を求めて聖なる山ヒマーラヤに行った。(一四)彼らが去った時、ガルダは、枝をくわえているので口を開けたままで、父のカシャパにたずねた。(一五)

「父上、樹の枝をどこで離しましょうか。バラモンのいない場所をおっしゃって下さい。(一六)」

そこでカシャパは、洞窟が雪でおおわれた、人気（ひとけ）のない、余人によっては心によってすら行けない山を彼に教えた。(一七)ガルダ鳥は、枝をくわえ象と亀をつかんで、その大きな山の懐をめざして、全速力で飛んで行った。(一八)その鳥がくわえて飛んだその樹の枝は非常に大きくて、百の皮革から作られた、長く細い皮ひもによっても取り巻くことができない程であった。(一九)それから、最高の鳥ガルダは、まもなく十万由旬（ヨージャナ）の距離を飛んだ。(二〇)そしてその鳥は、一瞬のうちに父に教えられた山に行って、大枝を放した。それは大音響をたてた。(二一)

その大山は彼の翼のたてる風に打たれて震動し、その樹々は倒れ、花の雨を降らせた。(二二)宝玉と黄金で燦然と輝く、その山の峰々はいたるところ粉々に砕かれ、大山を輝かせ

た。（二三）そして、多くの樹々は、その枝に打たれて、金色の花々により輝いた。稲妻の輝く雲のように。（二四）それらの樹々は、金色にきらめき、更に山の鉱石と混って、日光に染められたかのように輝いた。（二五）それから、最高の鳥ガルダは、その山の頂に降りて、象と亀を食べた。（二六）

それからガルダは、思考のように速やかに山頂から飛び立った。すると、神々の間に、危険を知らせる種々の前兆が起こった。（二七）インドラ（帝釈天）の愛用の金剛杵（ヴァジュラ）が、苦痛を訴えて輝いた。流星が天空から降り、煙と焔をあげて落下した。（二八）そして、ヴァス神群、ルドラ神群、アーディティヤ神群、サーディヤ神群、マルト神群、及びその他の神群の、各々の武器が、いたるところで相互に攻撃し合った。（二九）そのようなことは、神と阿修羅（アスラ）との戦いにおいてさえ、かつてなかったことである。風が雷（または、旋風）をともなって吹き、流星がいたるところで落ちた。（三〇）そして雲もない空が、大きな音をたてて雷鳴を轟かせた。神のうちの神（雨神）も、血の雨を降らせた。（三一）神々の花輪（しおれることがない）がしおれ、光輝も失せた。恐ろしい不吉な雲が、多量の血を雨降らせた。そして舞い上がるほこりが、神々の冠を汚した。（三二）それから、恐ろしい前兆を見て、恐怖にかられたインドラは、他の神々とともに、ブリハスパティ（神々の師）にたずねた。（三三）

「尊師よ、いかなるわけでこの恐ろしい大前兆が起こったのか。戦闘で我々にうち勝つような敵がいるとも思われぬが。（三四）」

ブリハスパティは言った。

「神々の王インドラよ、あなたの過失、あなたの怠慢のせいだ。ヴァーラキリヤたちの苦行の力により、驚くべきものが生じたのである。（三五）カシャパとヴィナターの息子で、強力で欲するがままの姿をとれるガルダ鳥が、甘露（ソーマ）（アムリタ）を取るためにやって来たのだ。（三六）その最高に強力な鳥は、甘露を奪う能力がある。彼にあってはすべてが可能であると私は思う。彼は達成不能なことをも達成することができる。（三七）」

吟誦詩人は語った。——

シャクラ（インドラ）はその言葉を聞くと、甘露の番人たちに言った。

「大力の鳥が、甘露を奪おうと企てている。（三八）彼が力ずくで奪うことのないよう、諸君に警告する。彼の力は無比であるとブリハスパティが私に告げた。（三九）」

その言葉を聞くと、神々は驚き、色々と努力し、甘露を取り巻いて立った。金剛杵（ヴァジュラ）を持つインドラも同様にした。（四〇）気高い神々は瑠璃をちりばめた、多彩な黄金製の、非常に高価な鎧をつけた。（四一）そして、鋭利な先端と刃を有する様々な恐ろしい形態の武器を幾千となく振り上げた。（四二）それらは、いたるところで火焔と煙を放出した。円盤（チャクラ）、鉄棒、三叉の戟、斧、種々の鋭い槍、曇りのない太刀、恐ろしい形の棍棒など、彼らは各自の身体にふさわしい武器を持っていた。（四三―四四）神々しい装飾品に飾られた神々の群は、それらの燦然たる武器により、汚れなく輝いて立っていた。（四五）阿修羅（アスラ）の都城を破壊する神々は、燃え盛る火のように輝く身体をし、無比の力と精力と威光を持ち、甘露を守る決意を固めてい

た。（四六）このようにして、神々に守られ、無数の鉄棒に満ちた最高の戦場が、空中に溶けこむかのように、太陽の光線に照り映えて輝いていた。（四七）　（第二十六章）

シャウナカはたずねた。

「吟誦詩人よ、大インドラの過失とは何か。怠慢とは何か。また、ヴァーラキリヤの苦行によって、どのようにして、バラモンのカシャパの息子として、鳥の王ガルダが生まれたのか。どうしてガルダは一切の生類に害されることなく、殺されることがないのか。また、どうしてその鳥は欲するがままに飛行でき、欲するがままの力をそなえているのか。もし古伝説（プラーナ）に語られているなら、そのことを聞きたいと思う。（一―三）」

吟誦詩人は語った。――

あなたがたずねたことは、まさしく古伝説の主題である。私は簡潔に語るから、バラモンよ、すべてを聞きなさい。（四）

造物主（プラジャーパティ）カシャパが息子を望んで祭祀を行なった時、聖仙や神々やガンダルヴァ（半神の一種）たちは彼を援助したという。（五）カシャパはインドラ（帝釈天）や、聖者ヴァーラキリヤたちや、その他の神の群に、薪を調達することを頼んだ。（六）

インドラ神は、その力量にふさわしい山のような薪を持ち上げて、苦もなく運んで来た。

（七）その時、彼は途中で、親指の腹の部分ほどの大きさの、矮小な聖仙（ヴァーラキリヤ）たちが、一本のパラーシャ（植物名）の茎を、大勢で力を合わせて運んでいるのを見た。（八）この苦行者たちは、食物をとっていないので、非常に身体が痩せており、非力であって、水があふれた牛の足あとにも難儀するという有様であった。（九）インドラは自分の力に酔って慢心し、彼らすべてを嘲笑し、軽蔑してまたいで、速やかに追い越して行った。（一〇）彼らはひどく怒り、恨みを抱いて、インドラをおびやかす大きな祭式を企てた。（一一）このすばらしい苦行の力を持つバラモンたちは、種々の呪句（マントラ）とともに、作法に従って火中に供物を投じた。その願いの趣旨は次のようである。〔シャウナカよ〕聞きなさい。（一二）

「欲するがままの力を持ち、欲するがままに行く、神々の王（インドラ）をおびやかす、すべての神々の他のインドラ（王）が生じますように。」

と、誓戒を守る彼らは述べた。（一三）

「我々の苦行の果報により、今、武勇と精力にかけてインドラの百倍ある、思考のように速い、恐ろしい存在が生じますように。（一四）」

それを知ると神々の王インドラは非常に悩み、固く誓戒を守るカシャパのもとに庇護を求めた。（一五）神々の王の言葉を聞いて、造物主カシャパはヴァーラキリヤのもとに行って、祭式が成就したかとたずねた。（一六）すると真実を語る彼らは、「成就したはずだ」と答えた。そこで造物主カシャパは、まず彼らをなだめてから、次のように述べた。（一七）

「このインドラは、梵天（ブラフマー）の指令により、三界におけるインドラ（神々の王）となった。しかるに、

苦行者たちよ、あなた方もインドラを作ろうと努力している。(一八) 最上の人々よ、梵天の言葉を偽りにすることはよくない。そして私は、あなた方の意向も偽りにならないようにしたい。(一九) 非常な力と精神力をそなえた、鳥たちのインドラ(王)が生ずるように！ そして、許しを請うている神々の王に好意をかけなさい。(二〇)」

カシャパにこう言われて、苦行者ヴァーラキリヤたちは、最高の聖者である造物主(カシャパ)に敬意を払ってから、次のように答えた。(二一)

「造物主よ、この我々すべての企ては、他のインドラを作るためである。またこの企ては、あなたの息子を作るためであり、あなたにとって望ましいものである。(二二) それ故、あなたはこの実りある祭式をお受け下さい。そして、あなたがよいと思うようにお計らい下さい。(二三)」

ちょうどその時、ダクシャ(造物主の一人)の娘で、美しく誉れ高い、ヴィナターという(カシャパの)妃が、息子を望んでいた。(二四) 彼女は苦行を行ない、誓戒を守り、沐浴してから、生理の後の清浄な時期に、夫のカシャパに近づいた。カシャパは彼女に言った。(二五)

「妃よ、この企てはお前の望み通りの成果をあげるであろう。お前は三界の主である、二名の勇敢な息子を生むであろう。(二六) ヴァーラキリヤたちの苦行により、また私の意向から生まれた、栄光ある、世界の者たちに尊敬される二人の息子が、お前に生まれるであろう。(二七)」

尊いカシャパはなおも彼女に告げた。

「この栄光ある胎児を怠ることなく守れ。(二八) 一方の鳥は、世に尊ばれる勇士で、欲するがままの力を持ち、すべての鳥の王(インドラ)の位に就くであろう。(二九)」

それから、造物主は喜んでインドラに言った。

「この二羽の鳥の兄弟は、あなたの助力者となるであろう。(三〇) インドラよ、この二羽があなたの害になることはない。あなたは苦しむ必要がない。インドラはあなただけであろう。(三一) しかし、あなたは慢心して、言葉が有毒で非常に短気なヴェーダ学者を、二度と軽蔑してはならぬ。(三二)」

このように告げられて、インドラは不安もなくなり、天界へ帰って行った。ヴィナターも目的を成就して喜んだ。(三三) そして、アルナとガルダという二羽の息子を生んだ。両者のうちアルナ(光暁)は不具であって、太陽の前を行く。(三四) 一方ガルダは、鳥類の王の位に就いた。ブリグの子孫(シャウナカ)よ、ガルダの偉業を聞きなさい。(三五)　(第二十七章)

吟誦詩人は語った。——

最高のバラモンよ、神軍がこのように興奮している時、鳥の王ガルダは、速やかに神々のもとに到着した。(一) こよなく強力な彼を見ると、神々はいたるところで戦慄した。そしてすべての武器が互いにぶつかり合った。(二) 彼らのうちに、限りなく高邁で、稲妻か火のように輝き、広大な精力を有する、ソーマの番人、ヴィシュヴァカルマン(毘首羯磨、一切造者)がいた。

(三) 彼はわずかな間、激しく応戦したが、戦闘において、鳥の王に翼とくちばしと爪で傷つけられ、打ち倒された。(四) 鳥は翼で風を送ってほこりを立て、世界を暗黒にし、それを神々にふり注いだ。(五) ほこりをまかれた神々は錯乱に陥った。そして、甘露の番人たちは、ほこりにおおわれて、ガルダを見ることができなかった。(六) このようにして、ガルダは天界を混乱させ、翼とくちばしで打って神々を粉砕した。(七)

それから、千眼の神（インドラ）は急いでヴァーユ（風神）に命じた。

「風よ、このほこりの雨を吹き払え。これはあなたの仕事だ。(八)」

そこで強力なヴァーユは速やかにそのほこりを吹き払った。神々はほこりから解放されて、鳥を攻撃した。(九) 神群に攻撃されると、強力な鳥は大きな雷雲のような音で、高らかに鳴いた。そして、敵の勇士を殺す、強力な鳥の王は、一切の生類を恐れさせつつ舞い上った。(一〇) 飛び上って空中で神々の上にいる彼に対し、インドラをはじめとする、甲冑に身をかためたすべての神々は、種々の武器をふり注いだ。矛、鉄棒、槍、棍棒、鋭い縁を持った太陽のように輝く円盤を。(一一―一二) 種々の武器の発射によりいたるところ撃たれながらも、鳥の王は激烈に戦って、ひるむことはなかった。(一三) 威光にあふれたガルダ鳥は、空中で咆哮し、両翼と胸によって神々を全面的に蹴散らした。(一四) それから、ガルダに苦しめられた神々は、四散し、逃げ出した。彼らはガルダの爪とくちばしで傷つけられ、多量の血を流していた。(一五) 鳥の王に圧倒されて、サーディヤ神群とガンダルヴァ（半神族）たちは東方に、ヴァス神群とルドラ神群は南方へ逃げた。(一六) アーディティヤ神群は西方へ、ナーサティヤ（アシュヴィン双神）は北方へ逃げた。戦いつつ、幾度も強力な鳥を注視しながら。(一七) ガルダ鳥は、勇猛なアシュヴァクランダ、鳥のレーヌカ、勇士クラタナ、タパナ、ウルーカとシュヴァサナ、鳥のニメーシャ、プラルジャ、プラリハ（九名の夜叉）と戦い、翼や爪やくちばしの先で彼らをひき裂いた。まるで宇宙紀の終わりにおいて怒り狂う強力なシヴァ神のように。(一八―二〇) 強力で気力に満ちた彼らは、ガルダにひどく傷つけられ、雲の群のように、ほとばしる血の雨を降らせて輝いた。(二一)

最高の鳥は、彼らすべての命を奪ってから、甘露を求めて進んで行くと、いたるところに火を見た。(二二) それは大きく燃え広がり、火焔により空を一面におおっていた。それは燃える太陽のようであり、風にあおられて恐ろしく燃え上がった。(二三)

そこで、偉大で強力なガルダは、八千百の口を作り出し、それらの口で川の水を飲んでから、速やかに全速力でもどって来た。(二四) そして、敵を苦しめる鳥は、川の水を燃える火に注ぎかけた。火を鎮めてから、甘露の貯蔵所に入ろうとして、別の小さな体をとった。(二五)

（第二十八章）

吟誦詩人は語った。――

ガルダ鳥は金色の体をして、太陽の光線のようにきらきら輝き、激流が海に入るように、力ずくで入った。(一) 彼は甘露の前に、鋭い縁を持つ円盤を見た。それは鉄製で、鋭利な刃

を持ち、絶えず回転していた。（二）燃える火のように恐ろしく、甘露を盗むものを切るべく、神々により巧妙に作られた、この上なく不気味な姿をした装置であった。（三）鳥はその隙間を見るや〔それとともに〕回転した。そして、体を縮めて、一瞬のうちに輻（や）の間を飛び抜けた。（四）円盤の後に、彼は甘露の番をしている二匹の最高の蛇を見た。それは燃火のように輝き、稲妻のような舌を持ち、燃える口、燃える眼を持つ非常に恐ろしいもので、有毒な目つきをし、大なる精力を有し、常に怒っている、強力な蛇たちであった。（五―六）彼らは絶えず眼をらんらんと見開き、決してまばたきすることはなかった。彼らのうちの一匹でも、誰かを見るならば、その者はたちまち灰になってしまうのであった。（七）

金翅鳥（スパルナ）（ガルダ）はすぐさま二匹の眼にほこりをかけた。こうして彼らに姿を見られることなく、すっかり彼らを駆逐した。（八）ガルダ鳥は、彼らの体に襲いかかって、すぐに彼らの体を真中で断ち切った。（九）それから、強力で精力的なガルダは、甘露〔の容器〕を引き抜き、装置を粉砕して、全速力で飛び上がった。（一〇）その精力的な鳥は、甘露を飲まないでかき抱き、速やかに、疲れることなく、太陽の輝きを遮って飛んで行った。（一一）

ガルダは空中でヴィシュヌに遭遇した。ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）は彼の無欲の行為に満足した。（一二）不滅なる神は鳥に、「願いごとをかなえてやる」と言った。鳥は、「私はあなたの上にいたい」と願った。（一三）そして彼は、更にナーラーヤナに言った。

「甘露を飲まずとも不老不死でありたい。（一四）」

ヴィシュヌが二つの願いを承知すると、ガルダはヴィシュヌに言った。

「私もあなたの願いをかなえてあげます。主も選んで下さい。（一五）」

クリシュナ（ヴィシュヌ）は強力なガルダに、乗物となってくれと願った。そして主は、「上にとまっていなさい」と言って、彼を旗標とした。（一六）

一方インドラは、甘露を強奪した神々の敵ガルダ鳥を追跡して、金剛杵（ヴァジュラ）によってその体を撃った。（一七）ところが、戦闘中、最高の鳥ガルダは、金剛杵で撃たれても笑って、優雅な声でインドラに言った。（一八）

「その骨から金剛杵が作られた聖仙（ダディーチャ）と、金剛杵と、あなたに、私は敬意を表する。インドラよ。（一九）この通り、私は一枚の羽根を捨てる。だが、あなたはその端を見出すことはできないであろう。実に、金剛杵にあたっても、私には全く苦痛は生じなかった。（二〇）」

一切の生類は、美しい羽根を見て、驚嘆して言った。「あれは金翅鳥（スパルナ）に違いない」と。（二一）この奇蹟を見て、千眼者インドラは、この鳥は偉大な存在だと考えて言った。（二二）

「私はあなたの無上なる力の窮極を知りたいと思う。そして、あなたと永遠の友情を結びたい。最高の鳥よ。（二三）」（第二十九章）

ガルダは言った。

「インドラ神よ、あなたの望み通り、私はあなたと友情を結ぶ。私の力は大きく、耐えがた

いものであると知りなさい。(一)確かに自己の力を讃えることや、自ら美点を語ることを、善き人々は讃えないが、インドラよ、あなたは私の友人であり、あなたに問われたから、友よ、私は語るであろう。というのは、理由なくして、自己を讃美すべきでないから。(二―三)山や森や海を含む大地を、そしてそこにぶらさがっているあなたをも、インドラよ、また動不動のものを含む全世界をひっくるめて、私は疲れることなく一本の羽根により支えることができる。私の偉大な力はこのようであると知りなさい。(四―五)」

吟誦詩人は語った。――

勇士がこのように言った時、一切の生類の安寧を望む、神々の王インドラ神は告げた。(六)

「さあ、私の永久にして最高の友情を受け入れてくれ。あなたには甘露は必要ない。私にそれを返して下さい。あなたがそれを与えようとしている者たちは、我々を苦しめるであろう。(七)」

ガルダは言った。

「私はある理由があってこの甘露を奪った。私は決して飲むために甘露を誰かに与えはしない。(八)千眼の神よ、私自身がこれをどこかに置いたら、あなたはそれを持って速やかに奪いなさい。神々の主よ。(九)」

インドラは言った。

「鳥よ、私はあなたの言葉に満足した。最高の鳥よ、願いをかなえてあげるから選びなさい。

(一〇)」

吟誦詩人は語った。――

そう言われて、彼はカドルーの息子たちのことを思い出し、また、母が奴隷になった際に彼らが行なった術策のことを思い出して、答えた。(一一)

「私はすべての主であるが、あなたに請願することにする。インドラよ、強力な蛇たちが私の餌となるように。(一二)」

「承知した」と言って、そして更に、「あなたが置いた甘露を奪うであろう」と述べて、インドラは彼の後について行った。(一三)

それから金翅鳥は急いで母のもとに帰った。そして上機嫌ですべての蛇たちに告げた。(一四)

「この通り甘露を持って来た。あなた方のためにそれをクシャ草の上に置く。蛇たちよ、沐浴して身を清めてから食べなさい。(一五)そして、今日から、この私の母は奴隷でなくなる。私はあなた方の言う通りにしたのだから。(一六)」

(一七)

蛇たちは「承知した」と答えて沐浴に行った。インドラは甘露を奪って天界へ帰った。

さて、蛇たちは沐浴し、祈禱し、身を清め、喜んで甘露を求めてその場所に帰って来た。

(一八)それが奪われ、騙し返されたのを知って、蛇たちは、これが甘露の置いてあった場所

だということで、ダルバ草（クシャ草。鋭い葉を持つ）を舐めまわした。（二九）そうすることによって、蛇の舌は〔切れて〕二枚になった。そして、甘露と接触したので、ダルバ草は清浄になった。（三〇）

かくて、金翅鳥は最高に喜んで、母とともに森で時を過ごし、蛇たちを食べた。鳥たちにこよなく尊敬され、不滅の名声を得、ヴィナターを喜ばせた。（三一）

常にこの物語を聞く人、あるいは主立ったバラモンの集会で朗誦する人は、疑いもなく天界へ行くであろう。偉大な鳥の王を讃えることにより功徳を得て。（三二）（第三十章）

大地を支えるシェーシャ竜王

シャウナカは言った。

「蛇たちが母に呪われたこと、ヴィナターが息子（アルナ）に呪われたことの原因を、吟誦詩人よ、あなたは語った。（一）そして、カドルーとヴィナターが、夫に願いをかなえてもらったことをも。あなたはヴィナターの息子である二羽の鳥の名を告げた。（二）しかし、蛇たちの名前をあげてはいない。主な名前を聞きたいと思う。（三）」

吟誦詩人は語った。――

苦行者よ、蛇たちの名前は多いから、すべてをあげることはできないが、主要なものをあ

げるから聞きなさい。（四）最初にシェーシャが、次にヴァースキが生まれた。それから、アイラーヴァタ、タクシャカ、カルコータカ、ダナンジャヤ、カーリヤ、（以下略）たちが生まれた。（五―一五）

最高のバラモンよ。以上、主要な竜（ナーガ）（蛇）たちが列挙された。多数の名があるから、その他の名はあげない。（一六）彼らの子、またその子の子孫は無数であるから、それらを告げないのである。最高のバラモンよ。（一七）蛇たちは何千、何百万、何億といるから、数えあげることは不可能である。苦行者よ。（一八）（第三十一章）

シャウナカは言った。

「友よ、蛇たちは強力で、征服しがたい。しかるに、その呪詛を知ってから、その後、彼らはどのように行動したのか。（一）」

吟誦詩人は語った。――

彼らのうちで、高名なる竜王シェーシャは、カドルーと別れて、風を食べ（断食して）、誓戒を守り、激しい苦行を行なった。（二）彼はガンダマーダナ山に行き、バダリー川、ゴーカルナ、プシュカラの森、ヒマーラヤの斜面で苦行に専念した。（三）あちこちの聖地、霊場、聖域において、彼は専ら戒を守り、自制し、常に感官を制御した。（四）祖父（ピターマハ）（梵天）が激しい苦行を

していた彼を見た。竜王は髪を結い綴（つづれ）をまとい、その肉と皮膚と筋はひからびていた。（五）
梵天は堅く誓いを守って苦行している彼に言った。
「シェーシャよ、お前は何をしているか。生類に安寧をもたらせ。（六）というのは、お前は激しい苦行（熱力）により生類を苦しめているのだ。罪なき者よ、シェーシャよ、お前の心に久しく存する望みを言いなさい。（七）」
シェーシャは答えた。
「私の同腹の兄弟たちはすべて愚かである。私は彼らといっしょに住むことに耐えられない。どうかお許し下さい。（八）彼らはお互いに、敵のように、いつも憎み合っています。そこで私は、彼らを見ないですむように、苦行を行なっています。（九）彼らはいつもヴィナターとその息子に対し容赦しません。しかもガルダは我々の従兄弟なのです。祖父よ。（一〇）彼らは彼を異常に憎んでいます。そして、偉大な父カシャパのおかげで強力になった彼も、彼らを憎んでいます。（一一）そこで私は、苦行を行なってこの肉体を捨てます。死後も決して彼らと会うことがありませんように。（一二）」
梵天（ブラフマー）は言った。
「シェーシャよ、私はお前のすべての兄弟の行状を知っている。また、お前の母の罪により、兄弟たちに大きな危険が迫っていることも知っている。（一三）しかし、蛇よ、これには前もって特赦が設けられている。お前のすべての兄弟について悲しむ必要はない。（一四）シェーシャよ、お前の願望を私に言いなさい。今日、お前の願いをかなえてあげよう。私はお前に

大そう満足したから。（一五）最高の蛇よ、幸いなことにお前の心は法（ダルマ）に専念している。そしてお前の心が、更に法において確定するように。主よ。（一六）」
シェーシャは言った。
「祖父よ、まさにそれこそ、今、私が望むことです。私の心が法と寂静と苦行とにおいて楽しみますように。（一七）」
梵天は言った。
「シェーシャよ、私はお前の自制と寂滅に満足した。だが、私の指令により、生類の安寧を願う私の言葉を実行して欲しい。（一八）山や森、海や鉱脈や都市に満ちたこの大地は非常に動揺している。シェーシャよ、それが不動になるように、お前は適切に支えて保持せよ。（一九）」
シェーシャは答えた。
「願いをかなえる神、造物主（プラジャーパティ）、大地の主、生類の主、世界の主が言われたように、私は大地を支えて不動にするでしょう。造物主よ、大地を私の頭にのせて下さい。（二〇）」
梵天は言った。
「最高の蛇よ、地底へ行きなさい。大地の女神は自らお前に裂け目をさし出す（通路を開く）であろう。シェーシャよ、この大地を支えることにより、お前は私のために大きな親切をしてくれたことになる。（二一）」

吟誦詩人は語った。——

最高の蛇の長兄である竜王は、「承知しました」と言って大地の裂け目に入り、そこにとどまった。そして、海に囲まれた大地の女神を、すっかり抱きかかえて（取り巻いて）、頭で支えた。（二二）

梵天は言った。

「最高の竜よ、汝シェーシャは、ダルマ神だ。一人でこの大地を支えているのだから。私やインドラ同様、無限の体をもって大地すべてを抱きかかえて。（二三）」

吟誦詩人は語った。——

かくて、威光ある強力なアナンタ竜（シェーシャ）は地底に住む。梵天の命により一人で大地を支えつつ。（二四）最高の神、聖なる梵天は、その時アナンタに、ヴィナターの子である金翅鳥を友人として与えた。（二五）（第三十二章）

蛇たちの協議

最高の蛇ヴァースキは、あの母の呪詛のことを聞き、どのようにしたらその呪詛を無効にできるか思いめぐらした。（一）そこで彼は、法に専念するアイラーヴァタなどの兄弟と、色々と協議した。（二）

ヴァースキは言った。

「罪なき者たちよ、この呪詛が発せられたいきさつを知っているだろう。その呪詛から逃れるために、協議して色々と努力しよう。（三）一切の呪詛には対処法がある。蛇たちよ、しかし母に呪われた者が救われることはない。（四）我々は不滅で無量の真実の前で呪われたと聞いて、私の心はふるえる。（五）きっと我々の全滅が告げられたのだ。あの不滅の神（梵天）が、呪っている彼女を止めなかったのだから。（六）それ故、すべての蛇が無事でいられる方法を協議しよう。手遅れにならぬうちに。（七）昔、火が密かに洞窟に隠れた時に神々がしたように、我々も協議して解放の手段を見出そう。（八）蛇を滅ぼそうとするジャナメージャヤの供犠が実現しないような、または失敗するような手段を。（九）」

吟誦詩人は語った。——

「そうしましょう」と言って、方策に通じたカドルーのすべての息子たちは集まって、協定を結んだ。（一〇）彼らのうちのある蛇たちは言った。

「我々はバラモンの雄牛（最上の者）となって、ジャナメージャヤに、『あなたの供犠を取り止めて下さい』と要請する。（一一）」

また、自分が賢いと思っている他の蛇たちが言った。

「我々はすべて、彼に非常に尊敬される顧問官となろう。彼は、一切の企てについて確定的な意見を我々にたずねるだろう。そこで、供犠が中止されるような意見を述べるであろう。

（一一―一三）非常に知性ある王は、我々を尊重すべきであると考えて、その供犠の効果をたずねるであろう。もちろん我々は『ありません』と答えるであろう。（一四）その供犠が実現しないように、論理的に、かつ原因をあげて、現世と死後における、多くの恐ろしい災禍を示しつつ。（一五）また、他の蛇供の執行に通じた師が、王の企てに没頭するなら、ある蛇が彼を咬むべきであり、彼は死ぬであろう。その祭官が死んだら、祭祀は実現しないであろう。（一六―一七）そしてまた、他の蛇供に通じた者たちが王の祭官になったら、我々は彼らすべてを咬むであろう。このようにすれば我々の目的は成就するであろう。（一八）」

すると、他の徳性ある蛇たちが言った。

「あなた方のバラモン殺しの計は無思慮であり、よろしくない。（一九）災禍においては、まさに正法にもとづく鎮静法が最高である。非法にもとづくものは、全世界を滅ぼすであろう。（二〇）」

また他の蛇たちが言った。

「我々は稲妻をともなう雲となり、燃える祭火を雨によって消そう。（二一）」

また他の主立った蛇たちが言った。

「夜中に行って、人々が油断している間に、速やかに杓（しゃく）などの祭式の道具を奪え。祭式の障害となるであろう。（二二）」または、「その祭祀において、蛇たちは、百回、千回と、すべての人々を咬むべきである。恐慌が起こるであろう。（二三）」または、「蛇たちは、その糞尿により、調理された食物を汚すべきである。糞尿はすべての食物をだめにする。（二四）」

また、他の蛇たちが言った。

「我々は彼の祭官となって、祭祀の妨害をしよう。謝礼を下さいと言って。彼は我々の影響下にあって、我々の望むことをなすであろう。（二五）」

他の者たちが言った。

「王が水遊びをしている時、彼を我々の住処（すみか）に連れて来て、監禁しよう。そうすれば、彼の祭式は実現しないであろう。（二六）」

しかるに、巧妙にことを行なう他の蛇たちが言った。

「彼をつかまえて咬みつこう。そうすればすぐに目的は成就するであろう。彼が死ねば、災いの根が絶たれるであろう。（二七）これこそが窮極の判断であり、すべてのものたちに承認される。王よ、あなたのお考え通り、速やかに実行して下さい。（二八）」

以上のように言って、彼らは竜王ヴァースキを見つめた。ヴァースキは熟考してから、蛇たちに言った。（二九）

「蛇たちよ、この汝らの窮極の判断を実行することには賛成できない。また、他のすべての蛇たちの判断も気に入らない。（三〇）しかし、この場合、汝らの安寧が実現するために、何が実行されるべきなのか。このため、私は非常に苦しんでいる。成功も失敗も私にかかっているから。（三一）」

（第三十三章）

蛇が救われる道

吟誦詩人は語った。――

一同の言葉を聞いて、またヴァースキの言葉を聞いて、エーラーパトラは次のように言った。(一)

「その供犠は必ず実現する。また、我々の大なる危険の原因である、パーンダヴァ家のジャナメージャヤは、そのような〔愚かな〕王ではない。(二)王よ、この世で運命に打たれた人は、運命にのみ寄る辺を求める。そこには、他にいかなる依り所もない。(三)最高の蛇たちよ、我々のこの危険は運命である。この場合、我々はまさに運命に寄る辺を求めよう。私の言葉を聞きなさい。(四)光輝あふれる王よ、呪いがかけられた時、私は恐怖から母の膝にはい上った。そこで、悲嘆に暮れた神々が梵天に近づいて、『最上の蛇たちはひどく無慈悲なものだ』と言っているのを聞いた。(五―六)

神々は言った。

『神々の神である梵天よ、いかなる女性が、愛しい息子を得てこのように呪うだろうか。あなたの前にいる、その無慈悲なカドルーを除いては……。(七)しかも、あなたは、承知したと彼女に答えた。我々は、彼女を止めなかった理由を知りたい。(八)』

梵天は答えた。

『蛇たちは多すぎて、苛酷で、恐ろしい力を持ち、猛毒を有する。あの時、私は生類の安寧を願って、止めなかったのである。(九)咬むくせのある、下劣で、悪事をなし、猛毒を持つ蛇たちが滅亡するのであって、正しくふるまう蛇たちは滅びはしない。(一〇)その時が来た際、そういう蛇たちが大なる危険から救われる手段があるから聞きなさい。(一一)ヤーヤーヴァラの家系に、ジャラトカールという聡明で偉大な聖仙、高名で威光をそなえ、感官を制御した聖仙が出るであろう。(一二)そのジャラトカールに、アースティーカという偉大な苦行者の息子が生まれ、その供犠をやめさせるであろう。そこで、行ない正しい蛇たちは救われるであろう。(一三)』

神々は言った。

『神よ、最高の聖者、大苦行者、強力なジャラトカールは、いかなる女性に偉大な息子を生ませるのか。(一四)』

梵天は答えた。

『神々よ、その強力な最高のバラモンは、彼と同じ名前の娘に、強力な息子を生ませるであろう。(一五)』」

エーラーパトラは続けた。

「その時、神々は、『その通りになりますように』と梵天に言った。そして、神々と梵天は立ち去った。(一六)ヴァースキよ、私はここに、ジャラトカールという名の、あなたの妹を見出す。行乞をしているあの誓戒を守る聖仙に、彼女を施物として贈りなさい。蛇たちの危

険を鎮めるために。私は以上のような救済の道を聞きました。(二七―二八)」　(第三十四章)

吟誦詩人は語った。――

最高のバラモンよ、エーラーパトラの言葉を聞くと、すべての蛇たちは心から喜んで、「いいぞ、いいぞ」と讃えた。(一) それ以来、ヴァースキは妹のジャラトカールという少女を大切に守り、最高の喜びに達した。(二) それからほどなくして、すべての神々と阿修羅(アスラ)たちは水天(ヴァルナ)の住処（海）を攪拌した。(三) その際、最も強力なヴァースキ竜は攪拌棒をまわす紐の役目を果たした。その仕事を終えてから、神々はヴァースキとともに、梵天に近づいて言った。

「聖なる神よ、このヴァースキは呪詛を恐れ、ひどく悩んでいます。(四―五) どうか、母の呪詛から生じた彼の心の棘を抜いてやって下さい。親族の幸せを願っている彼の。(六) この竜王はいつも我々に親切で、よいことをしてくれます。どうか好意をかけてやって下さい。彼の心痛を鎮めて下さい。(七)」

梵天は告げた。

「神々よ、かつてエーラーパトラ竜が彼に述べた言葉は、まさにこの私が意図して授けたものだ。(八) 今やその言葉を実行する時が来た。竜王はそれを行なうべきである。悪しき蛇たちは滅びるが、行ない正しき蛇たちは滅びないであろう。(九) あのバラモンのジャラトカールが生まれ、激しい苦行に専念している。適切な時に、竜王は妹のジャラトカールを彼に与えるべきである。(一〇) あの時、蛇のエーラーパトラに言われた、蛇たちのためになる言葉は、神々よ、その通りになり違(たが)うことはない。(一一)」

吟誦詩人は語った。――

竜王は梵天の言葉を聞くと、多くの蛇たちに、ジャラトカールを常に見張らせた。(一二)

「ジャラトカールが妻を娶りたいと望んだら、速やかに来て告げよ。そうすれば、我々は幸せになれるであろう。(一三)」　(第三十五章)

呪われたパリクシット王

シャウナカはたずねた。

「吟誦詩人よ、あなたはジャラトカールとその名を呼んだ。その偉大な聖仙ジャラトカールの名は、いかなる理由で、この地上において有名になったのか。ジャラトカールの語源を正しく説明して下さい。(一―二)」

吟誦詩人は答えた。

「ジャラーというのは『滅亡』のことであり、カールというのは『恐ろしい』ということである。彼にとって身体は恐ろしく、賢明なる彼は、激しい苦行によりそれを滅したと

いうので、そう呼ばれるのである。ヴァースキの妹も、同様にしてジャラトカールと呼ばれるのである。（三―四）」

そう言われて、徳性あるシャウナカは笑った。ウグラシュラヴァスに呼びかけて、「さもあらん」と言いながら。（五）

吟誦詩人は語った。——

この誓戒を守る賢明なる隠者（ムニ）は、長い間、苦行に没頭していて、妻を望まなかった。（六）彼は射精することなく、苦行に専念し、学習に励み、何も恐れず、倦むこともなく、すべての土地を遍歴していた。この偉大な男は、心の中ですら妻を望むことはなかった。（七）

それから、他の時期に、クルの家系に属するパリクシット（ジャナメージャヤの父親）という名の王がいた。（八）彼はかつて曾祖父のパーンドゥがそうであったように、地上における勇士、最高の弓取りであり、狩猟を好んだ。この王は、鹿、猪、ハイエナ、水牛、その他種々の野獣を射つつ、狩をしてまわった。（九―一〇）ある時彼は、鋭い矢（異本の読み）で鹿を射て、弓を背負い、深い森に入って行った。（一一）ちょうどルドラ（シヴァ）神が天界において、祭祀そのものである鹿を射て、弓を手にして方々探しまわりながら追跡したように。（一二）パリクシット王に射られた鹿は、生きて森を走ることはないのに、その彼に射られた鹿が消え失せたということは、きっと彼が昇天する前兆であったのだ。（一三）その王は、鹿に長いこと引きずりまわされて、疲れ、渇きに苦しんだ。そのうち彼は、森の中で、ある隠者に出会った。（一四）その隠者は、

牝牛の牧場に座り、乳を飲む仔牛の口から出る多量の泡を食べていた。（一五）王は飢えて疲れていたが、急いでその誓戒を守る隠者に駆け寄り、弓を構えてたずねた。（一六）「おお、バラモンよ、私はアビマニユの息子パリクシットである。私が射た鹿はどこかへ消えた。あなたは見なかったか。（一七）」

その隠者は沈黙の戒を守っていたので、彼に何も言わなかった。王は怒って、死んだ蛇を弓の端で拾い上げ、彼の肩にかけて、彼を見つめた。しかし彼は、王に対して、よいことも悪いことも、何も言わなかった。（一八―一九）王はそのような状態の彼を見て、怒りを捨て、苦しみつつ都に帰った。一方、その聖仙はそのままの状態でいた。（二〇）

この聖仙には、シュリンギンという若い息子がいた。その息子は、偉大な苦行者で、激しい威光を有し、短気でなだめがたく、誓戒を固持する者であった。（二一）時おり彼は、一切の生類の幸せを望む最高の主である梵天を熱心に崇拝した。その彼が、梵天に許されて、家に帰って来たのである。（二二）ところが、彼の友人である、ある聖仙の息子クリシャが、ふざけて笑い、この非常に短気で毒のような聖仙の息子（シュリンギン）をからかって言った。（二三）

「君は威光に満ち苦行の力を有するというが、君の父上が死骸を肩にかけているぞ。シュリンギンよ、あまりうぬぼれるなよ。（二四）我々のようなブラフマン（ヴェーダ）を知る完成した苦行者である聖仙の息子たちが語らっている時に、何もしゃべるな。（二五）あのように死骸を肩にかけている父親を見たら、君の誇りや、高慢な言葉も、どこかへ行ってしまうよ。（二六）」

（第三十六章）

吟誦詩人は語った。――

威光ある短気なシュリンギンは、父が死骸を背負っていると聞くと、怒りで苦しんだ。(一)彼はクリシャを見て、柔和な言葉を捨てて、「どうしてまた、今日、私の父は死骸を肩にかけているのか」とたずねた。(二)

クリシャは言った。

「パリクシット王が狩をしていて、君の父親の肩に蛇をかけたのだ。(三)」

シュリンギンはたずねた。

「私の父はその性悪の王にどんな嫌なことをしたのか。クリシャよ、本当のことを言ってくれ。私の苦行の力を見よ。(四)」

クリシャは答えた。

「アビマニユの息子パリクシット王は、狩猟に出かけ、矢で鹿を射て、一人で後を追った。(五)王は大きな森をさまよったが、鹿を見出せなかった。彼は沈黙行をしている君の父上を見てたずねた。(六)飢えと渇きと疲労に苦しむ彼は、樹幹のように不動の父上に、何度も消えた鹿のことをたずねた。(七)父上は沈黙の誓いをたてているので、彼に答えなかった。王は弓の端で、彼の肩に蛇を投げかけた。(八)シュリンギンよ、君の父上は、誓戒を守り、今もそのままの状態で座っている。あの王も、自分の象の都(ハースティナプラ)にもどった。(九)」

吟誦詩人は語った。――

それを聞くやいなや、聖仙の息子は怒りで眼を赤くし、怨みで燃えるようになり、天を支持するかのように立っていた。(一〇)その時、威光ある彼は怒りにとらわれ、激しい憤怒に我を忘れ、水に触れて王を呪った。(一一)

シュリンギンは言った。

「あの罪深い王は、苦行する老いた父の肩に、死んだ蛇を投げた。(一二)毒牙を持つ、激しい威力を有する竜王タクシャカが、私の言葉にうながされ、怒り狂って、その邪悪な彼を、七日のうちにヤマ(閻魔)の住処に送る(殺す)であろう。バラモンを侮辱した、クルの家系の面汚しを。(一三―一四)」

吟誦詩人は語った。――

怒ったシュリンギンは、このように王を呪ってから、その牛の牧場で、死んだ蛇を肩にかけて座っている父のもとに行った。(一五)シュリンギンは、死んだ蛇を肩にかけている父を見ると、更に怒りをつのらせた。(一六)彼は悔し涙を流して父に言った。

「お父さん、あの邪悪なパリクシット王があなたを侮辱したことを聞いて、私は怒ってあの王を呪いました。あのクルの家系における最低の男は、恐ろしい呪詛にふさわしいのです。(一七―一八)七日後に、竜王タクシャカが、あの悪人を、最高に恐ろしいヤマの住処に送るでし

よう。（一九）」
　父は怒っている息子に言った。
「わが子よ、お前は私によいことをしてはいない。これは苦行者の法（ダルマ）ではない。（二〇）我々はあの王の領土に住んでおり、彼により正しく守護されている。彼の悪は好まないが、息子よ、我々のようなものはあらゆる場合、常に、現在の王に対し忍耐しなければならない。損われた法は、必ずや報復するからである。（二一―二二）もし王が守護しなければ、我々の苦しみは最高になろう。息子よ、我々は安心して法を行なえないであろう。（二三）わが子よ、〔政治〕論に通じた諸王により守られて、我々は大いなる法を実践でき、彼らもその功徳の配分を受けるのである。（二四）特にパリクシットは、彼の曾祖父（パーンドゥ）同様、王にふさわしく我々を守っている。（二五）今日、彼は飢え、疲れ、苦労して、疑いもなく私の沈黙の誓いを知らずに、あのようなことをしたのだ。（二六）だから、お前は、幼稚さから性急に悪しき行為をなしたのである。息子よ、王というものは、あらゆる場合、我々の呪いを受けるべきではないのだ。（二七）」

（第三十七章）

　シュリンギンは言った。
「お父さん、私が無謀なことをしようと、悪いことをしようと、それがあなたの気に入るにせよ、入らぬにせよ、私が言った言葉は虚言（そらごと）にはなりません。（一）父上、それは決して変え

ようがありません。誓って申し上げます。私はふざけている時も嘘は言いません。いわんや呪ったらなおさらです。（二）」
　シャミーカ（父親の名）は言った。
「息子よ、お前が恐ろしい力を持ち、言葉に忠実であることは知っている。お前はかつて嘘を言ったことはない。この呪いは虚言にはならぬであろう。（三）しかし、父親というものは、息子が成人になっても、徳をそなえ高い名声を得られるよう、いつも助言しなければならない。（四）ましてや、お前のような者の場合はなおさらである。お前は子供ながら、苦行に専念している。そして、力を有する偉大な人々の怒りは、この上なく増大する。（五）そこで私は、お前が息子であり幼稚で無謀なのを見て、お前に助言すべきだと考えるのである。法（ダルマ）を守る者たちの最上者よ。（六）お前は寂静になり、森の食物を食べて過ごせ。その怒りを捨てよ。そのように法をないがしろにしてはならぬ。（七）
　実に怒りは苦行者たちが苦労して集めた法（功徳）を奪うものだ。そして法を欠いた者たちには、望ましい帰趨はない。（八）忍耐強い苦行者にとって、静寂こそが成就をもたらす。忍耐する人々にとって、この世と彼の世が存する。（九）それ故、常に忍耐を心がけ、感官を制御して修行せよ。忍耐によりお前は直ちに梵天（ブラフマン）の諸世界へ達するであろう。（一〇）ところで私は、静寂を保って、今できることをやろう。私は王に使いを出す。（一一）
『王よ、幼稚で分別のない私の息子は、あなたが私に行なった侮辱を見て怒り、あなたを呪いました』と。（一二）」

タクシャカ竜王

吟誦詩人は語った。――

弟子にこのように説諭してから、誓戒を守る大苦行者は憐憫にかられ、パリクシット王に対して、ガウラムカという、行ない正しく心を統一した弟子を派遣した。まず王が息災であるかをたずねてから、ことの次第を伝言せよと命じて。(二三―二四) その弟子は速やかにクル族の王のもとに行き、まず門衛に取次いでもらってから、王宮に入った。(二五) 王はバラモンのガウラムカをもてなした。そして、疲れのとれた彼は、大臣たちの前で、シャミーカの言った恐ろしい言葉を、すべて残らず王に伝えた。(二六)

「王よ、あなたの領土にシャミーカという聖仙がいます。彼は最高の徳性をそなえ、自制し、寂静なる大苦行者です。(二七) あなたは弓の端で、死んだ蛇を彼の肩にかけました。彼はあなたの行為に耐えましたが、彼の息子は我慢できませんでした。(二八) 彼は父の知らぬうちに、今日、あなたを呪いました。――七日のうちに、タクシャカ〔竜王〕があなたの死〔をもたらす〕であろうと。(二九) そこで〔シャミーカは〕それに対し警戒しなさいと、何度も申しました。何人もそれを別様にすることはできぬとも。(三〇) 彼は怒りにかられた息子を制止することができませんでした。そこで王よ、あなたの安寧を願って、私を派遣したのです。(三一)」

クルの家系に属する王は、この恐ろしい言葉を聞いて、あの悪事をなしたことを非常に後悔した。(二二) そして、その時、偉大な隠者が沈黙行をしていたと聞いて、王はいっそう苦悩した。(二三) また、シャミーカが自分に同情していることを聞くと、隠者に罪を犯したことを更に更に悔やんだ。(二四) その王は不死なる者のように、実にかかる行為をしたことを悔いたのであって、自分の死を聞いて悲しんだのではなかった。(二五)

そこで王は、ガウラムカを送り返した。「尊者よ、私に更に好意をおかけ下さい」と伝言して。(二六) ガウラムカが去った時、王は意気消沈して、大臣たちと協議した。(二七) 彼はよくよく協議して、大臣たちとともに結論を出して、一本の柱の上に、厳重に守られた楼閣を作らせた。(二八) そしてそこを警護し、医師、薬草、〔解毒の〕呪句に通じたバラモンたちを、いたるところに配した。(二九) そして、法を知る彼は、いたるところ厳重に守られてそこに住み、大臣たちとともにすべての王の職務を行なった。(三〇)

七日目になった時、賢者カーシャパが王を治療するためにやって来た。(三一) 彼は、今日、竜王タクシャカがその偉大な王をヤマ〔閻魔〕の住処に導くであろうということを聞いたのだった。(三二)「竜王が王を咬んだら、私が熱を鎮めてやろう。そうすれば、私は財物と功徳を得るだろう」と彼は考えたのである。(三三) カーシャパが一途にそう考えて歩いて行くと、途中で、竜王タクシャカが彼を見た。竜王は非常に高齢のバラモンになって、偉大な聖者カーシャパにたずねた。

「あなたは急いでどこへ行くのですか。どのような仕事をしようというのですか。(三四―三五)」

カーシャパは答えた。
「今日、竜王タクシャカが、クルの家系に生まれた勇士パリクシット王を、その威光によって燃やすであろう。(三六)パーンダヴァの家系を受け継ぐ、無量の力を持つ王が、その火のような威光を有する竜王に咬まれたら、私はすぐに彼の熱を鎮めようとして、急いで行くのである。(三七)」
タクシャカは言った。
「バラモンよ、俺がタクシャカだ。俺は王を滅ぼすであろう。引き返しなさい。あなたは俺が咬んだ者を治療することはできない。(三八)」
カーシャパは答えた。
「蛇よ、あの王があなたに咬まれたら、彼の熱を鎮めると、私は決意している。自分の術の力を信じているから。(三九)」（第三十八章）
タクシャカは言った。
「もし俺が咬んだものを何でも治療することができるなら、カーシャパよ、俺が咬むこの樹を生き返らせてみよ。(一)あなたの持つ呪句（マントラ）の力を示せ。全力を尽くせ。最高のバラモンよ、あなたが見ている前で、俺はこのバニヤン樹を燃やすから。(二)」
カーシャパは言った。

「竜王よ、もしそうしたいなら、樹を咬んでみなさい。蛇よ、あなたが咬んだ樹を、私は生き返らせよう。(三)」
吟誦詩人は語った。——
偉大なカーシャパにそう言われて、最高の蛇である竜王は、バニヤン樹に近づいてそれを咬んだ。(四)その樹は彼に咬まれるやいなや、毒蛇の毒にやられ、いたるところ燃え上がった。(五)竜はその樹を燃やしてから、カーシャパに言った。
「最高のバラモンよ、努力してこの大樹を生き返らせよ。(六)」
樹は竜王の熱力によって灰燼に帰したが、カーシャパはその灰をすべて集めて言った。(七)
「竜王よ、この大樹に対する私の術の力を見よ。蛇よ、あなたが見ている前で、それを生き返らせるであろう。(八)」
それから賢明な尊者、最高のバラモンであるカーシャパは、灰の山となった樹を、その術により生き返らせた。(九)彼はまず芽を作り、次に、それに二枚の葉を生じさせ、更に、葉が茂り多くの枝を有するバニヤン樹を作った。(一〇)偉大なカーシャパにより生き返った樹を見て、タクシャカは言った。
「バラモンよ、あなたには驚異的な能力がある。最高のバラモンよ、俺のような者の毒を滅するとは。ところで苦行者よ、いかなる利益を欲してあそこへ行くのか。(一一―一二)あの偉大

な王からあなたが得たいと望む果報は何でも、どのように得がたいものでも、この俺が与えるであろう。(二三) あの王はバラモンの呪詛にやられ、その寿命も尽きているから、あなたがいくら努力しても、成功はおぼつかないだろう。(二四) かくて、三界に知れわたったあなたの輝かしい名声は、光を失った太陽のように、消失してしまうであろう。(二五)」

カーシャパは言った。

「私は財物を求めてそこへ行くのである。竜王よ、それを私にくれれば、私は引き返すことにする。(二六)」

タクシャカは答えた。

「あなたがあの王に求める以上の財物を、私は今すぐあなたに与えるであろう。最高のバラモンよ、引き返しなさい。(二七)」

吟誦詩人は語った。――

タクシャカの言葉を聞いて、広大な威光を有する最高のバラモンである賢者カーシャパは、王の運命について考察した。(二八) 天眼通を有する苦行者カーシャパは、そのパーンダヴァの王の寿命が尽きていることを知って、引き返した。そしてその偉大な聖者は、タクシャカから望み通りの財物を受け取った。(二九)

偉大なカーシャパが条件を受け入れて引き返した時、タクシャカは急いで象の都（ハースティナプラ）へ行った。(三〇) その途中で、タクシャカは、王が毒を消す呪句（マントラ）や薬によって入念

に守られていることを聞き知った。(二一) そこで彼は考えた。「俺は幻術によって王を欺くべきである。いかなる方策があるだろうか」と。(二二) そしてタクシャカ竜は、蛇たちに苦行者の姿をとらせ、果実と葉と水を持たせて、王のもとに派遣した。(二三)

タクシャカは言った。

「お前たちは所用があると称して、臆することなく王のもとへ行け。そして王に果実と葉と水を受けさせよ。(二四)」

吟誦詩人は語った。――

タクシャカに命じられた蛇たちは、言われた通りにして、王にダルバ草と水と果実をさし出した。(二五) 強力な大王はすべてを受け取った。そして彼らの用向きを聞いてから、彼らを退出させた。(二六) 苦行者に変装した蛇たちが去った時、王は大臣と友人たちに告げた。(二七)

「諸卿も私とともに、苦行者たちの持ってきたこの美味な果実をすっかり食べなさい。(二八)」

それから王は、大臣らとともに果実を食べようとした。ところが、彼が持った果実の中に微細な虫がいた。それは非常に小さくて、黒い眼を持ち、銅の色をしていた。(二九) 王はそれをつかんで、大臣たちに言った。

「太陽が沈む。今や毒の危険は去った。(三〇) 隠者の言葉が真実となれ。この虫がタクシャ

カとなって、私を咬め。そうすれば罪を免れることができよう。(三一)」

大臣たちはカーラ（時間、破壊神）にかりたてられて、彼に倣った。王はそう言うと、虫を喉のところに置いて急に笑い出した。彼は死ぬ運命にあり、思慮を失っていたのである。(三二) 笑っているうちに、タクシャカが、王のもらった果実から抜け出して、彼に巻きついていた。(三三)

（第三十九章）

吟誦詩人は語った。——

大臣たちはみな、蛇に巻きつかれた彼を見て、顔色を変え、ひどく悲しんで泣き叫んだ。(一) しかし、その蛇のうなり声を聞くと、大臣たちは逃げ出した。そして、彼らは空中を行く驚異的な竜を見た。(二) タクシャカ竜王は蓮華色に輝き、空〔という黒髪〕に分け目をつけるかのようであった。それを見て、彼らはひどく嘆き悲しんだ。(三) それから、彼らは恐怖にかられて、蛇の毒から生じた火に包まれ燃えている楼閣を捨てて、諸方に逃げた。それは雷に撃たれたかのように倒れた。(四)

王がタクシャカの熱力によって殺された時、清浄なるバラモン、王の司祭、王の顧問官たちは、一切の葬儀を執り行なった。(五) それから都に住むすべての人々が集まって、幼い王子を王位につけた。人々は、その敵を滅ぼすクルの英雄となる王を、ジャナメージャヤと呼

んだ。(六) このクルの勇士たちの長子は、幼少の頃から実利（アルタ）を考慮する立派な王であり、顧問官や司祭たちとともに王国を統治した。英雄であった彼の曾祖父（ユディシティラ）のように。(七) それから、その王が敵を苦しめる〔ほど成長した〕のを見て、王の顧問官たちは、カーシ国王のスヴァルナヴァルマンのもとに行き、王女のヴァプシュタマーをいただきたいと願い出た。(八) そこでカーシ国王は、色々検討してから、法（ダルマ）に従って、クルの勇士にヴァプシュタマーを与えた。ジャナメージャヤは彼女を得て喜び、それ以来、決して他の婦人たちに心を向けることはなかった。(九) 強力な王は心から満足し、花開く森や湖で楽しい時を過ごした。かつてプルーラヴァス王がウルヴァシー（天女の名）を得て楽しんだように、その最高の王は楽しく暮らしたのであった。(一〇) 最高の美女ヴァプシュタマーの方も、端麗で立派な王を夫として得て、くつろぎの時に、こよなき愛情でもって彼を愛した。(一一)

（第四十章）

逆さづりの先祖たち

その間、大苦行者ジャラトカールは、全地上を遍歴していた。たまたま夜になった場所を宿として。(一) その威力あふれる聖者は、自己を制御していない者には行ないがたい戒行を行じ、聖地の水で沐浴しつつさすらっていた。(二) 聖者は断食し、風を食べ、日ごと憔悴して行った。そのうち、彼は、洞穴の中で、顔を下にしてぶらさがっている祖霊たちを見た（一・一三参照）。(三) 彼らはヴィーラナ草の束で支えられていたが、それは一本だけしか残っていな

かった。そして、穴に住む鼠が、その一本を徐々に食っているのを見た。(四) 彼らは食物をとらず、痩せ衰え、洞穴の中で苦しみ、救いを求めていた。彼は、自らも惨めな姿をしていたが、惨めな彼らに近づいてたずねた。(五)

「ヴィーラナ草の束に支えられてぶらさがっているあなた方は誰ですか。その草は、穴に住む鼠によって根もとを食われ、弱くなっています。(六) しかも、ヴィーラナの束には、今や一本の根しか残っていませんが、それをも鼠は鋭い歯で徐々に食っています。(七) それもわずかしか残っていないので、遠からず切れるでしょう。そして、あなた方は頭を下にしてこの穴に落ちるでしょう。(八) あなた方が、頭を下にして、ひどい災禍に陥っているのを見て、私も心苦しく思います。あなた方のために何かお役に立てるでしょうか。(九) 私の苦行の力の四分の一、三分の一、あるいは半分により、その災難を取り除くことができるでしょうか。すぐに言って下さい。(一〇) あるいは、私の苦行の力の全体により、あなた方がみなこの状態から救われますように。そうだそのようにしましょう。(一一)」

祖霊たちは言った。

「福徳ある梵行者(禁欲者)であるあなたは、我々を救おうと願っているが、最高のバラモンよ、苦行でこの苦境を除くことはできない。(一二) 語る者たちのうちの最高者よ、我々には苦行の果報がふりかかっているのだ。バラモンよ、子孫が途絶えることにより、我々は不浄な地獄に堕ちるのである。(一三) ここでぶらさがっている間に、我々の知力は閃かなくなり、その力量が世に知れわたっているであろうあなたが誰であるかわからないのだ。(一四) 非常に

苦しむ哀れな我々に、憐憫の情から近づき、悲しんでくれるあなたは、福徳あり心豊かな人である。バラモンよ、我々が誰であるか聞きなさい。(一五) 我々はヤーヤーヴァラ家の、誓戒を厳守する聖仙である。子孫が途絶えることにより、我々は清浄なる世界から堕ちたのだ。(一六) 我々の清浄なる功徳(タパス)は消滅した。我々には糸(子孫)がないから。しかし、我々にはまだ一本の糸が残っている。ところが、それは無きにも等しいのだ。(一七) この薄幸なる我々の縁者として、我々の家系に、ヴェーダ聖典とその補助学に通じた、ジャラトカールという有名な者がいるが、不幸なことに、この偉大な男は、自己を制し、誓戒を守り、激しい苦行に没頭している。(一八) 彼はあくせく苦行することにより、我々をこの苦境に陥らせたのである。彼には、妻も息子も縁者も全くいない。(一九) それ故、我々は身寄りのない者のように、分別を失ってこの洞穴にぶらさがっている。あなたは我々を助けると思って、彼に会ったら言ってやって下さい。(二〇) 『お前の惨めな祖先たちは、洞穴で、頭を下にしてぶらさがっていた。妻を娶り、子孫を作るがよい。というのは、苦行者よ、我々(祖霊たち)にはお前という家系の糸だけしか残っていないのだから』と。(二一) バラモンよ、あなたの見るように、我々はヴィーラナ草の束にぶらさがっているが、これは我々の家系を繁栄させる、家系の束である。(二二) そして、ここにこの蔓草の根があるが、これは我々の糸(子孫)で、時間(カーラ)によって食われているのだ。(二三) そして、我々はみな、この半ば食われた根にぶらさがっているが、その一本の根も、苦行を行なっている。(二四) ここにいる鼠は強力な時間に他ならない。それは、あの苦行に専念している愚かな男を打って、次第に滅ぼしているのである。あのあく

せく苦行をする、無思慮で情のないジャラトカールを。(二五) ごらんなさい。我々は根を切られ、堕ち、時間により分別を失い、まるで罪人のように、奈落に落ちようとしている。(二六) 我々が以前の先祖たちとともに、ここに落ちたら、彼も時間に切られ、奈落に行くであろう。(二七) 苦行も祭祀も、その他の偉大な浄めの手だても、すべて子孫と比べれば取るに足らぬ、というのが善き人々の説である。(二八) もし苦行者ジャラトカールに会ったら、ここで見たことを残らず告げて下さい。(二九) そして、妻を娶り息子を作れと、彼に言って下さい。我々を助けると思われるなら。(三〇)」

(第四十一章)

吟誦詩人は語った。——

それを聞くと、ジャラトカールは悲嘆に暮れ、苦しみのあまり涙で声をつまらせて、自分の祖霊たちに言った。(一)

「私がそのジャラトカールです。あなた方の罪深い息子です。私は愚かにも悪行を犯しました。どうか罰して下さい。(二)」

祖霊たちは言った。

「息子よ、お前がたまたまこの場に来たのは幸いなことだ。ところで、お前はどうして妻帯しないのか。(三)」

ジャラトカールは答えた。

「御先祖様、私の心にはいつもこの願いがあるのです。射精しないようにして、この身体を後生に到達させたいものだという。(四) しかし、あなた方が鳥のようにぶらさがっているのを見ると、私は梵行(清浄行)をやめる気になりました。(五) 私はあなた方のよいようにいたします。確かに結婚しましょう。保証いたします。もしいつか、私と同じ名前の少女を得ることができたら……。(六) その女性が自ら進んで、施物として与えられ、そして私が彼女を扶養しなくていいなら、彼女を妻とするでしょう。(七) もしこのようであるなら、私は結婚をいたします。そうでなければしません。御先祖様、私はそう誓います。(八)」

吟誦詩人は語った。——

祖霊たちにこのように言ってから、聖者は地上を遍歴したが、「彼は老人だ」ということで、妻を得ることができなかった。(九) 絶望し、また祖霊たちにせきたてられ、彼は森へ行き、非常に苦しんで、大声で叫んだ。(一〇)

「ここにいる生物たち、動くものも動かないものも、隠れたものたちも、私の言うことを聞いてくれ。(一一) 私が激しい苦行を行なっていた時、祖霊たちが苦しんで、『結婚せよ』と私に命じた。彼らによかれと思い、私は結婚を求め、少女の施物を乞うて全地上をさすらっている。貧しく、いつも苦しんで、祖霊たちにせきたてられて。(一二―一三) いかなる生物でも娘を持つもの、ここで私が呼びかけたものたち、あらゆる方角をさすらっている私に娘を下さい。(一四) その少女が私と同じ名を持ち、施物として与えられるなら、また私が彼女を扶養

しなくてよいなら、その少女を私に下さい。(一五)」

さて、ジャラトカールを見張っていた蛇たちは、その知らせを持ってヴァースキに報告した。(一六) 竜王は彼らの報告を聞くと、飾りつけた妹を森へ連れて行き、聖者に近づいた。(一七) そこで竜王ヴァースキは、偉大な男に少女を与えた。ところが、彼は少女をすぐに受けなかった。(一八) 彼女は同じ名前ではないと考えて。また、扶養の件もどうなるかわからなかったからである。解脱を求めつつも結婚を求め、矛盾した気持を抱いて。(一九) それから彼は少女の名をたずね、更に、「ヴァースキよ、私は彼女を扶養しないであろう」と告げた。(二〇)

（第四十二章）

ジャラトカールの結婚

その時、ヴァースキは聖仙ジャラトカールに答えた。

「最高のバラモンよ、私の妹である、この修養(タパス)をそなえた乙女は、あなたと同じ名前である。そして、あなたの妻を私が扶養しよう。彼女を受け取りなさい。苦行者よ、私は全力をあげて彼女を守るであろう。(一―二)」

竜が妹を扶養すると約した時、ジャラトカールは蛇の住処へ行った。(三) そこで、この最高のヴェーダ学者、苦行を積み、誓戒を厳しく守る徳性ある男は、作法に従い、聖句(マントラ)とともに新婦の手をとった（結婚した）。(四) それから、偉大な聖仙たちに祝福されつつ、妻をともなって、竜王が用意したすばらしい寝室に入った。(五) そこには、高価な敷布におおわれた寝台が整えられてあった。そこでジャラトカールは妻とともに夜を過ごした。(六) そしてその最高の男は、妻と約束した。

「決して私に不愉快なことをしてはならぬ、言ってはならぬ。もし不愉快なことをしたら、私はお前を捨て、この家に住むこともやめるであろう。私の言ったこの言葉を心に留めておきなさい。(七―八)」

すると竜王の妹はこよなく恐れ、非常に悩んで、「そういたします」と彼に答えた。(九) かくて、この誉れ高い女は、気に入られようとして、白い鳥のように稀な仕え方で、気むずかしい夫に仕えた。(一〇)

ある時、ヴァースキの妹は、受胎に適した時期に、規定に従って、沐浴してから夫である偉大な聖者に近づいた。(一一) そこで彼女は子を宿した。それは、焔のような胎児で、この上なく熱力(タパス)をそなえ、普遍火(ヴァイシュヴァーナラ)のように輝いていた。ちょうど白月における月のように、その胎児は成長した。(一二)

それからほどなくして、大苦行者ジャラトカールは、彼女の膝に頭をのせて、疲れた人のように眠った。(一三) その偉大なバラモンが眠っている間に、太陽は西山へ行き、昼は終わろうとしていた。そこで、思慮深いヴァースキの妹は、法(ダルマ)（黄昏の勤行）を怠るのではないかと恐れて考えた。(一四)

「私はどのようにしたらよいだろうか。夫を起こした方がよいか、起こさない方がよいか。

彼は気むずかしいし、法を守るし。どうやれば彼に不愉快な思いをさせないですむか。(一五) 彼を怒らせるか、それとも、この法を守る人に法を怠らせるか。」

「法を怠ることの方が重大である」と彼女は心を決めた。(一六) 「もし、私が彼を起こせば、きっと彼は怒るであろう。しかし、黄昏の勤行を逸すれば、必ずや法を怠ることになる。(一七)」

竜女はそう決意して、眠っている、激しい熱力を持つ火のような聖仙に、優しい言葉でささやきかけた。(一八)

「旦那様、起きて下さい。太陽が沈みます。誓戒を守り、水に触れて、黄昏(サンディヤー)を念想なさって下さい。(一九) 今や、心地よくかつ危険な時、火供(アグニホートラ)を行なうべき時です。御主人様、黄昏が西の方角に広がっております。(二〇)」

すると、聖なる大苦行者ジャラトカールは、唇をふるわせて妻に言った。(二一)

「竜女よ、お前は私を侮辱した。私はお前のそばにはいたくない。私はもとのところへもどる。(二二) 美しい腿の女よ、太陽には、私が眠っている間に、時間通りに沈む勇気はありはしない、と私は思っている。(二三) 誰でも侮辱されたらここに住みたいとは望まない。いわんや常に法(ダルマ)を守っている私や、私と同類の者の場合は。(二四)」

夫がそう告げると、ヴァースキの妹であるジャラトカールは、心をふるわせて言った。(二五)

「私は侮辱してあなたを起こしたのではありません。あなたが法を怠ることのないようにと、

そうしたのです。(二六)」

すると、大苦行者である聖仙ジャラトカールは、怒りにかられ、竜女を捨てようと決意して言った。(二七)

「私は決して偽りの言葉を述べない。竜女よ、私は去るであろう。私はお前と約束を交わしたはずだ。(二八) 妻よ、私は幸せに暮らした。私がここから去ったら、怯(おび)える女よ、『あの聖者は行ってしまった』と兄に告げなさい。そしてお前も、私が去っても悲しんではならぬ。(二九)」

美しい肢体のジャラトカールは、悲嘆に暮れて、夫のジャラトカールに、涙で口ごもり、乾いた口をして告げた。その美しい腰と腿を持つ女は、手を合わせ、眼に涙をためて、心ふるえていたが、気をとりなおして告げたのである。(三〇―三一)

「法(ダルマ)を守る人よ、罪もない私を捨てることはよくありません。法を守るあなたが、いつもあなたのために尽くす、法を守る私を捨てることは……。(三二) 最高のバラモンよ、私をあなたに与えた目的を私が果たさなかったら、ヴァースキは、この愚かな私に何と言うでしょうか。(三三) 最高の人よ、私の親族は、母の呪詛にうちひしがれ、あなたの息子を望んでいますが、その子はまだ生まれません。(三四) あなたの息子を得れば、私の親族は幸せになれるのです。バラモンよ、私がこうしてあなたと結びついたことが、どうか無駄になりませんように。(三五) 私は親族の幸せを望んで、聖者よ、あなたにお願いいたします。最高の偉大なる人よ、このまだ生まれ出ない胎児を宿らせながら、どうして罪もない私を捨てて去ろう

とするのですか。(三六)」

するとその聖者、苦行者のジャラトカールは、次のような、理にかなった適切な言葉を妻に告げた。(三七)

「愛しい女よ、お前の宿した子は、普遍火のような聖仙で、最高に徳性あり、ヴェーダ聖典とその補助学に通じた者である。(三八)」

このように告げて、その徳性ある大仙ジャラトカールは、決意して、再び激しい苦行に入ったのである。(三九)

(第四十三章)

アースティーカ誕生

吟誦詩人は語った。――

夫が立ち去るとすぐに、ジャラトカール(女竜)は急いで兄のところに行き、ありのままに報告した。(一) 竜王はこの非常に不幸な話を聞くと、落胆している妹に言った。自分自身、より一そう落胆して。(二)

「妹よ、お前を与えた理由と目的を知っているだろう。蛇たちの安寧のために、お前に息子が出来れば、その強力な息子が我々を蛇供から救ってくれるという。かつて梵天が神々とともに、そのように私に告げたのだ。(三―四) 妹よ、あの最高の聖者の子を宿したか。あの思慮深い男の結婚が成果をもたらさぬとは思われない。(五) 確かに私がお前にそのようなことをたずねるのは適切ではない。しかし、この件は非常に重要であるから、お前をせきたてるのだ。(六) 私はあまりにも厳格な苦行者であるお前の夫が怒りっぽいことを知っているから、彼を追うことはしないであろう。彼が私を呪うといけないから。(七) 妹よ、お前の夫がしたことを残らず言いなさい。私の心に長くささっている恐ろしい棘を抜いてくれ。(八)」

そうたずねられて、ジャラトカール(女竜)は次のように答えた。苦しむ竜王ヴァースキを元気づけて。(九)

「私はその偉大な大苦行者に、息子のことをたずねました。すると彼は、私の腹部を指して、『ある』と告げて去りました。(一〇) ふざけている時も、彼がかつて偽りを言ったという記憶はありません。いわんや、このような重大な時に、どうして嘘を言うでしょうか。(一一) 『竜女よ、お前はこの件に関し、苦しむ必要はない。火や太陽のように輝く息子がお前に生まれるだろう(一二)』と私に告げて、兄よ、夫は苦行林へ行きました。ですから、あなたの心にある大きな苦悩が去りますように。(一三)」

それを聞いて、竜王ヴァースキは非常に喜び、「そうあれかし」と言って、妹の言葉を歓迎した。(一四) 竜王は優しい言葉、尊敬、贈物により、またふさわしいもてなしにより、同腹の妹に敬意を払った。(一五) それから、その大なる威光を有する、太陽のような胎児は、白月の空に昇った月のように、大きくなって行った。(一六)

やがてその時期が来て、竜の妹は息子を産んだ。神の子のような、父母(親族)の恐怖を除去する息子を。(一七) 彼はその竜王の家で成長し、チャヴァナの息子のバールガヴァから、

ヴェーダ聖典とその補助学を学んだ。（二八）彼はまだ子供であるのに、誓戒を守り、知性、精神力、諸々の美点をそなえていた。そしてアースティーカという彼の名は、世に知れわたった。（二九）胎内にいる彼について、父が「ある（アスティ）」と言ってから森へ行ったので、彼の名は「アースティーカ」として知られるようになった。（三〇）子供ながらも無量の知性を持つ彼は、そこで生活し、竜王の家で注意深く保護されていた。（三一）彼は聖なる神々の主、槍を手にし、黄金をもたらす神（シヴァ）のように、一切の蛇たちを喜ばせつつ成長して行った。（三二）

（第四十四章）

ジャナメージャヤ王の蛇供

シャウナカは言った。

「あの時、ジャナメージャヤ王は、大臣たちに、父が天に行ったわけをたずねたが、その間の事情をまた私に詳細に語って下さい。（一）」

吟誦詩人は語った。

バラモンよ、聞きなさい。――王がその時、大臣たちにたずね、彼ら一同がパリクシットの死について語った事情を。（二）

ジャナメージャヤは言った。

「誉れ高い私の父がどのように行動し、そして時至って死んだか、諸卿は知っている。（三）諸卿から父に起こったことを残らず聞いてから、（世人に）有益なことがあれば実行しよう。反対の場合は決して行なわない。（四）」

吟誦詩人は語った。――

偉大な王にたずねられて、一切の法（ダルマ）を知る、賢明なる大臣たちは、ジャナメージャヤ王に答えた。（五）

「あなたの父君は徳性あり、偉大で、臣民を守る王であった。その偉大な王がどのように行動したか、それをお聞き下さい。（六）

その法を知る王は、四姓（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）よりなる社会を、各自その本務に従わせて、法にのっとって守護し、あたかもダルマ神の化身のようであった。（七）彼は栄光に満ち、比類なき勇武を持ち、大地の女神を守護した。彼を憎む者はなく、彼も何者をも憎まなかった。一切の生類に対し平等で、造物主（プラジャーパティ）のようであった。（八）バラモン（祭官、学者）、クシャトリヤ（王族、武士）、ヴァイシャ（実業者）、シュードラ（従僕）は満足して各自の仕事に従事し、王によりみごとに統治されていた。（九）そして彼は寡婦、孤児、貧者、身障者たちを養い、一切の生類にとって、第二の月のように恵み深く見えた。（一〇）その臣民は養われ満足し、王は栄光に満ち、真実を語り、非常に勇猛で、弓術にかけてはクリパ師の弟子であった。（一一）ジャナメージャヤよ、あなたの父はゴーヴィンダ（クリシュナ）に愛され、誉れ高く、すべての世人にも

愛されていた。(一二)クル族が滅亡しよう(パリクシーナ)とする時、このアビマニユの強力な息子はウッタラーの胎に生まれたので、パリクシットという名になった。(一三)この王は王の法と実利(アルタ)に通じ、一切の美質をそなえ、感官を制御し、思慮深く、聡明で、長老に尊敬されていた。(一四)彼は六種の悪徳(欲望、怒り、貪り、酔い、迷妄、歓喜)をわきまえ、広大な知性をそなえ、この上なく政略と法を心得ていた。あなたの父君は六十年の間(または、六十歳まで)、臣民を守護していた。それから、蛇により、乗り越えがたい最期の日が訪れた。(一五)それから、最高の人よ、あなた様が、法にのっとって、このクルの王家を千年間治めるようにと継承されたのであります。あなたは、幼少にして、一切の生類の守護者として生まれついたのです。(一六)」

ジャナメージャヤは言った。

「この家系には、臣民に益をもたらさず愛されないような王は一人もいない。わけても、偉大な行為に専念する祖父(パーンダヴァ)たちの行為を見よ。(一七)どうしてそのような私の父が死ななければならなかったのか。私は知りたいと思う。真実をありのままに言ってくれ。(一八)」

吟誦詩人は語った。――

王にこのように命じられて、王に好まれ有益なことを望むすべての大臣は、一部始終を王に告げた。(一九)

「陛下、あなたの父君は常に狩猟を好まれました。戦場において最上の弓取りであった、栄光あるパーンドゥのように。一切の王の仕事を残らず我々の手にゆだねて。(二〇)ある日、

彼は森を歩いていて、矢で鹿を射ました。それから、深い森の中で、速やかにその鹿を追って行きました。(二一)徒歩で、剣を帯び、弓矢を持って。しかし父君は、密林に消えた鹿を見出すことはできませんでした。(二二)彼は老いて六十になっていたので、疲れ果て、飢えました。その時、大きな森の中で、一人の隠者(ムニ)が近くにいるのを見ました。(二三)偉大な王は隠者に問いかけましたが、その隠者は沈黙の行をしていたのです。隠者は問われても彼に何も答えませんでした。(二四)王は飢えと疲れに苦しんでいたので、沈黙の行をして、寂静の境に入り、柱のように座っている隠者に対し、突然、怒りにかられました。(二五)王は隠者が沈黙の行をしていることに気づかなかったからです。父君は怒りにかられて彼を侮辱しました。(二六)王は弓の端で、地面から死んだ蛇を取り上げて、その聖者の肩にかけました。(二七)その賢者は王に対し、よいことも悪いことも、何も言いませんでした。蛇を肩にかけたまま、怒りもせずに、そのままの姿勢でおりました。(二八)」(第四十五章)

大臣たちは続けた。

「偉大な王よ、それからその王は、隠者の肩に蛇をかけて、飢えに苦しみつつ、自分の都へ帰りました。(一)

ところが、その聖仙には、牝牛から生まれた、シュリンギンという、誉れ高い息子がおりました。彼は大威光を持ち、激しい力を有し、非常に短気でした。(二)この隠者シュリンギ

ンは、梵天（ブラフマー）に伺候して供養を行ない、いとま乞いをして帰って来たところ、友人から、あなたの父君が彼の父親を侮辱したことを聞きました。（三）父親が、罪もないのに、死んだ蛇を肩にかけているということを。（四）その父は、非常に偉大な苦行者であり、最高の隠者であり、感官を制御し、清浄であり、驚くべき行為に従事し、苦行によりそのアートマン（真我）は輝き、全身において自制し、その行動と言葉は清く、非常に平静であり、貪ることなく、大人物で、妬むことなく、高齢で、沈黙の誓戒を守って、一切の生類の寄る辺であるのに、あなたの父君が彼を侮辱したことを。（五―七）

聖仙の息子は、それを聞くと怒りにかられ、あなたの父君を呪いました。彼は子供ながら、大威光を有し、長老よりも優れておりました。（八）彼は速やかに水に触れ、怒って次のように言いました。あなたの父君を目標として、熱力により燃え上がるかのように。（九）

『罪もない私の父に、死んだ蛇を投げた悪人を、怒ったタクシャカ竜がその熱力により、今から七日後に成敗するであろう。私の苦行の力を見よ。（一〇）』

そう言って、彼は父のいるところへ行きました。そして父を見て、呪詛のことを知らせました。（一一）そしてその偉大な隠者は、あなたの父君に使いを出しました。

『あなたは私の息子に呪われました。王よ、用心しなさい。タクシャカが熱力によりあなたを滅ぼすでしょう。（一二）』

ジャナメージャヤよ、あなたの父君はその恐ろしい言葉を聞くと、竜王タクシャカを恐れて警戒しました。（一三）それから七日目になった時、梵仙カーシャパが王のもとに行こうと

しました。（一四）その時、竜王タクシャカがカーシャパを見ました。竜王は道を急ぐカーシャパに言いました。

『あなたは急いでどこへ行くのか。また、何をしようとしているのか。（一五）』

カーシャパは答えました。

『クルの長、パリクシット王のもとに行くのだ。バラモンよ。そこで彼は蛇のタクシャカに焼かれるという。（一六）私は即座に彼の熱を取り除くために、急いで行くのである。私が守れば、蛇は彼を害することはできないだろう。（一七）』

タクシャカは言いました。

『あなたは何を求めて、俺に咬まれた彼を生き返らせようというのだ。望みを言え。今は、俺がそれを与えるであろう。自分の家に帰りなさい。（一八）』

大臣たちは続けた。――

『私は財物を欲してそこに行くのだ』と彼が答えると、竜は偉大な聖仙に言いました。甘い言葉で機嫌を取りつつ。（一九）

『その王に要求する以上の財物を俺から受け取りなさい。非の打ち所のない者よ、急いで引き返しなさい。（二〇）』

竜にそう言われると、最高のバラモンのカーシャパは、タクシャカから望みだけの財物をもらって引き返しました。（二一）

そのバラモンが引き返した時、タクシャカは手管を用いてあなたの敬虔な父王に近づきました。(二二)父君は警戒して楼閣におられましたが、竜は彼を毒の火により焼きました。それから、人中の虎よ、あなた様が栄えある王位に就任されたのです。(二三)最高の王よ、我々は見聞きした恐ろしいことを、ありのままに、すべて残らずお話ししました。(二四)王が亡くなったこと、また、聖仙ウッタンカが侮辱されたことを聞いて(一・三参照)、最高の王よ、次になすべきことを行なって下さい。(二五)」

ジャナメージャヤは言った。

「人のいない森で、その時、竜王とカーシャパの間で交された会話の内容を知りたいと思う。(二六)それは誰に見聞きされ、諸卿の耳に達したのか。それを聞いてから、蛇を滅ぼす計画を決定しよう。(二七)」

大臣たちは言った。

「最高のバラモンと竜王との出会いを、かつてある男が我々に語りましたが、陛下、その次第をお聞き下さい。(二八)王よ、ある男がその森で、薪を求めて、枯れた枝を取るために、大樹に登っていました。竜とバラモンは、樹に登っている彼に気づきませんでした。(二九)ところが彼は、(竜によって)その樹もろとも灰にされてしまったのです。しかし、彼は、樹とともに、バラモンの神通力によってよみがえりました。(三〇)彼はこの都に帰り、タクシャカとバラモンの間に起ったことをすべて報告しました。(三一)陛下、以上、我々が聞いた一部始終を語りました。王中の虎よ、聞かれたら、お望みのままになさって下さい。

(三二)」

吟誦詩人は語った。——

大臣たちの話を聞くと、ジャナメージャヤ王は大いに苦しみ、手と手をこすりあわせた(怒りのしぐさ)。(三三)蓮のような眼をした王は、幾度も熱く長いため息をつき、絶えず両眼から涙を流した。そして、王は悲嘆に暮れて言った。(三四)

「私の父が昇天したことに関する諸卿の話を聞いて、私の心は決った。私の決意を聞きなさい。(三五)直ちに邪悪なタクシャカに復讐をしなければなるまい。彼は私の父を殺したのだから。(三六)聖仙シュリンギンの言葉を実行して王を焼いたのであるから……。もしあのバラモン(異本による)が行ったら、私の父は生きていたのではないか。(三七)その王が、カーシャパの好意と大臣たちの優れた方策により生き返ったとしても、彼に何の損失があるというのか。(三八)ところが、彼は迷妄により、最勝の王をよみがえらせようとしてやって来た最高のバラモンのカーシャパを止めた。(三九)王を生き返らせてはいけないと考え、バラモンに財物を与えたのは、実に、邪悪なタクシャカの大きな過失である。(四〇)ウッタンカを喜ばせるため、自分を喜ばせるため、そして、あなた方すべてを喜ばせるために、私は父の復讐をするぞ。(四一)」

(第四十六章)

吟誦詩人は語った。——

栄光に満ちた王がそう言うと、大臣たちは歓迎した。そこで、バラタ族の虎、パリクシットの子である王は、蛇供（蛇の犠牲祭）を行なう約束をした。(一) それから王は宮廷僧と司祭を呼び、雄弁に、目的を成就する言葉を述べた。(二)

「私の父を危めたあの邪悪なタクシャカに復讐したいのだが、その手段を教えて下さい。(三)あなた方は、蛇のタクシャカを親族もろとも、燃え盛る火に投ずることのできる祭式を知っているか。(四) 彼は私の父を毒の火で焼いたから、私もあの悪い蛇を焼きたいと思う。(五)」

司祭たちは言った。

「王よ、あなたのために神々が創った大なる祭祀があります。王よ、それは古伝説の中で語られ、蛇供（サルパサトラ）という名で知られています。(六) そして王よ、あなた以外の者はその祭祀を開催できないと、古伝説の語り手たちは言っております。そして我々はその祭祀を行なえます。(七)」

吟誦詩人は語った。——

そのように言われた王仙（ジャナメージャヤ）は、蛇のタクシャカがすでに燃える火の口に入ったかのように考えた。(八) それから王は、呪句を知っているバラモンたちに言った。

「私はその祭祀を開催する。私のために、必要なものをそろえなさい。(九)」

そこで最高の知性を有するすべての司祭たちは、祭場を作るために、その祭祀の論書に従って、正しい知識をわきまえた人々にその場所を測量させた。(一〇) その祭祀は最高に豪奢であり、バラモンの群が連なり、多くの財物や穀物に満ち、司祭たちはそこで安楽に座していた。(一一) 望ましい祭場を規定のごとく作ってから、彼らは蛇供を受けるために、王に潔斎をさせた。(一二)

さて、蛇供が始まる直前に、祭祀が妨げられるという大なる前兆が起こった。(一三) 祭場が作られつつある時、判断力をそなえ、建築学に通達した棟梁が発言した。(一四) その監督者である、古い伝承に通じた吟誦詩人は言った。

「この測量が行なわれた場所と時間からすると、この祭祀は完了しない。あるバラモンが原因で。(一五)」

それを聞くと、王は潔斎の時の前に、門衛に、「ここに私の知らない者を入れるな」と命じた。(一六)

かくて、儀軌に従って、蛇供の儀式が進行した。祭官たちは、規定にのっとって、各々の仕事をして動きまわっていた。(一七) 彼らは黒衣をまとい、煙で目を赤くし、呪句とともに護摩を焚いていた。(一八) 一切の蛇の心を戦慄させつつ、彼らは多くの蛇を火の口に供えた。(一九) 蛇たちは燃え盛る火の中に落ち、のたうちまわり、哀れにも、お互いに叫びあった。(二〇) 彼らは跳ねまわり、嘆息し、尾と頭でからみあいながら、激しい火の中に落ちて行った。(二一) 白い蛇も、黒い蛇も、青い蛇も、老いも若きも、恐ろしい叫び声をあげながら、

燃え盛る火に落ちた。(二二) こうして、十万、百万、一億の蛇が、なす術(すべ)もなく死んで行った。(二三) 鼠のように小さい蛇、また、象の鼻のような蛇、発情した象のように巨大で強力な蛇、(二四) 種々の色をした蛇たち、有毒で、恐ろしい蛇たち、閂(かんぬき)のような蛇たち、咬む習性(せい)のある強力な蛇たち、これら多くの、ありとあらゆる蛇たちが、母の呪詛に苦しみ、火中に落ちた。(二五) (第四十七章)

シャウナカは言った。

「その時、パーンダヴァ一族の聡明な王ジャナメージャヤの蛇供において、いかなる偉大な聖仙たちが司祭(リトゥヴィジュ)であったか。(一) 蛇たちを悲嘆のどん底に沈めた、その非常に恐ろしく苛酷な蛇供において、誰が祭官(サダスヤ)(協力者)を勤めたのか。(二) 吟誦詩人よ、すべてを詳細に話してくれ。というのは、彼らは蛇供の儀軌を知っているとみなせるから。(三)」

吟誦詩人は語った。——

おお、その時、王の司祭であり祭官であった聖者たちの名前を語りましょう。(四) 勧請僧(ホートリ)は、チャヴァナの家系に生まれた、最高のヴェーダ学者である有名なバラモン、チャンダ・バールガヴァでした。(五) 歌詠僧(ウドガートリ)は、聡明なる老バラモン、カウトサーリヤ・ジャイミニでした。祈禱僧(ブラフマン)はシャールンガラヴァで、行祭僧(アドヴァリウ)はボーダピンガラでした。(六) 祭官(サダスヤ)は、息子

や弟子をともなったヴィヤーサ、また、ウッダーラカ、シャマタカ、シュヴェータケートゥ、アシタ・デーヴァラ、ナーラダ、パルヴァタ、アートレーヤ、クンダジャタラ、クティガタ、ヴァーツヤ、シュルタシュラヴァス、カホーダ、デーヴァシャルマン、マウドガリヤ、シャマサウバラであった。(七—九) その他、多数の誓戒を厳しく守るバラモンたちが、パリクシットの息子の蛇供において祭官を勤めた。(一〇)

その時、蛇供の大祭において、司祭たちが護摩を焚いている間に、生類をおびえさせる恐ろしい蛇たちは、そこに落ちて行った。(一一) 絶えず焼かれる蛇たちの脂肪や髄は川のように流れ出し、ひどい悪臭が漂っていた。(一二) 落下する蛇や、空間にいる蛇や、手ひどく火で焼かれる蛇たちの声が絶えず聞こえた。(一三)

ところで、竜王タクシャカは、ジャナメージャヤ王が(蛇供のために)潔斎したことを聞くやいなや、インドラ(帝釈天)の宮殿へ行った。(一四) そして、竜王は一部始終を告げ、罪を犯し(たと認め)て恐れ、インドラに庇護を求めた。(一五) インドラは非常に満足して彼に告げた。

「竜王タクシャカよ、ここでは、あの蛇供による危険は、汝にはまったくない。(一六) かつて私は、汝のために梵天の歓心を買っておいた。だから汝には危険はないのだ。心の熱を取り除け。(一七)」

(一八) インドラにこのように慰撫されて、竜王は喜んで、インドラの宮殿で安楽に暮らした。

ところが、ヴァースキ（竜王の名）は、蛇たちが絶えず火中に落ちるので、従者が残り少なくなり、非常に苦しんだ。（一九）恐ろしい失意が竜王ヴァースキに入りこんだ。彼は心を乱して妹に言った。（二〇）

「妹よ、私の身体は苦しみで燃やされている。私は方向を見失ってしまった。私は迷妄により沈みこんでいるかのようだ。私の心は動揺しているかのようだ。（二一）眼はひどくまわり、心臓は張り裂けるかのようだ。今や私は力も失せ、あの燃え盛る火に落ちるであろう。（二二）このパリクシットの息子の祭祀は、我々を滅ぼすことをめざすものである。明らかに、私もまた祖霊たちの王（ヤマ、閻魔）の住処に行かなければならぬ。（二三）妹よ、今や、その時が来た。この時のために、かつてお前をジャラトカールに与えたのだ。我々と親族を救ってくれ。（二四）最高の竜女よ、アースティーカが、進行中の祭祀を止めてくれるということだ。かつて梵天は、自ら私にそう告げたのだ。（二五）そこで妹よ、最高のヴェーダ学者であり、長老にも尊敬されているお前の愛児に、今、私と従者たちを救ってくれるように言ってくれ。（二六）」　（第四十八章）

蛇供をやめさせたアースティーカ

吟誦詩人は語った。――

そこで竜女ジャラトカールは自分の息子を呼んで、竜王ヴァースキの言葉に従い、次のように言った。（一）

「わが子よ、兄は理由（わけ）があって私をお前の父に与えました。そしてその時が来ました。ですから、適切に行動して下さい。（二）」

アースティーカは言った。

「叔父さんはどういう理由であなたを私の父に与えたのですか。それを私にありのまま話して下さい。聞いてからしかるべく行動します。（三）」

吟誦詩人は語った。――

竜王の妹ジャラトカールは、親族の安寧を願って、迷うことなく彼に語った。（四）

「カドルーはすべての蛇の母でした。彼女は怒って子供たちを呪いました。その理由を聞きなさい。（五）『息子たちよ、私はヴィナターと負けた方が奴隷となるという条件で賭けをしたのに、お前たちは、私のために、馬の王ウッチャイヒシュラヴァスに細工をしなかったから、ジャナメージャヤの祭祀において、火がお前たちを焼くであろう。そしてお前たちは五元素に帰し（死に）、死者の世界へ行くであろう』と彼女は呪いました。（六―七）そして、彼女がそう呪うと、世界の祖父（梵天）は、直々に、『そのようになれ』と言って、彼女の言葉を承認したのです。（八）ところがヴァースキは、梵天の言葉を聞いて、攪拌により甘露（アムリタ）が得られた時に、神々に庇護を求めました。（九）最高の甘露を得て、目的を達したすべての神々は、私の兄を先頭に立てて、造物主（プラジャーパティ）（梵天）のもとに行きました。（一〇）すべての神々は、竜王ヴァ

ースキとともに、あの呪詛が実現しないようにと、梵天の好意にすがりました。(一一) 主よ、母親の呪詛が実現しませんように』と。(一二)

梵天は告げました。

『ジャラトカールがジャラトカールを妻にした時に生まれたバラモンが、蛇たちを呪詛から解放するであろう。(一三)』」

ジャラトカール(女竜)は続けた。

「神にも似た息子よ、この言葉を聞いた時、竜王ヴァースキは、お前の偉大な父に私を与えたのです。いまだその時が来ないうちに。そこでお前が私に生まれました。(一四) 今やその時が来ました。我々を危険から救って下さい。私の兄をあの火から救って下さい。(一五) 我々の救済のために私がお前の父に与えられたことが無駄にならないように。わが子よ、お前はどのように考えるか。(一六)」

吟誦詩人は語った。——

そう言われたアースティーカは、「わかりました」と母に答えてから、苦悩するヴァースキを蘇生させるかのように言った。(一七)

「竜王ヴァースキよ、私があの呪詛からあなたを解放しましょう。偉大な存在よ、私はそう誓います。(一八) 竜よ、安心して下さい。あなたには危険はありません。伯父さん、幸せが来るように努力いたします。私はふざけている時も不真実を語りません。いわんやこのような重大な時にはなおさらです。(一九) 叔父さん、今日、(祭祀のために)潔斎した偉大な王ジャナメージャヤのもとに行き、祝詞を含む言葉によって満足させましょう。王の祭祀が終わるように。(二〇) 思慮深い竜王よ、すべてを私に任せなさい。あなたが私に寄せる信頼は、決して裏切られることはありません。(二一)」

ヴァースキは言った。

「アースティーカよ、私の心は動転し、引き裂かれる。私は梵杖(ブラフマダンダ)(呪詛)に苦しめられ、方向を見失っている。(二二)」

アースティーカは言った。

「竜王よ、あなたは少しも悩む必要はない。燃え盛る火の危険を取り除いてあげます。(二三) 終末の火のように輝く、非常に恐ろしい梵杖を取り除いてあげます。あなたは少しも恐れる必要はありません。(二四)」

吟誦詩人は語った。——

かくて、最高のバラモンのアースティーカは、ヴァースキの恐ろしい心の熱を除去して、それを自己の身体に受け取り、竜王たちを救うために、一切の要件をそなえたジャナメージャヤの祭場に大急ぎで行った。(二五―二六) アースティーカはそこへ行って、太陽や火のように

輝く多数の祭官に満ちた最高の祭場を見た。(二七) その最高のバラモンがそこに入ろうとすると、門衛たちが彼を制止した。そこで最高のバラモンは、入場するために、その祭祀を讃えた。(二八)

(第四十九章)

吟誦詩人は語った。(一一六略) ——

このように口を極めて讃えられて、王も祭官も司祭も祭火も、すべてが満足した。ジャナメージャヤ王は、彼らの気持やジェスチャーを見てとり、次のように告げた。(二七)

(第五十章)

ジャナメージャヤは言った。

「彼は子供ながら長老のように語る。これは子供ではない。長老であると私は思う。私は彼の願いをかなえてやりたい。バラモンたちよ、こぞって賛成してくれ。(二)」

祭官たちは言った。

「子供といえどもバラモンは、賢者であろうとなかろうと、王はこれを適切に尊敬しなければなりません。今、彼はあなたからすべての願いをかなえられるべきです。タクシャカが我々のところに速やかに来るならば。(三)」

吟誦詩人は語った。——

施しを好む王がバラモンに、「願いごとを選べ」と告げようと考えた時、内心あまり喜ばしくなく思った司祭が言った。

「この祭式に、まだタクシャカは来ておりません。(三)」

ジャナメージャヤは言った。

「この私の祭式が完了するように、タクシャカが我々のところに速やかに来るように、あなた方はみな全力を尽くしてくれ。彼こそ我のめざす敵であるから。(四)」

司祭たちは言った。

「聖典が我々に告げるところによると、また聖火が告げるところによると、王よ、タクシャカは恐れおののいて、インドラ(帝釈天)の宮殿にいます。(五)」

吟誦詩人は語った。——

古伝説(プラーナ)に通じた偉大な吟誦詩人ローヒタークシャは、前もってそのように知っていた。その時、彼は問われて、王に答えた。

「陛下、バラモンたちが告げた通りです。(六) 私は古伝説に基づいて申し上げます。陛下、インドラは彼の願いをかなえてやりました。『汝はよく保護されて、私のもとに住みなさい。火は汝を焼くことはないであろう』と。(七)」

それを聞くと、潔斎した王は熱くなり、儀式を続行するよう司祭を促した。そこで司祭が呪句(マントラ)を唱えて護摩を焚くと、インドラ自身がやって来た。(八)その強力な神は天車に乗り、一切の神々に讃えられつつ、雲たちを従え、ヴィディヤーダラ(半神の種類)や天女たちの群を従えていた。(九)例の竜はその神の上衣に隠れていたが、恐怖にふるえ、寄る辺を見出せないでいた。そこで、怒った王は、タクシャカの死を望んで、呪句を知るバラモンたちに告げた。(一〇)

「バラモンたちよ、タクシャカ竜がインドラの宮殿にいるなら、インドラもろとも彼を火中に落とせ。(一一)」

司祭たちは言った。

「王よ、今やタクシャカは、速やかにあなたの支配下に帰しました。恐怖にかられてうめく彼の、恐ろしい咆哮が聞こえます。(一二)その竜は疑いもなくインドラに放されました。呪句によりぐったりした体をして、その膝から落ちました。(一三)竜王は気を失い、空中でもだえつつ近づいて来ます。激しいため息をつきながら。陛下、あなた様のこの祭式は儀軌の通りに進行しております。今や、この最高のバラモン(アースティーカ)の願いをかなえてもよいでしょう。(一四)」

ジャナメージャヤは言った。

「無比の童子よ、美しい姿をしたあなたにふさわしい願いをかなえてあげる。あなたの心にある願いごとを選べ。かなえられないような願いでもかなえてあげよう。(一五)」

吟誦詩人は語った。——

竜王タクシャカがまさに火中に落ちようとした時、アースティーカは王に要求した。(一六)

「もし私の願いをかなえて下さるなら、ジャナメージャヤよ、あなたの祭祀をやめて下さい。蛇たちが落ちないようにして下さい。(一七)」

ジャナメージャヤ王はそう言われて、心中あまり面白くなく思って、アースティーカに次のように答えた。(一八)

「バラモンよ、金銀や牛その他の望みをかなえてやろう。しかし、私の祭式をやめさせるわけには行かぬ。(一九)」

アースティーカは言った。

「王様、金銀や牛は欲しくありません。あなたの祭祀をやめて下さい。そうすれば私の母の一族は安泰です。(二〇)」

吟誦詩人は語った。——

アースティーカにそう言われて、ジャナメージャヤ王は、語る者たちの最高者であるアースティーカに何度も答えた。(二一)

「最高のバラモンよ、あなたの好きな他の願いを選べ。」

しかし、アースティーカは他の願いを要求しなかった。（二二）そこで、ヴェーダ聖典を知るすべての祭官はこぞって王に言った。
「このバラモンの願いをかなえるべきです。（二三）」（第五十一章）／（第五十二章略）

蛇たちの喜び

吟誦詩人は語った。——
我々はアースティーカに関する非常な奇蹟を聞いている。ジャナメージャヤ王が願いをかなえて彼を喜ばせようとした時、インドラの手から落ちた竜は、空中に止まったままでいた。そこでジャナメージャヤ王は考えこんでしまった。（一―二）燃える火の中に、儀軌にもとづき、多量の供物が投じられても、恐れおののくタクシャカは火中に落下しないのであった。（三）
シャウナカはたずねた。
「吟誦詩人よ、タクシャカが落下しないとは、思慮深いバラモンたちの一連の呪句（マントラ）が何故効力を発揮しなかったのか。（四）」
吟誦詩人は語った。——
インドラの手から落ち、気を失った竜王に対し、アースティーカは、「止まれ、止まれ」

と三度叫んだ。（五）すると竜は、心配しながらも、空中に止まった。牛の群の中で止まっている人のように。（六）そこで王は、祭官たちにせきたてられて、次のように告げた。
「よろしい、アースティーカの言葉通りにせよ。（七）この祭式を終えよ。蛇たちは安全だ。アースティーカを喜ばせよう。あの吟誦詩人の言葉が真実となれ。（八）」
アースティーカの願いがかなえられた時、万歳という喜びの声があがった。そして、パーンダヴァの家系に属する、パリクシットの息子である王の祭祀は終わった。バラタ族のジャナメージャヤ王は満足した。（九―一〇）そしてそこに集合した司祭と祭官たちに、百、千という謝礼を与えた。（一一）そして王は、祭祀の前に、あるバラモンが原因で祭祀が中断されることを告げた棟梁、吟誦詩人ローヒタークシャにも、多くの財物を与えた。それから、儀軌にある儀式によって祭祀を終了した。（一二―一三）
王は心から喜んで、アースティーカをねんごろにもてなし、家へ送りとどけた。賢者も目的を達して喜んだ。（一四）そして王は彼に言った。
「再び来てくれ。私の馬祀の大祭において、私の祭官になって下さい。（一五）」
アースティーカは喜んで、「かしこまりました」と答えて、急いで帰って行った。無比の任務を果たし、王を満足させて。（一六）彼は大喜びで母と叔父のもとに行き、近づくと、足を抱いて挨拶し、一部始終を報告した。（一七）
それを聞くと、そこに集まった蛇たちは、苦悩も去り、アースティーカに対して大いに満足して、「何でも望みをかなえるから選びなさい」と言った。（一八）何度も何度も彼らはいた

るところで彼に言った。

「賢者よ、今、我々はあなたにどのようなお礼をしたらよいでしょう。我々みな解放されて喜んでいます。御子よ、我々はあなたの望み通りのことをします。（一九）」

アースティーカは言った。

「この世におけるバラモンやその他の人々が、朝に夕に、清浄な心で、私のこの敬虔な物語を唱えるなら、彼らには汝ら（蛇）の危険が少しもないようにして欲しい。（二〇）」

吟誦詩人は語った。――

彼らは満足して妹の息子に答えた。

「その通りになるであろう。あなたの望みのように行動する。我々は喜んで、あらゆる場合、あなたの願いを進んで実行するであろう。妹の子よ。（二一）」

「ジャラトカールとジャラトカールとの間に生まれた、誓いを守る、誉れ高いアースティーカが、私を蛇たちから守らんことを。（二二）アシタ、アールティマット、スニータを、昼に夜に念ずるならば、その人には蛇の危険はないであろう。（二三）」

吟誦詩人は語った。――

蛇たちを蛇供から解放してから、その敬虔な最高のバラモンは、時至り、子供と孫たちを

残してこの世を去った。（二四）

以上、アースティーカの物語をあなたに、ありのままに語った。それを語れば、蛇の危険はどこにもなくなるであろう。（二五）そして、功徳を増す、敬虔なアースティーカの物語を、この聖者アースティーカの栄光ある業績を、最初から聞くならば、バラモンよ、蛇の危険はどこにもなくなるであろう。（二六）

(6) 最初の家系の降下（第五十三章—第五十八章）

シャウナカは言った。
「吟誦詩人よ、あなたはブリグの家系から始まって、この大なる物語をすべて語った。私はあなたに満足した。(二七) 吟誦詩人よ、私は再びあのヴィヤーサが作った物語をありのままに聞きたい。その続きを私に語って下さい。(二八) 大詩人よ、あの最高に達成されがたい蛇供（蛇を犠牲にする儀式）において、祭式の合い間に、偉大な祭官たちの間で、適切に、驚異的な種々の物語が話されたが、それらの内容について、ありのままにあなたから聞きたいのだ。吟誦詩人よ、あなたはそれに精通しているから。(二九—三〇)」
吟誦詩人は言った。
「祭式の合い間に、バラモンたちはヴェーダに基づく物語をした。しかるに、ヴィヤーサは、永遠なる物語、偉大な『バーラタ』を語った。(三一)」
シャウナカは言った。
「パーンダヴァ一族の名を高めた、『マハーバーラタ物語』、その時ジャナメージャヤに請われてクリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）が祭式の合い間に適切に語った物語、その神聖なる物語を、私は正しく聞きたいと願っている。(三二—三三) 清浄なる大仙の、海のような心から生じた物語を、最高の善き人よ、語ってくれ。吟誦詩人よ、私の好奇心はまだ満たされていないから。(三四)」
吟誦詩人は言った。
「おお、私は最高の偉大なる物語を語りましょう。クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナが説いた『マハーバーラタ』を、始めから。(三五) 私は語りますから、高邁なバラモンよ、それを楽しんで下さい。語ることは私の喜びでもあります。(三六)」　(第五十三章)

バラタ族の離間

吟誦詩人は語った。——
ジャナメージャヤが蛇供のために潔斎に入ったことを聞いて、賢明なる聖仙クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）はその場所に行った。(一) この聖仙は、カーリー（サティヤヴァティー）が処女のままで、ヤムナー川の洲において、シャクティの息子パラーシャラとの間に生んだものであり、パーンダヴァ兄弟の祖父である。(二) 彼は生まれるやいなや、その意思により急速に体を成長させた。この誉れ高い人は、ヴェーダ聖典とその補助学と叙事詩とを修得した。(三) 何人も、苦行、ヴェーダの学習、誓戒、断食、子孫、祭祀にかけて彼を凌駕することはなかった。(四) 最高のヴェーダ学者である彼は、一つのヴェーダを四つに配分（ヴィヤス）した。（だからヴィヤーサと呼ばれる。）彼は高きもの低きものを知る梵仙であり、聖者（詩人）であり、誓いを守り、清浄であった。(五) 高名であり福徳の誉れ高い彼は、シャンタヌの家系を維持するため、パーンドゥとドリタラーシトラとヴィドゥラを生んだ。(六)
ヴィヤーサは、ヴェーダとその補助学に通じた弟子たちとともに、王仙ジャナメージャヤの祭場に入った。(七) そこで、神々に囲まれたインドラ（帝釈天）のように、祭官や、頭に灌水

された各地の王や、祭祀の執行に長けた神にも似た司祭(リトウヴィジュ)たちに囲まれて座っているジャナメージャヤ王を見た。（八―九）バラタ族の君主、王仙ジャナメージャヤは、その聖仙が来たのを見ると、従者とともに、喜んで速やかに立ち上った。（一〇）王は祭官の同意を得て、黄金の腰掛けを彼にさし出した。インドラがブリハスパティ（神々の師）に席を提供したように。（一一）願いをかなえるヴィヤーサは、神仙の群に敬われつつそこに座った。最高の王は、聖典にある作法によって彼をもてなした。（一二）彼は規定に従って、足を洗う水と口をすすぐ水と、接客用の品と、牛を、それを受けるにふさわしい先祖ヴィヤーサにさし出した。（一三）ヴィヤーサは、ジャナメージャヤからその供養を受けてから牛を放し、満足した。（一四）このように、王はねんごろに先祖をもてなしてから、満足してそのそばに座り、御機嫌はいかがと問うた。（一五）聖者も彼を見て、息災かどうかたずねた。そして、すべての祭官たちと挨拶を交わした。（一六）

それから、ジャナメージャヤは合掌して、最高のバラモンにたずねた。（一七）

「聖者よ、あなたはクル一族とパーンダヴァ一族とのことを実際に目撃した。バラモンよ、彼らの行動を語って下さい。（一八）汚れなき行動をする彼らの間に、どうして離間が生じたのですか。生類の滅亡をもたらすあの大戦争はどうして起こったのですか。運命に魅入られたすべての先祖たちの間に。それをすべて話して下さい。聖者よ。あなたはそれに通じておられるから。（一九―二〇）」

それを聞いて、ヴィヤーサは、かたわらに座っている弟子のヴァイシャンパーヤナに命じた。（二一）

「かつてクル一族とパーンダヴァ一族との間に離間が生じた次第を、すべて彼に語れ。私から聞いた通りに。（二二）」

そこでそのバラモンの雄牛（ヴァイシャンパーヤナ）は、師の命を受けて、その王や祭官や王族(クシャトリヤ)たちに、古(いにしえ)の叙事詩(イチイハーサ)をすべて語った。クル一族とパーンダヴァ一族との、王国を滅ぼす離間を。（二三―二四）

（第五十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

まず、意(こころ)と知性と心統一によって師に敬礼し、またすべてのバラモンとその他の賢明なる人々に敬意を表してから、全世界に知れわたった、無量の威光を有する、聡明なる大仙ヴィヤーサの説を、私は残らず語るであろう。（一―二）王よ、あなたはそれを聞く資格のある人だ。このバラタ族の物語を師から受け、語ろうとして、喜びのあまりふるえるが、それは私を鼓舞するかのようである。（三）王よ、クル一族とパーンダヴァ一族の離間の次第を聞きなさい。それは王国を求める賭博から生じた。それから森林での滞在。（四）そして、地上の滅亡をもたらす戦争となった次第を。バラタ族の雄牛（ジャナメージャヤ）よ、あなたの求めに応じて、私はそれをあなたに語るであろう。（五）

父親（パーンドゥ）が死んだ時、英雄たち（パーンダヴァ兄弟）は森から家に帰った。彼らはすぐにヴェーダ聖典と弓のヴェーダ（兵学）に通達した。（六）パーンダヴァ（パーンドゥの息子）たちが、容姿と勇猛さと威厳に恵まれ、市民に敬愛され、富貴と名声を有するのを見て、クル族の人々は我慢できなかった。（七）そこで、酷薄なドゥルヨーダナ、カルナ、シャクニは、彼らを迫害し追放しようとして、色々と画策した。（八）ドリタラーシトラの邪悪な息子は、ビーマに毒を食べさせた。ところがこの狼腹（ヴリコーダラ）（大食漢）の勇士は、食物とともにそれを消化してしまった。（九）また、彼は、プラマーナコーティ（ガンガー河畔の聖地の名）で眠った狼腹ビーマを縛り、ガンガー（ガンジス）の流れに投げ込んでから、都に帰った。（一〇）ビーマセーナは目覚め、いましめを断ち切って、苦もなく上がって来た。（一一）また彼は、猛毒の黒蛇に、眠っているビーマの全身を咬ませた。しかしその勇士は死ななかった。（一二）

このように様々な悪事が行なわれたが、思慮深いヴィドゥラ（彼らの叔父）は、彼らを救い出したり、危険を防止したりすることに専念した。（一三）ちょうど天界にいるインドラ（帝釈天）が生類の世界に幸福をもたらすように、ヴィドゥラも常にパーンダヴァ兄弟に幸福をもたらした。（一四）

内密の、あるいは公然とした、様々な方策によっても、運命により来るべき目的のために守られているパーンダヴァ兄弟を殺すことができなかった時、彼はカルナやドゥフシャーサナなどの徒党と謀議し、ドリタラーシトラをも説得して、ラック（可燃物）の家を作るよう命じた。（一五―一六）彼は無量の力を有するパーンダヴァたちを信用させてそこに住まわせ、火でもって焼いた。（一七）しかし、ヴィドゥラの忠告により作られた地下道が彼らをみごとに救出し、そのため彼らは難を逃れて脱出した。（一八）その後、恐ろしい大森林で、名うての豪傑であるビーマセーナは、怒ってヒディンバという羅刹を殺した。（一九）それから、英雄たちはそろって、バラモンに変装して、母とともにエーカチャクラーの都へ行った。（二〇）そこで彼らはあるバラモンのために、強力なバカ（阿修羅の名）を殺してから、バラモンたちとともにパーンチャーラの都へ行った。（二一）そこで彼らはドラウパディー（兄弟の共通の妻）を獲得して、一年間滞在した。英雄たちは、（生きていたと親族に）知られて、ハースティナプラにもどった。（二二）

ドリタラーシトラ王とビーシュマは彼らに言った。

「従兄弟たちとの抗争が起こらないように、お前たちはカーンダヴァプラスタに住むのがよいと思う。（二三）それ故、怨みを鎮め、地方に恵まれ、よく区画された広い道路のあるカーンダヴァプラスタに移住せよ。（二四）」

彼らは二人の言葉に従い、すべての親しい人々とともに、あらゆる財宝を持って、カーンダヴァプラスタの都へ行った。（二五）彼らは長年の間そこに住み、武力によって他の王たちを支配下に置いた。（二六）彼らは法（ダルマ）を尊重し、約束を守ることに専念し、怠ることなく精励し、忍耐強く、敵を苦しめた。（二七）大力のビーマセーナは東方を征服した。勇士アルジュナは北方を、ナクラは西方を征服した。（二八）敵の勇士を殺すサハデーヴァは南方を征服した。かくて、彼らはみなして全地上を支配下に置いた。（二九）不屈の勇者、太陽のようなパ

ーンダヴァの五兄弟と、光り輝く太陽とで、地上は六つの太陽を持つかのように見えた。
(三〇)

それから、ダルマ王ユディシティラは、ある理由で、弟のアルジュナを森に送り出した。(三一)彼は満一年と一カ月、森に滞在した。そしてある時、彼はドゥヴァーラヴァティーにいるクリシュナのもとに行った。(三二)そこでアルジュナは、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)の妹の、蓮の眼を持つスバドラーを、妻として得た。(三三)シャチーが大インドラと、シュリーがクリシュナ(ヴィシュヌ神)と交わったように、スバドラーも喜んでパーンダヴァ一族のアルジュナと交わった。(三四)カーンダヴァの森で、アルジュナはクリシュナとともに火神を満足させた。(三五)クリシュナをともなうアルジュナにとっては、いかなる重荷も重すぎるということはない。敵を滅ぼそうという決意をともなうヴィシュヌ神にとってと同様に。(三六)火神はアルジュナに、最高の弓ガーンディーヴァと、無尽の矢を入れた二つの箙と、猿の旗標のついた戦車とを与えた。(三七)そこで、アルジュナは、偉大な阿修羅マヤを解放した。マヤはあらゆる宝石におおわれた、神々しい集会場を作った。(三八)愚鈍で邪悪なドゥルヨーダナは、それを見て欲望を抱いた。それからシャクニを用いて、骰子賭博でユディシティラを騙した。(三九)そして、十二年の森での亡命生活と、第十三年目の一年間を人に知られずにある王国で住むことを余儀なくさせた。(四〇)

第十四年目に、彼らが自分の財産を要求しても返してもらえず、そこで戦争が始まった。
(四一)それから、パーンダヴァたちはすべての〔敵〕を滅ぼし、ドゥルヨーダナ王を殺して、

すっかり荒廃した王国を取りもどした。(四二)

最高の王よ、以上が精力的な英雄たちの古の業績である。彼らが離間し、王国を失い、勝利する物語である。(四三)　(第五十五章)

『マハーバーラタ』の語源

ジャナメージャヤは言った。

「最高のバラモンよ、あなたはすべての『マハーバーラタ』の物語、クル族の偉大な業績を、要約して語った。(一)だが、あなたがこの多彩な内容の物語を語っている間、私はそれを詳しく聞きたいという好奇心にかられた。(二)そこであなたは、この物語を再び詳細に語って下さい。先人の偉大な業績をいくら聞いても飽き足りることはありませんから。(三)法を知るパーンダヴァたちが、殺すべきでない人々をみな殺しにし、しかも人々に称讃されるとは、それには少なからぬ理由があるはずです。(四)虎のような人々、能力あり、罪の無い人が、いかなるわけで、悪者たちに加えられた苦しみに耐えたのか。(五)一万の象の力を有するビーマは、どうして、苦しめられても怒りを押えたのか。(六)あのドラウパディー・クリシュナーは、悪者たちに苦しめられながらも、それが可能なのに、どうしてドリタラーシトラの息子たちをその忿怒の眼で燃やさなかったのか。(七)プリターの二人の息子(ビーマとアルジュナ)とマードリーの二人の息子(ナクラとサハデーヴァ)は、賭博においてユディシティラが悪者たちに騙されてい

る時、どうして彼を無視して、後で彼に従ったのか。(八) 最高に敬虔で、法(ダルマ)を知る、ダルマ神の息子ユディシティラは、どのようにして、彼にふさわしからぬ苦悩に耐えたか。(九) そしてアルジュナは、クリシュナを御者として、どのようにして、一騎で矢を放ち、大軍を全滅させたのか。(一〇) 苦行者よ、以上すべてをありのままに語って下さい。各所で勇士たちが行なったことを。(一一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

全世界で敬われている、無量の威光を有する、偉大な大仙ヴィヤーサのすべての説を語りましょう。(一二) 威厳に満ちたヴィヤーサは、聖なる十万の詩節を語った。(一三) これを語ったり聞いたりする人々は、梵界へ行き、神と等しい状態に至るであろう。(一四) 何故なら、これはヴェーダ聖典に等しい、最高の聖なる書である。そしてこれは、聞くに価する書のうちでも、聖仙に讃えられる最高の古伝説(プラーナ)である。(一五) この非常に神聖な叙事詩(イティハーサ)には、実利(アルタ)と法と、窮極的な知性とが、全的に説かれている。(一六) 賢者は、このクリシュナ(ヴィヤーサ)のヴェーダを、立派な人々、寛大な人々、真実を守る人々、信仰ある人々に聞かせれば、利益を得るであろう。(一七) 非常に苛酷な男といえども、この叙事詩を聞けば、胎児殺しの罪過をも滅するであろう。(一八) この「ジャヤ」(利勝)という名の叙事詩は、征服を欲する王によって聞かれるべきである。彼は全地上を征服し、敵どもに勝利するであろう。(一九) これは息子を得るための最高の儀式であり、繁栄を得るための最上の手段であって、王妃や皇太子

たちによっても、幾度も聞かれるべきである。(二〇) 無量の知性を有するヴィヤーサは、この聖なる実利論、最高の法典、解脱論を説いた。(二一) ある人々は現在これを説き、またある人々は未来に説くであろう。息子たちは従順になり、召使たちは好ましいことを行なうであろう。(二二) 常にこれを聞く人は、身・語・意で行なった罪過を速やかに捨て去るであろう。(二三) バラタ族の偉大な生涯を、嫉み心なく聞く人々には、病の恐怖はなく、いわんや次の世の恐怖もない。(二四) クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)は、功徳を追求して、このすばらしい、名声と長寿と天界をもたらす書を作った。(二五) 偉大なパーンダヴァたちと、多くの富と威力を有するその他の王族たちの名声を世に広めて。(二六) 聖なる海とヒマーラヤ山との両者が「宝蔵」として知られるように、この『バーラタ』も「宝蔵」として知られる。(二七) 節日(パルヴァン)(月相の変わり目の日)に、バラモンたちにこれを語る賢者は、罪障を離れ、天界に至り、ブラフマン(梵、最高原理)と合一するであろう。(二八) そして、シュラーッダ祭(祖霊祭)において、そのうちの四分の一詩節でもバラモンたちに語る者は、彼のそのシュラーッダは不滅となり、祖霊たちにも及ぶであろう。(二九) 人が日々行動していて、知らないで犯す罪は、『マハーバーラタ』の物語を聞くやいなや消滅する。(三〇) バーラタ(バラタ族の人々)の偉大な(マハット)誕生がマハーバーラタであると言われる。この語源解釈を知る者は、一切の罪悪から解放される。(三一) 聖者クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)は、三年の間、常に精励して、この最高の『マハーバーラタ』の物語を作った。(三二) バラタ族の雄牛よ、法(ダルマ)・実利(アルタ)・享楽(カーマ)・解脱(モークシャ)に関して、ここに存するものは他にもある。

しかし、ここに存しないものは、他のどこにも存しない。（二三）

（第五十六章）

ヴァス王とインドラ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ある時、ウパリチャラという王がいた。この王は常に法《ダルマ》を守るとともに、狩猟に行くことも好んだ。（一）このパウラヴァ一族の後裔であるヴァス王（ウパリチャラ）は、インドラ（帝釈天）の指示により、快適で併合するに価するチェーディ国を併合した。（二）

この王は武器を捨て、苦行を好んで、隠棲所に住んでいたが、インドラは、自ら直々に、王に近づいた。（三）神は、「この王は苦行によってインドラ（神々の王）の位につくことができる」と心配して、その王を直々に懐柔して、苦行をやめさせたのである。（四）

インドラは言った。

「王よ、地上における法を混乱させてはならぬ。それを守れ。法が保たれたら、それは全世間を維持するであろう。（五）汝は常に専念し、心を統一し、世俗の法を守れ。法を守れば、永遠にして清浄なる世界に到達するであろう。（六）汝は地上に立ち、天界に立つ私の親友となり、大地（女神）の乳房である国土に住め。（七）家畜に富み、清浄で、安定し、財物と穀物に満ち、天界のように守られ（または、容易に守られ得る）、（気候が）温和で、味わわれるべき土地の美質に恵まれている国土。（八）その国土は他の国土を凌駕し、財宝などに満ちている。大地は富にあ

ふれている。チェーディに住め、チェーディの王よ。（九）そこの国民は敬虔で、非常に満足し、善人であり、ふざけている時も嘘をつかない。いわんやそうでない時はなおさらである。（一〇）人々は父親と離反することはなく、目上の幸せを喜ぶ。彼らは痩せた牛を頸木《くびき》につなぐことはなく、飼養してやる。（一一）王よ、チェーディにおいては、すべての種姓《ヴァルナ》（四姓）が常に自己の法（本務）を守る。そして、三界（全世界）にあるようなもので汝に知られぬものはない。（一二）神々に利用される、空中を飛行するあの巨大な天車《ヴィマーナ》は、神々しく空中で水晶のように輝く。それが汝のものとなるであろう。私はそれを贈る。（一三）一切の人間のうちで、汝のみがすばらしい天車を利用し、それに乗って神の化身のように飛びまわるであろう。（一四）そして私は、しおれない蓮花の花輪であるヴァイジャヤンティーを汝に与える。それは戦場において、武器で傷つけられぬようにして、汝を守るであろう。（一五）王よ、それは汝の標識《しるし》となるであろう。インドラの花輪として知れわたった、幸運をもたらす、比類なき偉大な標識に。（一六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

インドラは彼を喜ばせるために、竹製の竿を彼に与えた。それは修養ある人々を守護するものである。（一七）一年たった時に、王はシャクラ（インドラ）を供養するために、その竿を地面に植え込ませた。（一八）それ以来、今日に至るまで、彼が始めた例にならって、優れた諸王は竿を植え込むのである。（一九）その翌日、王たちは、それを金色の鞘や香や花輪や装飾品で

飾りつけて真っ直に立てる。そして、規定のごとく、花輪や飾紐をそれに巻きつける。(二〇)そこにおいて、偉大なヴァスを喜ばせるために自ら笑いの相をとった、恵み深い神が供養されるのである。(二一)

　大インドラに対して、最高の王ヴァスが行なったこのような供養を見て、インドラは満足して告げた。(二二)

「チェーディの国が行なったように、人々や諸王が喜んで私のマハ(祭礼)を供養し、行なわせるならば、(二三)彼らとその王国は、富貴と勝利を得るであろう。また、国民は繁栄し、喜悦するであろう。(二四)」

　偉大なる大インドラ、マガヴァットは、このように、喜んで大王ヴァスに敬意を表した。(二五)土地の寄進などの布施により、また(請願者の)願いをかなえ、盛大な祭祀をすることにより、常にインドラの祭りを行なわせる人々は、その祭りにより浄められるのである。(二六)インドラに敬意を表されたチェーディの王ヴァスは、チェーディに住し、法(ダルマ)に従ってこの大地を守護した。ヴァス王は、インドラを喜ばせるために、インドラのマハ(祭礼)を主催した。(二七)

　この王には、無量の力を持つ、精力にあふれた五人の息子がいた。そしてこの帝王は、息子たちを諸国の王位につけた。(二八)マガダ国王として知られる偉大な戦士ブリハッドラタ、プラティヤーグラハ、クシャーンバ――別名マニヴァーハナ――、マッチッラ、ヤドゥ、すべて無敵の王族であった。(二九)以上、威光に満ちたこの王仙の息子たちは、各自の名をつ

けた国や都市を建設した。これがヴァーサヴァ(ヴァスの息子)の五王であり、それぞれの家系は永遠に続いた。(三〇)

魚から生まれたヴァスの子

　ヴァスがインドラに贈られた水晶の天車に乗って空中を飛行すると、ガンダルヴァ(半神の一種)や天女(アプサラス)たちがこの偉大な王を崇拝した。かくて、彼はウパリチャラ(上方を行く者)という名で知られるようになった。(三一)

　彼の都の付近を流れる、シュクティマティーという川があった。コーラーハラ山は、生命を持ち、愛欲にかられてその川を塞き止めたという。(三二)しかるに、ヴァスはその山を蹴飛ばした。川は足蹴により開いた通路により流出(出脱)した。(三三)山は自らその川に双児を生ませた。山から解放されて喜んだ川は、子供たちを王に贈った。(三四)そのうちの一人は男であった。財宝を授ける最高の王仙ヴァスは、敵を挫く(アリンダマ)彼を軍司令官に任じた。ヴァス王はまた、娘のギリカーを妻にして可愛がった。(三五)

　ヴァスの妻ギリカーは、息子を生むに適した時期に、沐浴して身を清め、自分から進んで、受胎に適した時期が訪れたことを告げた。(三六)その日、喜んだ祖霊たちは、最高の賢者である王に、「(祖霊供養のため)鹿を殺せ」と命じた。(三七)王は祖霊たちの命に背けず、狩猟に出かけたが、愛欲を抱き、シュリー(吉祥天女)の化身のような、こよなく美しいギリカーの

ことばかり思い出していた。(三八)美しい森を行くうちに、彼の精液がほとばしり出た。王は射精するやいなや、精液を木の葉に受けた。自分の射精が無駄にならぬようにと。また、自分の妻の受胎期が無駄にならぬようにと。(三九―四〇)王はこのように考え、何度もよく思案して、その精液が無駄にならないことを知った。(四一)精液が出る時、彼は妻の受胎の時期を考慮して、呪句を唱えてその精液を加持し、微妙な法と実利の真実を知る彼は、高速で飛ぶ鷹がかたわらにいるのを見て、それに言った。(四二)

「友よ、私のためにこの精液を家に運び、ギリカーに渡して欲しい。今日は彼女の受胎に適した日なのだ。(四三)」

鷹はそれを受け取ると、速やかに舞い上り、全速力で飛んで行った。(四四)その時、他の鷹がその鷹を見て、肉を持っていると思って、急いで近づいて来た。(四五)二羽は空中で、嘴による戦いを始めた。二羽が戦っているうちに、その精液はヤムナー川に落ちた。(四六)

そこに、アドリカーという美しい天女で、梵天の呪詛により魚となり、ヤムナー川に住んでいるものがいた。(四七)この魚の姿をしたアドリカーは、急いで近づいて、鷹の足から落ちたヴァスの精液を飲んだ。(四八)それから十カ月たった時、ある日、漁師たちがその魚を捕え、彼女の胎から、男女の双子を引き出した。(四九)彼らは奇蹟だと考えて、王に報告した。

「王様、この二人は魚の胎内に生まれました」と。(五〇)

その時、ウパリチャラ王は、双子のうちの男児を取り上げた。彼は、マツヤ(「魚」の意)という

名の、敬虔で真実を守る王となった。(五一)

その天女の方は、即座に呪詛から解放された。かつて彼女は神(梵天)から告げられていたのだった。「人間の双子を生めば、汝は呪詛から解放されるであろう」と。(五二)

そこで彼女は双子を生み、漁師たちに殺された時、魚の姿を捨てて天女の姿を取りもどした。それから美しい天女は、シッダ(半神の一種)、聖仙、チャーラナ(天上の楽人)の住む天界にもどった。(五三)

聖者ヴィヤーサの誕生

その魚の生んだ女児の方は、魚の臭いがしたので、王は、「お前のものだ」と言って、彼女を漁師に与えた。ところが、その娘は容色と天性の魅力に恵まれ、一切の美点をそなえていた。(五四)彼女はサティヤヴァティーと名づけられたが、この美しく微笑む娘は、漁師に育てられたので、しばらくの間、魚の臭いをさせていた。(五五)

彼女は父の言いつけに従って、川で舟を操っていた。それを、聖地巡礼中のパラーシャラが見たのである。(五六)非常に美しく、シッダにも希求されるような、魅力的なヴァスの娘を見るやいなや、この最高の隠者は、賢明であり目的を持ってはいたが、彼女を愛してしまった。(五七)彼女は言った。

「尊い方、ごらんなさい。両岸に聖仙たちが立っています。彼らが見ているのに、どうして

交われましょう。(五八)」

そう言われて、聖者は霧を創り出した。それにより、一切の方角は闇のようになった。(五九) 最高の聖仙により創り出された霧を見て、その思慮深い少女は、恥じらいながらも微笑して言った。(六〇)

「尊い方、私はいつも父の命に従っている処女(むすめ)です。あなたと交われば、私は処女でなくなってしまいます。(六一) 処女を失えば、どうして家に帰ることができましょう。私は家に住むことができません。このことを考えてから、しかるべきことをなさって下さい。(六二)」

そう言われて、最高の聖仙は喜んで彼女に告げた。

「私の好きにしてくれたら、お前は処女のままでいるであろう。(六三) 可愛い女よ、お前の望む願いごとを選べ。美しい女よ。私の恩寵はいまだかつて偽りであったことはない。(六四)」

そのように言われて、彼女は身体が最高に芳香を帯びることを願った。聖者は彼女の念願をかなえてやった。(六五) そこで念願のかなった彼女は、女性の諸々の美質で飾られて喜び、奇蹟を行なう聖仙と交わった。(六六) そこで、「ガンダヴァティー」(芳香を放つ女)という彼女の名が地上に広まった。世の人々は、彼女の芳香(ガンダ)を一由旬(ヨージャナ)(距離の単位、八乃至九マイル)離れたところから嗅ぐことができた。(六七) そこで、彼女の名は「ヨージャナーガンダー」とも知られるようになった。

聖者パラーシャラは自分の住処に帰った。(六八) サティヤヴァティーは最高の願いをかなえてもらい、喜んで、パラーシャラと交わるとすぐに胎児を産み落とした。その精力的なパラーシャラの息子(ヴィヤーサ)は、ヤムナー川の洲(しま)で生まれた。(六九) 彼は母の前に立ち、苦行に専念する決意をした。そして、「何か用事があって、私のことを念ずれば、私は姿を見せるでしょう」と彼は告げた。(七〇)

かくて、ドゥヴァイパーヤナが、パラーシャラとサティヤヴァティーとの間に生まれた。(七一) その幼児は洲(ドゥヴィーパ)に産み落とされたから、それ故「ドゥヴァイパーヤナ」と呼ばれた。聖法(ダルマ)は宇宙紀(ユガ)ごとに一足(四分の一)ずつ減退すると知り、また、人間の寿命と能力も宇宙紀に順応すると見て、ブラフマン(ヴェーダ聖典)とバラモンたちによかれと願い、彼はヴェーダ聖典を分割した(ヴィヤース)。それ故、ヴィヤーサと呼ばれるようになった。(七二―七三) この願いをかなえる偉大な聖者は、四ヴェーダと第五のヴェーダ『マハーバーラタ』を、スマントゥ、ジャイミニ、パイラ、息子のシュカ、及びヴァイシャンパーヤナに教示した。彼らは各自、『バーラタ』の本集(サンヒター)を公表した。(七四―七五)

主要人物の誕生

無量の輝きを有する強力で誉れ高い、シャンタヌの息子ビーシュマも、ヴァスの精液(ヴァス神群の一部)から、ガンガー(ガンジス)女神の胎に生まれた。(七六)

アニーマーンダヴィヤという高名な古(いにしえ)の聖仙がいた。彼は盗まないのに盗みの嫌疑をかけ

られ、串刺しの刑に処せられた。(七七) かつて、この大仙はダルマ（正義の神）を呼び出して言った。

「子供の頃、私は無邪気さから小鳥を草の茎で突き刺した。(七八) ダルマよ、私はその罪は思い出すが、他に悪いことをしたおぼえがない。私が幾千と積んだ苦行は、何故それを克服することができないのか。(七九) バラモン殺害（自分を殺すこと）は、一切の生類を殺すことより悪いはずだ。あなたはこの罪により、シュードラの胎に生まれるであろう。(八〇)」

この呪いにより、ダルマはシュードラ（従僕）の胎に、ヴィドゥラとして生まれた。賢明で法を守り、汚れのない体をとって。(八一)

一方、聖者に等しい吟誦者（御者）サンジャヤは、ガヴァルガナから生まれた。また、勇士カルナは、太陽神と処女クンティーとの間に生まれた。彼は生まれつき鎧を着け、その顔は耳環で輝いていた。(八二)

世の人々に崇拝される誉れ高いヴィシュヌ神は、この世の人々を益するために、ヴァスデーヴァとデーヴァキーとの間に生まれた。(八三) この神は始めもなく終わりもなく、世界の創造神であり、非顕現にして不滅のブラフマン（「梵」、最高原理）であり、構成要素を持たない最も主要なものである。(八四) 不滅のアートマン（真我）であり、根本原質であり、最高の本源である。神人であり、一切造者である。純質と結びついており、永遠の音（聖音オーム）である。(八五) 終わりなく不動の神である。鶩鳥でありナーラーヤナ神である。設定者であり、不老、常住であり、最高の不滅なる神である。人々はその神をこのように呼ぶ。(八六) その神人、創造者、一切の生類の祖父である神は、法を栄えさせるために、アンダカ・ヴリシュニ族

の間に生まれた。(八七)

ナーラーヤナ神（クリシュナ）に忠実な、ありとあらゆる種類の武器に通じた、強力なサーティヤキとクリタヴァルマンが、勇士サティヤカとフリディカから生まれた。(八八) 激しい苦行を行なう大仙バラドゥヴァージャの精液が、枡に落ちて成長し、それからドローナが生まれた。(八九) ガウタマ（ゴータマの息子）シャラドヴァットから、葦の束（に落ちた精液）により、強力なクリパと、クリピーという双子が生まれた。それから、彼女（クリピー）とドローナとの間に、勇士アシュヴァッターマンが生まれた。(九〇) また、祭式の最中、火の化身のように輝くドリシタデュムナが、弓とともに、聖火から生まれた。この強力な勇士は、ドローナを殺すことになる。(九一) 同様にして、威光にあふれ美しいクリシュナー（ドラウパディー）が、その祭壇に生まれた。その容姿で輝きわたり、最高の容色をそなえて。(九二) それから、プラフラーダの弟子ナグナジット・スバラが生まれた。神々の怒りにより、彼に法を滅す子孫が生まれた。(九三) すなわち、ガーンダーラ王の息子シャクニ・サウバラと、ドゥルヨーダナの母（ガーンダーリー）という、実利を知る二人の子が生まれた。(九四)

クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）から、ヴィチトラヴィーリヤの未亡人に、ドリタラーシトラ王と、強力なパーンドゥが生まれた。(九五) パーンドゥと二人の妻の間に、各々神に等しい五人の息子が生まれた。彼らのうちで、ユディシティラ（長男）は、最高の徳性をそなえていた。(九六) 彼はダルマ神から生まれた。狼腹（次男のビーマセーナ）は風神から生まれた。栄光に満ちた最高の勇士ダナンジャヤ（三男のアルジュナ）は、インドラ（帝釈天）から生まれた。(九七) 容

色をそなえた双子、目上に忠実に従うナクラとサハデーヴァは、アシュヴィン双神から生まれた。（九八）また、賢明なドリタラーシトラに、ドゥルヨーダナをはじめとする百人の息子と、〔ヴァイシャ（実業者）の女との〕混血のユユツが生まれた。（九九）

アルジュナはヴァースデーヴァ（クリシュナ）の妹のスバドラーに、アビマニユを生ませた。すなわち彼は偉大なパーンドゥの孫にあたる。（一〇〇）パーンダヴァ（パーンドゥの息子）の五王子から、〔クリシュナー（ドラウパディー）〕に、容色に恵まれすべての武器に通じた五人の息子が生まれた。（一〇一）ユディシティラからはプラティヴィンディヤ、ビーマからはスタソーマ、アルジュナからはシュルタキールティ、ナクラからはシャターニーカが生まれた。（一〇二）また、サハデーヴァからは、威光あふれるシュルタセーナが生まれた。森林で、ビーマとヒディンバー（羅刹女）との間に、ガトートカチャが生まれた。（一〇三）シカンディンはドルパダから女児として生まれたが、後に男児となった。夜叉（ヤクシャ）のストゥーナが、好意から彼女を男に変えたのである。（一〇四）

このクル族の戦争に、無数の王たちが参戦した。（一〇五）彼らすべての名を挙げることは、一万年かかっても不可能であるが、以上、この物語の展開にかかわる主要な人物が列挙された。（一〇六）

（第五十七章）／（第五十八章略）

(7) 起源（第五十九章―第百二十三章）

シャクンタラー物語

ジャナメージャヤは言った。（第五十九章〜六十一章略）

「バラモンよ、神々、悪魔（ダーナヴァ）、羅刹（ラクシャス）、ガンダルヴァ（半神の一種）、天女（アプサラス）たちが、部分的に地上に降下した次第を、あなたから詳らかに聞いた。(一)更に、バラモンや聖仙の群の前で、クル族の家系について、始めから話してもらいたい。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

パウラヴァの家系にドゥフシャンタという、四辺に至る大地の守護者である強力な王がいた。(三)この戦いにおいて常勝の、無敵の王は、あまねくすべての土地を領有し、海に囲まれた国土、蛮（ムレーッチャ）族や林住族に及ぶすべての国土、四姓（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）の人々の住む海に至るまでの国土を領有していた。(四—五)この王が統治している間は、人々に四姓の混合はなく、強制的に税を取る人々もなく、誰も罪悪を犯すこともなかった。(六)その王の治世には、人々は法（ダルマ）にかなった楽しみを享受し、法と実利（アルタ）に専念していた。(七)また、その王の治世には、盗みの恐れもなく、飢えの恐れもなく、病気の恐れもなかった。(八)四姓は各々の

法（本務）により満足し、願望を抱いて神事をすることはなかった。その王を頼りにして、何の恐れもなく暮らしていた。(九)雲（または雨神）は適切な時に雨を降らせ、穀物は豊かに実った。豊穣の大地は、ありとあらゆる宝に満ちていた。(一〇)その若い王は、驚異的な大力を持ち、金剛のように堅固な体をし、両腕でマンダラ山を森林もろとも持ち上げて運ぶことができるほどであった。(一一)彼は、弓術、棍棒戦、剣術、馬術、象術に通達していた。(一二)力にかけてはヴィシュヌ神に等しく、威光にかけては太陽のようで、動揺しないことにかけては海洋に等しく、忍耐力は大地に等しかった。(一三)その都市や地方の住民は満足し、この王は尊敬されて、法に専心することで知られる民を治めていた。(一四)（第六十二章）

ある時、この強力な王は、多くの軍隊と乗物をともない、数百の騎兵と象兵に囲まれ、奥深い森へ行った。(一)彼は、刀槍や棍棒や種々の投槍を持つ、多くの勇猛な戦士たちに囲まれて進んで行った。(二)その王が進む時、戦士たちの獅子吼、螺貝と太鼓の音、戦車の大輪の音と巨象の叫び声、馬のいななきに混じる兵士たちの雄叫びと武器を鳴らす音により、大音響があがった。(三—四)女たちは大邸宅の屋上に出て、王者にふさわしい威光により自己の名声を高める英雄を眺めた。(五)シャクラ（インドラ帝釈天）にも似て、敵を破り、敵の象隊を撃退し、武器を手にした王を見て、女たちは敬意を払った。(六)

「あの虎のような方は、戦場で驚異的な武勇を発揮する。彼の腕力の前では、敵の群は生存

しない。(七)」

などと言いながら、女たちは愛情をこめて王を称讃し、彼の頭に花の雨を投げた。(八) いたるところで、優れたバラモンたちに讃えられつつ、彼は心から満足して、狩をするために森へ行った。(九) その時、市民や地方民は、かなり遠方まで王について行ったが、やがて王に別れを告げられたので、そこから引き返して行った。(一〇)

王は金翅鳥(ガルダ)のような戦車に乗り、その音で天地を満たした。(一一) この聡明な王は、進んで行くうちに、歓喜園(インドラの楽園)のような森を見出した。それはビルヴァやアルカやカディラ、カピッタやダヴァなどの樹々に満ちていた。(一二) その森は、山や台地や岩でおおわれ起伏があり、水無く無人であり、幾由旬にも及んでいた。そこには鹿の群や、その他の恐ろしい森の動物が住んでいた。(一三) 人中の虎ドゥフシャンタは、従者や軍隊や戦車をともない、様々な獣を殺して、その森を震撼させた。(一四) 彼は矢の射程に入った多くの虎の群を矢で貫いて殺した。(一五) 遠くにいるものは矢で貫き、また近くに来たものは剣で切った。(一六) 槍と棍棒の術に秀でた、この限りなく勇猛な王は、羚羊を槍で殺し、投槍、刀、棍棒、その他の種々の武器で、森に住む鳥獣を殺しつつ進んで行った。(一七―一八) 驚異的な力を持つ王と、好戦的な戦士たちが広大な森を震撼させた時、大きな獣たちは森から逃げ出した。(一九) 群の指導者を失った鹿の群は、散り散りになり、度を失っていたるところで鳴き叫んだ。(二〇) 彼らは干上った川に至り着いて、水が無いので絶望して苦しみ、疲労のあまり心臓が衰弱し、意識を失って倒れた。(二一) そして、飢えと渇きに苦しみ、疲れて、地上に倒れた。あるものたちは、飢えた虎のような兵たちにその場で食われた。(二二) また、ある森に住む人々は、火を起こし、燃やして、適当に肉を切って食べた。(二三) 強力な象たちが、武器で傷ついて興奮し、恐れて、鼻を巻いて全速力で走った。(二四) 森に住む巨象たちは、糞尿をまき散らし、多量の血を流し、多くの人々を押しつぶした。(二五) その森は厚い雲と矢の雨でおおわれ、水牛(むしろ異本の「鹿」)に満ち、王に殺された大きな獣にあふれ、輝いていた。(二六)

(第六十三章)

王は多くの乗物を従えて、幾多の鹿を殺してから、鹿狩りに熱中し、別の森に入って行った。(一) 最強の王は、そのうちほとんど一人になり、飢えと渇きをおぼえた。そして、森の果てに至って、広い荒地に着いた。(二) それを過ぎて、王はまた別の大きな森に達した。そこは最上の隠棲所があり、心を喜ばせ、非常に眺めがよく、涼しい風が吹いていた。(三) 花咲く樹々に満ち、こよなく心地よい草原があり、広々として、鳥たちは甘美な声で囀っていた。(四) 快い陰をもたらす大きい枝の樹々におおわれ、蔓草には蜂たちが群がり、最高に美しい森であった。(五) その森には、花や果実をつけない木は全く無く、刺のある木も無く、蜂の群がらない木も無かった。(六) そこは鳥たちが囀り、花々にこの上なく飾られ、すべての季節の花の咲く樹々で飾られ、こよなく心地よい草地があった。偉大な射手はその魅力的な森に入って行った。(七) そこでは、花々で満ちた樹々が風で揺られて、絶えず多彩な花の

雨を降らせていた。(八)天にもとどくほどの樹々は、美しい声の鳥たちが囀り、色とりどりの花の衣をまとい、輝いていた。(九)それらの、花の重みでたわむ若枝では、鳥たちが蜂たちとともに甘い音をたてていた。(一〇)

多くの花の群に飾られ、蔓草の亭に囲まれた、心の喜びを高める場所を見て、威光に満ちた王は幸せを感じた。(一一)お互いに枝を交え、花々におおわれた、大インドラの旗のような樹々により、その森は輝いていた。(一二)快く冷い、芳香に満ちて花粉を運ぶ風は、森を経めぐり、欲情を抱いたかのように樹々と交わった。(一三)王はこのような美質をそなえた森を見た。川辺にある、高い旗のような、美しい森を。(一四)鳥たちが大喜びしている森を眺めているうちに、彼は心地よい最上の隠棲所を見出した。(一五)そこは種々の樹々におおわれており、火は赤々と燃えていた。苦行者やヴァーラキリヤ（聖仙の一種。一・二六参照）たちに満ち、隠者の群にあふれていた。(一六)多くの聖火堂が点在し、花のしとねでおおわれ、大きな沼で輝いていた。(一七)そこは聖河マーリニーの付近であった。その川は幸ある水をたたえ、多くの鳥の群に満ち、苦行林があり魅力的であった。彼はそこで温和な野獣や鹿たちを見て、心から喜んだ。(一八)

栄光に満ちた勇士はその隠棲所に入った。そこはいたるところ神界のようで、非常に魅力的であった。(一九)彼はそこで、すべての生類の母のように、隠棲所を抱いて流れる聖河を見た。(二〇)その砂洲にはチャクラヴァーカ鳥（夫婦仲のよいことで知られる鳥）がおり、その流れは花と水泡を運ぶ。そこにはキンナラ（半神の一種）の群や、猿や熊が住んでいた。(二一)そこには神聖なヴェー

ダの朗誦が鳴り響き、一連の砂洲に飾られていた。発情した象や、虎や大蛇が住みついていた。(二二)

隠棲所とそのそばを流れる川を見て、その時、王はそこに入る決意をした。(二三)そして、砂洲と美しい岸を持つマーリニー川に飾られた、大きな森林に入って行った。それはちょうど、ガンガー（ガンジス）川に飾られた、ナラとナーラーヤナ神の住処のようで、発情した孔雀の声が響いていた。(二四)

王はそのチトララタの森（ガンダルヴァのチトララタに作られた、クベーラ神の森）にも似たその森に入り、この上なく美質をそなえ、たとえようもない威力を有する、苦行を積んだ大仙カーシャパ（カシャパの族姓に属する）カヌヴァに面会したいと思った。(二五)王は〔追いついた〕戦車隊と、騎兵隊と歩兵隊を森の入口に待機させて、次のように告げた。(二六)

「私は苦行を積み、汚れを離れたカーシャパ仙に会いに行く。私がもどるまでここに居なさい。(二七)」

王は歓喜園（ナンダナ）（インドラの楽園）にも似たその森に入り、飢えと渇きを忘れ、心から満足した。(二八)王は王の標識（しるし）を取り去り、大臣と宮廷僧とをともない、最上の隠棲所に入って行った。そこで不滅の功徳を積んだかの聖仙に会おうと考えて。(二九)彼はその梵界（ブラフマローカ）にも似た隠棲所を見た。そこでは蜂（詩節）の羽音（吟誦）が響き、種々の鳥（バラモン）の群に満ちていた。(三〇)虎のように勇敢な王は、主立った祭官たちが祭式を執行して種々の吟誦法でリグ・ヴェーダ（讃歌の集成）を唱えているのを聞いた。(三一)その隠棲所は、祭祀の手続きをふんでいる、よく自

己を制御し、偉大な、ヤジュル・ヴェーダ（祭詞の集成）とその補助学を知る人々により輝いていた。（三二）祭官たちに尊敬される、アタルヴァ・ヴェーダ（呪句の集成）に通じた人々は、種々の吟誦法で本集（サンヒター）を唱えていた。（三三）他のバラモンたちは、（洗練された発声法で語り、隠棲所は彼らの声に満たされ、聖なる梵界のように輝かしかった。（三四）祭祀（及び浄法）を知る人々、吟誦法と発声法に通じた人々、解釈を知悉した人々、ヴェーダに通達した人々、様々な文章の和合と結合に通じた人々、特別の儀式に通じた人々、解脱法（モークシャダルマ）に通達した人々、主張・反論・定説により真理を知った人々、世俗に通達した人々が、いたるところにひしめいていた。（三五―三七）王はそこかしこに、自己を制御し、誓戒を守り、読誦と護摩（ホーマ）に専念し、完成した偉大なバラモンたちを見た。（三八）王は、注意してしつらえられた、花々をちりばめた、色とりどりの座席を見て驚嘆した。（三九）そして、神々の聖域に対し供養（プージャー）が行なわれているのを見て、最高の王は、自分が梵界にいるかのように感じた。（四〇）カーシャパに守られ、苦行者たちの群の住む、すばらしい隠棲所を眺めつつ、彼は見飽きることがなかった。（四一）このようにして王は、大臣と宮廷僧をともない、カーシャパの聖域に入った。いたるところ、偉大な誓戒を守り、苦行を積んだ聖仙たちに満ち、人里離れ、この上なく魅力的で吉祥なる聖域に。（四二）　（第六十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから王は、大臣たちを帰らせて一人で行ったが、かの厳しい誓戒を守る聖仙を、その隠棲所に見出すことができなかった。（一）彼は聖仙に会えず、その隠棲所に人がいないのを見て、大音声で森を響かせて、「誰かここにおられるか」と言った。（二）すると、彼の声を聞いて、その隠棲所から、苦行者の衣をつけた吉祥天女（シュリー）のような娘が出てきた。（三）黒い瞳の娘は、王を見るとすぐに、「ようこそ」と言って接待した。（四）彼女は席を勧め、足をすすぐ水と接客の品を出して歓待し、御機嫌はいかがですかと王にたずねた。（五）彼女はふさわしく歓待し、息災か否かをたずねてから、微笑みながら、「何の御用でしょうか」と訊いた。（六）王は適切にもてなされ、その魅力的に語る、全身非の打ち所のない娘を見て言った。（七）

「私は偉大な聖仙カヌヴァに敬意を表するために来たのです。美しい娘さん、聖者はどこへ行かれたのですか。（八）」

シャクンタラー（娘の名）は言った。

「私の父上様は、木の実をとるために隠棲所を出たのです。少しの間お待ちになればもどるでしょう。（九）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

聖仙はいなかったが、彼女にそう言われ、王はその美しい腰つきをして魅力的に笑う美しい娘を見た。（一〇）彼女はその肢体と苦行と心の制御により光り輝いていた。容色と若さに満ちた彼女を見て、王はたずねた。（一一）

「美しい娘よ、あなたは誰か。何のために森に来たのか。このように容色に恵まれながら。どこから来たのか。(二二) あなたを見るやいなや、私の心は奪われてしまった。あなたのことを知りたく思う。私に答えて下さい。(二三)」

その隠棲所で王にこのようにたずねられて、娘は笑いながら、魅力的な口調で告げた。(二四)

「ドゥフシャンタ様、私は聖者カヌヴァの娘とみなされています。苦行を積み、平静で法(ダルマ)を知る、高名な聖者の。(二五)」

ドゥフシャンタは言った。

「たとえダルマ(道徳の神)が道からはずれたとしても、精をもらさず、世に敬われ、誓戒を守るこの偉大な聖者が、道からはずれた行為をすることはあり得ない。(二六) あなたはどうして彼の娘として生まれたのか。この私の大きな疑問を解いてもらいたい。(二七)」

シャクンタラーは答えた。

「王様、私が教えられたこと、以前に起ったこと、私があの聖者の娘となった次第を、ありのままにお話ししますからお聞き下さい。(二八)

ある聖仙がやって来て、私の出生についてたずねたところ、聖仙は彼に次のように語りました。王様、お聞き下さい。(二九)

かつて偉大な苦行者ヴィシュヴァーミトラは、苦行をし、神々の王シャクラ(インドラ、帝釈天)

を手ひどく苦しめた。(二〇) この激しい威力を持つ男は、苦行によって、私を神々の王位から追い落とすであろう、と恐れたインドラは、天女のメーナカーに告げた。(二一)

『メーナカーよ、お前は天女の神的な美質の点で卓越している。美しい女よ、私のために働いてくれ。私の言うことを聞きなさい。(二二) あの太陽にも似た大苦行者ヴィシュヴァーミトラは、恐ろしい苦行を行なって、私の心をふるえさせる。(二三) メーナカーよ、これはお前の任務だ。あの誓戒を守る、犯しがたい男は、激しい苦行に専念している。(二四) 彼が私を王位から追い落とさないように、行って誘惑せよ。彼の苦行の妨害をせよ。私のために尽くしてくれ。(二五) 美しい腰つきの女よ、若さと美貌と、魅力、しぐさ、微笑、言葉により誘惑して、苦行をやめさせなさい。(二六)』

メーナカーは言った。

『あの威光にあふれた聖者は、常に激しい苦行を行ない、短気です。あなた様もそのことは御存知でしょう。(二七) あの偉大な方の威光、苦行、怒りは、あなたですら恐れます。いわんやどうして私が恐れないでしょうか。(二八) 彼は偉大なヴァシシタ仙を、愛しい息子たちと別れさせました(一・一六六参照)。彼はかつて王族(クシャトラ)に生まれたが、強引にバラモンとなりました。(二九) 彼は沐浴するために、多くの水をたたえた、渡りがたい川を作りました。世間の人々は、その聖河をカウシキー(カウシカ〔ヴィシュヴァーミトラの姓〕の川という意)と呼んでおります。(三〇) かつて、〔父の呪いにより〕猟師となった、敬虔な王仙マタンガ(トリシャンク)は、飢饉の際、その川のほとりでこの偉大な聖仙を養いました。(三一) 飢饉が過ぎた時に、この隠者は再び隠棲所に帰り、その

川にパーラーという名をつけたのです。（三二）そして満足した聖者は、自らマタンガのために祭式を執行しました。神々の王よ、あなたはその時、彼を恐れてソーマ（強精飲料）を飲みに行ったではありませんか。（三三）怒った彼は、この星宿群に加えて、豊富な星々により、シュラヴァナ（星宿の名）をはじめとする第二の星宿を創ろうとしました。（三四）このような行為を行なった彼を、私はひどく恐れます。神よ、彼が怒って私を燃やすことのないような方法を私に教えて下さい。（三五）彼はその威力で世界中を燃やし、その足で大地を震動させることができます。大メール山を引き抜いて速やかに廻すことだってできるでしょう。（三六）あのように感官を制御し、苦行を積み、燃え盛る火のような方に、どうして私のような女が触れることができましょう。（三七）

彼の口は燃える火のようです。その瞳は太陽と月です。その舌は時間です。神々の王よ、どうして私のような女がその彼に触れることができましょう。（三八）ヤマ（閻魔）、ソーマ、大仙たち、すべてのサーディヤ神群、すべてのヴァーラキリヤ族、彼らですらあの聖者を恐れます。どうして私のような女が恐れないでしょうか。（三九）でも、神々の王よ、あなたにこのように命じられたら、私はあの聖者に近づかないわけにはいかないでしょう。しかし、私があなたのために安全に働けるように、私を守る手段を考えて下さい。（四〇）どうか、私が戯れている時、風の神が私の衣服を取り去るようにして下さい。神よ、あなたの御好意により、愛の神（カーマ）がその任務に際し私に協力してくれますように。（四一）そして、私があの聖仙を誘惑している、まさにその時、森から芳しい風が吹いて来ますように。』

インドラが『承知した』と言って、そのように手配した時、彼女はカウシカ（ヴィシュヴァーミトラ）の隠棲所へ行った。（四二）」　（第六十五章）

シャクンタラーは続けた。

「メーナカーに頼まれて、インドラは風に指示した。そこで彼女は風とともに出発した。（一）そして美しい腰つきのメーナカーは、苦行で罪障を滅し、隠棲所でなおも苦行を行なっているヴィシュヴァーミトラを、恐る恐る見た。（二）彼女は聖仙に挨拶し、彼のそばで遊び戯れた。その時、風が、月のような彼女の衣服を奪った。（三）その時、美しい女は、急いで大地に倒れ、衣服を抱きしめ、恥じらいを含んで、風に向かって微笑んだ。（四）その最高の聖者は、その時、言いようもない若さと美貌をそなえたメーナカーが、裸で、あわてて衣服を求めているのを見た。（五）聖者は彼女の容色を見て、愛欲に支配され、彼女と交わりたいと望んだ。（六）そして彼女を招いた。非の打ち所のない彼女もそれを望んだ。二人は森で、欲するがままに楽しみつつ、非常に長い時を一日であるかのように過ごした。（七）そして、ヒマーラヤの美しい高原において、マーリニー川のほとりで、その聖者はメーナカーにシャクンタラーを生ませた。（八）メーナカーは生まれた嬰児をマーリニーのほとりに捨てて、任務を達成し、急いでインドラの宮廷にもどった。（九）

獅子や虎に満ちた、人気のない森に横たわっている嬰児を見て、鳥たちはそのまわりをす

っかり取り巻いた。(二〇)肉に飢えた森の猛獣がこの赤児を害することのないようにと、鳥たちはメーナカーの子をしっかりと守った。(二一)

その時、私(カヌヴァ)は口をゆすぐために外出したが、無人の密林で、鳥たちに取り囲まれて寝ているその女の子を見つけた。そこでその子を連れて帰り、養女としたのである。(二二)法典の規定では、順に三種の父親があげられている。すなわち、生みの親、命の恩人、それから育ての親である。(二三)そして、無人の森で、鳥(シャクンタ)たちに守られていたということで、彼女にシャクンタラーという名をつけた。(二四)このようなわけで、シャクンタラーは私の娘なのである。そして、非の打ち所のないシャクンタラーは、私を父親だと思っているのである。(二五)

カヌヴァは問われて、以上のようにその大仙に告げました。王様、このようなわけで、私はカヌヴァの娘であるのです。(二六)私は実の父を知りませんので、カヌヴァを父と思っております。王様、以上、私の聞いたことをありのままに話しました。(二七)」(第六十六章)

ドゥフシャンタは言った。

「美しい女よ、あなたの話では、あなたはまぎれもなく王の娘である。美しい尻の女よ、私の妻となれ。言ってくれ。私はあなたのために何をしたらよいか。(一)黄金の頸飾り、衣服、金無垢の耳環、諸国で産する宝珠と宝石、金の胸飾り、獣皮……。今日、私はそれらをあなたにあげる。今日、すべての王国があなたのものとなろう。美しい女よ、私の妻となれ。(二―三)可愛い娘よ、ガンダルヴァの作法(自由恋愛による結婚)により、私のもとに来い。婚礼のうちでガーンダルヴァ婚は最上であると言われるから。(四)」

シャクンタラーは言った。

「王様、私の父は木の実を集めるため、この隠棲所から出て行きました。少しの間、彼の帰りをお待ち下さい。彼が私をあなたに与えるでしょう。(五)」

ドゥフシャンタは言った。

「美しい尻の女よ、非の打ち所のない女よ、私を愛してくれ。あなたのために私がここにいると知って欲しい。私の心はあなたにあるのだから。(六)自分こそ自分の友人だ。自分こそ自分の寄る辺だ。あなたは合法的に、自分によって自分を与えることができる。(七)合計、八種の合法的な婚礼があると伝えられる。すなわち、ブラーフマ、ダイヴァ、アールシャ、プラージャーパティヤ、アースラ、ガーンダルヴァ、ラークシャサ、そして、第八がパイシャーチャである(『マヌ法典』三・二一以下参照)。スヴァヤンブー(梵天)の息子マヌは、順を追ってそれらの適法なることを述べた。(八―九)最初の四種はバラモンの場合に称揚されると知れ。最初の六種は、順次に、王族(クシャトリヤ)の場合に適法であると知れ。(一〇)王族の場合、ラークシャサも許される。実業者(ヴァイシャ)と従僕(シュードラ)の場合はアースラも許される。〔最初の〕五種のうちの三種は適法で、二種は適法でない。(一一)パイシャーチャとアースラとは、決して行なうべきではない。以上のよ

うな作法により〔結婚〕すべきである。これが法(ダルマ)の帰趨であるとされる。(二二)だから、ガーンダルヴァ婚とラークシャサ婚は、王族の場合は合法的なのである。恐れることはない。その一つ、あるいは混った形の結婚が行なわれるべきである。この点に疑問はない。(二三)私はあなたを愛し、あなたは私を愛している。ガーンダルヴァ婚により、妻となって欲しい。(二四)」

シャクンタラーは言った。

「もしそれが法にかない、またもし私が自由であるなら、パウラヴァの王様、私を与えるについて条件がありますから聞いて下さい。(二五)私があなたに密かに申し上げることを守るとお約束下さい。私から生まれる息子が、あなたの後継ぎの皇太子となりますように。大王様、この約束を守るとおっしゃって下さい。ドゥフシャンタよ、もしそうしていただければ、あなたと交わりましょう。(二六―二七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王は躊躇することなく、「承知した」と彼女に答えた。「美しく微笑む女よ、そして私はあなたをわが都に連れて行くであろう。美しい尻の女よ、あなたはそれにふさわしいから。私はあなたにこのことを誓う。(二八)」

王仙はそう言って、魅力的に歩く彼女を、規定に従って娶った。そして、彼女とともに時を過ごした。(二九)

王は出発するに際し、彼女を慰め、次のように何度も言った。

「私はあなたのために、四部〔象、戦車、馬、歩兵〕よりなる軍隊を派遣するであろう。それで、あなたを私の王宮に導くであろう。(三〇)」

彼女にそう約束して、王は出発した。しかし、内心では、カーシャパ〔カヌヴァ〕のことを心配していた。(三一)

「苦行を積んだ聖者が聞いたら、どうするだろうか。」

このように思案しているうちに、自分の都に入った。(三二)

王が発ってから少したって、カヌヴァは隠棲所にもどって来た。シャクンタラーは恥ずかしくて、父のそばに行けなかった。(三三)しかし、苦行を積み、神的な叡知をそなえた聖者カヌヴァは、天眼によりすべてを理解して喜んだ。(三四)

「お前は今日、私を無視して男と交わったが、それは法(ダルマ)にもとることではない。お前は王の子である。(三五)王族(クシャトリヤ)にとっては、愛し合う男女が、〔結婚式の〕聖句(マントラ)もなく、密かに結びつくガーンダルヴァ婚は、上々であるとされる。(三六)また、シャクンタラーよ、お前を愛し、お前が夫として交わったドゥフシャンタは、徳性あり偉大な最高の人物である。(三七)世にも偉大で強力な息子がお前に生まれるであろう。彼はこの海に至るまでの全地上を享受するであろう。(三八)そしてこの偉大な転輪聖王(チャクラヴァルティン)が敵国へ遠征する時、彼の輪円(チャクラ)〔軍隊〕は常に撃退されることがないであろう。(三九)」

それから彼女は聖者の両足を洗い、荷物を下ろし、果実を置いて、休息した聖者に言った。

(三〇)

「この最高の人ドゥフシャンタを、私は夫と選びました。彼と大臣たちに恩寵を授けて下さい。(三一)」

カヌヴァは言った。

「美しい顔色の女よ、お前のために私は彼に恩寵を授ける。彼のために望むがままの願いごとを選べ。(三二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そこでシャクンタラーは、ドゥフシャンタによかれと願って、パウラヴァの王たちがよく法（ダルマ）を守り、王位から足を踏み外すことのないように願った。(三三)　(第六十七章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドゥフシャンタが約束して帰ってから、美しい腿のシャクンタラーは、無量の力を持つ息子を出産した。(一) 丸三年が経過した時に、そのドゥフシャンタの息子は、容色と高貴さと諸々の美質をそなえ、燃える火のように輝いていた。(二) 最高の聖者カヌヴァは、その賢い児が成長する過程で、彼のために誕生式その他の浄法（サンスカーラ）を主催した。(三) その子は白くて尖った歯をして、獅子のように堅固であった。その手には車輪(王者の標識)の印がついていた。栄

光に満ち、頭が大きくて、大力であった。その神の子にも似た少年は、その地で速やかに成長した。(四) 六歳になったばかりで、その大力の少年は、カヌヴァの隠棲所の付近で、虎や獅子や猪や象や水牛たちを木につなぎとめ、それらを馴らし、それらに乗って、隠棲所じゅうを遊びながら走りまわった。(五―六) そこで、カヌヴァの隠棲所に住む人々は、彼に名をつけた。

「彼はすべて(サルヴァ)を馴らす(ダマナ)から、サルヴァダマナと呼ぼう」と。(七) そこで、この武勇と精神力と体力をそなえた少年は、サルヴァダマナと呼ばれるようになった。(八)

聖仙は、少年とその超人的な所業を見て、「皇太子になるべき時が来た」とシャクンタラーに告げた。(九) カヌヴァは彼のそのような力を知り、弟子たちを呼んで命じた。

「すべての吉相に恵まれたシャクンタラーとその息子をこの隠棲所から、夫のもとに速やかに連れて行け。(一〇) 人妻が親族のもとに長く住むのは好ましくない。それはその婦人の名誉と徳行と法（ダルマ）をそこなうことだ。それ故、急いで連れて行け。(一一)」

「かしこまりました」と言って、限りなく強力な隠者たちは、みなしてシャクンタラーとその息子を連れて、象の都(ハースティナプラ)に向けて発った。(一二) その美しい女は、蓮のような眼をした神童を連れて、ドゥフシャンタの知っている森を後にした。(一三)

彼女は王のもとに行くと、面会を許され、若い太陽のように輝く息子とともに中に通された。(一四) シャクンタラーは作法通りに挨拶してから、彼に言った。

「王様、この息子を皇太子に即位させて下さい。(一五) この神のような息子は、あなたと私

の間に生まれたのですから。この子について、約束通りになさって下さい。(二六)以前、契りを交した時、あなたは約束しました。偉大な方よ、カヌヴァの隠棲所におけるその約束を思い出して下さい。(二七)」

王はその言葉を聞いて思い出したが、こう言った。

「私は覚えていない。悪い女行者よ、お前は誰の女か。(二八)法（ダルマ）の点でも性愛（カーマ）の点でも実利（アルタ）の点でも、お前と関係を持った覚えはない。行くなりとどまるなり、お前の勝手にせよ。(二九)」

思慮深く、美しい尻の女は、そう言われて、恥ずかしくなり、苦悩のあまり意識を失ったかのようになり、柱のように動かずに立ち尽くしていた。(三〇)彼女は当惑と怒りで眼を赤くし、唇をふるわせ、瞳を眼の隅に寄せて、燃やすかのように斜に王を見た。(三一)彼女は怒りにかられたが、それを表に出すことをひかえ、苦行により積まれた熱力を発することを抑えた。(三二)苦悩と恨みに満ち、少しの間考えこんでから、怒って夫を見つめて言った。(三三)

「大王様、あなたは知っていながら何故そのように言われるのです。つれなく知らないと。他の普通の人々のように。(二四)このことについて、あなたの心が知っている。ああ、高貴な方よ、あなたは真実と嘘との証人です。御自身をおとしめてはいけません。(二五)ある状態である自己を別の状態に見せる人は、自己を奪う盗人であり、大罪を犯すものです。(二六)あなたは自分は一人だと考えています。でも、心に宿る古（いにしえ）の聖者を知らないのですか。悪事を知っている……。あなたはその人の前で罪を犯しているのに。(二七)あなたは罪を犯しながら、誰も自分のことを知らないと思っています。しかし、神々と自己の内なる神人（プルシャ）がそれを知っています。(二八)日月、風と火、ヤマ（閻魔）、昼夜、黎明と黄昏、法（ダルマ）が人間の行為を知っています。(二九)心中に存する、行為の証人である知田者（クシェートラジュニャ）（真我）がその人に満足する時、ヴィヴァスヴァットの息子ヤマは彼の犯した罪〔だけ〕を取って行きます。(三〇)しかし知田者が邪悪な人に満足しない時は、ヤマはその罪を犯した悪人を連れて行くのです。(三一)自分で自分をおとしめ、別様に見せるならば、神々は彼に好意的でなく、真我（アートマン）も彼の利益をもたらしません。(三二)自分からやって来たといって、夫に貞節な私をそのようにおとしめてはなりませぬ。自分からやって来た私を、もてなされるにふさわしい私を、あなたはもてなさない。(三三)どうしてあなたは、衆人の前で、普通の人のように私を無視するのですか。私は無人の場所で叫んでいるわけではない。何故、あなたは私の言うことを聞いていないのですか。(三四)もし、請願している私の言葉通りにしないなら、ドゥフシャンタよ、今日あなたの頭は粉々に砕けてしまいますよ。(三五)夫は妻に入って、妻から再び生まれる（ジャーヤテー）。これが妻（ジャーヤー）の妻たる所以である。古（いにしえ）の詩人たちはそのことを知っております。(三六)聖典に通じた人に息子が生まれると、その息子が家系を継承して、前に死んだ祖先を救う。(三七)息子（プトラ）はプトという名の地獄から父を救う（トラー）から、それ故、息子である。スヴァヤンブー（創造神、梵天）自身がそう告げました。(三八)家事に巧みなもの、それが妻です。子孫を生むもの、それが妻です。夫を生命とするもの、それが妻です。夫に貞節なもの、それが

妻です。(三九) 妻は男の半身です。妻は最上の友です。妻は三目的（法、実利、性愛）の根本です。妻は死に行くものの友です。(四〇) 妻を持つ人々は祭式を行なう人々です。妻を持つ人々は家長の義務を果たす人々です。妻を持つ人々は喜びます。妻を持つ人々は幸福です。(四一) 優しく語る妻は孤独な時の友です。敬虔な行為の際の父です。苦悩する者にとっては母です。(四二) 荒地を旅する人にとっては休息です。妻を持つ人は信頼に価します。それ故、妻は最高の寄る辺なのです。(四三) 夫が死に、輪廻し、悪趣に一人で堕ちている時も、ただ貞節な妻のみが常につき従います。(四四) 先に死んだ妻は、死後、夫を待ちます。そして、夫が先に死んだら、良き妻は後から夫につき従います。(四五) 王様、このような理由で、結婚が望まれるのです。夫はこの世とあの世とにおいて妻を得るのですから。(四六) 息子は、自分自身から生まれた自分であると賢者たちに言われております。それ故、人は息子の母である妻を、母であるかのように見なすのです。(四七) 父は妻に生まれた息子を見て、鏡の中の自分の顔を見るように喜びます。善業を積んだ人が天に昇って喜ぶように。(四八) 心労や病に燃やされ苦しむ人々は、自分の妻に喜びを見出します。熱に苦しむ人々が水中で喜ぶように。(四九) 知者はどのように激しても、妻に不快なことを言うべきではありません。愛と喜びと功徳とが彼女らに依存することを見て。(五〇) 妻というものは永遠に自己の生の清浄なる田地です。聖仙といえども、妻なしでは、どうして子孫を作る能力がありましょう。(五一) 息子が遊びまわり、泥まみれになって、父親の体に抱きつく、これにまさるものがあるでしょうか。(五二) この息子が、自分からやって来て、期待をもってあなたを見ているのに、あなたは何故、眉をひそめて、その子を軽んずるのですか。(五三) 蟻は自分の卵を運んで、こわすことはない。あなたは法を知っているのに、どうして自分の子供を受け入れないのですか。(五四) 衣服や愛しい女や水に触れることも、抱かれた幼い息子に触れることほど快くはない。(五五) 二足のもの（人間）のうちではバラモンが最上です。四足のうちでは牛が最上です。敬われるべきもののうちでは師が最上です。触れるもののうちでは息子が最上です。(五六) ここにいる可愛い息子を抱いて、あなたに触れるようにして下さい。息子に触れることよりも快い接触は、この世にはありません。(五七) 王様、私は丸三年が過ぎた時、あなたの憂いをなくすこの息子を生みました。(五八) かつてこの子が生まれた時、空中の声が、『彼は百の馬祀（馬の犠牲祭）を実施するであろう』と私に告げました。(五九) 他の村に行った男たちは、愛情をこめて息子たちを膝にのせ、その頭に口づけして歓迎するではありませんか。(六〇) バラモンたちは、息子の誕生式において、ヴェーダ聖典の聖句を唱えます。あなたも御存じのように。(六一)『体の各部分から汝は生まれた。汝は心から生まれた。汝は息子という名の私自身に他ならない。汝は百年の間生きよ。(六二) 私の扶養は汝に依存する。私の不滅の家系も。それ故わが子よ、百年の間、こよなく幸せに生きよ。(六三)』

あなたの身体から彼が生まれました。一人の人間からもう一人の人間が生じたのです。清浄な池に写るもう一人の自分を見るように、私の息子を見て下さい。(六四) 祭火（アーハヴァニーヤ）が家庭の聖火（ガールハパティヤ）から取られるように、この子はあなたから生まれたのです。一人のあなたが二つになったのです。(六五)

王様、あなたは狩に出かけ、鹿に夢中になっているうちに父の隠棲所に来て、処女であった私を得ました。(六六)ウルヴァシー、プールヴァチッティ、サハジャニヤー、メーナカー、ヴィシュヴァーチー、グリターチー、以上が六名の最高の天女(アプサラス)です。(六七)そのうちでも、梵天(ブラフマー)の娘であるメーナカーという天女が、天上から地上に来て、ヴィシュヴァーミトラと交わり、私を生んだのです。(六八)天女メーナカーは、ヒマーラヤの峰で私を生みました。そして彼女は無情にも、他人の子であるかのように私を捨てて立ち去りました。(六九)私は前生でどんな悪さをしたのでしょうか。幼い時に親に捨てられ、そして今あなたに捨てられるとは。(七〇)あなたに捨てられて、私は隠棲所へ帰りましょう。しかし、御自分から生まれた息子を自分で捨てることはやめて下さい。(七一)」

ドゥフシャンタは言った。

「シャクンタラーよ、お前に生まれた息子を、私は認知しない。女というものは嘘つきだ。誰がお前の言葉を信ずるか。(七二)お前の母メーナカーは、無慈悲で浮気女で、ヒマーラヤの峰で、古い花を捨てるようにお前を捨てただと。(七三)そして、お前の父が、王族(クシャトリヤ)に生まれながらバラモンの位を欲したあのヴィシュヴァーミトラで、愛欲に溺れ、無慈悲だと。(七四)メーナカーは最高の天女で、お前の父だという人は最高の大仙である。その二人の子であるお前が、どうして娼婦のように語るのか。(七五)こんな信じられぬことを語って、恥ずかしくないのか。殊に私の前で。邪悪な苦行女よ、去りなさい。(七六)あの常に厳格な大仙と、あの天女のメーナカーが、どうしてお前のようにみすぼらしい、苦行女の衣をまとう

女と関係があるというのか。(七七)またお前の息子も、大きすぎる。子供なのに力強い。どうして短い時間で、シャーラ樹の幹のように成長したのか。(七八)お前の生まれはあまりにも卑しい。お前は娼婦のように見える。メーナカーはたまたま愛欲にかられてお前を生んだのか。(七九)苦行女よ、お前の言うことはすべて証拠がない。私はお前を認知しない。好きなように立ち去るがよい。(八〇)」

(第六十八章)

シャクンタラーは言った。

「王様、あなたは芥子粒ほどの他人の欠点を見て、ビルヴァの実のような自分の欠点を見ながらも、見ようとしない。(一)メーナカーは天人たちのうちの一人です。そして、天人たちはメーナカーに従属します。ドゥフシャンタよ、私の生まれはあなたの生まれより優れています。(二)王様、あなたは地上を歩くが、私は空中を行くことができます。我々にはメール山と芥子粒ほどの差があるのですよ。(三)私は大インドラ、クベーラ(富の神、毘沙門天)、ヤマ(閻魔)、ヴァルナ(水天)の宮殿に行くこともできます。王よ、私の力を見なさい。(四)私がこれから告げることは真実の言葉です。私は怨みからでなく、あなたに教えるために言うのです。それを聞いて我慢して下さい。(五)醜い人も、鏡で自分の顔を見るまでは、自分が他人よりも美しいと思います。(六)しかし、醜い顔を鏡に見る時、自分は他人よりも劣っていると知るのです。(七)この上なく美しい人は、何ものをも軽蔑しません。あまりにも悪口を言う人は、

人を傷つけます。(一八)実に愚者は、人がよいことと悪いことを話すのを聞いて、悪い言葉だけを受け入れます。豚が糞を食べるように。(一九)一方、知者は、人がよいことと悪いことを話すのを聞いて、有徳の言葉だけを受け入れます。ハンサ(鵞鳥の一種)が水から乳を選別して飲むように。(一〇)善人が他人を非難して苦しむように、悪人は他人を非難して満足します。(一一)善人が長老を讃えて至福に至るように、愚者は善人を非難して喜びます。(一二)自分の過失を知らないで、他人の過失をあげつらう愚者は、気楽に暮らします。他人に非難さるべきなのに、他人を非難して。(一三)世の中でこれほど滑稽なことはありません。悪人が、他ならぬ善人を悪人と呼ぶことほど。(一四)無神論者といえども、約束を守らぬ人を恐れます。恐ろしい毒蛇を恐れるように。いわんや信仰ある人の場合はなおさらです。(一五)自分に等しい息子を自分で作っておきながら、彼を軽んずるならば、神々はその者の富貴を滅ぼし、その者は〔願わしい〕世界を得ることはないでしょう。(一六)実に祖霊たちは、息子は家系の拠り所であり、一切の法(ダルマ)のうちで最上のものであると告げました。それ故、息子を捨てるべきではありません。(一七)息子とは、自分の妻に生まれたもの、及び、以下の五、すなわち、もらった子、買った子、養育された子、養子、他の女に生まれた子であると、マヌは言いました(『マヌ法典』第九章にあげられたものと異なる)。(一八)息子が生まれると、それは人々の法と名声をもたらし、心の喜びを増大させます。そして法の舟のように、祖霊たちを地獄から救済します。(一九)虎のような王よ、自分自身と、真実と法とを守り、息子を捨てるべきではありません。獅子のような王よ、欺瞞を行なってはいけません。(二〇)池は百の井戸に勝ります。祭祀は百の池に勝ります。息子は百の祭祀に勝ります。真実(サティヤ)は百の息子に勝ります。(二一)実に、真実と千の馬祀とを秤にかけたら、真実の方が千の馬祀より優れています。(二二)王よ、一切のヴェーダ聖典の学習と一切の聖地で沐浴することは、真実を述べることと比べたら、等しいでしょうか、等しくないでしょうか。(二三)真実より優れた法(ダルマ)はなく、真実に勝るものは何もありません。不真実よりひどいものは、この世には存在しません。(二四)王よ、真実は最高のブラフマン(梵、最高原理)です。真実は最高の約定です。王よ、約定を捨ててはなりませぬ。真実をお守り下さい。(二五)あなたが不真実に執着するなら、自ら自らを信じないなら、ああ、私は去ります。あなたのような人とはつきあいません。(二六)ドゥフシャンタよ、あなたなしでも、私の息子は、山の王を宝冠とする、四辺に及ぶ大地を支配するでしょう。(二七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

シャクンタラーは以上のように言って、出発しようとした。するとその時、姿の見えない者の声が聞こえ、司祭、宮廷祭僧、王師、大臣たちに囲まれた王に告げた。(二八)

「母は父の革袋である。父から生まれた息子は父自身である。ドゥフシャンタよ、息子を養育せよ。シャクンタラーを軽んじてはならぬ。(二九)人間の神よ、子種のある息子はヤマ(閻魔)の王国から〔祖霊を〕救済する。汝がこの子を生ませた。シャクンタラーは真実を述べた。(三〇)母親は〔父〕自身の体の分身である息子を生む。それ故、ドゥフシャンタ王よ、

シャクンタラーの息子を養育せよ。(三一)これは不幸なことである。何人(なんぴと)が生きながら、自分から生まれた生きている息子を捨てるであろうか。パウラヴァよ、シャクンタラーの生んだ、ドゥフシャンタの偉大な息子を養育せよ。(三二)我々の言葉により、その子は汝に養育されるべきである(バルタヴィヤ)であるから、それ故、汝の息子はバラタと名づけられるべきである。(三三)」

(三四)パウラヴァの王は、神々の言葉を聞くと大いに喜び、宮廷祭僧や大臣たちに告げた。

「諸卿、この神々の使者の言葉を聞け。私自身も、彼が私の息子であると知っている。(三五)もし私が彼女の言葉だけで彼を息子として受け入れたら、世人の疑惑が生じ、彼はこのように身のあかしを立てられなかったろう。(三六)」

王は神々の使者により、彼の身のあかしを立て、喜び勇んで息子を受け入れた。(三七)王は彼の頭に口づけして、愛情をこめて抱擁した。バラモンたちに敬われ、吟誦者たちに讃えられて。王は息子に触れることで生じた、最高の喜びを味わった。(三八)そして、法(ダルマ)を知る王は、法に従って妻をもてなした。王は彼女の機嫌を取りながら言った。(三九)

「あなたとの結びつきは、人知れずなされた。王妃よ、それ故、私はあなたの身のあかしを立てるために考慮していた。(四〇)また、あなたが〔不品行の〕女として私と交わり、そしてこの息子を王位につけると、世人が考えるかも知れないので、それ故私は考慮していた。(四一)大きな眼をした愛しい女よ、あなたは、愛しているから、怒って私に不快なことを言

ったが、私はあなたの言葉を許す。(四二)」

王仙ドゥフシャンタは愛しい王妃にこう言ってから、衣服や飲食物を出して彼女をもてなした。(四三)それからドゥフシャンタ王は、シャクンタラーの息子をバラタと名づけて、皇太子に即位させた。(四四)そして、その偉大な息子の広大な〔戦車の〕車輪(チャクラ)が、輝いて神々しく、無敵で、世界に轟く偉大な車輪が廻転した。(四五)彼は諸王を征服し、支配下に置いた。彼はまた善き人々の法(ダルマ)を実践し、最高の名声を獲得した。(四六)その王は、あらゆる土地を領有する、威光に満ちた転輪聖王(チャクラヴァルティン)であった。彼はマルト神群の主インドラのように、多くの祭祀を行なった。(四七)カヌヴァ仙が、ダクシャ(造物主の名。盛大な祭祀を行なった)のように、多くの報酬をともなうその祭祀を執行した。その栄光ある王は、ゴーヴィタタ(多くの牛をともなう)という馬祀を達成した。バラタはその祭祀において、莫大な謝礼をカヌヴァに与えた。(四八)バラタからバラタの(バーラティー)名声が生じ、彼からこのバーラタの家系が生じた。また、他の、バーラタとして知られる古人たちが生じた。(四九)バラタの家系には、神のような、強力な、梵天(ブラフマー)にも似た、多くの偉大な王たちが出た。(五〇)彼らの名前は、いたるところ、計り知れない。しかし、彼らのうちで主立ったものを列挙するであろう。栄光あり、神にも似た、真実(サティヤ)と廉直を守る人々を。(五一)

(第六十九章)

ヤヤーティの誕生

ヴァイシャンパーヤナは語った。――(一―一二略)

マヌ(人間の祖)は十人の強力な子供たちを持っていた。すなわち、ヴェーナ、ドリシュヌ、ナリシュヤット、ナーバーガ、イクシュヴァーク、カルーシャ、シャリヤーティ、イラー(マヌの娘)、プリシャドゥナ、ナーバーガーリシタである。だが、彼らはお互いに離反して全滅したと伝えられている。(一三―一四)このマヌは、地上に、他に五十人の息子を持っていた。だが、聡明なプルーラヴァスが生まれた。彼女は彼の母であるとともに(二五)その後、イラーに、聡明なプルーラヴァスが生まれた。彼女は彼の母であるとともに父でもあると伝えられている。(二六)

誉れ高いプルーラヴァスは海上にある十三の大陸を獲得し、人間でありながら、天人たちに囲まれていた。(二七)このプルーラヴァスは、その力に酔い痴れ、バラモンたちと戦い、彼らが抗議したにもかかわらず、その宝物を奪った。(二八)そこでサナトクマーラ(梵天の四名の息子の一人)は、梵界から降りて来て、〔彼の非を〕指摘したが、彼はそれを受け入れなかった。(二九)そこで大仙たちは怒り、彼を呪った。そこで、貪欲にとらわれ、慢心して思慮を失った王は、即座に破滅した。(二〇)実にこの帝王が、ウルヴァシー(彼の妻)とともにガンダルヴァ(半神族)の世界に住んでいた時、祭式のために規定に従って設置された三種の火を〔地上に〕もたらしたのであった。(二一)

プルーラヴァスとウルヴァシーとの間に、六人の息子が生まれた。すなわち、アーユス、ディーマット、アマーヴァス、ドリダーユス、ヴァナーユス、シュルターユスである。(二二)アーユスとスヴァルバーナヴィーとの間に、六名の息子がいた。それがナフシャ、ヴリッダシャルマン、ラジ、ランバ、ガヤ、アネーナスである。(二三)

ナフシャはアーユスの息子である。この王は聡明で、真実(サティヤ)を守り、法(ダルマ)に従って、広大な王国を統治した。(二四)ナフシャは、祖霊、神々、聖仙、学者、ガンダルヴァ、蛇、羅刹たち、及び、バラモン、王族(クシャトリヤ)、実業者(ヴァイシュ)たちを守護した。(二五)彼は悪魔(ダスユ)の群を殺したが、聖仙たちに租税を払わせた。そして強力な彼は、まるで家畜のように、聖仙たちに輿を肩でかつがせた。(二六)そしてその威光と苦行と武勇と精神力により神々を圧倒して、自らをインドラ(神々の王)の位につけさせたのである。(二七)

ナフシャはプリヤヴァーサスに、ヤティ、ヤヤーティ、サンヤーティ、アーヤーティ、パンチャ、ウッダヴァという六人の息子を生ませた。(二八)ナフシャの息子ヤヤーティは、不屈の勇気を持つ帝王であった。彼は地上を守護し、ありとあらゆる多様な祭祀を行なった。(二九)彼は常に、力の限り祖霊と神々を敬うことに専念した。無敵のヤヤーティは、一切の臣民に恩恵を与えた。(三〇)彼の息子たちは偉大な戦士で、ありとあらゆる美質に恵まれていた。彼らは、デーヴァヤーニーとシャルミシターとの間に生まれた。(三一)デーヴァヤー

ニーには、ヤドゥとトゥルヴァスとが生まれた。シャルミシターには、ドルフュとアヌとプールが生まれた。（三二）
　ヤヤーティは長年の間、法（ダルマ）により臣民を守護していたが、〔ウシャナスの呪いにより〕非常におぞましい、容色を破壊する老齢に達した（一・七八以下参照）。（三三）老いに苦しむ王は、息子のヤドゥ、プール、トゥルヴァス、ドルフュ、アヌを呼んで言った。（三四）
「私は若者となり、若さにより諸欲を享受し、若い女たちとともに楽しみたい。息子たちよ、私を助けてくれ。（三五）」
　デーヴァヤーニーの生んだ長男のヤドゥが言った。
「私たちと若さが、あなたにとって何になるのですか。（三六）」
　ヤヤーティは彼に言った。
「私の老いを引き受けてくれ。お前たちの若さにより、私は諸楽を享受したいのだ。（三七）息子たちよ、私が長期の祭祀を行なっていた時、聖者ウシャナスが私を呪い、そのため私は享楽（カーマ）を追求することができなくなり、それで苦しんでいるのである。（三八）お前たちのうちの一人が、私の体をとって、王国を治めてもらいたい。私は新しい体になって若返り、諸欲を享受したい。（三九）」
　ヤドゥたちは彼の老いを引き受けなかった。すると、不屈の勇者である末の息子のプールが彼に言った。（四〇）
「王様、新しい体によって、若返って楽しみなさい。私は老いを受け取って、あなたの命により王国を治めましょう。（四一）」
　そのように言われて、王仙は苦行の力によって、偉大な息子に、老いを転送した。（四二）王はプールの若さにより青春を取りもどした。またプールは、ヤヤーティの老いを引き受けて、王国を治めた。（四三）それから千年が過ぎても、無敵のヤヤーティは、諸々の享楽に飽き足りることはなかった。そして息子のプールに告げた。（四四）
「私はお前により後継者を得た。お前は私の家系を担う息子だ。お前の家系は世にパウラヴァ（プールの家系）と呼ばれるようになろう。（四五）」
　それからその虎のような王は、プールを王位につけて、長い期間が過ぎた後、時間（カーラ）の法（ダルマ）に従った（死んだ）。（四六）
（第七十章）

蘇生の術

　ジャナメージャヤは言った。
「我々の先祖、造物主（プラジャーパティ）から十代目のヤヤーティは、どのようにしてこよなく得がたいシュクラの娘（デーヴァヤーニー）を得たのですか。（一）最高のバラモンよ、私はそれを聞きたい。また、プールの家系の継承者たちを、一人一人、順に語って下さい。（二）」
　ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヤヤーティは神々の王（インドラ）のように輝かしい王仙であった。かつてシュクラ（ウシャナス）とヴリシャパルヴァン（魔王の名）とは、彼を〔娘たちの夫として〕選んだ。(三)ジャナメージャヤよ、あなたの問いに答えて、私はその次第を語るであろう。また、ナフシャの息子ヤヤーティが、デーヴァヤーニーと結ばれた次第を。(四)

動不動のものを含む三界の主権をめぐって、神々と阿修羅（悪魔）たちの間に抗争が生じた。(五)神々は勝利を願って、アンギラスの息子である聖者（ブリハスパティ）を、祭祀のための司祭として選んだ。他方はウシャナス・カーヴィヤを選んだ。この二人のバラモンは、常に激しく張り合っていた。(六)

神々はその戦いにおいて、群がる悪魔（ダーナヴァ）たちを殺した。しかし、ウシャナスは術の力によって、彼らを生き返らせた。そこで彼らは再び立ち上り、神々に戦いを挑んだ。(七)今度は阿修羅（悪魔）たちが、激戦において神々を殺した。しかしブリハスパティは、この上なく聡明ではあったが、神々を生き返らせることはできなかった。(八)というのは、彼は強力なウシャナスが知っている蘇生の術を知らなかったからである。そこで神々はすっかり悲嘆に暮れた。(九)

ウシャナス・カーヴィヤを恐れた神々は、ブリハスパティの長男であるカチャのところに行って言った。(一〇)

「あなたを愛している我々を愛してくれ。我々に最高の援助をしてくれ。無量の威力を有するバラモンのシュクラに存するあの術を、速やかに獲得してくれ。そうすれば、あなたは

我々の配分に預れるであろう。(一一)あなたはヴリシャパルヴァンのところでそのバラモンに会えるであろう。彼は悪魔たちを守るが、そうでないものは守ってくれないのである。(一二)あなたは若いから、あの聖者（カヴィ）（ウシャナス）と、その偉大な人物の愛娘のデーヴァヤーニーの好意を得ることができる。(一三)あなただけが彼の好意を受けられるのであって、他に誰もいない。徳性と礼儀と優しさ、立居振舞、自制によって、デーヴァヤーニーを満足させれば、必ずやあの術を得ることができよう。」(一四)

ブリハスパティの息子カチャは、「承知しました」と言うと、神々に敬意を表されて、ヴリシャパルヴァンのもとへ行った。(一五)

カチャは神々に派遣されて、道を急ぎ、阿修羅の王の都でシュクラ（ウシャナス）に会って、こう言った。(一六)

「私はアンギラス仙の孫で、ブリハスパティの実子の、カチャという名前のものです。私を弟子として受け入れて下さい。(一七)私はお師匠様のもとで、最高の梵行（学習、禁欲生活）をいたします。バラモンよ、千年の間、私を受け入れて下さい。」(一八)

シュクラは言った。

「カチャよ、ようこそ。私はお前の言葉を承諾する。私は尊敬に価するお前に敬意を払う。ブリハスパティも尊敬されるべきである。」(一九)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

カチャは、カヴィの息子シュクラ・ウシャナスが自ら命じた誓戒を、「かしこまりました」と言って受け入れた。（二〇）彼は、師とデーヴァヤーニーとの機嫌を取りつつ、言われた通りの誓戒の期間を受け入れた。（二一）青春の絶頂にある若者は、常にデーヴァヤーニーの機嫌を取り、歌い、踊り、楽器を奏で、彼女を満足させた。（二二）彼は青春に達した娘のデーヴァヤーニーのところに入りびたり、花や果実により、また使い走りをすることにより、彼女を満足させた。（二三）デーヴァヤーニーは、その誓戒を守るバラモンを愛し、女性らしく密かに彼の世話をした。（二四）

このようにして、カチャが誓戒を守っているうちに五百年が過ぎた。その時、悪魔たちは、彼がカチャであることを知った。（二五）彼が一人、人気（ひとけ）のない森で牛の番をしているのを見て、彼らはブリハスパティに対する怨みから、また、術を守るために、怒って彼を殺した。殺してから彼をこま切れにして、ジャッカルどもに与えた。（二六）

それから牛たちは、牛番なしで、そのすみかに帰った。デーヴァヤーニーは、牛たちがカチャなしで森から帰ったのを見て、〔火供（アグニホートラ）を行なう〕時間に言った。（二七）

「お父様、火供はまだ行なわれていません。太陽が沈みます。牛たちは牛番なしで帰って来ました。お父様、カチャはおりません。（二八）お父様、きっとカチャは殺されたか、死んでしまったのでしょう。私はカチャなしでは生きることができません。本当です。（二九）」

シュクラは言った。

「私は『ここにもどって来い』と言うことにより、死者を生き返らせることができる。（三〇）」

「ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから彼は蘇生の術を用いて、カチャを呼んだ。呼ばれて、カチャは術のおかげで無事に出て来た。彼はバラモンの娘に問われ、「私は殺されました」と告げた。（三一）

このバラモンは、たまたまデーヴァヤーニーに花を摘んで来るようにと言われて、再び森へ行ったところ、悪魔たちが彼を見つけた。（三二）彼らは再度彼を殺し、焼いて、粉にした。そして阿修羅たちは、それを酒の中に入れて、バラモン（シュクラ）に与えた。（三三）一方、デーヴァヤーニーは再び父に言った。

「カチャは花摘みのため使いに行きましたが、いなくなりました。（三四）」

シュクラは言った。

「娘よ、ブリハスパティの息子カチャは冥界に行った。術によって生き返らされても、このように殺されてしまう。私は何をすればよいのか。（三五）そのように嘆くな。デーヴァヤーニーよ、泣くな。お前のような女は、人間のことを嘆き悲しむものではない。一切の神々、全世界は、さしせまった変異に頭を下げるものだ。（三六）」

デーヴァヤーニーは言った。

「彼の祖父は古（いにしえ）の聖仙アンギラスです。そして父は、苦行を積んだブリハスパティです。聖仙の息子であり、また孫である彼のことを、どうして嘆いては、泣いてはいけないのですか。

(三七) 彼は梵行者（禁欲を守る学生）で、苦行を積んでいます。いつも精励で、諸事に巧みです。私はカチャの道を辿ります。もう食事をしません。お父様、私はあの美しいカチャを愛していますから。(三八)」

シュクラは言った。

「疑いもなく阿修羅たちは私を恨んでいる。罪もない私の弟子を殺すとは。恐ろしい彼らは私を非バラモンにしようと望んで、いつも道に外れたことをする（異本による）。ここでこの罪過が終わらんことを。バラモン殺しは何人(なんぴと)を焼かないだろうか。それはインドラをも焼く。(三九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

デーヴァヤーニーにせきたてられて、大仙カーヴィヤ（シュクラ）は、大急ぎでブリハスパティの息子カチャを再び呼んだ。(四〇) 術によって呼び出された彼は、師を恐れて、その腹の中で静かに返事をした。師はたずねた。

「バラモンよ、いかなる経路によって私の腹に入ったのか。答えなさい。(四一)」

カチャは言った。

「先生のおかげで記憶がもどりました。起こったことをすべて思い出しました。それにしましても、私の苦しみはなくなりません。そこでこの恐ろしい苦痛に耐えております。(四二) 阿修羅たちは私を殺して燃やし、粉にして酒の中に入れ、あなたに与えたのです。あなたがおられるのに、阿修羅の幻力がどうしてバラモンの幻力(マーヤー)を凌駕できるのですか。(四三)」

シュクラは言った。

「娘よ、今お前のために私はどうすればよいのか。私が死ねばカチャは生きながらえるであろう。デーヴァヤーニーよ、私の腹を裂く以外には、私の中にいるカチャが外に出る方法がない。(四四)」

デーヴァヤーニーは言った。

「二つの火のような悲しみが私を焼きます。カチャの死と、あなたの死という……。カチャが死ねば私の幸せはありません。お父様が死ねば私は生きることができません。(四五)」

シュクラは言った。

「ブリハスパティの息子よ、お前は完全な姿をとるであろう（または「成功した」）。デーヴァヤーニーが献身的なお前を愛しているから。この蘇生の術を取得せよ。お前がカチャの姿をとったインドラでなければ。(四六) 他の誰も、生き返って私の腹から出ることはできない。ただ一人のバラモンを除いて。それ故、術を取得しなさい。(四七) 私の息子となり、私に生き返らされたら、わが子よ、この腹を出てから、また私を生き返らせてくれ。師から術を得て術を手中にしたら、お前は法(ダルマ)にかなった配慮をすべきである。(四八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

美しいバラモンのカチャは、師から術を授かると、師の右の腹を破って出た。白月（月が満ちる十

四日間）の終わり、満月の夜の月のように。（四九）カチャの方も、碩学の師が死んで倒れているのを見ると、修得した術を用いて彼を生き返らせた。それからカチャは、師に挨拶して、次のように言った。（五〇）

「至高の真実（リタ）を与える者、四分をそなえる宝庫（四ヴェーダ聖典）の宝庫である、敬うべき師を尊敬しない人々は、定めなき悪しき世界（地獄）に赴く。（五一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

飲酒のために錯乱し、おぞましくも正気を失ったので、また、酒に迷わされて美しいカチャを飲んでしまったことを知り、（五二）威厳に満ちたウシャナス・カーヴィヤは怒って立ち上がり、バラモンの幸せを願い、飲酒に対し警告して、自ら次のように述べた。（五三）

「今日以降、この世でバラモンが迷って理性を失い、酒を飲んだら、その者は法（ダルマ）を欠き、バラモン殺しとなり、この世と来世において非難されるであろう。（五四）私は全世界において、このバラモンの法を説く規定を制定する。師に仕える善きバラモンたち、神々、全世界の人々は、みなこの規定を聞け。（五五）」

このように言ってから、その威厳に満ちた、無比の苦行者である聖仙は、運命により理性を失った悪魔たちを呼び集めて言った。（五六）

「悪魔たちよ、私は汝らに告げる。汝らは愚かである。カチャは目的を成就して、私のもとにとどまるであろう。彼は非常に有益な蘇生の術を得て、バラモンでありながら梵天（ブラフマー）に等

しい力をそなえている。（五七）」

カチャは師のもとに千年間住んでから、去ることを許されて、神々の住む所へ行こうと考えた。（五八）　（第七十一章）

恋人の呪い

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

カチャが誓戒を完了し、師に別れを告げ、神々の住む所へ出発する時、デーヴァヤーニーは彼に言った。（一）

「聖仙アンギラスの孫よ。行為、生まれ、学術、苦行、自制によりあなたは輝いています。（二）私の父が高名なアンギラス仙を尊敬するように、私もまたブリハスパティを尊敬いたします。（三）このように知って、苦行者よ、私が申し上げることを理解して下さい。あなたが誓戒を守り、自制を保っていた時、私があなたのためにしたことを考慮して。（四）あなたは術を修得しましたから、あなたを愛している私を愛して下さい。聖句（マントラ）とともに、儀軌に従って、私の手をとって下さい。（五）」

カチャは答えた。

「私はあなたの父である聖者を尊敬するように、非の打ち所のない身体の女（ひと）よ、あなたを非常に尊敬しています。（六）あなたは偉大なシュクラにとって、自分の生命よりも愛しい人だ

から。お嬢さん、私は師の娘であるあなたを、法（ダルマ）に従って、常に尊敬いたします。(七) あなたの父である師シュクラを常に尊敬するように、デーヴァヤーニーよ、あなたを尊敬します。私にそのように言ってはなりませぬ。(八)」

デーヴァヤーニーは言った。

「あなたは私の父の師の息子ではありませんか（異写本によりテクストを修正）。ですから、最高のバラモンよ、私もまたあなたを尊敬します。(九) カチャよ、あなたが阿修羅たちに何度も殺されかけた時、私が示した好意をどうか思い出して下さい。(一〇) 友情と愛情にかけて、私の最高の献身を知って下さい。法を知る人よ、愛している罪もない私を捨ててはいけません。(一一)」

カチャは言った。

「殊勝な誓戒を保つ女（ひと）よ、あなたは命ずべきでない命令を私に命ずる。美しい女よ、お許し下さい。あなたは私にとって師よりも尊重すべき方なのです。(一二) 切れ長の眼の女よ、月のような顔の女よ、あなたが宿ったカーヴィヤ（シュクラ）の腹に、私も住んでいました。(一三) あなたはまさしく私の妹です。美しい顔の女よ、そのように言ってはなりませぬ。お嬢さん、私は幸せに暮らしました。私には思い残すことはありません。(一四) さようなら。私は出発します。道中の無事を祈って下さい。法に背くことなく、話が出たら私のことを思い出して下さい。怠ることなく精を出して、私の師をいつも敬って下さい。(一五)」

デーヴァヤーニーは言った。

「カチャよ、これほど頼んでも、もしあなたが法と性愛と実利にかけて私を拒絶するなら、あなたの術は成就しないでしょう。(一六)」

カチャは言った。

「師の娘であるから、私はあなたを拒絶した。過失があるからではない。師は私が去ることをお許しになった。私を呪うならそれもいいでしょう。(一七) 私は聖仙の法を述べているのです。デーヴァヤーニーよ、今あなたは呪詛に価しない私を呪った。それも法からではなく欲望から。(一八) それ故、あなたの欲望は実現しないでしょう。いかなる聖仙の息子もあなたの手をとらない（結婚しない）でしょう。(一九) あなたが私に『あなたの術は成就しない』と告げたことは、その通りになるでしょう。しかし、私が誰かにそれを教えれば、彼の術は効力を持つでしょう。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

最高のバラモンのカチャは、デーヴァヤーニーにこのように告げて、神々の住処に速やかに行った。(二一) インドラをはじめとする神々は、彼が来たのを見て、ブリハスパティに敬意を表し、喜んでカチャに言った。(二二)

「汝は我々のために、非常に驚くべき行為をなしたから、汝の名声は不滅となり、我々の配分を受けるであろう。(二三)」

（第七十二章）

召使になった王女

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

カチャが術を修得してもどった時、神々は喜び、カチャから例の術を学んで、目的を達した。（一）彼らはこぞって集まって、インドラに言った。

「インドラよ、今こそ敵に対しあなたの武勇を示す時です。（二）」

「承知した」と答えてインドラは、神々を従えて出発した。彼は森の中で女たちを見た。（三）ところが彼は、女たちがチトララタの園（クベーラ神の庭園）のような森の中で遊んでいる間に、風となって、〔脱いであった〕すべての衣服をまぜこぜにしてしまった。（四）娘たちはそろって水から上がると、それぞれ手もとにある衣服を取った。（五）ヴリシャパルヴァン（魔王の名）の娘シャルミシターは、衣服が混じり合っているのを知らず、デーヴァヤーニーの衣服を取った。（六）そこでそのために、二人の娘は喧嘩を始めた。（七）

デーヴァヤーニーは言った。

「阿修羅の娘よ、あなたは私の弟子なのに何故私の着物を取ったの。あなたは失礼なひとだから、いいことはないでしょうよ。（八）」

シャルミシターは答えた。

「私の父が座っている時も寝ている時も、あなたの父親は、つつましくへりくだって、いつ

も父をほめ讃えているわ。（九）あなたは、乞い、讃え、ものをもらう人の娘よ。私は、讃えられ、与え、もらわない人の娘なの。（一〇）乞食女よ、あなたは武器を持たず、貧しくて、武器を持つ私の前でふるえている。いつでも相手になってあげるわ。私はあなたなんて問題にしないから。（一一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

デーヴァヤーニーは憤然として、衣服をつかんだが、シャルミシターは彼女を井戸につき落して自分の都へ帰った。（一二）邪見になったシャルミシターは、彼女は死んだと思い、激しく怒っていたので、調べもしないで立ち去った。（一三）

その時、ナフシャの息子ヤヤーティがその場にやって来た。彼は狩猟をしていたが、輓馬は疲れ、乗用馬も疲れ、彼も渇きを感じていた。（一四）彼は水の無くなった井戸をのぞいた。すると、そこに燃える火焔のような娘がいるのを見た。（一五）最高の王は、その神のように美しい娘を見ると、この上なく甘美な声で慰めながら、彼女にたずねた。（一六）

「赤い爪をし、浅黒く、輝かしい宝玉と耳環をつけたあなたは誰か。あなたは何故、長く考えこみ、ひどく嘆息して悩んでいるのか。（一七）また、どうして蔓草におおわれたこの井戸に落ちたのか。あなたは誰の娘か。美しい腰の女よ、すべてを語れ。（一八）」

デーヴァヤーニーは言った。

「私はシュクラの娘です。神々に殺された悪魔（ダイティヤ）を術で生き返らせる、あのシュクラです。

彼はきっと、私がどこにいるか知りません。(一九) ここに赤い爪をした私の右手があります。それを持って私を引き上げて下さい。あなたは良家の方のように思われますので。(二〇) あなたは静寂で強力で高名であると私は考えます。井戸に落ちた私を、井戸から引き上げて下さい。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ナフシャの息子（ヤヤーティ）は、それがバラモンの娘であると知って、右手をとって井戸から引き上げた。(二二) ヤヤーティ王は彼女を急いで井戸から引き上げると、その美しい尻の女に別れを告げて、自分の都へ帰った。(二三)

デーヴァヤーニーは〔召使女のグールニカーに会って〕言った。

「グールニカーよ、急いで行って、すべてをお父様に申し上げなさい。もう私はヴリシャパルヴァンの都へは入らないから。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

グールニカーは急いで、阿修羅の宮殿へ行き、カーヴィヤ（シュクラ）を見ると、あわてて告げた。(二五)

「申し上げます。大先生。ヴリシャパルヴァンの娘シャルミシターが、森でデーヴァヤーニーに危害を加えました。(二六)」

カーヴィヤは、娘がシャルミシターに危害を加えられたことを聞くと、心配して、急いで森に娘を探しに行った。(二七) 彼は森で娘を見つけると、両腕で抱きしめ、苦しんでこう言った。(二八)

「すべての人々は、自己の過失により苦楽を受ける。お前は何か悪いことをしたから、そのような仕返しをされたのだろう。(二九)」

デーヴァヤーニーは言った。

「私が仕返しされたにせよ、そうでないにせよ、注意して私の話を聞いて下さい。私がシャルミシターに言われたことは本当なのですね。彼女は、あなたが悪魔たちのための歌手だと言ったのよ。(三〇) あの女は、怒りで眼を真っ赤にして、こんなひどい暴言を吐いたのです。(三一)『あなたは、讃え、乞い、ものをもらう人の娘よ。私は、讃えられ、与え、もらわない人の娘なの(三二)』シャルミシターは怒りで眼を赤くし、高慢ちきに、何度も私にそう言いました。(三三) お父様、もし私が、讃え、ものをもらう人の娘なら、私はシャルミシターに許しを乞うでしょう。私はそのように友達に申しました。(三四)」

シュクラは言った。

「お前は、讃え、ものをもらう者の娘ではない。デーヴァヤーニーよ、お前は、讃えられ、讃えることのない者の娘である。(三五) ヴリシャパルヴァン自身がそれを知っている。インドラもヤヤーティ王も知っている。実際、私には、不可思議なブラフマン（ヴェーダ、あるいはその言葉の呪力）の力、対抗するもののない至上の力があるのだ。(三六)」

（第七十三章）

シュクラは続けた。

「デーヴァヤーニーよ、常に他人の非難に耐える人は、すべてに勝利していると知れ。(一) 湧き上る怒りを、奔馬を制するように制御する人は、善き人々により『御者』と呼ばれる。手綱につかまっている者はそうは呼ばれない。(二) デーヴァヤーニーよ、湧き上る怒りを、怒らぬことにより捨てる人は、このすべてに勝利していると知れ。(三) 湧き上る怒りを、蛇が古い皮を捨てるように、忍耐によって捨てる人は、まさに男（プルシャ）であると言われる。(四) 怒りを抑え、他人の非難に耐える人、苦しめられても苦しめない人は、まさしく利益（アルタ）の器である。(五) 月ごとに、孜々として、百年の間、祭祀を行なう人と、すべてに対し怒らない人とを比べると、怒らぬ人の方が優れている。(六) 心ない男の子や女の子がいがみ合ったからといって、知者はそれをまねてはいけない。彼らは何が大切で何が大切でないかを知らないのだ。(七)」

デーヴァヤーニーは言った。

「お父様、私は子供ですが、種々の法（ダルマ）をわきまえています。また、怒らぬことと、非難とについて、何が大切で何が大切でないかを知っております。(八) でも、幸福を望む人は、弟子らしくふるまわない弟子を許すべきではありません。ですから、私はけじめのない人たちのところに住みたくないのです。(九) 仕事や生まれのことで非難する、そういう知性のない人々の間に、幸せを望む知者は住むべきではありません。(一〇) 仕事や生まれのことで理解してくれる、そういう善い人々の間に住むべきです。そこに住むのは最上であると言われます。(一一) あのシャルミシターのおぞましい暴言ほどひどいものは、三界（全世界）にも存在しないと思います。富貴のない人が輝かしいライバルの富貴を崇拝するなんて。(一二)」

（第七十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そこで、ブリグ家の長カーヴィヤ（シュクラ）は、怒ってヴリシャパルヴァンが座っているところへ行き、ためらうことなくこう言った。(一)

「王よ、不正な行為は、牝牛のようにすぐに果報をもたらすものではない。悪は、もし現在自分に果をもたらさなくても、子供や孫たちにおいて、必ずや果をもたらす。腹における過食のように。(二) あなたはあの時、アンギラスの孫カチャを殺した。善良で、法（ダルマ）を知り、私の家で献身的に仕えていた弟子を。(三) 死に価しない彼を殺そうとしたから、また、私の娘を殺そうとしたから、ヴリシャパルヴァンよ、よく聞きなさい。私はあなたとその一族を捨てる。王よ、あなたの領内で、あなたとともに住むことはできない。(四) ああ、悪魔よ、私が嘘を言うと思うのか。この自己の罪を抑止しようとせず、無視するとは。(五)」

ヴリシャパルヴァンは言った。

「シュクラよ、あなたにあって、法にもとることや虚言があるとは考えない。あなたには法と真実とが存する。どうか我々を許していただきたい。（六）もしあなたが我々を捨てて行かれたら、我々は海に入るでしょう。他に頼る人がいませんから。（七）」
　シュクラは言った。
「阿修羅たちよ、海に入るなり、諸方へ走るなりするがよい。私は娘に対する不快な仕打ちに我慢できない。あれは私の可愛い娘だから。（八）デーヴァヤーニーが満足するようにしなさい。私の生命はあれにかかっているから。ブリハスパティがインドラの安寧をもたらすように、私としてはあなたの安寧をもたらしたいのだ。（九）」
　ヴリシャパルヴァンは言った。
「阿修羅の王たちがこの世で所有する財産は何であっても、象でも牛でも馬でも、あなたはその持主であり、また私の主人でもある。（一〇）」
　シュクラは言った。
「偉大な阿修羅よ、悪魔の王たちが所有する財産が何であっても、私がその持主となろう。もしデーヴァヤーニーがあなたに満足するなら。（一一）」
　デーヴァヤーニーは言った。
「お父様、もしあなたが王と財産の持主だとしても、私はあなたがそうだと認めることができません。王自身が証明して下さい。（一二）」
　ヴリシャパルヴァンは言った。

「美しい微笑のデーヴァヤーニーよ、あなたが望むことは、たとえどのように得がたいものでも、私はあなたにさし上げます。（一三）」
　デーヴァヤーニーは言った。
「シャルミシターが、千人の侍女とともに、私の召使になることを望みます。そして、私の父が私を〔嫁に〕やるところにもついて来なければなりません。（一四）」
　ヴリシャパルヴァンは言った。
「乳母よ、立ちなさい。シャルミシターをすぐに連れて来なさい。デーヴァヤーニーが望んだことは何でもやらなければいけない。（一五）」
　ヴァイシャンパーヤナは語った。――
　そこで乳母はシャルミシターのところに行って告げた。
「お姫様、お立ちなさい。一族の幸福をもたらして下さい。（一六）あのバラモンは、デーヴァヤーニーにせかされて、弟子たちを捨ててしまいます。無邪気な方よ、これからは、彼女が望むことは何でもやらなければなりません。（一七）」
　シャルミシターは言った。
「今は、彼女が望むことは何でもいたします。シュクラとデーヴァヤーニーが、私のせいで出て行くことがありませんように。（一八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから彼女は、父の命により、千人の侍女に囲まれ、輿に乗って、急いで美しい都城から出て行った。(一九) シャルミシターは言った。

「私は千人の侍女とともに、あなたの召使、下女となります。あなたのお父様があなたを(嫁に)やるところにもついて行きます。(二〇)」

デーヴァヤーニーは言った。

「私は讃え、ものをもらう讃嘆者の娘です。讃えられる人の娘であるあなたが、どうして召使になるの。(二一)」

シャルミシターは答えた。

「人はいかなることをしても、苦しむ親族のために幸福をもたらさねばなりません。そこで、あなたのお父様があなたを与えるところにもついて行くのです。(二二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヴリシャパルヴァンの娘が召使となる約束をした時、デーヴァヤーニーは父に告げた。(二三)

「お父様、都に入りましょう。最高のバラモンよ、私は満足しました。あなたの知識と術の力とは空虚ではありませんでした。(二四)」

娘にこう言われて、その誉れ高い最高のバラモンは、喜んで、すべての悪魔たちに尊敬されつつ、都に入った。(二五)

(第七十五章)

ヤヤーティの結婚

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

さて、長い時が経過して、美しいデーヴァヤーニーは、あの同じ森へ遊びに出かけた。(一) 彼女は、千人の侍女を連れたシャルミシターとともに、例の場所に行って、気の向くままに散策した。すべての女友達とともに、こよなく楽しみながら。(二) 蜜酒を飲み、種々の食物を食べ、果実を食べて、みなして楽しく遊んだ。(三) ヤヤーティ王も、狩猟をしているうちにたまたまその場所にやって来た。疲れ果てて、水を探して。(四) 彼はデーヴァヤーニーやシャルミシターやその他の女たちを見出した。彼女たちは神々しい装身具に飾られ、飲物を飲み、遊び戯れていた。(五) 彼は美しい微笑のデーヴァヤーニーを認めた。その美しい女性は、女達の間に座っていたが、容色の点で比べるものがなかった。シャルミシターが、足をさすったりして、彼女に仕えていた。(六)

ヤヤーティは言った。

「二人の娘さんが、二千人の侍女に囲まれている。お二人の姓と名前をお聞きしたい。(七)」

デーヴァヤーニーは答えた。

「申し上げましょう。王様、お聞き下さい。シュクラという阿修羅の師がいます。私は彼の

娘です。(八) ここにいるのは私の友達(付き人)であり、どこでも私の行くところにつき従う召使です。悪魔の王ヴリシャパルヴァンの娘シャルミシターです。(九)」
ヤヤーティはたずねた。
「この美しいあなたの友達は、阿修羅の王の娘でありながら、どうして召使となったのですか。美しい眉の女(ひと)よ、私はとても興味があります。(二〇)」
デーヴァヤーニーは答えた。
「虎のような方よ、すべての人が運命に従います。運命が定めたこととお思いになって、あれこれとおたずねにならないで下さい。(二一) あなたの姿と衣裳は王様のようです。また、言葉はバラモンの言葉づかいであるようです。あなたは何というお名前で、どこから来られ、どなたの息子なのですか。おっしゃって下さい。(二二)」
ヤヤーティは言った。
「私は学生期(がくしょうき)に、すべてのヴェーダ聖典を修得した。私は王族の息子で、ヤヤーティ王として知られている。(二三)」
デーヴァヤーニーはたずねた。
「どのような目的でこの場所に来られたのですか。蓮花を摘むためですか、それとも狩猟のためですか。(二四)」
ヤヤーティは答えた。
「美しい女(ひと)よ、私は狩猟をしていて、水を求めてここに来た。私は多くの質問(に答えました)。もう失礼することにする。(二五)」
デーヴァヤーニーは言った。
「二千人の侍女と、召使のシャルミシターとともに、あなたにお仕えします。あなた様に幸せがありますように。私の友に、私の夫になって下さい。(二六)」
ヤヤーティは言った。
「ウシャナスの娘さん、あなたに幸せがあるように。わかって下さい。美しい女よ、私はあなたにふさわしくありません。デーヴァヤーニーよ、あなたの父上は王族にあなたを嫁がせないでしょう(バラモンの娘が王族と結婚することは適切でないとされる)。(二七)」
デーヴァヤーニーは言った。
「バラモンは王族(クシャトラ)と混交しています。王族もバラモンと結びついています。あなたは聖仙で、聖仙の息子です。ナフシャの子よ、さあ、私を娶って下さい。(二八)」
ヤヤーティは答えた。
「美しい女よ、四つの種姓(ヴァルナ)は一つの体(神人プルシャの体)から生じました。しかし、彼らの法(ダルマ)(職分)は異なり、何が清浄であるかも異なります。それらのうちでバラモンが最高です。(二九)」
デーヴァヤーニーは言った。
「ヤヤーティよ、あなたの他に、いまだ私の手をとった男はいません。あなたは以前、私の手をおとりになりました。そこで、私はあなたを選びます。(三〇) 他の男がどうして私のように慎み深い女の手に触れられましょうか。聖仙であり聖仙の息子であるあなたは、自らそ

の手をとったのです。(二一)」
ヤヤーティは言った。
「バラモンは猛毒の蛇よりも、あらゆる方面に広がる火よりも制しがたいと知者は〔知っている〕。(二二)」
デーヴァヤーニーはたずねた。
「どうして、バラモンは猛毒の蛇よりも、あらゆる方面に広がる火よりも、制しがたいとおっしゃるのですか。雄牛のような方よ。(二三)」
ヤヤーティは言った。
「毒蛇は一人を殺す。武器は一人を殺す。怒ったバラモンは、都城と領土とを滅ぼす。(二四) それ故、娘よ、バラモンは制しがたいと私は思う。だから愛らしい娘よ、父に与えられないうちは、私はあなたを娶らない。(二五)」
デーヴァヤーニーは言った。
「それでは、父が与えたら私を娶って下さい。王よ、私はあなたを選んだのです。要求しないで、与えられたものを受け取る人には、恐れることはありません。(二六)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
そこでデーヴァヤーニーは、急いで自分の父に使いを出した。シュクラはそのことを聞くとすぐに王に会いに来た。(二七) やって来たシュクラを見るやいなや、ヤヤーティ王は合掌

し頭を下げて立ち、彼におじぎをした。(二八)
デーヴァヤーニーは言った。
「お父様、ここにおられる方がヤヤーティ王です。この方は、私の苦境において手をとって下さいました。お願いいたします。私をこの方に与えて下さい。この世で、他の人を夫に選びたくはありません。(二九)」
シュクラは答えた。
「私の愛しい娘があなたを夫に選びました。ナフシャの息子よ、私はこの娘を与えますので、王妃としてお受け下さい。(三〇)」
ヤヤーティは言った。
「シュクラよ、そのようにしても、種姓（ヴァルナ）を混乱させるという大なる非法（アダルマ）が私にふりかかりませんように！バラモンよ、このことをあなたにお願いします。(三一)」
シュクラは言った。
「非法に陥らないことを私が請（う）け合います。望みのままに彼女を娶りなさい。この結婚について尻込みしてはならぬ。私があなたの罪を除去してあげます。(三二) 美しい腰のデーヴァヤーニーを正式に妻にしなさい。あなたは彼女とともに、比べるもののない幸福を得るでしょう。(三三) そして、このヴリシャパルヴァンの娘シャルミシターも、常に尊敬されるべきです。だが、王よ、この娘を寝所に呼んではなりませぬ。(三四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そう言われてヤヤーティは、シュクラの周囲を右まわりにまわって敬意を表し、この偉大な聖仙に別れの挨拶をして、喜んで自分の都へ帰った。(三五)(第七十六章)

老人になったヤヤーティ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヤヤーティは大インドラの都のような自分の都に帰ると、宮中に入り、そこにデーヴァヤーニーを住まわせた。(二)そして彼女の許可を受けて、アショーカ樹林のそばに家を建てて、そこにヴリシャパルヴァンの娘、千人の侍女に取り巻かれた阿修羅の娘シャルミシターを住まわせた。衣料や飲食物を分かち与え、厚遇して。(三)

ヤヤーティ王は、デーヴァヤーニーとともに、神のようにこよなく楽しみつつ、長年の間暮らした。(四)美しいデーヴァヤーニーは、受胎に適した時期が来て、初めて懐胎し、男の子を生んだ。(五)また千年が過ぎた時、ヴリシャパルヴァンの娘シャルミシターは、青春期に達し、生理を見て考えた。(六)

「受胎期が来ても、私はまだ夫を選んでいない。どうしたのか。何をしたらよいのか。どうしたら目的がかなうのか。(七)デーヴァヤーニーは子を生んだが、私の青春は無駄である。彼女が夫を選んだように、私も彼を選ぼう。(八)王は私に子宝を授けるべきだと、私の心は

決まった。あの法(ダルマ)を守る王が今、私に密かに会いに来て欲しいものだ。(九)」

ちょうどその時、その王はたまたま外出して、アショーカ樹林のそばにシャルミシターを見つけて立ち止った。(一〇)王が一人で人のいない所にいるのを見て、美しく笑うシャルミシターは、手を合わせて進み出て、王に言った。(一一)

「ソーマ、インドラ、ヤマ、ヴァルナなどの神々と、あなた様の家においては、ヤヤーティ様、男は誰も女に触れることはできません。(一二)王様、あなたはいつも私のことを、容姿と生まれと性質がよいと思って下さいます。そこで私はお願いいたします。王様、どうか私に子宝を下さい。(一三)」

ヤヤーティは答えた。

「あなたがよい性質で、非難の余地のない悪魔の娘であることは知っている。また、あなたの容姿には、針の先ほどの欠点も認められない。(一四)しかし、デーヴァヤーニーを娶った時、ウシャナス・カーヴィヤ(シュクラ)が言った。ヴリシャパルヴァンの娘を寝所に呼んではいけないと。(一五)」

シャルミシターは言った。

「王よ、冗談で言われた嘘は罪がない。また、女性に対する嘘、結婚の時の嘘、生命の危機の際の嘘、全財産を失いそうな時の嘘、以上の五つの嘘は罪にはならないと言われます。(一六)証言を求められて虚偽を述べる者を嘘つきと呼ぶのです。王様。また、同一の内容を持つ証言が集まった場合に、不真実が虚偽を述べる者を害するのです。(一七)」

ヤヤーティは言った。
「王は生類の尺度である。もし嘘をつけば、彼は滅びるであろう。たとい困難な情況に陥っても、虚偽を述べることはできない。(一八)」
シャルミシターは言った。
「王様、夫と友人の夫とは同一であると考えられます。結婚は友人と共有すると言われます。あなたは私に、夫として選ばれました。(一九)」
ヤヤーティは言った。
「要求している人々には与えるべきである、と私は誓いを立てている。あなたは私に要求している。望みを言え。私は何をすべきなのか。(二〇)」
シャルミシターは言った。
「王様、私が法(ダルマ)にもとらぬよう、救って下さい。法を遂行させて下さい。あなたから息子を授かれば、私はこの世で最高の法を行なうことになります。(二一)王様、財産を持たないものが三つあります。妻と召使(隷奴)と息子です。彼らが得た財産は、彼らを所有する者に帰します。(二二)私はデーヴァヤーニーの召使です。そして彼女はあなたに属します。王様、彼女と私とは、あなたに属します。私を愛して下さい。(二三)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
王はそのように言われて、もっともだと考えた。そこでシャルミシターに敬意を払い、彼

女の言う法を遂行させてやった。(二四)そして、欲望のおもむくままに彼女を受け入れて、交わった。二人はお互いに愛し合って、もと来た道を引き返して行った。(二五)その交わりによって、美しいシャルミシターは、初めてその最高の王の子を宿した。(二六)それから、時至って、その青蓮のような眼の女は、神の子にも似た、青蓮のような眼をした息子を生んだ。(二七)

(第七十七章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
美しい微笑のデーヴァヤーニーは、シャルミシターに息子が生まれたことを聞くと、彼女のことで色々と思い悩んだ。(一)彼女はシャルミシターのところに行ってこうたずねた。
「美しい眉の女(ひと)よ、あなたは愛に焦がれてどんな罪を犯したの。(二)」
シャルミシターは答えた。
「ある、ヴェーダ聖典に通じた徳高い聖仙が来られました。その願いをかなえる方に、私は法(ダルマ)にかなった望み(愛性)をお願いしました。(三)美しい微笑の女よ、私は道ならぬ愛欲に身をまかせたのではありません。その聖仙から子供を得たのです。私は真実を申し上げます。(四)」
デーヴァヤーニーは言った。
「内気な女よ、本当なら結構なことだわ。そのバラモンについて知っているでしょう。その

バラモンの族姓（ゴートラ）と名前と生まれを知りたいわ。(五)」
シャルミシターは言った。
「その方は気力と威光により、太陽のように輝いていました。美しい微笑の女よ、その方を見たら、私はたずねることができませんでした。(六)」
デーヴァヤーニーは言った。
「シャルミシターよ、もしその通り、あなたが最高のバラモンから息子を授かったのなら、私は怒りません。(七)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
彼女たちは互いに語り合って、二人して笑った。デーヴァヤーニーは本当のことだと信じて帰って行った。(八)ヤヤーティ王はデーヴァヤーニーに二人の息子を生ませた。すなわち、ヤドゥとトゥルヴァスである。二人はまるでインドラとヴィシュヌのようであった。(九)シャルミシターは、その王仙により、ドルフュとアヌとプールという三人の息子を生んだ。(一〇)
それから、ある時、美しい微笑のデーヴァヤーニーは、ヤヤーティとともに大きな森へ行った。(一一)そこで彼女は、神々しい姿の三人の少年が屈託なく遊んでいるのを見て、驚いてたずねた。(一二)
「王様、この神の子のように美しい子供たちは誰の子ですか。その威光と容姿の点であなた

に似ているように思われますが。(一三)」
王にそうたずねてから、彼女は少年たちにたずねた。
「坊やたち、あなた方のお父さんはバラモンでしょう。何という姓名なの。正直におっしゃい。聞きたいの。(一四)」
子供たちは人差し指で他ならぬ大王を指し示した。そして、シャルミシターが母であると述べた。(一五)そう言って、彼らはそろって王に近づいた。しかし、デーヴァヤーニーの前なので、王は彼らを歓迎しなかった。そこで子供たちは泣いて、シャルミシターのところへ帰って行った。(一六)
王に対する子供たちの愛情を見て、王妃は真相を知って、シャルミシターに言った。(一七)
「あなたは私の召使でありながら、どうして私に不快なことをしたの。あなたはあの阿修羅の法（ダルマ）を守っている。どうして恐れないのですか。(一八)」
シャルミシターは答えた。
「私が聖仙だと言ったのは真実です。美しく笑う女（ひと）よ。私は道理と法に従って行動していますから、あなたを恐れません。(一九)あなたが王を選んだ時、私も王を選んだのです。法によれば、友人の夫は自分の夫ですから。美しい女よ。(二〇)私はあなたを尊敬しております。あなたは第一王妃ですばらしい方です。でも、私は王仙をあなたよりもずっと尊敬しております。それを御存知なかったのですか。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼女の言葉を聞くと、デーヴァヤーニーは言った。

「王様、私はもうここに住むことはできません。あなたはひどいことをしました。(二二)」

その美しい女は、眼に涙をため、突然立ち上ると急いでカーヴィヤ(ウシャナス、シュクラ)のもとへ行こうとした。王は彼女を見て悩み、取り乱して、なだめながらその後をついて行った。しかし、怒りで赤い眼をした彼女は、引き返さなかった。(二三―二四) 美しい眼をした女は、何も王に答えず、やがてウシャナス・カーヴィヤのところに着いた。(二五) 彼女は父を見ると、おじぎをして、その前に立った。すぐにヤヤーティもやって来て、ウシャナスに挨拶した。(二六)

デーヴァヤーニーは言った。

「非法(アダルマ)が法(ダルマ)に勝ちました。世の中はさかさまになりました。ヴリシャパルヴァンの娘シャルミシターに出し抜かれました。(二七) お父様、聞いて下さい。ヤヤーティ王はあの女との間に三人の息子を作りました。ところがこの不幸な私には、二人の息子しか作らなかったのです。(二八) この王は法を知っていることで有名ですが、その彼が道徳を逸脱したのですよ。(二九)」

シュクラ(ウシャナス)は告げた。

「大王よ、あなたは法を知る者でありながら、進んで非法を行なった。それ故、すぐに、打ち勝ちがたい老いがあなたを襲うであろう。(三〇)」

ヤヤーティは言った。

「聖者よ、私は、悪魔の王の娘が受胎期を〔無駄にしたくない〕と要求したので、法にかなったことをした。他に〔邪な〕考えがあったわけではない。(三一) 女が受胎期を〔迎えて〕要求しているのに、選ばれた男が与えないならば、ヴェーダに通じた人々は彼を胎児殺しと呼びます。(三二) 女が愛を望んで身をまかせる時、密かに要求された男が法に従って抱かなければ、知者たちは彼を胎児殺しと呼びます。(三三) このようなことを考慮して、法にもとることを恐れて、シャルミシターと交わったのです。(三四)」

シュクラは言った。

「あなたは私のことも考慮に入れなかったのか。王よ、あなたは私に依存しているのに。ナフシャの息子よ、法を曲解して行動することは窃盗行為だ。(三五)」

若返ったヤヤーティ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

かくて、怒ったウシャナス(シュクラ)は、ナフシャの息子ヤヤーティを呪った。彼は以前の若さを失って、突然、老年になった。(三六)

ヤヤーティは言った。

「私はデーヴァヤーニーに対して、十分に青春を楽しんでいません。バラモンよ、私に好意をかけて下さい。この老いが私に入りこみませんように。(三七)」

シュクラは答えた。

「私の呪いは偽りとはならぬ。王よ、あなたは老いてしまったのだ。しかし、もしあなたが望むなら、この老いを他者に転送することができる。(三八)」

ヤヤーティは言った。

「バラモンよ、私に若さを与える息子が、王国を得、功徳を得、名声を得るように、あなたが保証して下さい。(三九)」

シュクラは答えた。

「ナフシャの息子よ、心で私のことを考えるなら、思いのままに、老いを転送することができよう。そして、あなたは罪に陥ることはないであろう。(四〇) あなたに若さを与える息子は、王となるであろう。彼は長寿で、名声を得、多くの子孫を得るであろう。(四一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――　(第七十八章)

ヤヤーティは老齢になって、自分の都に帰った。そして、一番上の息子のヤドゥに言った。(一)

「息子よ、ウシャナス・カーヴィヤの呪いにより、老いと皺と白髪とが私に入りこんだ。そして、私はまだ若さに満ち足りていない。(二) ヤドゥよ、私の老いと罪とを引き受けてくれ。お前の若さにより、私は諸楽を享受したいのだ。(三) 千年たったら、お前に若さを返し、自分の老いと罪とを引き受けよう。(四)」

ヤドゥは答えた。

「老いにより、ひげと髪は白くなり、惨めで、よぼよぼになり、身体は皺だらけで、醜く、力が無くなり、やせる。(五) 仕事もできず、若者や、生活をともにしている人たちに軽蔑される。私はそんな老いを望みません。(六)」

ヤヤーティは言った。

「お前は私の心から生まれたのに、自分の若さをくれない。それ故、お前の子孫は王国を統治できないであろう。(七)

トゥルヴァスよ、私の老いと罪とを引き受けてくれ。息子よお前の若さにより、諸楽を享受したい。(八) 千年たったら、若さを返し、自分の老いと罪とを引き受けるであろう。(九)」

トゥルヴァスは答えた。

「老いは諸々の享楽を終わらせ、力と容色を滅ぼし、知性と生気を無くさせます。私はそんな老いを望みません。(一〇)」

ヤヤーティは言った。

「お前は私の心から生まれたのに、自分の若さをくれない。それ故、トゥルヴァスよ、お前

の子孫は絶滅するであろう。〔二一〕愚か者、お前は、けじめのない慣習と法（ダルマ）を持ち、種姓を乱し、肉を食う最低の人々の王となるであろう。〔二二〕お前は、師の妻を愛し、畜生の胎に生まれ、獣のようにふるまう、邪悪な野蛮人たちの間で統治するであろう。〔二三〕」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ヤヤーティは、このように自分の息子であるトゥルヴァスを呪ってから、シャルミシターの息子のドルフュに告げた。〔二四〕

「ドルフュよ、千年の間、顔色と容色を滅ぼす私の老いを引き受けて、自分の若さを与えてくれ。〔二五〕千年たったら、私は若さを返し、自分の若さと罪を再び引き受けるであろう。〔二六〕」

ドルフュは答えた。

「老人は、象も車も馬も女も享受しない。彼の言葉もおぼつかない。私はそんな老いを望みません。〔二七〕」

ヤヤーティは言った。

「お前は私の心から生まれたのに、自分の若さをくれない。それ故、ドルフュよ、お前が最も欲する願いは決して成就しないであろう。〔二八〕お前とお前に続く者たちは、王にはなれず、ボージャという名で呼ばれるようになり、いつも筏や小舟でしか渡れないような場所に至るであろう。〔二九〕

アヌよ、お前が老いを引き受けてくれ。私はお前の若さで、千年間楽しみたいのだ。〔三〇〕」

アヌは答えた。

「老人は、幼児のように、時ならぬ時に食物を食べ、しかも不潔である。適切な時に、火中に供物を投じない。私はそんな老いを望みません。〔三一〕」

ヤヤーティは言った。

「お前は私の心から生まれながら、自分の若さをくれない。それ故、お前にあげられた老いの欠点、〔それを〕お前は引き受けるであろう。〔三二〕そしてアヌよ、お前の子孫は、青春に達すると死ぬであろう。またお前は、もっぱら火〔を用いた祭式〕を行なえない者となろう。〔三三〕

プールよ、お前は私の愛し子である。お前は最上の子となろう。息子よ、ウシャナス・カーヴィヤの呪いにより、老いと皺と白髪とが私に入りこんだ。そして、私はまだ若さに満ち足りていない。〔三四〕プールよ、お前が老いと罪とを引き受けてくれ。お前の若さにより、少しの間、諸楽を享受したいのだ。〔三五〕千年たったら、若さを返し、自分の老いと罪とを引き受けるであろう。〔三六〕」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そう言われると、プールはすぐさま父に答えた。

「大王様、おっしゃる通りにいたします。(二七) 王よ、私はあなたの老いと罪とを引き受けます。私から若さをお受け下さい。お望み通り、諸楽を享受して下さい。(二八) 私は若さをあなたに与え、老いに包まれ、あなたの年齢と容貌を身に帯び、あなたがおっしゃることを実行いたします。(二九)」

ヤヤーティは言った。

「プールよ、わが子よ、私はお前に満足した。だから、お前に贈物をしよう。お前の子孫は、すべての願望がかなえられ、王国を治めるであろう。(三〇)」(第七十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

かくて最高の王、ナフシャの子ヤヤーティは、プールの若さにより、喜びに満ちて、好ましい諸楽を享受した。(一) 欲するがままに、気力に応じて、時に応じて、快適に。しかし法(ダルマ)にもとらないようにして、適切に。(二) 彼は祭祀により神々を満足させ、祖霊祭(シュラーッダ)により祖霊を満足させた。好ましい恩恵を与えることにより不幸な人々を満足させ、願いをかなえることにより最高のバラモンたちを満足させた。(三) 飲食により客人を、守護することにより実業者(ヴァイシャ)を、慈悲深さにより従僕(シュードラ)を満足させた。そして、悪党を抑圧することにより〔人々を〕満足させた。(四) 法によってすべての臣民を喜ばせて、ヤヤーティは、インドラ(帝釈天)の化身のように統治した。(五) 若返った王は、獅子のように勇猛であり、〔すべての感官の〕

対象を所有し、法に背くことなく、最高の快楽を享受した。(六)

王はすばらしい諸欲を得て、満ち足り、やがて疲れ、千年が終了する時期を思い出した。(七) 時間に通じた王は、種々の時間の単位を計算して、満期が来たと知り、息子のプールに告げた。(八)

「勇猛な息子よ、私はお前の若さにより、欲するがまま、気力に応じ、時に応じて諸楽を享受した。(九) プールよ、私は満足した。どうか自分の若さを受け取りなさい。そして、この王国も受けてくれ。お前は私によいことをしてくれた息子であるから。(一〇)」

こうしてヤヤーティは老いを受け取り、プールは再び自分の若さを取りもどした。(一一) 彼が末の息子のプールを王位につけようとした時、バラモンをはじめとする四姓の人々が言った。(一二)

「王よ、どうしてシュクラの孫でありデーヴァヤーニーの息子である長男のヤドゥをさしおいて、プールに王国を譲るのですか。(一三) ヤドゥがあなたの長男であり、彼の次にトゥルヴァスが生まれました。それから、シャルミシターの息子のドルフュ、アヌ、プールと続きます。(一四) どうして長男をさしおいて、末の子が王位につけるのですか。御忠告申し上げます。法(ダルマ)をお守り下さい。(一五)」

ヤヤーティは言った。

「バラモンをはじめとするすべての種姓の人々は、私の言葉を聞いてくれ。私が長男に王国をどうしても譲れないわけを。(一六) 長男のヤドゥは私の命令に従わなかった。善き人々は、

父に背く者を息子とは考えない。（一七）父母の言葉に従い、父母のためになり、有益な者が息子である。父母に対し、息子らしくふるまう者が息子である。（一八）ヤドゥは私を軽んじた。トゥルヴァスとドルフュとアヌも、ひどく私を軽蔑した。（一九）プールは私の言葉に従い、非常に私を敬った。彼は末の子だが、私の後継ぎである。彼は私の老いを引き受けたのだから。私の享楽は、息子にふさわしいプールによってもたらされた。（二〇）そしてシュクラ、すなわちウシャナス・カーヴィヤが、自らこの願いをかなえてくれたのだ。『汝に従う息子が王になる』と。あなた方にお願いする。プールを王位につけて下さい。（二一）」

臣下たちは言った。

「王よ、美質をそなえ、常に父母に有益な息子は、末の子といえども、すべての繁栄を得るに価します。（二二）プールは息子としてあなたによいことをしたから、王国を受けるにふさわしいです。しかもシュクラが恩寵を与えたのですから、何も異存はありません。（二三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

市民や地方民がこのように言ったので、そこでナフシャの子ヤヤーティは、自分の息子のプールを王位に即位させた。（二四）そしてプールに王国を譲ってから、王は林住期のために潔斎を行ない、バラモンや苦行者たちとともに都から出て行った。（二五）

ヤドゥからヤーダヴァ族が生じた。トゥルヴァスの息子たちはヤヴァナ族となった。ドルフュの息子たちはボージャ族となった。アヌの息子たちは蛮族（ムレーッチャ）となった。（二六）一方、プールから、パウラヴァの家系ができた。王（ジャナメージャヤ）よ、あなたはそこに生まれたのです。強力で、千年間王国を治めるために。（二七）

（第八十章）

天から落ちたヤヤーティ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

かくてナフシャの子ヤヤーティ王は、愛しい息子を王位につけて、喜んで森に住む隠者となった。（一）バラモンたちとともに森での生活を送り、木の実と根を食べ、自制し、彼はついに天界へ赴った。（二）彼は天界に行き、喜び、幸福に住んでいたが、しばらくして、シャクラ（帝釈天（インドラ））により再び天から落とされた。（三）彼は天から追放され、落下したが、地表に達することなく、空中にとどまったと聞いている。（四）しかしその後、強力な彼は、集会において、ヴァスマット王、アシタカ、プラタルダナ、シビと出会い、再び天界へ行ったということである。（五）

ジャナメージャヤはたずねた。

「どのような行為により、王は再び天に達したのか。それを一部始終、ありのままに聞きたいと思う。バラモンよ、バラモンと聖仙の群の前で語ってくれ。（六）ヤヤーティは神々の王（インドラ）に等しい王であり、太陽のように輝き、クルの家系を繁栄させた。（七）その名声に違

わぬ誉れ高い偉大な人物の、天界とこの世における行為を、すべて聞きたいと思う。（八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

おお、ヤヤーティの後日談を語りましょう。その物語は、天界とこの世における功徳をもたらし、一切の罪障を滅するものです。（九）

ナフシャの子ヤヤーティ王は、末の息子のプールを王位につけて、喜んで森へ行った。（一〇）ヤドゥをはじめとするその他の息子たちは、辺境に追放されてしまった。王は、森の中で木の実や根を食べて、長らく生活していた。（一一）彼は自己を制御し、怒りを滅し、祖霊と神を満足させ、林住者の規定に従い、儀軌にのっとって火に供物を投じた。（一二）そして王は、森でとれる食物により客人をもてなした。彼は落穂拾いの生活をして残飯を食べた。（一三）王は丸千年間、このような生活を送った。三十年間、彼は言葉と心を制御し、水だけを飲んで過ごした。（一四）それから、倦むことなく、一年の間、彼は風を食べて（絶食して）過ごした。そして一年間、五火（四方に火を置き、頭上に太陽を頂く）の中で苦行を行なった。（一五）六カ月の間、彼は風を食べ、一本足で立っていた。それから、福徳の誉れ高い彼は、天地を〔名声で〕満たしつつ天界へ行った。（一六）

（第八十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

この最高の王は、天界、神々の住居に住んだ時、神々、サーディヤ神群、マルト神群、ヴァス神群によって尊敬された。（一）この功徳を積み、自己を制した王は、神々の世界から梵界（ブラフマローカ）に移り、長いこと暮らしたということである。（二）

ある日、最高の王ヤヤーティは、シャクラ（帝釈天（インドラ））のもとへ行った。話しているうちに、シャクラは王に質問した。（三）

シャクラはたずねた。

「王よ、プールがあなたの姿をとって老いを引き受け、地上で生活し、あなたが彼に王国を譲った時、あなたは何と言ったか。ありのままに告げてくれ。（四）」

ヤヤーティは答えた。

「このガンガー（ガンジス）川とヤムナー川との中間にある全領土がお前のものだ。お前は、地上の中央における王となり、お前の兄たちは辺境の王となる。（五）怒らぬ人は怒る人に勝る。忍耐する人は忍耐しない人に勝る。人間は人にあらざるものに勝る。賢者は愚者に勝る。（六）非難されても、非難を返すな。〔非難に〕耐える人の恨みは、非難する者を燃やし、またその者の善行をも獲得する。（七）他者を傷つけてはならぬ。辛辣に語るな。劣ったものからあまりにも多くを奪ってはならぬ。他人が苦しむような、相手を傷つける非道な言葉を述べてはいけない。（八）他者を傷つけ、乱暴に語り、言葉の棘により人々を刺す人は、人間のうちで最も不幸なもので、口に災いを含むものと知れ。（九）前面において善き人々に尊敬され、背後において善き人々に守られるようであれ。常に不善の人々の非難に耐えよ。気高い人は

善き人々の行動に従うべきだ。(二〇) 言葉は矢のように口から飛び出し、それに撃たれた者は日夜悲しむ。それは他者の急所に落ちる。賢者は言葉の矢を放つべきではない。(二一) 三界にこれほど霊験あらたかなものはない。生類に対する慈しみと布施と優しい言葉ほど。(二二) それ故、常に柔和に語るべきだ。決して乱暴に語ってはならぬ。敬うべき人を敬うべきだ。与え、決して要求してはならぬ。(二三)」　(第八十二章)

インドラは言った。

「王よ、あなたはすべての仕事を完了して、家を捨てて森へ行った。そこでナフシャの息子よ、私はあなたにたずねる。ヤヤーティよ、あなたは苦行にかけて誰に匹敵するか。(一)」

ヤヤーティは答えた。

「インドラよ、神々や人間、ガンダルヴァ(半神の一種)や大仙たちのうちで、苦行にかけて私に匹敵するものは誰も見出せません。(二)」

インドラは告げた。

「あなたは、自分と同等のものや上下のものたちを、彼らの力を知りもしないで軽蔑した。それ故、あなたにとってこの世界は終わった。王よ、功徳は尽きたから、今日、あなたは天から落ちるであろう。(三)」

ヤヤーティは言った。

「神や聖仙やガンダルヴァを軽蔑したことにより、もし私にとってこの世界が滅するなら、インドラよ、天界から離れて、善き人々の間に落ちるようにして下さい。神々の王よ。(四)」

インドラは告げた。

「王よ、あなたは追放されて、善き人々の間に落ちるであろう。そこであなたは再び確固たる地歩を占める(名声を得る)であろう。かくのごとく知って、ヤヤーティよ、自分と同等のものや優れたものを二度と軽蔑してはならぬ。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、ヤヤーティが神々の王の住む神聖な世界を離れて落下していた時、最高の王仙であるアシタカが彼を見た。その正法の規定の守護者である王仙は、ヤヤーティにたずねた。(六)

「あなたはインドラのような姿をした若者である。あなたは火のように、自己の威力で輝いている。あなたはどなたですか。空を行くものたちのうちで最高のものである太陽のように、群がる雲で暗い天空からあなたは落ちる。(七)」(八―一三略)　(第八十三章)

ヤヤーティは答えた。

「私はナフシャの息子ヤヤーティで、プールの父親である。一切の生類を軽蔑したことによ

り、神々やシッダ（半神）や聖仙たちの世界から追放され、功徳もわずかになり、こうして落ちて行くのである。（二）私は年齢の点であなたより先輩であるから、先にあなたに挨拶しない。学術や苦行や生まれの点で先輩の者は、バラモンたちに敬われるべきである。（三）」

（三―一一略）

アシタカは言った。

「王中の王よ、あなたが享受した最高の世界、そして時間。王よ、そのすべてをありのままに語って下さい。あなたは真理を知る人のように法（ダルマ）について説かれますから。（一二）」

ヤヤーティは答えた。

「私はこの全地上の王であった。それから、その他の広大なる諸世界を征服した。そこに私は千年ほど住んでから、他の（上の）世界に達した。（一三）そして、千の門を持ち、百由旬（ヨージャナ）にわたるインドラの心地よい都に千年ほど住んでから、他の（上の）世界に達した。（一四）そして、神聖にして老いの無い、到達しがたい世界、世界の主、造物主（梵天）の世界に達して、そこに千年ほど住んでから、他の世界に達した。（一五）各々の神の住処において、私は諸世界を勝ち得て欲するがままに住んだ。すべての神々にもてなされ、私は神々に等しい力と輝きを持っていた。（一六）欲するがままの姿をとって、私は歓喜園（ナンダナ）（インドラの庭園）に百万年間住んだ。天女（アプサラス）たちと楽しみ、花の香を［嗅ぎ］、花咲く美しい形の山々を眺めながら。（一七）私がそこに住み、神々の楽にひたっているうちに、途方もなく長い時が過ぎ去った。その時、恐ろしい姿をした神々の使者が、抑揚のある声で、高らかに、『落ちよ』と三度述べた。（一八）獅子のような王よ、私はそこまでは憶えている。それから、私は功徳が尽きて、歓喜園から落下した。そして私は、空中で、同情して悲しんでいる神々の声を聞いた。（一九）『ああ、残念だ。功徳を積み、福徳の誉れ高いヤヤーティが、功徳が尽きて落ちて行く』私は落ちながら彼らに言った。『善き人々の中に落ちたいものだ』と。（二〇）彼らはあなたの祭場を告げた。私はそれを見て、急いでやって来たのである。祭場を指示する供物の香り、目印となる煙を認め、私は喜んだ。（二一）」（第八十四章）

〔ヤヤーティはアシタカ、プラタルダナ、ヴァスマナス、シビたちと対話してから、再び天界へ昇る〕（第八十五～九十章略）

ヴァス神とガンガー女神との約束

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

イクシュヴァーク（甘蔗王）の家系に生まれた、マハービシャという王がいた。彼は真実を語る、不屈の勇者であった。（一）千の馬祀（アシュヴァメーダ）と百のヴァージャペーヤ祭（ソーマ祭の一種）により、彼は神々の王（インドラ）を満足させ、天界に昇った。（二）

ある時、神々は梵天（ブラフマー）に伺候（しこう）していた。そこには、王仙たちやマハービシャ王も列席していた。（三）その時、河川の女王ガンガー（ガンジス）が、梵天のそば近くへ行った時、風が吹き、月光のような彼女の白衣を持ち上げた。（四）そこで神々の群は、急いで下を向いた。

しかし、王仙マハービシャは、恐れることなく川の女神を見た。(五) 梵天は彼を呪って言った。

「汝は人間界に生まれ、再び諸世界に達するであろう。(六)」

王は一切の王や苦行者について考えてから、威力に満ちたプラティーパ王を父にしたいと願った。(七) 一方、川の女神は、平静さを失ったマハービシャ王を見て、心の中で彼のことをのみ思い続けていた。(八)

彼女は歩いて行くうちに、ヴァス神たちに出会った。彼らは体もやつれ、意気阻喪し、気力が失せていた。(九) 彼らがそのような様子をしているのを見て、川の女神はたずねた。

「どうしてあなた方はひどい様子をしているのですか。天に住む方たちが幸いであることを願っていますが。(一〇)」

ヴァス神たちは彼女に答えた。

「大河よ、わずかな過失を犯したので、偉大なヴァシシタ仙が怒って我々を呪ったのだ。(一一) かつて我々はみな、愚かにも、ひっそりと薄明の勤行をしている最高の聖仙ヴァシシタに対して過失を犯した（第九十三章で述べられるいきさつと異なる）。(一二) 彼は怒って、『〔人間の〕胎に生まれよ』と言って我々を呪った。ヴェーダ学者の言ったことは変えることができない。(一三) それ故、あなたは人間の女となって、地上でヴァスたちを息子として生んでくれ。我々は不浄な人間の女の腹に入ることはできない。(一四)」

ガンガーは「わかりました」と答えて、次のようにたずねた。

「人間のうちで、いかなる優れた人が、あなたたちの父親となるのですか。(一五)」

ヴァスたちは答えた。

「プラティーパの息子で、シャンタヌ（マハービシャの再生後の名）という敬虔な王が人間界に生ずるであろう。彼が我々の父親となろう。(一六)」

ガンガーは言った。

「私もあなた方がおっしゃったように考えておりました。私は彼に優しくし、またあなた方の願いをかなえましょう。(一七)」

ヴァスたちは言った。

「あなたは生まれたばかりの子供たちを水に投げこみなさい。そうすれば、遠からずして我々は罪を贖うだろう。三界（天界・地上・地底）を流れる女神よ。(一八)」

ガンガーは言った。

「その通りにします。でも、彼に一人の息子を授けて下さい。彼が息子を求めて私と交わったことが無駄にならないように。(一九)」

ヴァスたちは言った。

「我々は一人ずつ、八分の一の精液を寄付しよう（ヴァス神群は八体の神よりなる）。その精液から、あなたと彼とが望む息子（ビーシュマ）が生まれるであろう。(二〇) しかし彼は、人間界にあって、後継ぎを生まないであろう。それ故、あなたの息子は、精力的でありながら、息子を持たないであろう。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
　このようにヴァスたちは、ガンガーと約定を取り交わし、満足して、急いで気の向くままに立ち去った。（二二）

（第九十一章）

ガンガー女神の結婚

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
プラティーパ王は一切の幸せを願い、長年の間、ガンガー（ガンジス）川の岸で、祈禱を唱えながら座っていた。（一）美しいガンガー女神は、吉祥天女の化身のように、こよなく魅力的な姿をして、その川の水から立ち上がった。（二）神々しい姿をし、美しい顔をした女神は、読誦しつつある王仙の、シャーラ樹のような（たくましい）右の腿に座った。（三）プラティーパ王は女神に言った。
「美しい女よ、あなたの望みは何か。何をしたらよいか。（四）」
女は言った。
「クル族の王よ、私はあなたが欲しい。私を愛して下さい。愛を求める女を捨てれば、立派な人々に非難されますよ。（五）」
プラティーパは答えた。

「美しい女よ、私は愛欲から他人の妻や種姓を異にする女に近づきはしない。これが法にもとづく私の誓戒であると知れ。（六）」
女は言った。
「私は決して卑しい女でも、交わっていけない女でも、非難されるべき女でもありません。王よ、あなたを愛している私を愛して下さい。処女である美しい女を。（七）」
プラティーパは言った。
「あなたが私に迫った好意をお断わりする。もし承知したら、法に背くことになり、私は破滅するであろう。（八）美しい女よ、あなたは私の右の腿に座って抱きついたが、それは子供や義理の娘の座る場所だ。（九）あなたは、恋人の座る側である左腿を避けた。それ故、私はあなたと楽しまない。（一〇）美しい女よ、私の義理の娘となれ。息子の嫁としてあなたを選ぶ。美しい腿の女よ、あなたは義理の娘の側に座ったから。（一一）」
女は言った。
「法を知る人よ、それで結構です。あなたの息子と結ばれましょう。しかし、あなたへの愛ゆえに、私は名高いバーラタの一族（バラタ族）を愛するのです。（一二）あなた方は地上における諸王の依り所です。あなたの一族の多大な美点は、百年かかっても数え切れません。それは最高にすばらしいものです。（一三）あなたの息子は私の素姓を知ることはないでしょう。そして、私が何をしても、彼は一切詮索してはならないのです。（一四）そのようにして暮らして、私はあなたの息子の喜びを増大させるでしょう。息子たちにより、功徳により、恩寵により、

彼は天界へ達するでしょう。(一五)」
　ヴァイシャンパーヤナは語った。——
　承知したと言うと、彼女はその場で消え失せた。王は息子の誕生を待ちつつ、その約束を心にとどめていた。(一六)その間、プラティーパ王は、息子を求めて、妻とともに苦行を行なった。(一七)あのマハービシャは、その年老いた二人の息子として生まれた。寂静の男（シャーンタ）の息子として生まれたから、彼はシャンタヌと名づけられた。(一八)そして、自己の行為により獲得した不滅の世界を記憶していたので、シャンタヌは善行を行なう者となった。
(一九)シャンタヌが青年となった時、プラティーパは息子に忠告した。
「シャンタヌよ、かつてある女がお前の幸せのために、私に近づいた。(二〇)息子よ、もしその非常に美しい天女が、お前を求め、息子を望んで密かにお前に近づいて来たら、お前は彼女が誰であるか、誰のものか、たずねてはいけない。(二一)彼女がどんなことをしても、お前はたずねてはならない。私の指令により、お前を愛する彼女を愛してやれ。」
　父は息子にそう言ったのである。(二二)
　プラティーパ王は、息子のシャンタヌにそう命じて、彼を王位につけてから、森に入った。
(二三)この聡明なシャンタヌ王は、弓取りとして世に知られ、狩猟を好み、いつも森を徘徊していた。(二四)この最高の王は、鹿や野牛を殺して、シッダやチャーラナ（いずれも半神の一種）の住むガンガー川にそって、一人で歩くのだった。(二五)

　ある日、大王は一人の美しい女を見た。彼女は美の女神吉祥天（パドマー）の化身のようで、身体の美しさに輝いていた。(二六)彼女は全身非の打ち所がなく、美しい歯をして、神々しい装身具で飾られていた。薄い衣服をまとい、蓮花の内部のように輝いていた。(二七)彼女を見ると、王はその美しさに驚き、喜びのあまり総毛立った。その両眼で飲みほすかのように、飽くことなく見つめた。(二八)
　その魅力的な女の方も、輝きにあふれて歩く王を見るや、愛情から憎からず思い、飽かず見つめていた。(二九)それから王は、優しい言葉で機嫌を取りながら、彼女にたずねた。
「あなたは女神か。悪魔（ダーナヴァ）の女か。ガンダルヴァ（半神の一種）の女か。天女（アプサラス）か。(三〇)あるいは夜叉女（ヤクシー）か、竜女か、あるいは人間の女か。美しい腰の女よ。神の子のような女よ、あなたが誰であれ、私の妻になって下さい。(三一)」
　微笑する王の甘く優しい言葉を聞くと、非の打ち所のない女は、ヴァス神たちとの約定を思い出して、そばに近づいて来た。(三二)そして、その言葉で王の心を喜ばせつつ、こう答えた。
「王様、私はあなたに従い、妃となりましょう。(三三)しかし王様、私がよいことをしても悪いことをしても、それを止めてはなりませぬ。また、不快なことを言ってはなりませぬ。
(三四)もしそのようにして下さるなら、王様、私はあなたと暮らしましょう。しかし、あなたが止めたり、不快なことを言えば、私は必ずあなたを捨てるでしょう。(三五)」
「承知した」と王は彼女に答えた。彼女は最高の王を得て、比べるもののない歓喜を味わっ

た。(三六) そしてシャンタヌも、彼女を得て、愛欲のままに楽しんだ。何もたずねてはいけないと気をつけて、彼は彼女に何もたずねなかった。(三七) 王は彼女の性質とふるまい、容色と気高さ、奉仕により、密かに満足していた。(三八) 三界を流れる川、神々しい姿をしたガンガー女神は、美しい人間の肢体をとって、幸運にも望みのかなった、神々の王（インドラ）のように輝く、獅子王シャンタヌの妻として仕えた。(三九―四〇) そして、巧みな愛戯により、魅力的な媚態と舞踊により、王を楽しませ、王もそれに応えて楽しんだ。(四一) 王は最高の女性の美質に魅了され、快楽に耽溺したので、多くの年、季節、月が過ぎたのにも気づかぬほどであった。(四二)

王は欲するがままに妻と楽しんでいるうちに、八人の神のような息子を彼女に生ませた。(四三) ところが、息子が生まれる度に、彼女はそれを水に投げこんだ。「あなたによいことをしてあげましょう」と言って、ガンガーの流れに沈めるのであった。(四四) むろんシャンタヌ王にとっては、快いことではなかった。しかし王は、捨てられることを恐れて、彼女に何も言わなかった。(四五)

さて、八番目の息子が生まれた時、王は苦悩して、自分の息子を救おうとして、微笑している彼女に言った。(四六)

「殺してはいけない。お前は誰か。誰のものか。どうして息子たちを殺すのか。息子殺しの大罪を犯してはいけない。やめろ、悪い女よ。(四七)」

女は言った。

「息子を望む人よ。私はあなたの息子を殺しはしない。息子を持つ父親のうちの最上者よ。しかし、交わされた約定に従い、私はもはやここに住めない。(四八) 私はジャフヌの娘ガンガーである。偉大な聖仙の群に崇められる……。神々の目的を成就するために、私はあなたと暮らしたのです。(四九) これらの（息子）は、栄光ある強力な八体のヴァス神で、ヴァシシタ仙の呪詛のために人間として生まれたものです。(五〇) 彼らの父親は、この地上に、あなたの他にはおりません。そして、私のような人間の母も、この世には誰もいません。(五一) ですから、私は彼らを生むために人間になったのです。八体のヴァスを生ませたことにより、あなたは不滅なる世界を獲得するでしょう。(五二) これが、私がヴァス神たちと交わした約定なのです。――生まれるやいなや、次々と人間の生から解放してあげましょうというのが。(五三) そこで彼らは、偉大なるアーパヴァ（ヴァシシタ）の呪詛から解放されました。あなたに幸あらんことを。私は去ります。大誓戒を行なうであろう息子を守りなさい。(五四) この子はヴァスたち（の八分の一）の集結により私にできた、ヴァスたちの転生なのです。私から生まれたこの息子を、ガンガーダッタ（「ガンガーに授けられた」という意）であると知りなさい。(五五)」

（第九十二章）

シャンタヌはたずねた。

「アーパヴァというのは誰ですか。彼から呪われてすべて人間の身体になってしまったとい

うが、ヴァスたちはいかなる罪を犯したのですか。(一) また、その行為のため人間の間に住むことになった、少年ガンガーダッタは何をしたのですか。(二) 全世界の主であるヴァスたちが、どうして人間の間に生まれたのですか。ジャフヌの娘よ、それを私に告げて下さい。(三)」

ヴァシシタの如意牛を盗む

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
そうたずねられて、ガンガー女神は、夫である雄牛のような人、シャンタヌ王に告げた。(四)
「かつてヴァルナ(水天)は、ヴァシシタという聖者の息子を得ました。その聖者がアーパヴァであると知られております。(五) 山の王メールの山腹に彼の神聖な隠棲所があり、そこは鳥獣に満ち、すべての季節の花々におおわれています。(六) 最高の聖者であるヴァルナの息子(ヴァシシタ)は、美味の根や木の実や水に恵まれたその森で、苦行を行なっていました。(七) ダクシャの娘に、スラビーという誇り高い女神がいて、世界に恩恵をもたらすために、カシャパとの間に、すべての願望をかなえる最高の牝牛(如意牛)を生みました。(八—九) 徳性あるヴァシシタは、護摩〔の供物を供給する〕牛として、その牝牛を得ました。その牝牛は、隠者たちの住むその苦行林に住み、その心地よく神聖な森の中で、何の危険もなく暮らしていました。(一〇) ところが、ある時、神々や神仙の住むこの森に、プリトゥ(火神アグニ)をはじめとするすべてのヴァス神たちがやって来たのです。(一一) 神々は妻たちを連れて、森中を散歩し、心地よい丘や森で楽しみました。(一二) 一人のヴァスの美しい腰をした妻は、森の中を歩いているうちに、あの聖者ヴァシシタの、すべての願望をかなえる最高の牝牛を見ました。(一三) 彼女はその牛のすばらしい美質に驚いて、〔夫の〕ディヤウス(ヴァス神の一)にその牝牛を見せました。(一四) その牝牛は、よい乳房を持ち、よく乳を出し、よい尾と顔をして、輝かしく、すべての長所、最高の性質をそなえていました。(一五) かつて、ヴァスの妻は、このような長所をそなえた牝牛を、ヴァス神に見せたのです。(一六) ディヤウスは牝牛を見るやいなや、牝牛の姿と美質を讃えながら女神に言いました。(一七)
『この最高の牝牛は、このすばらしい森の所有者であるヴァシシタ仙のものだ。(一八) この牝牛のおいしい乳を飲んだ人間は、常に若さを保って、一万年間生きるであろう。(一九)』
女神はそれを聞くと、夫に言いました。(二〇)
『私には人間界に、ジナヴァティーという名の、若さと美しさにあふれる王女の友がおります。(二一) 彼女は真実を守る聡明な王仙ウシーナラの娘で、その容姿の美しさにかけて、〔人間界で有名な人です。(二二) あなた、彼女のためにその牝牛が欲しい。仔牛とともにそれを急いで奪って下さい。(二三) 私の友がその乳を飲んで、人間界でただ一人、老いと病から逃れることができるように。(二四) 私のためにそうして下さい。私にとって、それほど嬉しい

ことは他にありません。（二五）』
女神の言葉を聞くと、ディヤウスは彼女に喜ばれたいと願って、プリトゥなどの兄弟とともに、その牝牛を奪いました。（二六）その時ディヤウスは、蓮弁のような眼の女に頼まれて、その聖仙の激しい苦行の力を考慮することができなかったのです。牛を盗んだ時、彼は〔自分たちが天から〕落ちるとは推量できませんでした。（二七）
さて、ヴァシシタは木の実を持って隠棲所にもどって来たが、最高の森に、あの牝牛と仔牛を見ませんでした。（二八）そこで苦行者は森を探しまわりました。しかし、聡明な聖者は、いくら探しても、その牝牛を見出せませんでした。（二九）天眼を持つ彼は、牝牛がヴァスたちに奪われたことを知り、たちまち怒りにかられて、ヴァスたちを呪いました。（三〇）
『ヴァスたちは、私のみごとな尾をした乳牛を奪ったから、それ故、彼らはみな、必ずや人間に生まれるであろう。（三一）』（第九十一章における呪いの原因と異なる）
最高の聖者アーパヴァは、怒りにかられ、このようにヴァスたちを呪いました。（三二）そして、彼らを呪ってから、聖者は苦行に専念しました。王よ、その苦行を積んだ梵仙は、怒って、このように八体のヴァス神たちを呪ったのです。（三三）
神々は呪われたと知り、再び偉大な聖仙の隠棲所へ行き、聖仙に近づきました。（三四）ヴァス神たちは聖仙に許しを乞いましたが、一切の法（ダルマ）に通じた最高の聖仙アーパヴァに許してもらえませんでした。（三五）そしてその高徳の聖仙は、こう告げました。
『あなた方、ダラなどの七神は、一年の後に呪詛から解放されるであろう。（三六）しかし、

あなた方が私に呪われる原因となったこのディヤウスは、その行為により、人間界に長期間滞在するであろう。（三七）怒ってあなた方に言ったことを不真実にしようとは思わない。そして、この高邁な神（ディヤウス）は、人間界において子孫を作ることはないであろう。（三八）彼は徳性あり、すべての武器に通達するであろう。父の喜ぶことに専念し、女性と楽しむことを避けるであろう』
聖仙はヴァスたちすべてにそう言ってから立ち去りました。（三九）そこでヴァスたちはそろって私のもとに来て、願い出ました。そして私はその願いをかなえました。
『ガンガーよ、我々が生まれたら、その度ごとに自ら水に投げこんでくれ。（四〇）』〔というのが彼らの願いです。〕私は呪われた彼らを、人間界から解放するために、言われた通りにしました。（四一）しかし、ただディヤウスだけは、その聖仙の呪詛のために、人間界に長期間滞在しなければなりません。（四二）』
女神は以上のように語ると、即座に消え失せた。そして、その小児を連れて、いずこともなく立ち去った。（四三）シャンタヌの息子は、デーヴァヴラタとガーンゲーヤという二つの名前を持ち、諸々の美質にかけてシャンタヌを凌駕する人物となった。（四四）（デーヴァヴラタは後に英雄ビーシュマとなる）
シャンタヌは悲嘆に暮れて自分の都に帰った。私はこのシャンタヌの無量の美質を語るであろう。（四五）そしてこのバラタ族（バーラタ）の、誉れ高い王の栄光を語るであろう。その輝かしい叙事詩が『マハーバーラタ』と呼ばれる。（四六）

（第九十三章）

ビーシュマの誓い

ヴァイシャンパーヤナは語った。（一―二〇略）――

シャンタヌ王はある日、鹿を射て、ガンガー（ガンジス）川にそって進んで行くと、川の水が少しになっているのを見た。（二一）それを見て王は考えた。

「今日、この大河は何故、今までのように流れないのだろうか。（二二）」

王は原因を探っているうちに、容姿端麗の大きい少年を見出した。（二三）彼はまるでインドラ神（帝釈天）のように、神的な弓を使用して、鋭い多くの矢により、ガンガー全体をせき止めていた。（二四）彼のいるところで、ガンガー川が矢でせき止められているのを見て、王はこの非常に超人的な行為を目撃して驚嘆した。（二五）シャンタヌは聡明ではあったが、まさかそれが自分の息子であるとは気づかなかった。かつて、生まれたばかりの息子に会ったきりなので、思い出せなかったのである。（二六）ところが、少年は父を見るやいなや、幻力（マーヤー）により彼を錯乱させ、即座に姿を消してしまった。（二七）

シャンタヌ王はこの奇蹟を見ると、あれは息子ではなかったかと思い、「会わせてくれ」とガンガー（女神）に言った。（二八）そこでガンガーは最高の姿をとって現われ、右手で飾りたてた少年を連れ、彼を王に会わせた。（二九）彼女は装身具により飾られ、無汚の衣裳をまとっていたので、シャンタヌは以前に彼女を知っているのに、それと見わけられぬほどであったた。（三〇）

ガンガーは言った。

「王よ、以前あなたが私に生ませた八番目の息子がこの子です。虎のような人よ、この子を宮殿に連れて行きなさい。（三一）彼はヴェーダ聖典とその補助学を、他ならぬヴァシシタ仙から学びました。強力で、武器を修得し、最高の弓取りで、戦闘においては神々の王（インドラ）さながらです。（三二）常に神々や阿修羅（アスラ）たちに尊敬され、ウシャナスの知っている学問もすべて知っております。（三三）また、神と阿修羅に崇拝されるアンギラスの息子（ブリハスパティ）の知っている学問もすべて、その補助学そのまた補助学に至るまで、あなたの勇猛で偉大な息子は修得しております。（三四）ジャマダグニの無敵の息子、威光あふれる聖仙ラーマ（パラシュラーマ）が知っている武器をも、彼は修得しております。（三五）王よ、私の授けるこの息子、偉大な弓取りであり、王の法（ダルマ）と実利（アルタ）に通じた勇敢なる御自分の息子を、宮殿に連れて行きなさい。（三六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼女にそのように許可されて、シャンタヌはその太陽のように輝く息子を連れて、自分の都に帰った。（三七）王はインドラの都にも似た自分の都に帰り、自分の願望はすべて完全に成就したと考えた。それから彼は、息子をパウラヴァ家の皇太子に即位させた。（三八）シャンタヌの誉れ高い息子は、その行為によって、パウラヴァ一族と父親と領土〔の住民〕たち

に敬愛されるようになった。(三九) かくて、この勇猛無比な王は、息子とともに楽しみつつ、四年間を過ごした。(四〇)

ある日、シャンタヌ王は、ヤムナー河畔の森へ行った。そこで彼は言いようのないよい香りをかいだ。(四一) 彼はその香りのもとをたどって、いたるところ歩きまわった。やがて彼は、神々しい姿をした漁師の娘を見出した。(四二) 彼はその黒い瞳の娘を見るやいなやたずねた。

「あなたは誰の娘か。どなたか。何をしようとしているのか。可愛い娘よ。(四三)」

彼女は答えた。

「私は漁師の娘です。仕事のため小舟を動かしているのです。漁師の王である偉大な父の命でこの仕事をしております。(四四)」

彼女は容色と甘美さと芳香をそなえていた。それを見てシャンタヌ王は、その漁師の娘を欲しいと望んだ。(四五) 彼はその父親のところへ行って、彼女に求婚し、彼女の父親に自分の願いを聞いてくれるかどうかたずねた。(四六) 漁師の王は王に答えた。

「生まれた時から、私はこの美しい娘を求婚者にやらねばならぬと思っていました。しかし、私の心にはある願望があります。王様、聞いて下さい。(四七) もしあなたがこの娘を正式な妻として私からもらいたいとお望みなら、真実に誓って私と約定を交わして下さい。あなたは約束を守る方です。(四八) 王様、その約定と交換に娘をさし上げましょう。あなたほどの求婚者はどこにもいないでしょうから。(四九)」

シャンタヌは言った。

「漁師よ、あなたの願いを聞いてから承知するかどうかを決めよう。かなえられるものならかなえよう。かなえられぬものであれば無理だが。(五〇)」

漁師は言った。

「王様、この娘に生まれた息子を、あなたの後に、王位につけて下さい。他の誰かでなく。(五一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

シャンタヌは漁師の願いをかなえることを望まなかった。激しい愛に燃やされつつも……。(五二) 王は漁師の娘のことをのみ思い続け、悲嘆に暮れてハースティナプラ（首都）へもどった。(五三)

シャンタヌが悲しみ、もの思いにふけっていた時、ある日、息子のデーヴァヴラタが父に近づいてたずねた。(五四)

「あなたはどこから見ても安泰です。すべての諸侯は従順です。それなのに何故、絶えず苦しんで嘆いているのですか。もの思いにふけって、何も口をきかれないのですか。(五五)」

息子にそう訊かれて、シャンタヌは答えた。

「お前が言ったように、私は確かにもの思いにふけっている。(五六) バーラタ（バラタ族の子孫）よ、この偉大な家系において、お前が我らの唯一の息子である。そして人間というものは無常で

ある。息子よ、それで嘆いているのだ。(五七) ガンガーの息子（デーヴァヴラタ）よ、もしお前に何か不幸が起これば、我々の家は存続しない。疑いもなく、お前だけが百人の息子よりも大切である。(五八) そして私は、必要もないのに、再び妻を娶ることはできない。だが、私は家系の絶えないことを願っている。汝に幸あらんことを！ 一人息子は息子が無いのと同じだ、と法を説く人々は言っている。(五九) 火供、三ヴェーダ聖典、謝礼をともなう諸々の祭祀、これらすべては、息子の十六分の一にも値しない。(六〇) このことは人間にあっても、他の生物においてもあてはまることだ。聡明な息子よ、この点については私に疑念はない。息子というものは、諸々の尊い古伝説のうちの、永遠の三ヴェーダのようなものだ。(六一) そしてお前は常に猛々しく、常に武器をとる勇士である。お前の場合、武器による死以外は考えられない。(六二) そこで私は、お前が滅したらどのようになろうかと、悩んでいるのだ。息子よ、私は苦悩の理由を残らず告げた。(六三)」

このように、そのすべての理由を知って、聡明なデーヴァヴラタは考えこみながら外出した。(六四) そして急いで父の忠臣である老大臣に近づいて、父の悲しみの原因をたずねた。(六五) 大臣はクル族の長子に訊かれて、例の娘についての願いごとをありのままに告げた。(六六) それからデーヴァヴラタは、老大臣とともに、漁師の王のもとに行き、自ら父のために娘を求めた。(六七) 漁師は作法にのっとって接待して彼を歓迎した。そして、王の集会場に座した彼に言った。(六八)

「雄牛のような男よ、あなたはまさにシャンタヌの全き寄る辺である。息子を持つ者たち

（異本は「武器を持つ者たち」）のうちで最高の息子である。あなたの申し出に対し、何の不足があるだろうか。(六九) このような、願ってもない結構な婚姻関係を見逃したら、誰が悔やまないだろうか。たとえインドラ自身であったとしても〔悔やむはずだ〕。(七〇) ある貴顕の生まれの男がいた。彼は美質の点であなた方と同等であった。その人の種から、誉れ高いサティヤヴァティーが生まれたのである。(七一) 彼は私に何度もあなたの父について語った。一切の王のうちでも、彼はサティヤヴァティーを娶る資格があると。(七二) 最高の神仙アシタが、サティヤヴァティーをひどく欲しがった時でさえ、私は拒絶した。(七三) しかし、バラタ族の雄牛よ、娘の父として言いたいことがある。唯一の難点は、あなたが強力なライバルとなるということだ。(七四) あなたが怒ったら、相手がガンダルヴァ（半神族）であろうと阿修羅であろうと、あなたのライバルは決して安楽に生きながらえることはできないのだ。(七五) これだけが難点で、他には何もない。娘を与えるか与えないかについて、どうかこのことを知っておいて欲しい。(七六)」

そのように言われたガンガーの息子は、諸侯が聞いている中で、父親のために、ふさわしく答えた。(七七)

「真実を語る人々のうちの最高の人よ、私のこの真実の誓いを受けて下さい。このように言える人は生まれなかったし、生まれることもないでしょう。(七八) あなたが言われた通りにいたします。あなたの娘に生まれた息子が王となるでしょう。(七九)」

すると漁師は再び彼に告げた。

「バラタ族の雄牛よ、あなたは王国のために、なしがたい行為を追求している。(八〇) あなたはまさに、無量の輝きを持つシャンタヌの全き寄る辺である。(八一) しかし善き人よ、この法(ダルマ)を守る人よ、そしてあなたは、娘を与えることを実現させる主宰神である。私の言うことを聞いてくれ。娘を愛する親たちの常に従って私は言う。行してもらいたい。(八二) 真実の法に専念する人よ、諸侯の間であなたがサティヤヴァティーのために、あなたにふさわしく誓ったこと、(八三) 勇士よ、それは決して別様にはならぬ。この点は全く疑いないことだ。しかし、あなたに息子ができるのではないか、ということが我々の大きな心配なのだ。(八四)」

その真実の法に専念する男は、相手の考えを理解して、父の幸福を追求し、次のように約束した。(八五) デーヴァヴラタは言った。

「漁師の王よ、私の言葉を聞きなさい。諸侯が聞いている中で、私が父のために告げることを。(八六) 私はまず最初に王位を捨てました。そしてまた、私の子供についても、次のように決意します。(八七) 今日以後、私は梵行(禁欲)を守ります。私は息子を持ちませんが、天界における不滅の世界を得るでしょう。(八八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼の言葉を聞いて、敬虔な漁師は、総毛立って喜び、「娘を与える」と答えた。(八九) すると、空中で、天女や神々や聖仙の群が、花の雨を降らせた。「彼はビーシュマ(恐るべきもの)だ」と言いながら……。(九〇)〔それ以来、彼はビーシュマと呼ばれる。〕それから彼は、父のために、かの誉れ高い女性に告げた。

「母上、車にお乗り下さい。我々の家へ行きましょう。(九一)」

そしてビーシュマは、彼女を車に乗せてハースティナプラに着き、シャンタヌにすべてを報告した。(九二) 諸侯はこぞって、また個々に、彼のなしがたい行為を讃え、「彼はビーシュマだ」と言った。(九三) ビーシュマがなしがたい行為を行なったことを知って、父のシャンタヌは満足し、自分の欲する時に死ねる自由を、自ら彼に与えた。(九四)（第九十四章）

シャンタヌの息子たち

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

結婚式が終わると、シャンタヌ王はその美しい娘を王宮に住まわせた。(一) それから、サティヤヴァティーに、シャンタヌの息子として、チトラーンガダが生まれた。この息子は聡明で、勇者であり、その力量により他の人々を凌駕していた。(二) それから精力的な王は、サティヤヴァティーに、偉大な弓取りである王子ヴィチトラヴィーリヤを生ませた。(三) ところが聡明なシャンタヌ王は、その息子が成人に達しないうちに、時間(カーラ)の法(ダルマ)に従った(死んだ)。(四)

シャンタヌが昇天した時、ビーシュマはサティヤヴァティーの意見に従って、勇士チトラ

ーンガダを王位につけた。(五)そのチトラーンガダは、その武勇によりすべての王を打ち破った。自分に匹敵する人間は誰もいないと彼は考えていた。(六)彼が諸天や人間や阿修羅（アスラ）を打ち破った時、彼と同名の強力なガンダルヴァ（半神族の一種）王が攻めて来た。クルクシェートラにおいて、この両者の大戦争が行なわれた。(七)ヒラニヤヴァティー河畔における、この強力な二人、ガンダルヴァとクル族の指導者の戦いは、三年間続いた。(八)武器の雨に満ちたその激しい戦闘において、幻力（マーヤー）に優れたガンダルヴァは、勇敢なクルの王を殺した。(九)多彩な弓矢を駆使するクルの王チトラーンガダを亡き者にしてから、ガンダルヴァは天界へ帰った。(一〇)

その虎のような強力な王が殺された時、シャンタヌの息子ビーシュマは葬式を執行した。(一一)そしてその直後に、この勇士は、まだ成人に達しない少年ヴィチトラヴィーリヤをクル族の王に即位させた。(一二)ヴィチトラヴィーリヤは、ビーシュマの助言に従って、父祖の領土を統治した。(一三)この王は法典に通じており、法（ダルマ）に従ってビーシュマを尊敬した。ビーシュマの方も、彼をよく守護した。(一四)　(第九十五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

チトラーンガダが殺され、その弟が少年であった時、ビーシュマはサティヤヴァティーの意見を考慮しつつ、その王国を守った。(一)やがて、非常に聡明な弟が成人に達したのを見て、ビーシュマはヴィチトラヴィーリヤの結婚について考えた。(二)その時、ビーシュマは、カーシ国王の三人の娘のうわさを聞いた。三人とも天女のようであって、いっしょに、自ら夫を選ぶ式（婿選び式）を行なうという。(三)最高の戦士は、母の許しを受けて、鎧を身につけ、一台の戦車に乗り、ヴァーラーナシー（ベナレス、カーシ国の首都）へ行った。(四)そこでビーシュマは、いたるところから集まって来た立派な王たちと、例の王女たちを見た。(五)幾度も王たちの名前が呼びあげられている間に、ビーシュマ王子は自ら彼女たちを選んだのである。(六)そして最高の戦士ビーシュマは、娘たちを戦車に乗せてから、雷鳴のような声で諸王に告げた。(七)

「美質をそなえた人々を招待し、彼に娘を与えよと賢者たちは伝える。飾りつけて、能力に応じて財産をつけて。(八)他の人々は、一対の牛と交換に娘を与える。他の人々は、協議した財物と交換に娘を与える。他の人々は力ずくで娘を奪う。他の人々は合意のもとに結びつく。(九)他の人々は酔った娘をものにする。他の人々は自ら結婚する（原文、疑問）。〔他の人々は、ヴェーダ祭式を前提として妻を娶る。〕（異本により補う）それが聖仙（カヴィ）により〔最良と〕伝えられる第八の種類の結婚であると知れ。(一〇)（『マヌ法典』三・二七—三四参照。原文に混乱があるようである）しかるに、王族は婿選び式（スヴァヤンヴァラ）を称讃し、それを採用する。だが、〔王族の〕法を説く人々は、〔ライバルを〕破って奪った妻が最良であると述べる。(一一)それ故、諸侯よ、私は彼女をここから力ずくで奪おうと思う。あなた方は、勝敗を決すべく、力の限り努力せよ。私は戦う決意をしてここに立っている。(一二)」

強力なクルの王子は、諸王とカーシ国王にそのように告げて、すべての娘たちを自分の戦車に乗せた。彼は娘たちをさらい、彼らに別れを告げると、速やかに出発した。(一三)するとすべての王たちは怒って立ち上がった。各自その腕をさすり、唇を嚙みしめながら。(一四)(一五―一七略)彼ら勇士たちは、すべての武器を身につけ、一騎で進むクルの王子を、武器をふりかざして追跡した。(一八)それから、彼ら多数と一人の王子との間に、身の毛のよだつ激しい戦闘が始まった。(一九)彼らは彼に一万本もの矢を同時に放った。しかしビーシュマは、それらの矢が彼に達する前に、速やかにすべての矢を断ち切った。(二〇)

そこですべての王は、あらゆる方角から彼を取り囲んで矢の雨を注いだ。雲が山を囲んで雨を注ぐように。(二一)彼はいたるところ矢〔を射返すこと〕によりその矢の雨を防ぎ、それから、すべての王たちに、三本ずつの矢を射返した。(二二)戦闘において、その勇士は余人を凌駕する手練の早業を示し、みごとに自己を守ったので、敵といえどもその業を讃えたことである。(二三)一切の武器に長じたビーシュマは、戦いにおいて彼らを打ち破ってから、娘たちを連れてバラタ族の地をめざして出発した。(二四)

それから、豪胆な勇士であるシャールヴァ国王は、戦場において、ビーシュマの背後から攻撃した。(二五)非常に強力な象群の王が、牝象を〔奪った〕象に追いすがり、その牙で背後から攻撃するように。(二六)勇猛なシャールヴァ国王は怒りにかられ、「女を欲する者よ、止まれ、止まれ」とビーシュマに言った。(二七)そこで、敵軍を破る人中の虎であるビーシュマは、彼の言葉に憤然として、怒りのために、煙のない火のように燃えた。(二八)その勇士は王族(クシャトラ)の法(ダルマ)に従い、恐怖にかられることもなく、シャールヴァに対し戦車を引き返した。(二九)彼が引き返したのを見て、すべての王たちは、ビーシュマとシャールヴァとの合戦の観戦者となった。(三〇)

両者は牝牛をめぐって吼え合う強力な二頭の雄牛のように、互いに力と勇猛さをもって攻撃し合った。(三一)シャールヴァ王は、速やかに飛ぶ矢を、数百数千とビーシュマに浴びせた。(三二)まずビーシュマがシャールヴァに攻撃されているのを見て、諸王は驚嘆して、「やんや、やんや」と喝采した。(三三)すべての王たちは、戦闘におけるシャールヴァの手練の業を見て喜び、言葉に出して彼を讃えたのである。(三四)敵の都城を征服するビーシュマは、諸侯の言葉を聞いて怒り、「止まれ、止まれ」と〔御者に〕叫んだ。(三五)彼は怒って御者に言った。

「あの王がいる所へ行け。鳥の王〔ガルダ〕が蛇を殺すように、彼を殺してやる。(三六)」

それからクルの王子は、ヴァールナ〔「ヴァルナ(水天)の」という意〕という武器を放って、それでシャールヴァ王の四頭の馬を粉砕した。(三七)クルの王子ビーシュマは、シャールヴァ王の矢を自分の矢で防ぎつつ、敵の御者を殺し、一本の矢で敵の駿馬たちを殺した。(三八)娘たちのためにビーシュマは勝利したが、その最高の王〔シャールヴァ〕を殺さずに逃がしてやった。そこでシャールヴァは、自分の都へ帰って行った。(三九)そして、婿選び(スヴァヤンヴァラ)式に出席した王たちも、それぞれの領国へ帰った。(四〇)

このように、最高の戦士ビーシュマは、娘たちを獲得して、クル族の王〔ヴィチトラヴィーリヤ〕のいる

ハースティナプラへと向かった。(四一)ガンガーの息子(ビーシュマ)は、戦闘で数限りない武勲をたて、敵を打ち破りながらも傷一つなかった。彼はまたたくうちに森を越え、川を越え、木々の茂る山々を越え、カーシ国王の娘たちを護送して行った。(四二―四三)この徳性ある男は、彼女たちを義理の娘のように、妹のように、娘のように守って、クル族のもとへ進んで行った。(四四)そして、兄のビーシュマは、武勇によって奪った、美質をそなえた娘たちを、すべて弟のヴィチトラヴィーリヤに与えた。(四五)この法を知る思慮深い男は、超人的な行為をなしとげてから、善き人々の法に従って、サティヤヴァティーと相談して決定し、弟のヴィチトラヴィーリヤの結婚の準備をした。(四六)

ビーシュマが結婚を準備していた時、カーシ国王の長女(アンバー)が彼に言った。(四七)

「私は前に、心の中でサウバ(シャールヴァの首都)の王を夫として選んでいました。そして彼も私を選びました。これはまた、前からの父の望みでもありました。(四八)私はあの婿選び式でシャールヴァを選ぶはずでした。法を知る方よ、このことをよくお考えになって、法を遂行して下さい。(四九)」

娘にそう言われて、英雄ビーシュマは、バラモンたちの集会において、この件について考慮した。(五〇)法を知る彼は、ヴェーダ聖典に通じたバラモンたちとともに決定して、カーシ国王の長女アンバーが去ることを認めた。(五一)そしてビーシュマは、他の二人の娘、アンビカーとアンバーリカーとを、儀軌に示された式により、弟のヴィチトラヴィーリヤに、妻として与えた。(五二)美しさと若さを誇る徳性あるヴィチトラヴィーリヤは、二人の娘の

手をとって、愛のとりこになった。(五三)彼女らは背が高く、浅黒く(美しい色とされる)、黒い巻き毛で、赤く長い爪をし、その尻と乳房は豊かだった。(五四)彼女たちも、ふさわしい夫を得たと考えて、美しいヴィチトラヴィーリヤを称讃した。(五五)彼はアシュヴィン双神のように美しい姿をし、神のような気力と勇武をそなえ、すべての女たちの心を揺り動かした。(五六)ヴィチトラヴィーリヤ王は彼女たちと七年間過ごしたが、若くして結核にかかった。(五七)有能な医師たちとともに、親しい人々が努力したかいもなく、クルの王は、太陽が西に沈むように、ヤマ(閻魔)の住処へ赴った。(五八)ビーシュマはサティヤヴァティーの意向に従って、祭官たちやすべてのクルの勇士たちとともに、ヴィチトラヴィーリヤ王のために盛大な葬儀を執行した。(五九)

(第九十六章)

サティヤヴァティーの秘密

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

不幸なサティヤヴァティーは、息子を切望して悲嘆に暮れ、二人の嫁とともに葬式を終えた。(一)それから、思慮深い王母は、法のこと、父母の家系のことを考慮して、ビーシュマに言った。(二)

「常に法を守った、誉れ高いクルの王シャンタヌの霊に祭餅を供えること、その王の名声と後継、それはすべてあなたにかかっています。(三)善行をなせば確実に天界に行けるように、

真実を守れば確実に長寿があるように、あなたがいれば確実に法（正義）があります。（四）法を知る人よ、あなたは全体的にまた個別的に法を知っています。あなたは種々の聖典を知っています。また、ヴェーダを全体として知っています。（五）法において確立していること、一族における慣習、困窮時における処置。あなたはシュクラとブリハスパティのように、それらのことに通じていると私は思います。（六）それ故、私はあなたをすっかり信頼して、すべてをあなたにお任せします。私の言うことをお聞きになったら、適切に行動して下さい。（七）

私の息子はあなたの弟で、可愛がってもらいました。彼はまだ子供で、息子を作らずに天国へ赴きました。（八）あなたの弟の二人の妻、美しいカーシ国王の娘たち、若さと容貌に恵まれた二人の妻たちは、息子を望んでいます。（九）我々の一族が継続するように、二人に息子を生ませて下さい。これは私の指令（ニヨーガ）（『マヌ法典』九・五九参照）です。法（義務）を実行して下さい。（一〇）王位についてバラタ族を治めて下さい。法に従って妻帯して下さい。祖霊を苦しみに沈めることがありませんように。（一一）」

母から、また親しい人々からそう言われて、徳性あるビーシュマは、法にかなった答えをした。（一二）

「母上、あなたの言われたことは、確かに最高の法です。しかし、子孫に関する私の最高の誓いを、あなたは御存知でしょう。（一三）そしてあなたは、あなたをもらう時の交換条件についてのいきさつを知っています。サティヤヴァティーよ、私は今、あなたに再び真実（サティヤ）を誓

います。（一四）私は三界をも、神々における王位をも、その二つよりもっとすばらしいことをも捨てるでしょう。しかし、決して真実の誓いを捨てはしません。（一五）地がその香りを捨て、水がその味を捨て、光（火）がその色を捨て、風がその接触を捨て、太陽が輝きを捨て、火が熱を捨て、虚空が音を捨て、月が冷い光を捨てたとしても、インドラが武勇を捨て、ダルマ王が法（ダルマ）を捨てたとしても、私は決して真実の誓いを捨てようとはしないでしょう。（一六―一八）」

力と威光に満ちた息子ビーシュマがそう答えると、母のサティヤヴァティーは、すぐに彼に言った。（一九）

「不屈の勇者よ、あなたが最高に誓いを重んじる人であることは知っています。もしその気になれば、あなたは自分の威力によって別の三界を創造することもできるでしょう。（二〇）また、私のためにあなたが真実の誓いを述べたこともよく知っています。しかし窮迫時（アーパッド）の法（ダルマ）を考慮して下さい。先祖代々の重責を担って下さい。（二一）一族の糸と法が損なわれないように、親族が喜ぶように、そのように行動しなさい。（二二）」

不幸な彼女が息子を望んで、法に背いてそう告げた時、ビーシュマは再び彼女に答えた。（二三）

「王妃よ、法を考慮なさい。我々すべてを破滅させないで下さい。真実に背くことは、王族（クシャトリヤ）の法においては、ひどい不名誉です。（二四）シャンタヌの家系が地上において不滅となるような、永遠の王族の法をあなたに説いてあげましょう。（二五）それを聞いたら、窮迫

時の法に通じた賢明な宮廷僧たちとともに、世間の道理を考慮して、それを実行して下さい。(三六)」

（第九十七章）／（第九十八章略）

　ビーシュマは言った。

「母上、私はバラタの家系が益々栄えて存続するような方法を話しますから、お聞き下さい。(一)誰か有徳のバラモンを、財物を贈って招待しなさい。そして彼をして、ヴィチトラヴィーリヤの田地(クシエートラ)（夫人）に息子を作らせるべきです。(二)（『マヌ法典』九・五九及び一六七参照）」

　ヴァイシャンパーヤナは語った。——

するとサティヤヴァティーは、ためらいがちな声で、恥じらいつつ微笑んで、ビーシュマに言った。(三)

「強力なビーシュマよ、あなたの言ったことは正しい。あなたを信頼して、また一族の存続のために申し上げます。あなたに言わないわけには行きません。このような火急の場合ですから。(四)我々の一族において、まさにあなたは法であり、真実(サティヤ)であり、最高の寄る辺です。それ故、私の話を聞いて、すぐに善後策を講じて下さい。(五)私の徳性ある父は舟を持っていました。私は思春期に達して間もないころ、ある日その舟に乗っていました。(六)その時、法を持する者たちの最高者である、賢明な大仙パラーシャラが、ヤムナー川を渡ろうとして舟のところにやって来ました。(七)ヤムナーを渡っている時、その最高の聖者は、愛欲にかられ、私に近づいて機嫌を取りながら、色々と甘い言葉を述べました。(八)私は父を恐れつつも、彼の呪詛を恐れ、容易には得がたい願いをかなえてやると言われ、彼を拒絶することができなかったのです。(九)彼はまず視界を闇でおおってから、舟の上にいる処女(むすめ)の私を、その威力によって圧倒してものにしました。(一〇)以前、私にはひどい魚の悪臭がありましたが、その聖者はそれを除いて、このようなよい香りを授けてくれました。(一一)それから、その聖者は私に告げました。『お前の胎児をこの川の洲(しま)（ドゥヴィーパ）に生み落とした後は、お前は処女にもどるであろう』と。(一二)こうして、パラーシャラの息子である大仙、あの偉大な行者(ヨーギン)が生まれたのです。処女である私の息子は、かつて、ドウヴァイパーヤナと呼ばれました。(一三)その聖仙は、苦行の力によりヴェーダ聖典を四種に分離して（ヴィヤス）から、世にヴィヤーサと呼ばれるようになりました。また、色が黒（クリシュナ）かったことから、クリシュナと呼ばれました。(一四)彼は真実を語り、寂静に専念し、苦行を積み、罪過を焼き尽くしています。私とあなたに指令されれば、彼はきっとあなたの弟の田地(クシエートラ)（夫人）に、すばらしい息子を生ませるでしょう。(一五)彼は私に申しました。『何か必要なことがあったら私を想い起こして下さい』と。ビーシュマよ、もしあなたが望むなら、私は彼を想い起こします。(一六)あなたが承知すれば、ビーシュマよ、きっとあの大苦行者は、ヴィチトラヴィーリヤの田地に息子を生ませるでしょう。(一七)」

　その大仙のことが告げられた時、ビーシュマは合掌して言った。

「彼は法と実利と享楽の三つを洞察している。(一八)そしてその賢者は、実利に結びつく実利、法に結びつく法、享楽に結びつく享楽と、そのそれぞれの反対とを、叡知により考察して正しく決定する。(一九)あなたの言われたことは、法にかない、我々の一族に有益であり、最高にすばらしいことで、私にとっても喜ばしいことです。(二〇)」

ビーシュマが承諾したので、黒い女（サティヤヴァティー）は聖者クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナのことを想起した。(二一)その知者はヴェーダ聖典を解釈していたが、母に想起されたことを知って、そのことを知らされないのに、即座に出現した。(二二)漁師の娘は、久しぶりで息子を見て、作法通りに息子をもてなしてから、彼を両腕で抱きしめ、多量の涙を注いで泣いた。(二三)彼女の長男である大仙ヴィヤーサは、悲嘆に暮れた母に水を注いで挨拶をし、彼女に告げた。(二四)

「あなたの望みをかなえるために、私はここに来ました。法の真理を知る方よ、私に命令して下さい。あなたの好きなようにいたします。(二五)」

それから、宮廷僧が、最高の聖仙に敬意を払った。彼は聖句を唱えて、作法のごとくそれを受け入れた。(二六)彼が席に着いた時、母のサティヤヴァティーは、彼が息災かどうかたずねてから、彼を見つめて次のように言った。(二七)

「聖仙よ、息子というものは母と父の共有物として生まれます。父が息子の主であるように、疑いなく母も息子の主なのです。(二八)あなたは創造者に定められた私の最初の息子です。また梵仙よ、ヴィチトラヴィーリヤは私の末の息子です。(二九)ですから、ビーシュマがヴィチトラヴィーリヤの父方の兄であるように、息子よ、あなたが御承知の通り、あなたはあの子の母方の兄です。(三〇)ここにいる不屈の勇者ビーシュマは、誓いを守り、息子を作ることも王国を治めることも念頭に置いていません。(三一)汚れなき者よ、そこであなたは、兄弟のことを考慮して、また我々の一族の存続のために、ビーシュマの言葉に従い、また私の指令により、また一切の生類を憐れみ、守護するために、お願いだから私の言うことを聞いて実行して欲しいのです。(三二―三三)あなたの弟の二人の妻は、神の娘のようで、容色と若さに恵まれ、法に従って息子を望んでいます。(三四)彼女たちに息子を生ませて下さい。この一族にふさわしく、子孫の存続を可能にするような息子を。わが子よ、あなたは適任者だから。(三五)」

ヴィヤーサは言った。

「サティヤヴァティーよ、あなたは最高の法とそうでない（現世的な）法を知っています。そして、あなたの法に専念しておられるから、私はあなたの指令により、法のために、あなたの望むことをいたしましょう。そのようなことは古にも例のあることですから。(三六―三七)私は弟に、ミトラ神とヴァルナ神のような息子を授けましょう。二人の王妃は、私が指示した誓戒を行なわなければなりません。(三八)一年の間、適切に。そうすれば、二人は清浄になるでしょう。女性は誰でも、誓戒を行なわないで私に近づいてはいけないのです。(三九)」

サティヤヴァティーは言った。

「王妃がすぐに子を宿すようにして下さい。王のいない国土には、雨は降らず、神々もいな

くなります。(四〇) 聖者よ、王のいない国土をどのように維持することができましょう。ですからすぐに子を宿らせて下さい。ビーシュマが彼を養育するでしょう。(四一)」

ヴィヤーサは答えた。

「もし私が、時期を待たず速やかに息子を授けなければならないのなら、その女性は私の醜い姿を我慢しなければなりません。それが彼女の最高の誓戒です。(四二) もし私の臭い、姿、衣服、身体に耐えるなら、カウサリヤー(コーサラの王女、ここではヴィチトラヴィーリヤの妻)は今日中に、すばらしい子を宿すことができます。(四三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

交わる時を待ちつつ、聖者は姿を消した。そこで王母は嫁のところに行って密かに会い、実利(アルタ)をもたらし法(ダルマ)にかなう有益な言葉を述べた。(四四)

「カウサリヤー(アンビカー)よ、私は法の道理について話しますからお聞きなさい。不幸なことにバラタ族の断絶は確実になりました。(四五) ビーシュマは、悩む私を見て、また父の家系が危機に陥ったのを見て、また法の繁栄のために、私にある提案をしました。(四六) そしてその提案は、あなたにかかっているのです。断絶したバラタ族の家系を再興して下さい。(四七) 神々の王(インドラ)にも似た息子を生みなさい。彼は我々一族の王位の重責を担うでしょう。(四八)」

彼女は法を説いて、ようやくのことで敬虔な嫁を説得した。それから彼女は、バラモンや

神仙(最高の聖仙)や客人たちに御馳走をふるまった。(四九)

(第九十九章)

ヴィヤーサ、息子を作る

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからサティヤヴァティーは、妊娠に適した時期に沐浴した嫁を床につかせ、静かに言った。(一)

「カウサリヤー(アンビカー)よ、あなたには義理の兄がいます。彼は今日、あなたと交わるでしょう。彼は夜に訪れますから、心して待ちなさい。(二)」

彼女は姑の言葉を聞いて、美しい床に寝ながら、ビーシュマやその他のクルの英雄たちのことを考えていた。(三)

それから、あの約束を守る聖仙(ヴィヤーサ)は、母の指令を受けて、灯明が輝いている時に、まず第一に、アンビカーの床に入った。(四) 王妃は、クリシュナ(ヴィヤーサ)の赤褐色の編髪や燃えるような両眼や茶色の髭を見て、眼をつぶってしまった。(五) 彼はその夜、母によかれと思い、カーシ国の王女と交わったが、彼女の方は恐ろしくて彼を見ることができなかったのである。(六) それから、母は出て来た息子に会ってたずねた。

「わが子よ、彼女に有徳の王子が生まれるでしょうか。(七)」

母の言葉を聞くと、最高の知性をそなえ、超越的な能力を持つヴィヤーサは、運命にかり

たてられて答えた。(八)

「彼は数万の象に匹敵する生命力を持ち、聡明にして、最高の王仙であり、栄光あり、強力で、知性にあふれる者となるでしょう。(九) そして、彼には強力な百人の息子ができるでしょう。しかし、その母親の過失により、盲目となるでしょう。(一〇)」

彼の言葉を聞いて、母は息子に言った。

「苦行者よ、盲人はクルの王にふさわしくありません。(一一) 親族の家系を守護する、祖先の家系を栄えさせる、クルの家の第二の王を授けて下さい。(一二)」

大苦行者は「承知しました」と約束して出て行った。カウサリヤーはやがて盲目の息子(ドリタラーシトラ)を生んだ。(一三) それから王母サティヤー(サティヤヴァティー)は、再び嫁(アンバーリカー)を説得して、前と同じように聖仙を送りこんだ。(一四) 大仙は全く同様にしてアンバーリカーのもとに行き、彼女に近づいた。彼女の方は、彼を見ると、恐れて蒼白になった。(一五) 彼女が恐れて蒼白になったのを見て、ヴィヤーサはこう言った。(一六)

「あなたは醜い私を見て蒼白(パーンドゥ)となったから、あなたから生まれる息子は蒼白になるであろう。(一七) 美しい女よ、彼の名もパーンドゥとなるであろう。」

そう告げると、最高の聖者は出て行った。(一八) 息子が出て来たのを見て、サティヤーは彼にたずねた。そこで彼は、生まれる子が蒼白になることを母に告げた。(一九) 母は再び息子に、別の息子を作ってもらいたいと頼んだ。大仙は「承知しました」と母に約束した。(二〇) やがて時が至り、王妃は息子を生んだ。彼(パーンドゥ)は蒼白であったが、吉相をそなえ、美々しさに輝いていた。彼に、偉大な勇士である五人のパーンダヴァ(パーンドゥの息子)たちが生まれた。(二一)

それから、年長の嫁(アンビカー)がまた妊娠に適した時期になった時、王母は彼女を彼に指令した。ところが神の娘のような彼女は、大仙の姿と臭いを思い浮べ、恐ろしくて王母の言いつけに従えなかった。(二二) そこでカーシ国の王女は、天女のような召使女を自分の装飾品で飾りつけて、クリシュナ(ヴィヤーサ)のもとに派遣した。(二三) 召使女は聖仙が来ると立ち上がって挨拶をし、許しを得て彼と交わり、ねんごろに奉仕した。(二四) 大仙は快楽を味わい、彼女に満足し、彼女とともに楽しんで夜を過ごした。(二五) 彼は起き上がって言った。

「お前は召使でなくなるだろう。美しい女よ、そしてお前の胎児は、栄光に満ち、気高いものとなり、徳性あり、この世における一切の知者のうちで最高の男となるであろう。(二六)」

こうして、ヴィドゥラという、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナの息子が生まれたのである。このドリタラーシトラとパーンドゥの弟は、無量の知性をそなえていた。(二七) これはダルマ(正義の神)が、偉大なマーンダヴィヤの呪詛によりヴィドゥラの姿をとったものであり、真理を知り、欲望と怒りを離れた人物であった。(二八)

クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナは、法(義務)を残らず果たし、再び母に会って、召使女に子が宿ったことを告げて、その場で姿を消した。(二九) このようにして、ドゥヴァイパーヤナから、ヴィチトラヴィーリヤの田地(夫人)に、神の子のような、クルの家系を栄えさせる息子たちが生まれたのである。(三〇)

(第百章)

ジャナメージャヤはたずねた。

「ダルマはどのような行為をしたので呪われたのか。梵仙（バラモンの聖仙）よ、誰の呪詛により、彼は召使（シュードラ）の胎に生まれたのか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

マーンダヴィヤという高名なバラモンがいた。彼は志操堅固で、一切の法（ダルマ）を知り、真実（サティヤ）と苦行に専念していた。（二）この苦行を積んだ偉大な行者（ヨーギン）は、隠棲所の入口の樹の根方で、腕を上方に上げて、沈黙の誓戒を守って立っていた。（三）彼が長い期間そこで苦行をして立っていた時、盗品を運ぶ盗賊たちが、大勢の衛兵に追跡されて、その隠棲所にやって来た。（四）彼らは彼の居る付近に盗品を隠した。そして、軍隊が追いかけて来るので、彼らは恐れてそこに隠れた。（五）彼らが隠れるやいなや、すぐに衛兵隊が盗賊を追ってそこに到着し、その聖仙を見つけた。（六）そこで彼らは、同じ状態を保っている苦行者にたずねた。

「最高のバラモンよ、盗賊はどの方向へ行ったか。我々は急いでその方向へ行かねばならぬ。（七）」

しかし、衛兵にそうたずねられても、苦行者は、よいことも悪いことも、何も言わなかった。（八）そこで王の兵士たちはその隠棲所を探して、そこに隠れていた盗賊たちと、盗品と

を発見した。（九）そして衛兵たちは、聖者に対し疑惑を抱いた。そこで彼らは彼を捕えて、盗賊たちとともに、国王のもとに連れて行った。（一〇）王は、盗賊とともに、彼を死刑にせよと命じた。こうして、無実の大苦行者は、死刑執行人により槍の上にのせられた（串刺しの刑に処せられた）。（一一）衛兵たちは彼を槍にのせてから、盗品を持って王のもとに引き上げた。（一二）

しかしながら、槍に串刺しにされた徳性ある梵仙は、何も食べないのに、長い時が過ぎても死ななかった。彼は生命を持続させて、そして他の聖仙たちを召集した。（一三）聖者たちは、偉大な人が槍の上で苦行しているのを見て、この上なく苦しんだ。（一四）彼らは夜間、鳥になって、いたるところからもどって来た。彼らは可能な限り（自らの姿を）示して、その最高のバラモンにたずねた。

「バラモンよ、我々はお聞きしたい。あなたはどんな罪を犯したのですか。（一五）」

すると聖者の中の虎は、苦行者たちに答えた。

「誰を非難できようか。他の者は誰も私に罪を犯していないのだから。（一六）」

王はその聖仙について聞くと、大臣たちとともに出向いて、槍の上にいる最高の聖仙に許しを乞うた。（一七）

「最高の聖仙よ、迷妄と無知の故に私がした過ちを許していただきたい。私を怒らないで下さい。（一八）」

そのように王に言われて、聖者は彼を許した。許された王は、彼を槍の上から降ろした。（一九）王は槍の先から彼を降ろして、その槍を引き抜こうとしたが、引き抜くことができず、

〔体から出ている〕端のところで槍を切った。（二〇）そこで聖者は、槍を体の中に入れたままで遊行した。このような苦行により、彼は余人によっては得られがたい諸世界（天界）を獲得した。それ以来彼は、世にアニー（槍の先）マーンダヴィヤと呼ばれるようになった。（二一）

この真理を知るバラモンは、ダルマ（正義の神）の住居に行き、席に座っているダルマを見て非難した。（二二）

「このような報いを受けるとは、私は知らないでどんな悪い行為を行なったのですか。すぐ私に真実を告げて下さい。私の苦行の力を見なさい。（二三）」

ダルマは言った。

「あなたは小鳥（一・五七・七八参照）の尾に草の茎を突き刺した。苦行者よ、その行為の果報がこうしてあなたに訪れたのである。（二四）」

アニーマーンダヴィヤは言った。

「私の罪はわずかなのに、あなたは重い罰を与えた。ダルマよ、そこであなたは人間となり、召使（シュードラ）の胎に生まれるであろう。（二五）今日、私は、世間において法に関する応報が生ずる〔年齢〕制限を設定する。十四歳までは、罪を犯しても罪とならない。それ以上は、罪を犯したら必ずや罪となる。（二六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このような過失により、ダルマは偉大な聖仙に呪われて、ヴィドゥラの姿をとり、召使の胎に生まれた。（二七）彼は法（ダルマ）と実利（アルタ）とに通じ、貪欲と怒りを離れ、思慮深く、専ら静寂であり、クル一族の幸福に専念した。（二八）

（第百一章）

三人の王子が生まれた時、クルの未開地（ジャーンガラ）、クルの一族、クルの国土（クシェートラ）の三つは栄えた。（一）土地には穀物が生長し、穀物は豊かに実った。雨神は季節に応じて雨を降らせ、樹々は多くの花々や果実をつけた。（二）牛馬等は喜び、鳥獣も喜んでいた。花々は芳香を放ち、果実は美味だった。（三）諸都市は商人や職人にあふれ、人々は勇敢で、学を修め、善良で、幸福であった。（四）盗賊は皆無で、法にもとることを好む人々もいなかった。国土の諸地域において、黄金時代（クリタユガ）が現出していた。（五）国民は布施を行ない敬虔で、祭祀と誓戒に専念し、お互いに愛し合い、大いに繁栄した。（六）人々は慢心と怒りを離れ、貪欲を離れ、相互に繁栄を享受した。そこには最高の法が現出していた。（七）都市は大海のように洋々と輝き、雲の群のような城門やアーチ門や尖塔をそなえ、幾百もの楼閣に満ち、あたかも大インドラ（帝釈天）の都のようであった。（八）人々は川や森や池や溜池（タンク）や峰や、心地よい林で楽しく遊んだ。（九）その頃、クルの国土は、いわば「南のクル」であり、シッダ（半神の一種）や聖仙やチャーラナ（半神の一種）の住むというウッタラ（北の）クル（インド宇宙論における地域または国土の名）と競い合うかのようであった。誰も哀れな人々はおらず、寡婦もいなかった。（一〇）クル族の人々は、その心地よい地方（国土）に、多くの井戸、遊園、集会場、池、バラモンの住居を作った。ビーシュマは〔政

治）論に従って、その国土をすべて守護した。(一一) その国土は快適であり、幾百もの聖域（神殿）や祭柱が点在し、敵の国土を併合して繁栄した。その国土では、ビーシュマによって確定された法輪が廻転していた。(一二) 偉大な王子たちが種々の義務を遂行している間に、都市と地方の民はすべて、絶えず祝宴を行なうのだった。(一三) クルの主立った人々や市民たちの家々では、いたるところで、「与えらるべきである」、「お食べなさい」という言葉が聞かれた。(一四)

ドリタラーシトラとパーンドゥと、聡明なるヴィドゥラは、誕生以来、ビーシュマによって息子のように保護された。(一五) 彼らは浄法によって浄められ、誓戒と学習に専念し、種々の運動に秀で、やがて青年期に達した。(一六) 彼らは、弓術、馬術、棍棒戦、剣と盾、象学、政略論に通達した。(一七) 彼らはヴェーダ聖典とその補助学に通じ、叙事詩、古伝説、種々の学問にいそしんだ。(一八) 勇猛なパーンドゥは、弓術にかけて、他の人々を凌駕した。ドリタラーシトラ王子は、人並はずれて強力であった。(一九) 三界に法を守る王はいても、誰もヴィドゥラに匹敵せず、法にかけて彼を凌駕する者はいなかった。(二〇) 滅亡しかかったシャンタヌの家系が再興されたのを見て、全国土において、世人は次のように讃えた。(二一)

「英雄の母たちのうちで、カーシ国の王女が最高である。諸国のうちでは、クルの地が最高である。一切の法を知る人々のうちでは、ビーシュマが最高である。諸都市のうちでは、象の都（ハースティナプラ）が最高である。(二二)」

ドリタラーシトラは盲目であったので、王位を継承しなかった。ヴィドゥラは（召使との）混血であったので、王位を継承しなかった。そこでパーンドゥが王となった。(二三)

（第百二章）

パーンドゥの妻たち

ビーシュマは言った。

「我々の有名な一族は、まさに諸々の美質に恵まれ、他の諸王を凌駕して、地上における至上の地位に達した。(一) 我らの一族は、法を知る古の偉大な王たちに守護されて、この世において決して滅亡することはない。(二) 私とサティヤヴァティーと、偉大なクリシュナ（ヴィヤーサ）とにより、それは更に、一族の糸であるあなた方において確固たるものにされた。(三) ヴィドゥラよ、この一族が海のように栄えるように、私とあなたは特別に配慮しなければならぬ。(四) ヤーダヴァ族の王女と、スバラの娘と、マドラ国王の娘が、我々の一族（と縁組する）にふさわしいと聞いている。(五) 彼女たちはすべて良家の生まれで、容色をそなえ、有力な保護者に恵まれている。そして、彼ら王族の雄牛は、我々と親縁関係を結ぶにふさわしい。(六) わが一族が継続するように、彼女たちに求婚すべきだと私は思う。最高の賢者ヴィドゥラよ、お前はどう思うか。(七)」

ヴィドゥラは答えた。

「あなたは我々の父であり、母であり、最高の師(グル)です。ですから、御自身で我々一族のことを考慮されて、一族のためになることを行なって下さい。(八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それからビーシュマは、バラモンたちから、スバラの娘ガーンダーリーについて次のようなことを聞いた。美しいガーンダーリーは、シヴァ神を満足させて、百人の息子を授かるという願いをかなえてもらったというのである。(九)

それは確かなことであると聞き、クルの祖父ビーシュマは、ガーンダーラ国王に使いを送った。(一〇)ドリタラーシトラは盲目であったので、スバラは躊躇したが、家系と名声と行動とを考慮して、貞節なガーンダーリーをドリタラーシトラに与えることにした。(一一)一方ガーンダーリーは、ドリタラーシトラが盲目であると聞き、また、両親が自分を彼に与えたということを聞くと、布を取り、それを幾重にも折って、それで自分の両眼をおおった。彼女は夫に従順でありたいと一途になり、夫以上の経験をすまいと決意したのである。(一二—一三)

それから、ガーンダーラ国王の息子シャクニが、最高の美しさをそなえた姉(または妹)を連れて、カウラヴァ(クル一族)のもとにやって来た。(一四)その勇士は、姉とその付き人を適切に引き渡してから、ビーシュマにもてなされて、再び自分の都に帰って行った。(一五)美しい尻のガーンダーリーは、その性質や立居振舞によって、すべてのクルの人々を満足させた。

(一六)その夫に貞節な妻は、その行動によりみなを満足させたが、他の男について言葉によって言及することさえなかった。(一七)（第百三章）

ヴァスデーヴァの父である、シューラというヤドゥ族の長がいた。彼の娘のプリターは、その容色にかけて地上に並ぶものがいなかった。(一)この強力な王は、父方の叔母の息子であるクンティデーヴァに子供がいなかったので、以前、自分に最初に生まれた子をその従兄弟に与えると約束していた。(二)プリターは最初に生まれたので、彼は友人として、以前の好意的な約束を果たしてくれと望む偉大な友に娘を与えた。(三)

彼女は〔新しい〕父の家で、神々と賓客を接待する仕事をまかされていた。ある日、彼女はドゥルヴァーサスというバラモンを接待した。彼は恐ろしく気難しい男で、誓戒を厳守し、法(ダルマ)に関し並々ならぬ決意を秘めていた。彼女はありとあらゆる努力を払って、この気難しい苦行者を満足させた。(四—五)聖者は窮迫時の法を考慮して、〔神を呼ぶ〕魔術と結びつく呪句(マントラ)を彼女に授けて、次のように告げた。(六)

「お前がこの呪句を用いて任意の神を呼び出せば、その神の恩寵により、お前に息子が生まれるであろう。(七)」

バラモンにそのように告げられて、まだ処女(むすめ)であった彼女は、好奇心にかられて太陽神を呼び出した。(八)すると彼女は、世界を栄えさせる太陽がやって来たのを見た。非の打ち所

のない身体の女は、この大いなる奇蹟を見て仰天した。(九) それから太陽は彼女に子を授けた。そして彼女は、一切の武士のうちで最高の英雄を生んだ。それは甲冑を身につけた、栄光ある神の子で、輝きに満ちていた。生まれた息子は、生まれつき甲冑を身につけ、その顔は耳環で輝いていた。彼はカルナという名で、全世界に知られるようになった。(一〇) それからこの恵み深い神は、天界へ帰って行った。(一一)

(一二) 太陽神は彼女を再び処女にもどしてやった。

クンティー(プリター)は親族を恐れ、その不行跡を隠すために、瑞相をそなえたその子供を水に投じた。(一三) その時、ラーダーの誉れ高い夫であるスータ(御者、アディラタのこと)が、水に投じられた子供を拾い、妻とともに、自分の子として育てた。(一四) 二人は子供に名前をつけた。「この子は財宝(ヴァス)(耳環、甲冑)とともに生まれたから、ヴァスシェーナである」と。(一五)

彼は成長して強力な男となり、すべての武器に秀でたものとなった。この強力な男は、背中が熱くなるまで太陽に仕えた。(一六) この約束に忠実な気高い勇士が祈禱を唱えている間、彼はいかなるものでもバラモンたちに布施した。(一七) 生類を栄えさせる、栄光に満ちたインドラ(帝釈天)は、彼に乞うためにバラモンとなって、耳環と甲冑を要求した。(一八) カルナは困惑したが、自分の体から血のしたたる甲冑を切り取り、また耳環を切って、合掌して与えた。(一九) インドラは驚嘆し、彼に槍を与えて告げた。

「神であろうと、阿修羅(アスラ)、人間、ガンダルヴァ(半神の一種)、蛇、羅刹であろうと、それに向けてお前がこれを投げれば、その者は傷ついて死ぬであろう。(二〇)」

以前は彼の名はヴァスシェーナであった。しかし、それ以来、カルナはその行為により、ヴァイカルタナ(「みごとに切り離したもの」。しかし、太陽(ヴィカルタナ)の息子であるからこう呼ばれる)と呼ばれるようになった。(二一)

(第百四章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クンティボージャの娘(養女プリター)は、容色と美質に恵まれ、敬虔で、よく誓戒を守っていた。父は彼女のために婿選び(スヴァヤンヴァラ)式を行なった。(一) 彼女はその時、数千の王たちの中に、獅子のような歯を持ち、象のような肩をしたパーンドゥを見出した。(二) 無量の幸運を有するパーンドゥは、クンティボージャの娘と結ばれた。インドラがパウローミー(シャチー)と結ばれたように。(三)

それからデーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、マドラ国の首都へ行った。マドラ国王の娘マードリーは、三界においてその名も高く、その容色にかけて地上に並びないと、すべての王に知れわたっていた。ビーシュマはパーンドゥのために、彼女を多大な財物で買って、偉大なパーンドゥの結婚式をとり行なわせた。(四—五) 獅子のような胸と象のような肩を持ち、雄牛のような眼をし、虎のように勇猛で思慮深いパーンドゥを見て、世の人々は驚嘆した。(六) パーンドゥは結婚の後、軍隊をひきつれ、気力充実して、地上を征服しようと欲し、幾多の敵に向けて進軍した。(七)(八—一四略)

地上のすべての王は、残らず彼に征服されて、彼のみを真の英雄と考えた。神々におけるインドラのように。(二五) すべての王は、合掌し平伏し、財物と種々の宝物を持って彼のもとに伺候した。(二六) 宝玉、真珠、珊瑚、金銀、すばらしい牛馬と戦車、象。(二七) 驢馬、駱駝、水牛、山羊、羊など……。象の都（ハースティナプラ）の王は、それらをすべて受け取った。(二八) パーンドゥはそれらを受けてから、喜んだ兵たちをひきつれて、自国民を歓喜させ、再び象の都にもどった。(二九)

「獅子王シャンタヌと聡明なバラタの失われた名声が、パーンドゥにより再び高められた。(三〇) 以前にクルの国土とクルの財物を奪った者たちは、象の都の獅子パーンドゥによって、貢納者（進貢国、属国）とされた。(三一)」

諸侯や王の大臣たちは、都市と地方の民とともに、心から喜び、こぞってそのように述べた。(三二) ビーシュマをはじめとするすべての人々は、凱旋した王を出迎えに行った。象の都の住民たちは、あまり遠方に行かないうちに、多種多様な人々、種々の車で運ばれる多様な宝物、すばらしい象と馬と戦車、牛、駱駝、羊などがひしめいている光景を見て歓喜した。ビーシュマをはじめ、クル族の人々は近づいたが、その群の終わりを見出すことができなかった。(三三―三四)

パーンドゥは父（ビーシュマ）の足もとにひれ伏してから、ふさわしく都市と地方の民に敬意を表した。(三五) 敵国を征服して、目的を果たして凱旋した息子に会って、ビーシュマは歓びの涙を流した。(三六) 彼は多様な楽器と太鼓の大音響により、いたるところ市民たちを喜ばせつつ、象の都に入城した。(三七)　（第百五章）／（第百六章略）

ガーンダーリーの百人の息子

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、ドリタラーシトラとガーンダーリーとの間に百人の息子が生まれた。また、その百人の他に、彼と庶民（ヴァイシャ）の女との間に、もう一人の息子（ユユツ）が生まれた。(一) そして、パーンドゥには、クンティーとマードリーとの腹に、五人の勇猛な息子が生まれた。彼らは一族の継続のために、神々から生まれたものである。(二)

ジャナメージャヤはたずねた。

「最高のバラモンよ、どのようにしてガーンダーリーに百人の息子が生まれたのか。どのくらいの期間で生まれたのか。また、彼らの寿命はどのくらいか。(三) また、ドリタラーシトラのもう一人の息子は、どのようにして庶民の女に生まれたのか。ドリタラーシトラは何故、彼にふさわしい妻、敬虔で献身的なガーンダーリーをないがしろにしたのか。(四) 偉大な聖仙に呪われたパーンドゥに、どのようにして、神々から五人の勇猛な息子たちが生まれたのか。(五) 聡明なる苦行者よ、これらをありのままに詳しく語ってくれ。親族についての物語を聴いていると、飽きることがないのだ。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ガーンダーリーは、以前ヴィヤーサが飢えと疲労で憔悴し切って訪れた時、彼をもてなして満足させた。ヴィヤーサは彼女の願いをかなえることにした。(七) 彼女は、夫に等しい百人の息子を望んだ。時が経過し、彼女はドリタラーシトラと結婚して懐妊した。(八) 二年間、ガーンダーリーは出産することなく、子を宿したままでいた。そこで苦悩が彼女に入りこんだ。(九) クンティーに朝日のように輝かしい息子が生まれたと聞くにつけ、自分の動かない腹を見て心配するのであった。(一〇) やがて、ドリタラーシトラの知らないところで、ガーンダーリーは苦しみに失神しそうになりながら、非常に努力して胎児を生み落した。(一一) すると、鉄の玉のように堅い肉塊が生まれた。彼女は二年間も腹に宿していたそれを捨てようとした。(一二) その時、ヴィヤーサがそれを知って、急いでやって来た。その最高の祈禱者は肉塊を見て、ガーンダーリーにたずねた。

「あなたは何をしようとしているのか。」

彼女は最高の聖仙に、自分の考えをありのままに告げた。(一三―一四)

「クンティーに太陽のような長男が生まれたと聞いて、私は非常な苦しみの末、この胎児を生み落しました。(一五) あなたは以前、百人の息子を授けるとお告げになりました。百人の息子の代わりに、私にはこの肉塊が生まれたのです。(一六)」

ヴィヤーサは告げた。

「ガーンダーリーよ、告げた通りになるであろう。決して別様にはならない。私はふざけている時も、かつて嘘を言ったことがない。いわんや他の場合においては。(一七) ギー(バター状の乳製品)に満ちた百の瓶を急いで準備しなさい。それから、冷たい水をこの玉に注ぎなさい。(一八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

水を注ぐとその玉は百個(実は百一個)に分かれた。それぞれの胎児は親指の関節ほどの大きさだった。(一九) 百一の肉塊は順当に、時が経つにつれて次第に大きくなった。(二〇) それから彼は、それらを瓶の中に入れ、厳重に警護された場所で見守っていた。(二一) それから聖者はガーンダーリーに、しかじかの時が過ぎたら、それらの瓶を割るようにと告げた。(二二) そのように手配してから、聡明なる聖者ヴィヤーサは、苦行するために、ヒマーラヤの峰へと去った。(二三) やがて、それらのうちでまず第一にドゥルヨーダナ王子が生まれた。しかし、生まれの点でも、正統性からも、ユディシティラ王子の方が目上であった。(二四) その息子が生まれるとすぐに、ドリタラーシトラは、ビーシュマとヴィドゥラと多くのバラモンたちを召集して告げた。(二五)

「ユディシティラ王子は我々の一族の第一番目の後継者である。その徳性により彼が王位を得るという点については異論はない。(二六) しかし、この子は彼の次に王になるであろうか。この点につき、まさにどのようになろうか、真実を告げてくれ。(二七)」

彼が言い終わった時、あらゆる方角で、おぞましい肉食獣や、不吉な声のジャッカルがうなり声をあげた。(二八) いたるところで恐ろしい前兆を認めて、バラモンたちや聡明なヴィドゥラは言った。(二九)

「このあなたの息子は、明らかに一族を滅ぼします。彼を捨てれば平安ですが、育てれば大なる災いとなります。(三〇) 王よ、あなたには九十九人の息子が残ります。一人を捨てて、世界と一族の安寧を計りなさい。(三一)『一族のために一人を捨てよ。村落のために一族を捨てよ。地方のために村落を捨てよ。自己（アートマン）のために大地を捨てよ』と申しますから。(三二)」

ヴィドゥラとすべてのバラモンたちにそう言われても、息子に愛着する王はそれに従わなかった。(三三) それから、一月あまりの間に、百人の息子すべてと、その他に一人の娘がドリタラーシトラに生まれた。(三四)

ガーンダーリーが大きな腹で苦しんでいた間、ある庶民（ヴァイシャ）の女がドリタラーシトラの世話をしていたという。(三五) 一年後、ドリタラーシトラと彼女の間に、混合種姓ではあるが、誉れ高く聡明であるユユツが生まれた。(三六) このようにして、英邁なドリタラーシトラの、勇猛な戦士である百人の息子と、ドゥフシャラーという一人娘が生まれた。(三七)

（第百七章）／（第百八章略）

呪われたパーンドゥ

ジャナメージャヤは言った。

「最高の知者よ、あなたは、人間でありながら超人的なドリタラーシトラの息子たちの、最高に神聖な誕生について語った。(一) また彼らの名前も、一人一人あなたが告げるのを聞いた（本訳では省略した）。バラモンよ、今度はパーンダヴァ（パーンドゥの息子）たちの名前を告げてくれ。(二) 神々の王（インドラ）のように勇猛な、彼らすべての偉大な者たちは、神々の一部であると、あなたは「部分的化身」（一・六 本訳では省略した）において語った。(三) それ故、彼ら超人的な行為を行なう者たちの誕生について聞きたい。ヴァイシャンパーヤナよ、すべてを語って下さい。(四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ある日パーンドゥ王は、鹿や猛獣の住む大きな森で、鹿の群の長が雌と交尾しているのを見た。(五) そこでパーンドゥは、金色の美しい羽根のついた鋭い五本の高速の矢で雌雄の鹿を射た。(六) ところが、王よ、それは苦行を積み、大なる威光を持つ聖仙であった。彼は鹿の姿をとって妻と交わっていたのだ。(七) 彼は雌鹿と交わりながら、即座に地に倒れ、感官の力も失せたが、人間の言葉を発して叫んだ。(八)

鹿は言った。

「欲望と怒りにかられた者といえども、知性を欠いた者といえども、悪を好む人々といえども、残酷な行為を避ける。(九) 叡知は運命を呑めない。運命が叡知を呑むのである。運命に支配されたことがらを、叡知は知ることができない。(一〇) バーラタよ、常に徳性ある人々

の、傑出した一族に生まれながら、あなたは何故、享楽と貪りに支配され、理性を失ってしまったのか。(一一)」

パーンドゥは言った。

「王にとって、敵を殺すのが仕事であるように、鹿を殺すのも仕事のうちである。鹿よ、錯乱して私を非難すべきではない。(一二) 正々堂々と鹿を殺すことが望ましい。それは王の法（ダルマ）である。お前は賢明であるのに、何故非難するのか。(一三) 聖仙アガスティヤといえども、祭祀に列席していた時、権威〔ある聖典〕に示された教令（ダルマ）により、大きな森で狩猟を行なって、一切の神々に供えるため森の鹿たちを殺した。どうして我らを非難するのか。実にアガスティヤが殺して、お前たちの脂肪を火中に供えたのである。(一四—一五)」

鹿は言った。

「かつて、敵が弱みを持つ時は、敵に矢を射かけなかったものだ。特に殺すにふさわしい時（合戦など）〔に敵を殺すこと〕が讃えられる。(一六)」

パーンドゥは言った。

「不注意であろうとなかろうと、公然と力により殺すのである。方策により、または鋭い矢により。鹿よ、何故非難するのか。(一七)」

鹿は言った。

「王よ、私は鹿を殺したあなたを、私事で非難するのではない。だが、この場合あなたは、優しさをもって、私が交尾を終えるまで待つべきであった。(一八) というのは、いかなる賢者が、森で交わっている鹿を殺すであろうか。すべての生類に有益で、すべての生類に望ましい時に。あなたは、好ましい人間の目的（愛）の果報を無駄にしたのだ。(一九) そのことは、パウラヴァと汚れなき聖仙たちの家系に生まれたあなたにふさわしくない。(二〇) この非常に残酷な所業は、すべての世人に非難され、天界をもたらさず、（不名誉をもたらし、法（ダルマ）にもとるものである。(二一) あなたは、女性を享受することを知り、分別あり、教典と法と実利（アルタ）の真実を知っている。神のような人よ、そのあなたが、天界をもたらさぬこのような行為をなすのはふさわしくない。(二二) 最高の王よ、あなたは、残酷な行為をした人々、悪をなした人々、三目的（ダルマ、アルタ、カーマ）を捨てた人々を罰する立場です。(二三) 王よ、何の罪もない私を殺して何になるのですか。森に住み、常に寂静に専念し、根と木の実を食べ、鹿に身をやつした私を殺して。(二四) あなたは私を殺したから、必ずや、男女に残酷な行為をしたあなたも、自制を失って愛欲に迷った時に、私と同じように死ぬことになるであろう。(二五)

実は私は、キンダマという無比の苦行を積んだ隠者（ムニ）である。人間を厭い（人目を恥じて）、雌鹿と交わったのである。(二六) 鹿となって、鹿たちとともに深い森で生活している。このように、鹿の姿をとり、愛欲に迷った私を殺しても、知らなかったのだから、あなたはバラモン殺しの罪とはならない。(二七) だが、愚か者よ、あなたも全く同様の果報を得ることになろう。愛欲に迷い、愛しい女と同衾し、あなたもまたこのような状態で、死者の世界へ行くこととなろう。(二八) そしてあなたが死ぬ時に同衾した女性は、愛情から、すべての生類が免れ得ない、死王の支配下に達したお前を追うであろう。(二九) 私が快楽にある時、あなたによっ

て苦しみに落されたように、あなたが快感に達した時に、苦痛があなたを襲うであろう。(三〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

鹿はそう告げると、激痛に苦しんで、この世を去った。そしてパーンドゥの方も、たちまち悲嘆に暮れたのであった。(三一)

(第百九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その隠者の死は、王にとって、自分の縁者の死のような経験であった。彼は悲痛な気持になり、妻たちとともに悩んで、すっかり悲嘆に暮れた。(一)

パーンドゥは言った。

「ああ、立派な人々の家に生まれても、自己を制御せず、欲望の網に迷う者たちは、その所業の故に悪趣に達する。(二)私の父は、常に徳性ある人(シャンタヌ)から生まれたが、享楽的であったために、若くして死んだという。(三)享楽的なその王の田地(夫人)に、沈黙を守る聖仙クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)その人が、私を生ませたのである。(四)その私が、今、神々に見離されて邪悪となり、不幸にも狩猟にふけっている。私の知性は悪徳にふけって最低となった。(五)私は解脱を求める決意をした。束縛(家庭など)は大なる災禍であるから。私は

父(ヴィヤーサ)の、あの不滅なる善行に従う。私は必ずや激しい苦行に専心するであろう。(六)」

(七―二四略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

森に住む決意をした夫の言葉を聞くやいなや、クンティーとマードリーは同時に言った。(二五)

「バラタ族の雄牛よ、他の生活のしかたも可能ではありませんか。私たち法にかなった妻たちとともに、大なる苦行(功徳)を積んで、あなたはきっと天界へ旅立つことができるでしょう。(二六)私たちも、夫の世界に専念し、諸々の感官を制御し、愛欲の快楽を捨てて、大なる苦行を積みましょう。(二七)叡知に満ちた王様、もし私たちを捨てるなら、私たちは必ずや今日のうちに生命を捨てるでしょう。(二八)」

パーンドゥは言った。

「もし二人のその決意が法にもとづくなら、私は父の不滅の生活法を自分の生活法として、それに従うことにしよう。(二九)世俗の快楽と生活を捨て、激しい苦行を行ない、樹皮をまとい、木の実と根を食べて、大きな森で修行しよう。(三〇)朝な夕な沐浴し、護摩をたき、食を制限し、痩せ細り、襤褸と獣皮を着て髪を編み、(三一)寒風と熱に耐え、飢えと渇きと疲労に苦しみ、難行苦行し、この身体をひからびさせる。(三二)孤独を好み、沈思黙考し、熟したものや未熟なものを食べて生活し、森産物と言葉と水により祖霊と神々を満足させる。

(三三)森に住む（他の）人々や、家に住む人々や、村に住む人々を見ることはなく、いわんや不快なことをすることは決してない。(三四)このように、森に住む人々の教令の、この上なく厳しい規定を、この身体が滅するまで追求して行こう。(三五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンドゥ王は二人の妻にこのように言ってから、頭頂に飾る宝玉、首飾り、腕環、耳環、高価な衣服、妻たちの装飾品を、すべてバラモンたちに与えてから言った。

「象の都（ハーステイナプラ）へ行き、パーンドゥが出家して森へ発ったと伝えよ。クルの雄牛は、財産も享楽も幸福も、最高の快楽も、すべてを捨てて、妻たちとともに出発したと。(三六―三八)」

彼の従者と召使たちは、種々の悲しい言葉を聞くと、ひどく嘆声をあげて、「ああ、ああ」と慟哭した。(三九)彼らは熱い涙を流しながら、王を残し、急いで象の都へ行って彼の言葉をすべて伝えた。(四〇)ドリタラーシトラは、彼らから、森でのできごとをすべて聞くと、パーンドゥのことを嘆き悲しんだ。(四一)

パーンドゥ王は根と木の実を食べて生活し、二人の妻たちとともにナーガサバ山へ行った。(四二)彼はチャイトララタに行き、ヴァーリシェーナを越え、ヒマーラヤを越え、ガンダマーダナへ行った。(四三)そこで王は、平地や険阻な地で、偉大な霊（マハーブータ）やシッダ（半神の一種）や偉大な聖仙たちに守られて生活した。(四四)偉大な王である苦行者は、インドラデュムナ湖に達し、ハンサクータ山を越え、シャタシュリンガ山に到達した。(四五)

（第百十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その強力な王は、そこで最高の苦行を行ない、シッダやチャーラナ（いずれも半神族）の群は、彼を親しく見守った。(一)彼は（目上に）従順で、自己を誇らず、自己を制御し、感官を抑制した結果、自分の力量により天界へ行くために精進した。(二)ある者たちにとって、彼は兄弟のようであった。ある者たちにとって、彼は友人であった。また、その他の聖仙たちは、彼を息子のように保護した。(三)長い時が過ぎて、パーンドゥは汚れない功徳（タパス）を得て、梵仙（バラモン出身の聖者）のようになった。(四)

そこで彼は天界へ渡りたいと望み、二人の妻とともに、シャタシュリンガ山から北へ向って発った。その時、苦行者たちは言った。

「山々の王を北に向い、上方に上方に進んで行くと、我々はその山に、多くの難所を見た。それは神々やガンダルヴァ（半神）や天女たちの遊び戯れる場所である。(五―六)クベーラ神（毘沙門天）の平坦なそして起伏のある庭園である。大きな川の岸辺、そして難儀な山の洞窟である。(七)常に雪におおわれた地、樹もなく鳥獣も住まぬ地がある。大雨が降る場所があり、近づきがたい難所がある。(八)そこは鳥も越えることができない。いわんや他の獣たちはなおさらである。ただ風と、シッダ（半神）と偉大な聖仙たちだけが越えることができる。(九)苦しみに慣れていない二人の王女がこの山へ行ったら、必ずや参ってしまう。バラタの雄牛よ、

行ってはいけない。(一〇)」

パーンドゥは言った。

「偉大な方々よ、息子のいない者には天界への門戸は閉ざされていると言われます。それ故、息子のいない私は悩んでおります。そこで、私はあなた方に申し上げます。(一一) 人間は四種の負債とともに地上に生まれます。祖霊、神々、聖仙、その他の人に、百回も千回も返済されるべき負債とともに。(一二) 適切な時にそれらを考慮しない人々には、諸世界(天界など)は存在しないと、法(ダルマ)を知る人々は断言しています。(一三) 祭祀により神々を満足させ、学習と苦行により聖者たちを、息子と祖霊祭(シュラーッダ)により祖霊たちを、慈愛によって人々を満足させます。(一四) 私は法に従うことにより、聖仙と神と人間に対する負債を返済しました。しかし、祖霊に対する負債は返済していません。苦行者たちよ、そこで私は苦しんでおります。(一五) この身が滅びたら、必然的に祖霊たちも滅びてしまいます。立派な人々は子孫のためにこの世に生まれて来るのです。(一六) 父の田地(クシェートラ)(夫人)において、あの偉大な聖仙(ヴィヤーサ)により私が生まれたように、私のこの田地において、何とかして子孫ができないものでしょうか。(一七)」

苦行者たちは言った。

「徳性ある王よ、あなたには神のような、清浄で欠陥のない子孫ができると、我々は神的な眼により見る。(一八) 虎のような人よ、行動して、運命に定められたことを遂行せよ。聡明で冷静な人は、汚れなき果報を得るものだ。(一九) その果報が認められる時、わが子よ、努力するがよい。美質をそなえた子孫を得て、あなたは喜びに達するであろう。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

苦行者たちの言葉を聞いて、パーンドゥは考えこんでしまった。鹿の呪いにより自分の行動(息子を作ること)が妨げられていると思ったからである。(二一) 彼は人のいない所で、誉れ高い正式の妻クンティーに言った。(二二)(二三―三〇略)

「善き人々は、子孫というものは最高の法(ダルマ)の果報であるとみなす。自分の種(以外)から生まれても。マヌ・スヴァーヤンブヴァはそう述べた。(三一) それ故、私は自らは息子を作れないから、今、お前を他の男に指定しようと思う。誉れ高い女よ、同等の男から、またはより優れた男から、息子を見出しなさい。(三二) クンティーよ、シャーラダンダーイニーの物語を聞きなさい。彼女は英雄の妻だったが、目上の人々により、息子を生むようにと指定された。(三三) 彼女は自己を抑制し、沐浴して、夜中、花を持って四辻に立ち、成就を得たバラモンを選んで、息子を生むための式(プンサヴァナ)において火に供物を投じた。(三四) 式が終わった時、彼女は彼と同衾した。そして、ドゥルジャヤなど、三人の勇士を生んだ。(三五) お前もまた、私の指令により、苦行を積んだバラモンから、速やかに息子を得るように努力しなさい。(三六)」

(第百十一章)／(第百十二～百十三章略)

パーンドゥの息子たち

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ガーンダーリーが懐妊して一年になった時、クンティーは子を宿すために不滅のダルマ（正義の神）を呼んだ。（一）王妃は急いでダルマに供物を捧げてから、かつてドゥルヴァーサス仙から授った呪句を正しく唱えた。（二）その美しい尻の女は、ヨーガの体をとったダルマと交わって、一切の生類の最高者である息子を得た。（三）それは、月の出ている（白月の）インドラの日の第八の刻（ムフールタ）であるアビジトの、昼、太陽が中天に昇った、神聖にして崇められる日のことであった。（四）やがて時至り、クンティーは誉れ高い息子を出産した。その子が生まれるやいなや、姿なき声が告げた。（五）

「このパーンドゥの長子はユディシティラとして知られ、必ずや、法（ダルマ）を守る人々のうちの最高者となるであろう。（六）彼は三界において広くその名を知られる王となるであろう。誉れ高く、威光をそなえ、行ないの正しい。（七）」

パーンドゥはその敬虔な息子を得た後、再びクンティーに言った。

「王族（クシャトラ）は力によって最勝であると言われる。力にかけて最勝である息子を選べ。（八）」

そう言われて、彼女は風神（ヴァーユ）を呼んだ。その神から、恐ろしく勇猛な勇士ビーマが生まれた。（九）強力で揺ぎなき彼について、〔天の〕声は告げた。

「彼はすべての強力なる人々のうちで最高の者として生まれた。（一〇）」

狼腹（ヴリコーダラ）（ビーマ）が生まれるやいなや、この上ない奇蹟が起こった。彼は母の膝から落ちて、その身体で岩を砕いたのである。（一一）ある時、クンティーは虎を恐れて、その膝で眠っていた狼腹のことを忘れて、突然立ち上がったという。（一二）するとその金剛のように堅固な童子は、山の上に落ちた。落下した彼は、その身体で岩を粉微塵にしてしまった。パーンドゥは、粉々になった岩を見て驚嘆した。（一三）そのビーマが生まれたのとまさに同じ日に、ドゥルヨーダナも〔ガーンダーリーから〕生まれた。（一四）

狼腹が生まれてから、パーンドゥは更に次のように考えた。

「世界で最も優れた息子が私にできないものか。（一五）実にこの世界は、天命と人間の努力とにおいて確立する。だが、そのうち、天命は時間（カーラ）と結びついた運命により得られる。（一六）まことに、インドラ（帝釈天）は、神々の最高の王であるということである。彼は無量の力と気力をそなえ、精力的で無限の輝きを有する。（一七）苦行によって彼を満足させ、強力な息子を得よう。彼が私に授ける息子は、最も優れたものとなろう。それ故、心と言葉により、大なる苦行を行なおう。（一八）」

そこで威力に満ちたパーンドゥは、大仙たちと協議して、クンティーに、一年間の清浄なる誓戒を守るよう指示した。（一九）そして彼自身は一本足で立ち、最高に集中して、激しい苦行を行なった。（二〇）神々の王であるインドラ神を満足させるために、徳性ある彼は太陽とともに〔向きを変えて〕まわった。（二一）

長い時が過ぎて、インドラは彼に告げた。
「三界においてその名を知られる息子を汝に授けよう。(二二) 神々とバラモンと親しい人々との目的を成就し、一切の敵を滅ぼす最高の息子を汝に授けよう。(二三)」
偉大なインドラにこのように告げられて、徳性あるパーンドゥ王は、神々の王の言葉を想起しつつ、クンティーに言った。(二四)
「政略を知り、偉大で太陽のような威光にあふれ、無敵で、実行力に富み、この上なく瑞相をそなえた、王族(クシャトリヤ)の威光の拠り所である息子、美しい尻の女よ、そのような息子を生め。神々の王(インドラ)の恩寵が得られた。美しい微笑の女よ、あの神を呼びなさい。(二五―二六)」
そう言われて、その誉れ高い女はインドラを呼んだ。すると神々の王はやって来て、アルジュナを生ませた。(二七) その童子が生まれるやいなや、姿なき声が告げた。その声は非常に重々しく響きわたり、空を音響で満たした。(二八)
「クンティーよ、その子はカールタヴィーリヤ〔アルジュナ〕に匹敵し、シビ王のように勇敢で、インドラのように無敵であり、汝の名声を広めるであろう。(二九) アディティ(アーディティヤ神群の母)の喜びがヴィシュヌ神によって増大するように、このヴィシュヌに等しいアルジュナは汝の喜びを増大させるであろう。(三〇) 彼はマドラ、クル、ケーカヤ、チェーディ、カーシ、カルーシャを支配下に収め、クル族の繁栄を支えるであろう(原文疑問、異本による)。(三一) 彼の腕力のおかげで、火神はカーンダヴァの森において、一切の生類の脂肪により最高に満足することになろう。(三二) この強力で勇猛な指導者は、諸王を征服して、兄弟たちとともに三つの

祭祀を開催することになろう。(三三) ジャーマダグニヤ(パラシュラーマ)に等しく、ヴィシュヌ神のように勇猛で、この無敵な男は、強力な者たちのうちで最高の勇者となるであろう。(三四) この人中の雄牛は、すべての神的な武器を獲得し、失われた繁栄を取りもどすであろう。(三五)」
クンティーの息子の誕生に際し、風神は虚空でこのような非常に驚異的な言葉を述べた。クンティーはその言葉を聞いた。(三六) また、シャタシュリンガ山に住む苦行者たちも、高らかに発せられたその言葉を聞いて、この上なく喜んだ。(三七) そして、空中では、インドラをはじめとする神々や聖仙たち、天人たちの声や、太鼓の音が鳴り響いた。(三八) 花の雨が降り注ぎ、大音響が湧き上った。神々の群はこぞってプリターの息子(アルジュナ)を讃えた。(三九) カドルーの子供たち(蛇族)、ヴィナターの子供たち(ガルダ、アルナ)、ガンダルヴァ(半神族)、天女、造物主(プラジャーパティ)たち、七人の聖仙たちも、みなして讃えた。(四〇)(四一―六三略)
ところが誉れ高いパーンドゥは、なおも息子を欲しがって、美しい妻を〔他の神に〕指定しようとした。しかしクンティーは今度は彼に言った。(六四)
「已むを得ぬ時でも、四人目の息子を生めとは規定されていません。これ以上生めば、浮気女で、五人目を生めば娼婦となりましょう。(六五) それなのに、聡明な方よ、あなたは何故、息子を求めるあまり血迷ったかのように、理性で分別できる法を逸脱して、私にそのようなことを言うのですか。(六六)」
(第百十四章)

パーンドゥの死

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クンティーの息子たちと、ドリタラーシトラの息子たちが生まれた時、マドラ国王の娘(マードリー)は、密かにパーンドゥに言った。(一)

「王様、あなたが私に冷たくても、私は悩みません。大切にされているクンティーに対し、私がいつも第二の地位にいても、私は悩みません。(二)ガーンダーリーに百人の息子が生まれたと聞いても、私は悩みませんでした。(三)しかし、幸いなことにクンティーに私の夫の跡継ぎができた今、同じ条件の私に息子がいないということは、とても苦しいことです。(四)でも、もしクンティーが私に息子を授けてくれたら、私にとって有難いことですし、あなたのためにもなるでしょう。(五)クンティーは私のライバルですから、彼女に直接話すことはためらわれます。もしあなたが御自身で彼女に勧めて下さったら有難いのですが。(六)」

パーンドゥは答えた。

「マードリーよ、私もいつもそう考えていたのだ。だが、お前が望むかどうかわからなかったので、お前に言うことができなかった。(七)しかし、お前の考えがわかったからには、この後は私が努力しよう。私に言われたら、きっと彼女は承知すると思う。(八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、パーンドゥは、人のいないところで、クンティーに言った。

「私の家系を存続させ、この世のためになることをしてくれ。(九)(一〇—一三略)非の打ち所のない女よ、舟により人を渡らせるように、マードリーに息子を授けて、救ってやってくれ。そうすれば最高の名声を得るであろう。(一四)」

そう言われて、彼女はマードリーに告げた。

「一度だけ、神様のことを考えなさい。必ずや、彼からふさわしい息子が生まれるでしょう。(一五)」

そこでマードリーはよく考えて、アシュヴィン双神を祈念した。すると双神が訪れて、彼女に双子の息子を生ませた。(一六)それがナクラとサハデーヴァである。彼らはその容色の点で、地上に並ぶものがなかった。前と同様に、姿なき声がその双子について告げた。(一七)

「二人は他の男たちを凌駕して、美しさと勇気と美質をそなえ、容色と富貴に恵まれ、その威光によりこよなく輝くであろう。(一八)」

シャタシュリンガ山に住む人々は、愛情と儀式と祝福とともに、パーンドゥの息子たちに名前をつけた。(一九)クンティーの息子については、長男をユディシティラ、次男をビーマセーナ、三男をアルジュナと命名した。(二〇)そして、マードリーの息子については、満足したバラモンたちは、先に生まれたものをナクラと、次に生まれたものをサハデーヴァと名

づけた。これらのクルの英雄たちは、一年おきに生まれた。（二一）

パーンドゥは再度、マードリーに子を授けるよう、クンティーをうながした。しかし、密かに夫に頼まれたクンティーは、彼に答えた。（二二）

「彼女に、『一度だけ』と申しました。ところが、彼女は双子をもうけました。私は騙されたのです。もう負けてしまいそう。これが女のやり方なのです。（二三）私は愚かにも、双神を呼べば果報も二つだとは知りませんでした。ですから、お願いですから、もう私を利用しないで下さい。（二四）」

このようにして、神から授けられた、誉れ高い、クルの家系を栄えさせる、五人の強力なパーンドゥの息子たちが生まれたのである。（二五）彼らは吉相をそなえ、月のように見目麗しく、獅子のように誇り高く、獅子のように歩む偉大な勇士であった。獅子のような頸をして、神のように勇猛な、人間のインドラたちは成長して行った。（二六）神聖なヒマーラヤ山中で成長する彼らは、そこに集まった大仙たちを驚嘆させた。（二七）クルの家系を栄えさせる彼ら五王子と、〔ドリタラーシトラの〕百王子とは、すべて池の蓮のように、わずかな期間のうちに成長した。（二八）

（第百十五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

美しい五人の息子を、大森林の中で自分の腕で守りつつ、彼らを見てパーンドゥは楽しく

過ごしていた。（一）ある時、森の花々が美しく咲く、生類を狂おしい気持にさせる春の季節に、王は妻たちとともに森を散策した。（二）パラーシャラ、ティラカ、マンゴー、チャンパカ、パーリバドラカや、その他の多くの樹々は、豊かな果実と花をつけていた。（三）それらの樹々や、様々な湖や蓮池で美しく装う森を見て、パーンドゥの心に愛欲が生じた。（四）彼が幸せな気分で、そこで神のようにそぞろ歩いていた時、マードリーは美しい着物をまとって、一人で彼の後について行った。（五）彼が薄衣(うすぎぬ)をまとった若い彼女を見ているうちに、愛欲が森の火のようにめらめらと彼のうちに燃え広がって行った。（六）人のいないところで、自分と同じ気持でいる蓮の眼の女を見て、王は愛欲に支配され、欲情を抑えることができなかった。（七）そこで王は、一人たたずむ王妃を力ずくで引き寄せた。彼女は戦慄(おのの)き力の限り制止しようとした。（八）しかし彼は愛欲にかられ、例の呪詛のことを忘れ、マードリーと強引に交わろうとした。（九）クル族の王は、愛欲に支配されて、死に急ぎ、呪詛の危険を失念し、力ずくで妻と交わろうとしたのである。（一〇）愛欲にかられた彼の理性は、現に時間(カーラ)（運命）により迷わされて、諸々の感官をかき乱して、意識（生命）とともに消滅した。（一一）かくて、最高に徳高いパーンドゥは、妻と交わって、時間(カーラ)の法(ダルマ)に従った（死んだ）。（一二）

マードリーは意識を失った王を抱いて、幾度も悲痛な声をあげた。（一三）クンティーは、自分の息子たちとマードリーの二人の息子を連れ、みなして、王がそのような状態でいる場所にやって来た。（一四）哀れなマードリーはクンティーに言った。

「あなた一人で来て。子供たちはそこに居させて。（一五）」

彼女の言葉を聞くと、クンティーは子供たちをその場に留めて置いて、「もうだめだ」と叫びながら、急いで近づいて来た。（一六）

パーンドゥとマードリーが地面に横たわっているのを見て、クンティーは悲嘆に暮れて泣き叫んだ。（一七）

「この勇士はいつも私に守られて、常に自己を抑制していた。あなたはあの隠者の呪いを知りながら、どうして過失を犯したの。（一八）マードリー、あなたは王をお守りすべきではないの。それなのに、どうして人のいないところで王を誘惑したの。（一九）王はあの呪いのことを考えていつも悩んでいたのに、どうして一人でいるあなたと会って、歓びで我を忘れたのでしょう。（二〇）バーフリーカ（民族名）の女よ、あなたは幸せです。私より運がいいわ。王の喜んだ顔を見たのですから。（二一）」

マードリーは言った。

「彼は迷い、私が何度も止めたのに、自分の運命が実現するのを求めるかのように、自制することができませんでした。（二二）」

クンティーは言った。

「私は正式な第一妃です。第一の法（ダルマ）の果報（夫の後を追うこと）は私のものです。マードリー、これは定めよ。私を止めないで。（二三）私はこの場で、死んだ夫の後を追います。立ちなさい。彼から離れて。子供たちのことはよろしく。（二四）」

マードリーは言った。

「私が夫の後を追います。逃がしはしない。私はまだ愛に満ち足りていないから。第一妃さん、許して。（二五）このバラタの王は、愛欲から私を求めて亡くなりました。どうしてこの私が、ヤマ（閻魔）の住処において、彼の愛欲を断絶させることができましょう。（二六）それに、貴婦人（アーリヤー）よ、もし私が生きながらえても、あなたの子供たちに対し、分け隔てなくふるまうことはできません。私は過失を犯したと非難されるでしょうから。（二七）ですから、クンティー、私の二人の子を自分の子のように育てて下さい。王は私を愛して死んだのだから、王の身体とともに、しっかりと結ばれたこの私の身体を燃やして下さい。貴婦人よ、お願いです。（二八―二九）子供たちのめんどうをよく見てやって下さい。お願いです。それ以上は何も言い残すことはありません。（三〇）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

マドラ国王の娘、パーンドゥの誉れ高い正式の妻は、そう言い残すと、雄牛のように勇猛な夫の後を追って、急いで火葬の薪に登った。（三一）

（第百十六章）

パーンダヴァ、象の都に帰る

苦行を積んだ神のような大仙たちは、パーンドゥのために儀式を行なってから、集って相談した。（一）

「この偉大な苦行者は、王権と国土を捨て、この地で苦行を行なうために、苦行者たちに寄る辺を求めた。(二) パーンドゥ王は、生まれたばかりの息子と妻たちをあなた方に託して、天界へ発った。(三)」

一切の生類の幸福を願う、気高い聖者たちは、お互いに相談した結果、パーンドゥの息子たちを連れて象の都(ハースティナプラ)に行く決意をした。子供たちを、ビーシュマとドリタラーシトラに託そうと考えたのである。(四―五)

すぐさま、すべての苦行者たちは、パーンドゥの妻子と遺骨(シャリーラ)とともに出発した。(六) クンティーは以前は快適さに慣れていたが、子供への愛情の故に、長い旅路を短いと感じた。(七) 長いことかかって、その誉れ高い女性は、クルの領地に着き、やがて首都の城門に到着した。(八) おびただしいチャーラナ(神半)たち、隠者たちが来たと聞いて、象の都の人々は驚嘆した。(九) 太陽が昇るやいなや、子供たちをはじめとし(異本の読みによる)すべての市民は、妻をともない、苦行者たちを見るために外に出かけた。(一〇) 女性の群や王(クシャトリヤ)族の群は無数の車に乗り、バラモンやその妻たちも出て来た。(一一) 更に、庶民(ヴァイシャ)や従僕(シュードラ)の群衆でごったがえしていた。彼らはみな敬虔な気持だったので、誰も悪意を抱かなかった。(一二) シャンタヌの息子ビーシュマ、ソーマダッタ、バーフリーカ、智慧の眼を有する王仙(ドリタラーシトラ)、召使女の子ヴィドゥラたちも出て来た。(一三) また、王母サティヤヴァティー、誉れ高いカウサリヤー(アンバーリカー)、ガーンダーリーも、諸侯の妻たちに囲まれて出て来た。(一四) ドゥルヨーダナをはじめとする、ドリタラーシトラの百人の息子たちも、きらびやかな装身具に飾られて出て

来た。(一五)

すべてのクル族の人々は、宮廷僧たちとともに、大仙の群すべてに対し、頭を下げて挨拶し、その周囲に座った。(一六) そして、すべての市民と地方民も、頭を地面につけて挨拶し、周囲に座った。(一七) 群衆がすっかり静まったと見てとり、ビーシュマは王権と国土を大仙たちにさし出した。(一八) すると、彼らのうちで最長老の、髪を編み鹿皮を着けた大仙が、他の大仙たちの意見を代表して告げた。(一九)

「あのクル族の世継ぎパーンドゥ王は、享楽を捨てて、この地を去りシャタシュリンガ山へ行った。(二〇) 彼が梵行(清浄行)を行なっている間に、神的な原因により、ダルマ神御自身により、彼の息子としてユディシティラが生まれた。(二一) 同様にして、風神がその偉大な王に、最も強力なビーマという息子を与えた。(二二) また、インドラにより、クンティーに、この不屈の勇者〔アルジュナ〕が生まれた。彼の名声はすべての勇士を凌駕するであろう。(二三) また、アシュヴィン双神によりマードリーが生んだ、虎のような勇士たち(ナクラとサハデーヴァ)がここにいる。(二四) こうして、常に法(ダルマ)を守り森に住んだ誉れ高いパーンドゥは、先祖からの家系を再興したのである。(二五) 息子たちの誕生と成長とヴェーダの学習をいつも見守っているパーンドゥに、喜びが常に増大して行った。(二六) 善き人々の道を践(ふ)み、息子を得て、パーンドゥは十七日前に祖霊の世界へ発った。(二七) 火葬の薪の上で火神の口に供えられた彼を見て、マードリーはその生命を捨て火中に入った。(二八) 貞節な妻は彼とともに夫の世界へ行った。彼と彼女のために、この後で行なうべき儀式をやって下さい。(二九) ここにあ

る二人の遺骨（シャリーラ）と、この二人のすばらしい勇猛な息子たちを、彼らの母とともに、儀式によって受け入れて下さい。(三〇)葬式が終わったら、すべての法を知る誉れ高いクル一族の王パーンドゥが、祖霊祭（または、祖霊への供物）を受けられるように。(三一)」

クル族の人々にこのように告げると、クルの人々が見ている前で、すべてのチャーラナ（異本は「苦行者たち」）は、半神（グヒヤカ）たちとともに、即座に消え失せた。(三二)聖仙（シッダ）と半神の群が蜃気楼のようにその場で消えたのを見て、人々はこの上なく驚嘆したのであった。(三三)

（第百十七章）／（第百十八章略）

ビーマに対する恨み

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、ヴィドゥラと王とビーシュマは、親族とともに、甘露のような祖霊祭（シュラーッダ）の供物を供えた。(一)彼らは大勢のクル族の人々や主立ったバラモンたちに食事を出し、有力なバラモンたちに多くの宝物や土地を寄進した。(二)それから市民たちは、身を潔めたパーンダヴァ（パーンドゥの息子）たちをともなって象の都（ハースティナプラ）に入った。(三)すべての市民と地方民は、自分の親族が死んだかのように、かのバラタの雄牛（パーンドゥ）のことを悼んだ。(四)

祖霊祭が終わった時、人々が嘆き、母（サティヤヴァティー）が悲嘆に暮れて放心しているのを見て、ヴィヤーサは母に言った。(五)

「幸福な時代は過ぎ去り、恐ろしい時が近づいています。大地〔の女神〕は若さを失い、日に日に悪しき時代になって行きます。(六)多くの幻影（まやかし）に満ち、種々の過誤にあふれ、法（ダルマ）にもとづく行為と慣習が滅ぶ、恐ろしい時代となるでしょう。(七)あなたはすべてを捨て去り、苦行林で精神を統一して過ごしなさい。自分の一族の恐ろしい滅亡を見てはなりませぬ。(八)」

「わかりました」と言って、彼女は中に入って嫁に言った。

「アンビカーよ、あなたの息子の誤った政策により、バラタ族とその縁者、及び孫たちは滅亡するということです。(九)そこで、もしあなたが承知すれば、息子の死を嘆き悲しみ苦しんでいるカウサリヤーを連れて森へ行きましょう。(一〇)」

アンビカーは承知した。そこで、誓戒を守るサティヤヴァティーは、ビーシュマに別れを告げ、二人の嫁とともに森へ行った。(一一)王妃たちは激しい苦行を行ない、身体を捨てて望ましい帰趨（天界）へ行った。(一二)

パーンダヴァ（パーンドゥの息子）たちは、ヴェーダ聖典に説かれた浄法（サンスカーラ）を受け、父の家で色々な楽しみを享受しつつ成長した。(一三)父の家でドリタラーシトラの息子たちと遊ぶ時、すべての遊戯においてパーンダヴァたちが勝った。(一四)競走、目標物の争奪戦、大食競争、ほこりを立てること（子供の遊びの一種）において、ビーマはドリタラーシトラの息子たちすべてを破った。(一五)ビーマは大喜びして、遊んでいる彼らを、鳥のように捕えて（原文疑問）、頭をつかんで、彼らを戦わせた。(一六)狼腹（ビーマ）は、たった一人で、百一人の大力の子供たちを、苦もなく

ねじ伏せてしまった。(一七) 大力のビーマは彼らの足をつかみ、力ずくで倒し、膝と頭と眼をこすって泣き叫ぶ彼らを地面の上で引きずった。(一八) 水の中で遊んでいる時、彼は両腕で力まかせに十人の子をつかみ、水の中にもぐって、彼らが死にそうになったら放してやった。(一九) また、彼らが樹に登って果実をとろうとした時、ビーマは樹を足で蹴ってふるわせた。(二〇) 激しく動揺した少年たちは、勢いよく蹴られた樹から、すぐに果実とともに下に落ちてしまった。(二一) 少年たちは、格闘技においても、競走においても、教練においても、ビーマの敵ではなかった。(二二) このようにして、ビーマは、悪意からではなく、子供らしさから、ドリタラーシトラの息子たちと張り合っているうちに、この上なく彼らの憎しみを受けるようになった。(二三)

かくて、ビーマセーナの周知の力を知るに及び、激しい気性のドゥルヨーダナは邪悪な性格を発揮した。(二四) 法(ダルマ)から外れ、悪を求める彼に、迷妄と権力欲により、邪悪な考えが生じた。(二五)

「このクンティーの生んだパーンドゥの次男、とてつもなく強力な狼腹(ビーマ)を、謀略によりやっつけてやろう。(二六) それから弟と長男のユディシティラを力ずくで捕縛して、俺は地上を統治しよう。(二七)」

邪悪なドゥルヨーダナはこのように決意して、偉大なビーマの隙をいつもうかがっていた。(二八) それから彼は、水遊びのために、プラマーナコーティ(ガンジス河畔の地名)の水際に、色とりどりの大きなテントを作らせた。遊びが終わると、みなは清潔な衣服を着て、美しく身を飾り、

おもむろに、すべての食欲を満たすすばらしいごちそうを食べた。(二九―三〇) 昼が終わり、遊び疲れたクルの勇猛な王子たちは、遊戯用の住居で休みたくなった。(三一) ところが、力持ちのビーマは、水遊びをしていた少年たちに乗って遊んでいるうちに疲れ果て、休むためにプラマーナコーティの岸に登って眠り込んだ。(三二) 彼は冷い衣服を着て、疲れ、酒に酔い(異本では毒を飲まされたことになっている)、死んだように動かずに眠っていた。(三三) そこでドゥルヨーダナは、密かに蔓で作った縄でビーマを縛り、岸から深い急流に彼をつき落した。(三四) それからビーマは目覚め、すべてのいましめを断ち切り、水から上がった。(三五)

またある時は、ドゥルヨーダナは、鋭い牙と猛毒を持つ怒り狂った蛇どもに、眠っているビーマの急所という急所を咬ませた。(三六) ところが、蛇たちの牙が彼の急所に落ちても、彼の皮膚を破ることはできなかった。その豪傑はそれほど丈夫だったのである。(三七) 目覚めたビーマは、蛇どもをみな殺しにしてから、可愛がっている御者を平手打ちにした。(三八)

またある時は、ドゥルヨーダナはビーマセーナの食物に毒を盛った。それは身の毛のよだつような、作ったばかりの猛毒であった。(三九) ヴィドゥラはその時、プリター(クンティー)の息子たちのためを思い、そのことを彼らに知らせた。しかし、それを食べても、狼腹(ビーマ)は何の変わりもなく、消化してしまった。(四〇) そのような猛毒といえども、恐ろしく丈夫なビーマは何の変化もなく、消化してしまうのであった。(四一)

このようにして、ドゥルヨーダナ、カルナ、シャクニ・サウバラは、様々な手段によりパーンダヴァたちを殺そうとした。(四二) パーンダヴァたちはそれらをすべて見破ったが、ヴ

イドゥラの意見に従って、それらを公にしなかった。(四三)

(第百十九章)

兵法の師クリパ

ジャナメージャヤはたずねた。

「偉大なバラモンよ、クリパの誕生について語ってもらいたい。どのようにして彼は葦の茎から生まれたのか。また、どのようにして諸々の武器を得たのか。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

大仙ガウタマには息子がいた。その名をシャラドヴァットという。彼は矢（シャラ）とともに生まれたのでそう呼ばれた。(二) 彼の心は弓のヴェーダ（兵学）に対するほどにはヴェーダ聖典の学習に向いていなかった。(三) ブラフマンを語る人々（ヴェーダ学者）が苦行（タパス）によってヴェーダを修めるように、彼は苦行を積みすべての武器を修得した。(四) このガウタマ（彼の姓もガウタマである）は、弓術に専念し、激しい苦行により、神々の王（インドラ）をひどく悩ませた。(五) そこで神々の王は、「彼の苦行を妨害せよ」と命じて、ジャーラパディーという天女を派遣した。(六) その天女は、シャラドヴァットの心地よい隠棲所に行き、弓矢を持つガウタマ（シャラドヴァット）を誘惑した。(七) ガウタマは森で、一枚の布をまとう、世に類いなき美しい姿をした天女を見て、眼を見張った。(八) 彼の両手から、弓と矢が地に落ちた。彼女を見て、彼の身体はふるえた。(九) しかしその偉大な知者は、深い叡知をそなえ、苦行を積んでいたので、最高の平静さを保っていた。(一〇) だが、突然彼に変異が生じ、知らぬうちに彼の精液が流れ出た。(一一) 隠者は隠棲所とその天女を後にして去ったが、彼の精液は葦の茎に落ちた。(一二) それは葦の茎に落ちると二つに分れ、それから、ガウタマ・シャラドヴァットに（男女の）双子が生まれた。(一三)

その時、たまたまシャンタヌ王が猟をしていた。その王の、ある一人の兵士が、森で双子を見出した。(一四) 弓矢と黒い鹿皮（苦行者の衣）を見て、これは弓のヴェーダ（兵学）の奥義を極めたバラモンの子供たちであると判断して、彼は双子と矢を王に見せた。(一五) 王は不憫に思って双子を受け入れ、「私の子供としよう」と言って王宮に帰った。(一六) それから彼らを養育し、浄法（サンスカーラ）を受けさせた。一方、ガウタマの方は、どこかへ引きこもって弓のヴェーダに専念していた。(一七)

「私は憐憫（クリパー）からこの双子を養育した」ということで、王は二人に〔クリパとクリピーという〕名前をつけた。(一八) その時、ガウタマは苦行により、二人がそこにいることを知り、やって来て、族姓（ゴートラ）その他をすべて王に告げた。(一九) そして彼は、四種の弓のヴェーダ、種々の武器、一切の秘術を、残らずクリパに教えた。クリパは短期間のうちに、最高の〔兵法の〕師となった。(二〇) ドリタラーシトラの息子たち、パーンドゥの息子たち、ヴリシュニ族の人々、その他、様々な地方から集まって来た王侯たちなど、すべての勇士たちは彼から弓のヴェーダを学んだ。(二一)

(第百二十章)

ドローナとドルパダ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

孫たちが卓越することを求めるビーシュマは、彼らの修練を望んで、弓術その他の武術を知る、定評のある力量をそなえた師匠を探していた。(一)というのは、わずかな知性の者、栄光なき者、種々の武器に巧みでない者、神のような精神力を持たぬ者は、強力なクルたちに武術を教えることはできないからである。(二)

かつて大仙バラドゥヴァージャは祭場で祭祀を行なっている時、水浴を終えた天女グリターチーを眼前に見た。(三)その時、風が立ち、彼女の衣服を運び去った。そこで聖仙の精液がほとばしり出た。彼はそれを〔祭式用の〕枡（ドローナ）の中に入れた。(四)まさにその容器の中で、あの聡明なドローナが生まれたのである。彼はヴェーダ聖典とその補助学をすべて修得した。(五)法（ダルマ）を守る人々のうちの最高者である、威光を有するバラドゥヴァージャは、栄光あるアグニヴェーシャにアーグネーヤという武器を伝授した。(六)アグニ（火神）から生じた（異本に従う）かの聖者は、バラドゥヴァージャの息子に、その偉大な武器アーグネーヤを伝授した。(七)

バラドゥヴァージャの友人に、プリシャタという名の王がいた。彼にドルパダという息子が生まれた。(八)その雄牛のような武人ドルパダは、いつも隠棲所に行って、ドローナとともに遊び、かつヴェーダの学習をした。(九)やがてプリシャタが死んだ時、勇士ドルパダは北パーンチャーラの王となった。(一〇)聖者バラドゥヴァージャも昇天した。そこで誉れ高いドローナは、父の指令を考慮して息子を欲し、シャラドヴァットの娘クリピーを妻に迎えた。(一一)クリピーは、常に火供（アグニホートラ）と法（ダルマ）と自制に専念し、アシュヴァッターマンという息子を得た。(一二)彼は生まれるやいなや、神馬ウッチャイヒシュラヴァスのような叫び声をあげた。それを聞いて、空中にいる姿なき存在が告げた。(一三)

「彼の叫び声（スターマ）は、いななく馬（アシュヴァ）のそれのように諸方に達したから、それ故、この子はアシュヴァッターマンという名になるであろう。(一四)」

ドローナはその息子に大そう満足した。そして彼は同じ場所に滞在し、弓のヴェーダ（兵学）に専念していた。(一五)

ドローナは、偉大な勇士パラシュラーマが、バラモンたちに財産をすべて布施したいと望んでいることを聞いた。(一六)そこでドローナは森へ出かけたラーマに言った。

「私はバラモンの雄牛ドローナです。財物を望んでここに来ました。(一七)」

ラーマは告げた。

「苦行者よ、私は黄金でもその他の財物でも、何でもあるものをすべてバラモンに与えた。(一八)そこで私は、町を含み都市に飾られた、海に至るまで、すべての大地の女神をカシャパに贈った。(一九)今では、私に残るものは、この身体と、高価な飛び道具と種々の武器のみである。ドローナよ、望みのものを選べ。何を与えようか。速やかに告げなさい。(二〇)」

ドローナは言った。

「ラーマよ、すべての武器と、それを呼び出す呪句と、それを使用する秘法を残らず伝授して下さい。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ラーマは、「承知した」と言って、諸々の武器と弓のヴェーダ(兵学)とその秘法を残らず伝授した。(二二)ドローナはそのすべてを受け、武器を修得すると、喜び勇んで、親友のドルパダのもとへ行った。(二三)　(第百二十一章)

威光あふれるドローナは、ドルパダのもとに行って告げた。

「私は君の友人だ。憶えているかい。(一)」

ドルパダは答えた。

「バラモンよ、あなたの精神はあまり正常でないな。突然『私はあなたの友人だ』と私に言うとは。(二)高位の王というものは、幸運に見放され、財産のない者などと友人であることは決してない。愚か者よ。(三)時とともに老いぼれる人々には、友情もすり切れて行く。かつては、私とあなたの間には友情があった。それは力にもとづくものであった。(四)世の中には、古びない友情など決して見出されない。欲望(異本は「時間」)が友情を分離する。また怒りが友情を切り割く。(五)古びた友情にしがみつくな。新しい友情を始めよ。最高のバラモンよ、あなたと私の間には友情があった。それは利益にもとづくものであった。(六)貧者は富者の友ではない。愚者は賢者の友ではない。臆病者は勇士の友ではない。旧友なんて何になるか。(七)同等の財産と同等の家柄を持つ両者の間に、友情や結婚が成立する。富者と貧者の間には成立しない。(八)無学の者は博識者の友ではない。勇士でない者は勇士の友ではない。王にあらざる者は王の友ではない。旧友が何になるか。(九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドルパダにこのように言われて、威光あるドローナは怒りにかられて、しばし考えていた。(一〇)だが賢明な彼は、パーンチャーラを去る決意をして、クルの指導者たちの住む象の都(ハースティナプラ)へ行った。(一一)

その時、勇猛な王子たちは集まって象の都から出て、棒打ち遊びをして、そこで遊び戯れていた。(一二)彼らが遊んでいるうちに、棒切れが井戸に落ちた。しかし、誰もそれを取ることができなかった。(一三)

その時ドローナは、王子たちが困っているのを見ると、おもむろに笑って、優しく話しかけた。(一四)

「ああ、王族の力が何だ。あなた方が武器を修得したことが何になる。バラタの家系に生まれながら、あの棒切れを取れないとは。(一五)私はここにある一握りの葦を加持して(呪文をかけて)矢とする。他には見られないこれの力を見よ。(一六)まず葦〔の矢〕により棒切れを刺す。

それから、他の葦によりその葦を刺す。そしてまたそれを他の葦で刺す。このようにして葦はつながり、棒切れは私の手中に帰する。（一七）」
王子たちは、驚嘆して眼を見開いてそれを眺めていた。そして、棒切れが引き上げられたのを見て、ドローナに言った。（一八）
「バラモンよ、我々はあなたに頭を下げます。このようなことは他の人々にはできません。あなたはどなたですか、存じ上げませんが。我々は何をしたらよろしいのですか。（一九）」
ドローナは言った。
「私の姿と特性をビーシュマに告げよ。非常に聡明な彼なら、正しく理解するであろう。（二〇）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
彼らはみな「承知しました」と言って、祖父のビーシュマに、バラモンの言葉をそのまま告げ、またそのめざましい行為を語った。（二一）ビーシュマは王子たちの報告を聞いて、それがドローナであると知った。そして、彼こそ彼らにふさわしい師であると考えた。（二二）そこでビーシュマは、自ら彼を連れて来てもてなし、来訪の理由を丁重にたずねた。ドローナは彼にことの次第をすべて語った。（二三）（二四―三七略）
「ドルパダにそのように言われて、私は怒りにかられたが、ビーシュマよ、徳性をそなえた弟子たちを求めてクルの地に来たのである。（三八）」

ビーシュマとパーンドゥの息子たちは、彼を師として迎え入れた。そしてビーシュマは、すべての孫たちを連れ、種々の財宝を〔つけて〕、「弟子たちです」と言って、作法に従ってドローナに与えた。その偉大な兵法家は、カウラヴァ〔の王子〕たちを弟子として受け入れた。（三九―四〇）
ドローナは彼らすべてを受け入れてから、ある日、彼らだけといる時、期待にあふれて、同行している彼らに内密に告げた。（四一）
「私にはある心願が存する。あなた方が武器を修得したら、私の心願をかなえて欲しい。完全無欠なものたちよ、約束してくれ。（四二）」
それを聞くとクルの王子たちは沈黙していた。しかし、勇士アルジュナは一切を約束した。（四三）そこでドローナは何度もアルジュナの頭に口づけし、愛情をこめて抱きしめ、喜びの涙を流した。（四四）
それからドローナは、パーンドゥの息子たちに、神的な武器、人的な武器など、様々な武器を教えた。（四五）また、他の王子たちも参集して、武器について学ぼうとして、最高のバラモンであるドローナのもとを訪れた。ヴリシュニ族、アンダカ族、及びその他の国々の王たちもやって来た。（四六）御者（スータ）の子カルナもドローナ師のもとに来た。カルナは激しい敵愾心をもってアルジュナと張り合った。彼はドゥルヨーダナを後ろ楯として、パーンダヴァ（パーンドゥの五王子）を軽蔑した。（四七）
（第百二十二章）／（第百二十三章略）

(8) ラックの家の火災（第百二十四章—第百三十八章）

御前試合

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドローナは、ドリタラーシトラの息子たちとパーンドゥの息子たちが武器を修得したのを見て、クリパ、ソーマダッタ、英邁なバーフリーカ、ビーシュマ、ヴィヤーサ、ヴィドゥラの前で、ドリタラーシトラ王に告げた。（一―二）

「クルの王よ、王子たちは武術を修得しました。お許しがあれば、彼らは各自の武術を披露いたします。（三）」

すると大王は心から喜んで言った。

「最高のバラモン、バーラドゥヴァージャ（ドローナ）よ、よくやってくれた。（四）だが、それをどのように行なうか、いかなる場所で、いつやるか、あなた自身が私に指示してもらいたい。（五）これから武芸に通じた私の息子たちを見られる、眼の開いた人々を羨ましく思う（彼は盲目であるから）。ああ残念だ。（六）ヴィドゥラよ、尊師が指示されるように行なえ。このような嬉しいことはないと思うから。（七）」（八―一一略）

やがてその日がやって来た。王は大臣たちを従え、ビーシュマと偉大な師クリパに先導されて、真珠の網に囲まれ瑠璃で飾られた黄金づくりの神聖な観覧席に入場した。（一二―一三）王妃ガーンダーリー、クンティー、及びすべての王〔宮〕の婦人たちが、侍女たちを従えて、大喜びで桟敷に登った。ちょうど天女たちがメール山（須弥山）に登るように。（一四）バラモン、王族(クシャトリヤ)をはじめとする四姓の人々も、王子たちの武術の腕を見たいと願って、都から急いで出て集まって来た。（一五）演奏される楽器により、また人々の熱気により、群集は大海のようにざわめいていた。（一六）それから、白衣をまとい、白い聖紐をかけ、白い髪と髭をたくわえ、白い花輪と香油をつけた師（ドローナ）が、息子（アシュヴァッターマン）を従えて競技場に入場した。あたかも月が、火星を従えて、雲の無い空に登場するように。（一七―一八）ドローナはその時にかなった供物を供えた。そして、聖句(マントラ)を知るバラモンたちに、祝詞を唱えさせた。（一九）それから、その神聖な日を寿ぐ音とともに儀式が終わった直後に、男たちが種々の武器と道具を持って入場した。（二〇）それから、強力なバラタの雄牛たちが、甲冑を身につけ、帯をひきしめ（覚悟を決めて準備して）、箙(えびら)と弓を持って入場した。（二一）ユディシティラをはじめとし、年齢の順に、強力な王子たちは最高に驚嘆すべき武技を披露した。（二二）（二三―三三略）

（第百二十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

〔ドゥルヨーダナとビーマが棍棒戦を始めた〕

クルの王子（ドゥルヨーダナ）と最強のビーマが競技場に立った時、観衆はそれぞれを贔屓して二手に分かれた。（一）そして、「おお勇士よ、クルの王子よ」、「おおビーマよ」と声援する人々の大喚声がどっと上がった。（二）賢明なドローナは、波立つ海原のような競技場を見て、愛

しい息子のアシュヴァッターマンに告げた。(三) あの二人がもとで、競技場が大混乱に陥るといけないから。(四)」

そこで師の息子は、棍棒を振り上げている、この宇宙紀の終末の風に激しく波立つ海のような両者を制止した。(五)

それからドローナは、競技場に進み出て、大雲のような音をたてる楽隊を制止して告げた。(六)

「わが子よりも愛しい最強の戦士、インドラの息子、インドラの弟のような、このアルジュナを御覧下さい。(七)」

師の口上により祝福されて、弓籠手と弓懸をつけ、矢で満ちた箙をつけ、弓を持った若者が登場した。(八) アルジュナは黄金の甲冑をつけ、太陽と虹と稲光と黎明をともなう雲のようであった。(九) すると、競技場全体に大きな動揺が起こった。楽器や螺貝がいっせいに鳴り響いた。(一〇)

「あれが栄えあるクンティーの息子だ。あれがパーンダヴァの真中の子だ。彼は大インドラの息子だ。クル族の守護者だ。(一一) 彼は最高の戦士だ。彼は法を守る人々のうちの最上者だ。また、徳性ある人々のうちの最上者だ。徳性と知識の最高の宝庫だ。(一二)」

観衆はこのような称讃の言葉を様々に発した。それを聞いたクンティーの胸は、母乳の〔思い出と〕混じった涙によって濡れた。(一三)

〔盲目の〕ドリタラーシトラ王は、大喚声を耳にしてわくわくして、ヴィドゥラにたずねた。(一四)

「ヴィドゥラよ、この波立つ海のような大喚声は何か。突然、天空を破るかのように、競技場に上がった喚声は。(一五)」

ヴィドゥラは答えた。

「大王様、パーンドゥの息子アルジュナが、甲冑をつけてあそこに登場したので、このように大騒ぎになったのです。(一六)」

ドリタラーシトラは言った。

「賢者よ、私は幸せだ。有難いことだ。プリター（クンティー）という火鑽棒から生じた三人のパーンダヴァの火により守られているのだから。(一七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

盛り上った競技場がいく分静まった時、アルジュナは師から学んだ武器の手練を披露した。(一八) 彼はアーグネーヤ（「火神の」という意）から火を、ヴァールナ（「水天の」）から水を、ヴァーヤヴィヤ（「風神の」）から風を、パールジャニヤ（「雨神の」）から雨を創り出した。(一九) バウマ（「地の」）により地底に入り、パールヴァタ（「山の」）により山を創り出した。そして、アンタルダーナ（「消失させる」）という武器により、それは再び消失した。(二〇) 彼は瞬時に高く聳えたかと思うと、次の瞬間には身をちぢめ、瞬時に戦車の中央に立ち、次の瞬間には大地に飛び下りた。(二一) そし

て、この師のお気に入りの若者は、非常な巧みさで種々の矢を放って、毀れやすい的、微小な的、堅牢な的を貫いた。(二二) 彼は動く鉄の猪の口に、同時に五本の矢を重なり合わないように、しかも一本の矢のごとく放った。(二三) その強力な勇士は、縄でつるされた動く牛の角に、二十一本の矢を貫通させた。(二四) このように、武術に通じた彼は、剣術、弓術、棍棒術において、最高の妙技を発揮した。(二五)
さて、その競技が大部分終了した頃、群衆の興奮が収まり、楽器の音が静まった時のことである。(二六) 入場門の方から、偉大さと力を誇示する、雷鳴のような腕を打ち合わせる音が聞こえてきた。(二七)
「山々が裂けたのか。地が裂けたのか。空が雷雲の群で満ちたのか。(二八)」
桟敷の人々は一瞬そのように考えた。そしてすべての観衆は門の方を向いた。(二九)

(第百二十五章)

カルナの登場

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
人々が驚嘆して眼を見開いて道を開けると、勇士カルナが大競技場に入場した。(一) 彼は生まれつき身につけた甲冑をつけ、その顔は耳環で輝いていた。彼は弓を持ち、剣を佩び、まるで歩く山のようであった。(二) 実はカルナはプリター(クンティー)が処女のままで生んだ子であるが、広い名声と大きな眼をしていた。この英雄は、激しく燃える太陽の部分(息子)である。(三) その力と勇猛さは、獅子や雄牛や巨象のようであった。そして、光輝と美と輝きにかけて、太陽と月と火のようであった。(四) その若者は、黄金の棕櫚のように背が高く、獅子のように強健な体をしていた。その栄光ある太陽の息子は、数えきれない美質をそなえていた。(五)
その偉丈夫は競技場を見まわして、ドローナとクリパに軽く会釈した。(六) すべての会衆は動かず、凝視して、彼は何者かとわくわくして、好奇心でいっぱいになった。(七)
太陽の息子は雄弁に、雷雲のように力強い声で、お互いに兄弟であるとは知らずに、弟のアルジュナに告げた。(八)
「プリターの息子(アルジュナ)よ、観衆の前でお前がどのような業を行なおうとも、俺はそれよりもみごとにやるであろう。驚ろくなよ。(九)」
彼の言葉が終わらぬうちに、すべての人々は機械で吊り上げられたかのように速やかに立ち上がった。(一〇) ドゥルヨーダナは大喜びした。羞恥と怒りとが瞬時アルジュナを満たした。(一一) それから、ドローナに許可されて、常に戦いを好む強力なカルナは、アルジュナの行なった技を披露した。(一二) ドゥルヨーダナは弟たちとともにカルナを抱擁して言った。(一三)
「勇士よ、よくぞ来た。誇りをもたらす者よ、よいところにやって来た。私とクルの王国を、好きなように享受するがよい。(一四)」

カルナは言った。
「私には他のものは何もいりません。あなたと友になることを選びます。私はアルジュナと一騎討ちをしたいのです。（二五）」
ドゥルヨーダナは告げた。
「私とともに諸楽を享受せよ。友人たちのために尽力してくれ。敵を成敗する者よ、すべての悪意ある者たちの頭を足で踏みつけよ。（二六）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
アルジュナは侮辱されたように思って、兄弟の群の中に山のように立っているカルナに言った。（二七）
「カルナよ、お前は私に殺されて、招待されないのに闖入してしゃべる者たちのいる世界へ堕ちるであろう。（二八）」
カルナは答えた。
「この競技場は万人に共有のものだ。アルジュナよ、どうしてお前のものなのだ。王族は最も力に優れたものである。法（ダルマ）は力に従うのだ。（二九）無力なものを慰めるような非難をして何になる。矢によって語れ。今こそ、師の見ているところで、矢によってお前の首を断ち切ってやる。（三〇）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それから、ドローナの許しを得て、敵の都城を征服するアルジュナは、兄弟たちと急いで抱き合ってから、彼に戦いを挑んだ。（二一）カルナはドゥルヨーダナとその弟たちに抱擁されてから、戦いの準備をして、弓矢を持って立っていた。（二二）すると、稲妻と雷鳴をともない、虹（インドラの武器）インドラを従者とし、鶴（バラーカ）（白色）の列で笑うかのような雲が天空をおおった。（二三）それから、インドラが〔息子への〕愛情から競技場を見下していると見てとり、太陽の方もそばに近づいた雲を取り除いた。（二四）アルジュナは、雲の陰に隠されて見え〔がたくなり〕、一方カルナは、日光に取り囲まれて認められた。（二五）ドリタラーシトラの息子たちは、カルナのいる側に立ち、ドローナとクリパとビーシュマは、アルジュナのいる側に立っていた。（二六）観衆は二手に分かれ、女たちも二手に分かれた。
クンティーは真相を知って失神した。（二七）すべての法（ダルマ）を知るヴィドゥラは、梅檀水をふりかけて、失神したクンティーを元気づけた。（二八）やがて息を吹き返した彼女は、甲冑をつけた二人の息子を見て非常に苦しんだが、どうすることもできなかった。（二九）
二人が大きな弓をかまえた時、一騎討ちの作法に通じ、一切の法を知る、シャラドヴァットの息子クリパが言った。（三〇）
「汝と一騎討ちをするクル族の王子は、パーンドゥの息子で、プリター（クンティー）の生んだ末の子である。（三一）偉丈夫よ、汝もまた父母と一族と、汝の属する諸王の系図について述べよ。それを知ってから、アルジュナは汝と戦うか否かを決めるであろう。（三二）」

そう言われて、カルナは恥ずかしさでうつ向いた。雨に濡れてしおれた蓮のように。(三三)

ドゥルヨーダナは言った。

「先生、王族の起源には三種あると論書に規定されております。王家の生まれの者と、英雄と、軍隊を率いる者とであります。(三四) もしアルジュナが王族でない者と戦いたくないというなら、私は彼（カルナ）をアンガ国の王位につけます。(三五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

次の瞬間、聖句《マントラ》を知るバラモンたちは、英雄カルナを黄金の席に座らせて、穀物と花々をともなう黄金の水瓶により灌頂して、その栄光に満ちた勇士をアンガ国の王位に即位させた。(三六)「王者の標識である」傘と犛牛《やく》の尾の払子《ほっす》（王者のシンボル）を受けた、雄牛のような王（カルナ）は、「万歳！」という声が終わった時、クルの王子に告げた。(三七)

「この王国の贈り物に釣り合うような、何をあなたにさしあげられるでしょうか。王中の虎よ、おっしゃって下さい。私はそのようにいたします。」

スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は彼に、「私は永遠の友情を望む」と告げた。(三八) カルナは、「承知しました」と答えた。二人は抱きあって、最高の喜びを味わった。(三九)

（第百二十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、アディラタ（カルナの養父）が競技場に入った。その上衣はずり落ち、汗をかいてふるえ、杖にすがって、あえぎながら。(一) カルナは彼を見ると、父に対する尊敬の念から、弓を捨てて、灌頂で濡れた頭を下げておじぎをした。(二) 御者《スータ》（アディラタ）はあわてて衣の端で両足をおおって、目的を果たした彼に、「息子よ」と言った。(三) そして愛情のあまり彼を抱きしめ、アンガ国王の即位灌頂式により濡れた頭を、涙で更に濡らした。(四)

ビーマセーナは彼を見て、「あれは御者の息子だ」と結論して、笑って言った。(五)

「御者の息子よ、お前はアルジュナと戦って殺されるには値しない。さっさと一族に似合いの鞭を持つがよい。(六) 最低の奴め、お前はアンガの王位はふさわしくない。犬が祭火のそばにある供物を食べるにふさわしくないように。(七)」

カルナは、わずかに唇をふるわせて溜め息をつき、天空にある太陽を見上げた。(八) 強力なドゥルヨーダナは怒りのあまり飛び上った。兄弟という蓮池から、発情した象が立ち上るように。(九) 彼は恐ろしく勇猛なビーマセーナに言った。

「狼腹よ、そのようなことをほざいてはならぬ。(一〇) 王族《クシャトリヤ》にとっては力が最も重要である。名ばかりの王族とも戦うべきである。また、英雄と河川の出自（流源）は知りがたいという。(一一) 火は水より生じて、動不動のもの（全世界）を満たす。悪魔を滅ぼす金剛杵《ヴァジュラ》（インドラの武器）はダディーチャ仙の骨から作られた。(一二) 聖なるグハ神（スカンダ）の出生は全くの秘密であり、アグニから生まれたとか、クリッティカー（すばる星）の息子だとか、ルドラ（シヴァ）の息子だとか、

ガンガー（ガンジス）の息子だとか言われている。(一三) 王族の女性から生まれた人々がバラモンであると知られていることもある。師匠（ドローナ）は水瓶から生まれた。クリパ師は葦の茎から生まれた。汝ら（パーンダヴァ）の生まれも周知のことだ。(一四) 生得の耳環と甲冑をつけ、神的な相をそなえ、太陽のような虎を、どうして鹿が生むであろうか。(一五) この王者は、アンガ国王どころか、全世界の王位にふさわしい。その腕力により、また、彼の命に従う私によって……。(一六) 私のやったことに我慢できない男がいたら、戦車に乗り、あるいは徒（かち）で、弓を引き絞るがよい。(一七)」

すると競技場全体に、喝采の声とともに「おお、おお」という大喚声が起こった。だが、その時、太陽が西に沈んだ。(一八) そこでドゥルヨーダナはカルナの手をとって、松明の火で照らして、その競技場から退出した。(一九) パーンダヴァ兄弟も、ドローナやクリパやビーシュマとともに、全員それぞれの家に引きあげて行った。(二〇) ある人々はアルジュナを讃え、ある人々はカルナを讃え、ある人々はドゥルヨーダナを讃えつつその場を去った。(二一) クンティーは神的な相から、アンガ国王がわが子であることを確認し、愛情により、彼女の内に密かな喜びが広がっていった。(二二) ドゥルヨーダナがアルジュナに対して抱いた恐怖も、カルナを見出して、急速に消滅して行った。(二三) そして、その武術の達人である勇士カルナは、この上なく甘い言葉でドゥルヨーダナにお世辞を言った。その頃は、ユディシティラですら、カルナに匹敵する戦士は地上に存在しないと考えていた。(二四)

（第百二十七章）

ドローナの復讐

その後、ドローナはすべての弟子たちを残らず集めて、師に対する謝礼を払って欲しいとうながした。(一)

「前線において、パーンチャーラ王ドルパダを捕えて連れて来てくれれば有難いのだが。それが最高の謝礼である。(二)」

「承知しました」と答えて、すべての勇士たちは速やかに戦車に乗り、師への謝礼を払うために、ドローナとともに出発した。(三) 雄牛のような勇士たちはパーンチャーラに到着して攻略し、強力なドルパダの都市を粉砕した。(四) バラタの雄牛たちは前線でドルパダ・ヤジュニャセーナを捕えて、彼の大臣らとともに、ドローナに引き渡した。(五) 誇りを砕かれ、財産を奪われ、支配下に帰したドルパダに対し、ドローナは心の中で怨みを嚙みしめながら言った。(六)

「私は力ずくであなたの国土を粉砕し、都市を粉砕した。生きながら敵の手に捕えられて、旧友が必要ではないかね。(七)」

そのように言ってから笑い、心を決めて、彼に再び告げた。

「王よ、恐れることはない。生命の危険はない。我々バラモンは寛容であるから。(八) 少年時代、あなたは隠棲所で私と一しょに遊んでいる時、私とあなたの友情は深まって行った。

（九）私は再びあなたとの友情を望んでいる。王よ、私はあなたに贈物をする。王よ、王国の半分を受け取りなさい。（一〇）王でないものは王の友になることができないと言うから。ヤジュニャセーナよ、だから私はあなたの王国を望んだのである。（一一）あなたはガンガーの南岸の王となり、私は北岸の王になる。パーンチャーラよ、もし異存がなければ、私を友と認めてくれ。（一二）」

ドルパダは言った。

「バラモンよ、偉大な英雄たちにあっては、このような（好意）は驚くに値しない。私はあなたに満足した。あなたの永遠の友情を願っています。（一三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように言われて、ドローナは彼を自由にした。そして心から喜んで、彼をもてなし、王国の半分を返還した。（一四）　（第百二十八章）

ドゥルヨーダナの陰謀

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

邪悪なドゥルヨーダナは、ビーマセーナが卓越した力を持ち、アルジュナが武術に通達しているのを見て、非常に悩んだ。（一）そこでカルナやシャクニは様々な方策を用いてパーン

ダヴァ兄弟を殺そうとした。（二）しかし、パーンダヴァたちはそれらすべてを見破った。だが、彼らはヴィドゥラの意見に従って、それらを公表しなかったのである。（三）

市民たちは、パーンドゥの息子たちが諸々の美質をそなえているのを知って、広場や集会場に集まって言った。（四）

「智慧の眼をそなえたドリタラーシトラ王は、以前、盲目であるから王位を継承しなかったのに、どうして王となっているのか。（五）また、シャンタヌの息子である、約束に忠実で偉大な誓戒を守るビーシュマは、かつて王位を拒否し、今も決して継承しようとはしないであろう。（六）そこで我々は今、パーンドゥの長男であるユディシティラを即位させるのがよいであろう。彼は若年ながら、老成しており、真実の人で、慈悲深い人である。（七）彼はビーシュマと、ドリタラーシトラとその息子たちを尊敬し、種々の恩恵を与えてくれるであろう。（八）」

邪悪なドゥルヨーダナは、ユディシティラ贔屓の市民たちがそのように言うのを聞いて、非常に悩んだ。（九）邪な性格の彼は、彼らの言葉に我慢できず、嫉妬に苦しんでドリタラーシトラのもとに行った。（一〇）人のいないところで父を見て、挨拶してから、彼は市民がユディシティラ贔屓であることに苦しみ、次のように告げた。（一一）

「父上、私は市民たちが不吉な言葉をしゃべっているのを聞きました。彼らはあなたやビーシュマをないがしろにして、パーンドゥの息子が王となることを望んでいるのです。（一二）しかし、これはまたビーシュマの意見でもあります。彼は王位を望んでいないのですから。しかし、

我々に対しては、市民たちは最高の苦しみをもたらそうとしております。(二三) 以前、パーンドゥはその美質の故に、父から王国を受け取りました。だが、あなたは欠陥があったので王国を受け取りませんでした。(二四) もしあのパーンドゥの息子(ユディシティラ)が、パーンドゥから王位を継承すれば、彼の息子が必然的にそれを受け、その息子、またその息子と受け継ぐことになるでしょう。(二五) そこで我々と我々の息子たちは、王位継承からはずされ、世間の人々に軽蔑されることになりましょう。(二六) 王よ、我々が常に地獄に堕ち(苦しみ)、他人の餅で露命をつなぐことにならないように、速やかに対処して下さい。(二七) 王よ、もしあなたがあらかじめ揺ぎなき王権を握っていれば、人々が服従しなくとも、我々は必ずや王位を獲得するでありましょう。(二八)」(第百二十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

息子がこのように言うのを聞いて、ドリタラーシトラは少しの間考えて、息子に答えた。(一)

「パーンドゥは常に法(ダルマ)を守り、好んで私のためによいことをしてくれた。もちろん、すべての親族に対してだが、特に私に対して親切だった。(二) 食物など何でも、彼が独占しようとしたという記憶はない。いつも私にくれた。堅く誓戒を守る彼は王国も私に譲ってくれた。(三) パーンドゥの息子も、彼と同じように、法に専念し、美質をそなえ、世に知れわたり、

市民に尊敬されている。(四) その彼を、どうして父祖伝来の王国から力ずくで追い出すことができよう。とりわけ、彼には味方がいるというのに……。(五) パーンドゥは常に大臣たちや軍隊の世話をした。彼らの息子たちや孫たちを、実によく世話した。(六) パーンドゥは以前、パウラヴァ一族の人々に親切だった。彼らはユディシティラのために、我々と我々の縁者たちを殺さないだろうか。(七)」

ドゥルヨーダナは言った。

「父上、その危険については、私もよく考えてみました。臣下たちはすべて、財物と名誉でつれば、必ずや我先に私たちの味方になるでしょう。王よ、国庫とその係りの大臣は、今や私が掌握しています。(八―九) そこであなたは、何か穏当な方便を用いて、パーンダヴァたちを速やかにヴァーラナーヴァタの都へ追放するのがよろしいと思います。(一〇) 王権が私のもとに確立したら、クンティーとその息子たちを再びもどします。(一一)」

ドリタラーシトラは言った。

「ドゥルヨーダナよ、私にもそのような考えがないではない。しかし、その計画は邪なので、隠していたのだ。(一二) ビーシュマやドローナやヴィドゥラやクリパは、クンティーの息子たちが追放されることを決して承認しないであろう。(一三) 息子よ、クル一族の人々にとって、我らと彼らは対等なのであるから。あれら法(ダルマ)を守る思慮深い人々は、不公平を望みはしないだろう。(一四) わが子よ、そこで我々は、あの偉大なクル一族の人々や世界中の人々により、殺されることとならないであろうか。(一五)」

ドゥルヨーダナは言った。
「ビーシュマは常に中立です。ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は私の味方です。ドローナは必ずや息子のいる側につくでしょう。（一六）クリパはその三者のいる側につきます。彼はドローナと妹（クリピー）の息子（アシュヴァッターマン）とを決して捨てないでしょう。（一七）ヴィドゥラは密かに敵の側についていますが、利害の点で我々とつながっています。そして、彼一人では、パーンダヴァのために我々を害することはできません。（一八）そこで今すぐに、パーンドゥの息子たちを、母とともに、ヴァーラナーヴァタに追放しなさい。何の不都合も起きないでしょう。（一九）そうすることによって、私の不眠の原因、心に刺さった恐ろしい棘、燃え上る悲しみの炎を滅ぼして下さい。（二〇）」　（第百三十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
それから、ドゥルヨーダナ王子とその弟たちは、財物と名誉と贈物によって、次第にすべての臣下たちを味方につけた。（一）ドリタラーシトラに用いられた幾人かの巧妙な顧問官たちは、ヴァーラナーヴァタが美しい都であることを吹聴した。（二）
「ヴァーラナーヴァタの都では、獣主（パシュパティ）（シヴァ神）の盛大な集会（祭り）が近づいている。それは地上で最も美しいものだ。（三）その都は一切の宝物に満ち、人々を魅了する地である。」
彼らはドリタラーシトラに命じられて、そのように語った。（四）このようにヴァーラナーヴァタが美しい都であると語られているうちに、パーンドゥの息子たちはそこへ行って見たいものだという気になった。（五）彼らが好奇心を抱いたと判断し、ドリタラーシトラ王はパーンダヴァ兄弟に告げた。（六）

「私の臣下たちはいつも、ヴァーラナーヴァタが世界で最も美しい都であると、繰り返し語っている。（七）わが子よ、もしその気があれば、一族郎党を連れて、ヴァーラナーヴァタの祭りを神々のように楽しみなさい。（八）バラモンや歌手たちに、ありとあらゆる宝物を好きなだけ与えるがよい。威力に満ちた神々のように。（九）しばらく楽しんで、最高の喜びを味わってから、幸福な気分でまたハースティナプラにもどって来なさい。（一〇）」
ユディシティラはそれがドリタラーシトラの望みであると理解し、また自分には助力者がいないと考え、「承知しました」と王に答えた。（一一）それから彼は、ビーシュマや賢者ヴィドゥラやドローナなどに、おもむろに、悲し気に告げた。（一二―一三）
「我々は、ドリタラーシトラの命により、一族とともに、人々に讃えられる美しい都ヴァーラナーヴァタに住みます。（一四）みなさん、快く祝福の言葉を下さい。我々が祝福により力づけられたら、災いが我々にふりかかることはないでしょう。（一五）」
パーンドゥの息子がそう言うと、すべてのクルの人々は、晴れ晴れとした顔でパーンダヴァ兄弟を激励した。（一六）
「道中、あなた方がいつも、すべての生類から祝福されるように。パーンドゥの息子たちよ、いたるところで何の災いもないように。（一七）」

祝福を受けてから、パーンダヴァ兄弟は、王国〔の一部〕を得るためのすべての儀式を終えた後で、ヴァーラナーヴァタに向かった。(一八)

(第百三十一章)

燃えやすい家

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王が偉大なパーンダヴァ兄弟にこのように告げた時、邪悪なドゥルヨーダナは大喜びした。(一)彼は腹心のプローチャナを人のいないところに連れて行って、右手をとって言った。(二)「プローチャナよ、この財宝に満ちた大地が私のものになった。それは私のものであるとともにお前のものだ。それを守るがよい。(三)私には、手を組んで謀りごとをめぐらす相手として、お前のように信頼の置ける助力者は他にいない。(四)謀りごとを守れ。私のライバルを取り除いてくれ。巧妙な手段により、私の言うことをやってくれ。(五)パーンダヴァたちは、ドリタラーシトラによって、ヴァーラナーヴァタに送られた。彼らはドリタラーシトラの命により、祭りで楽しむであろう。(六)そこでお前は、駿馬〔原文は「驢馬」〕にひかせた高速の車に乗って、今日のうちにヴァーラナーヴァタに着くようにせよ。(七)そこへ行き、兵器庫に隣接して、念入りに囲いをした、四つの館からなる家を、大金を出して建てさせろ。(八)麻や樹脂など、何でも燃えやすい材料を使用させよ。(九)たくさんの乳脂と油とラックを土に混ぜて漆喰を作り、それを壁に塗らせろ。(一〇)そして、麻、竹、ギー〔バター〕、木材、種々の装置をその家全体に、いたるところに配置せよ。(一一)だが、パーンダヴァたちが検査しても、お前を疑わないように、また、他の人々が、燃えやすい建築だといぶからないようにやれ。(一二)このようにして家ができたら、最高の敬意を払って、パーンダヴァとクンティーとそのおつきの者たちをそこに住まわせよ。(一三)そこに、パーンダヴァのために、最高の座席や乗物や寝台を用意せよ。私の父が満足するような……。(一四)時が至るまで、彼らがヴァーラナーヴァタの都で安心して楽しめるように、一切を手配せよ。(一五)しかし、彼らがすっかり安心して何の恐れもなく寝たと見定めたら、その家の入口に火をつけろ。(一六)彼らが焼死したら、世人や親族はパーンダヴァについて『彼らは自分の家で〔失火により〕焼け死んだ』と言うであろう。(一七)」

プローチャナは「承知しました」とクルの王子に約束して、駿馬〔驢馬〕のひく車でヴァーラナーヴァタに行った。(一八)彼はドゥルヨーダナの命をうけ、速やかにそこに行って、王子に言われたことをすべてやってのけた。(一九)

(第百三十二章)/(第百三十三章「ヴィドゥラの忠告」略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ヴァーラナーヴァタの全市民は、最高の人々であるパーンドゥの息子たちが来たことを聞くと、この上なく喜んで、幾千となく様々な車に乗り、教典の規定に従って、すべての吉祥

の品をたずさえて都から出て、熱意をもって歓迎した。(二)市民たちは彼らに会い、みなして万歳と叫び、彼らを取り囲んでうやうやしく立っていた。(三)虎のような人、ダルマ王ユディシティラは、市民たちに囲まれて、神のように輝き、まるで神々に囲まれた金剛手(インドラ)のようであった。(四)非難の余地のない王子たちは、市民たちに歓迎され、また市民たちに答礼して、飾りつけられ、群衆であふれるヴァーラナーヴァタに入った。(五)勇士たちは都に入ると、自己の職務にいそしむバラモンたちの家へ行った。(六)それから最高の人々は、都の長官たちの家、武人たちの家、更には、実業者(ヴァイシャ)、従僕(シュードラ)の家々をも訪問した。(七)市民たちに尊敬されつつ、パーンダヴァの勇士たちは、その後で、プローチャナに案内されて宿舎に行った。(八)そこでプローチャナは、彼らに、飲食物、美しい寝台、すばらしい座席を提供した。(九)彼にもてなされて、彼らは主立った随行の人々とともに、都の住民たちに尊敬されつつ、そこに滞在した。(一〇)

彼らが十日間そこに滞在した時のことである。プローチャナは彼らのために「吉祥」と呼ばれる家——実は不吉な家——を提供した。(一一)虎のような勇士たちは、プローチャナの言に従って、随行の人々とともにそこに入った。あたかもグヒヤカ(夜叉)たちがカイラーサ山に入るように。(一二)しかし、すべての法(ダルマ)に通じたユディシティラは、その家を調べてみて、これは燃えやすい家だとビーマセーナに告げた。乳脂とラックが混った脂肪の臭いをかいだからである。(一三)

「この家はきっと燃えやすく作ってあるのだ。建築の時、麻と樹脂を用いたに違いない。材

料はすべて、藺草(ムンジャ)、バルヴァジャ草、竹などで、おまけにギー(バター)をかけてある。(一四)建築に通じた熟練の職人たちにより念入りに作られている。邪悪なプローチャナは、私が安心したら焼き殺そうと望んでいるのだ。(一五)ビーマよ、聡明なヴィドゥラが前に予見し、〔ハースティナプラを出る時〕私に警告した災難というのはこのことなのだ。(一六)彼に警告されて、そこで我々はこれが不吉な家であることを知った。ドゥルヨーダナの命に従う隠密の匠(たくみ)によって念入りに作られた。(一七)」

ビーマは言った。

「もしこの家が燃えやすく作られているとお思いなら、前の宿舎にもどった方がよい。(一八)」

ユディシティラは答えた。

「何くわぬ顔で住んでいた方がよいと思う。術中に陥ちたふりをして、ここから脱れる何かよい確かな道を探りながら。(一九)もしプローチャナが我々の態度〔の真意〕を知ったなら、彼は事を急いで、我々を無理にでも焼き殺そうとするであろう。(二〇)あのプローチャナは、人の非難や法(ダルマ)にもとることを恐れない奴だ。あの愚か者は、スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)の命に忠実だから。(二一)我々が焼き殺されたら、祖父のビーシュマは怒って〔決起し〕ないだろうか。また彼は、クル族の人々を決起させないであろうか。〔反乱は〕正義(ダルマ)であると考えて、彼は決起するであろう。同様に、他のクルの雄牛も決起するであろう。(二二)しかるに、もし我々が焼き討ちを恐れて逃げたら、王位を狙うスヨーダナは、スパイを用いて我々すべて

を暗殺するであろう。（二三）彼には地位があるが、我々にはない。彼には味方がいるが、我々にはない。彼には豊かな資金があるが、我々にはない。彼は必ずや種々の手段により我々を殺すであろう。（二四）それ故、我々はあの悪党と、邪悪なスヨーダナをあざむいて、いずこかで隠れて暮らすべきである。（二五）そこで我々は、狩猟を習いとして、この地を歩きまわるべきである。逃げる際に、道を知悉しているように。（二六）そして、今すぐに、秘密の地下壕を作ろう。そこに入って息を殺していれば、火は我々を焼かないであろう。（二七）我々がそこにいることを、プローチャナも市民たちも、誰も気づくことはないだろう。精を出して、そのように段取りしよう。（二八）」

（第百三十四章）

秘密の地下壕

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、ヴィドゥラの友人である、ある熟練の穴掘り師が来て、人のいないところで、パーンダヴァ兄弟に次のように言った。（一）

「私はヴィドゥラ様に、パーンダヴァ兄弟の役に立つようにと派遣された、非常に腕のよい穴掘り師です。何をしたらよいでしょうか。（二）ヴィドゥラ様は密かに申されました。『信頼にもとづき、パーンダヴァ兄弟のためになることをせよ』と。何をしたらよいでしょうか。（三）黒月の第十四日目の夜に、プローチャナはあなたの家の入口に火をつけるでしょう。（四）

ドゥルヨーダナは、母親もろともパーンダヴァの勇士たちを焼き殺そうと決意したということです。（五）また、ユディシティラ様、（出発の際、）ヴィドゥラ様が異邦人（ムレーッチャ）の言葉で何か言ったと思います。あなたはそれに対し、『承知しました』と答えました。これで私を信用なさるでしょう（ヴィドゥラとの間だけの秘密を知っているから）。（六）」

真実を守るユディシティラは言った。

「友よ、私はあなたを、ヴィドゥラの友人であると確認した。（七）清く、信頼でき、常に忠誠を尽くす親友であることを。聖者（ヴィドゥラ）からの証拠の品は何ら必要ない（異本に従えば、「見者（ヴィドゥラ）には知らないことはない」という意味になる）。（八）我々にとってあなたは彼同様である。我々はあなたを差別しない。我々は彼に依存するように、あなたに依存する。聖者（ヴィドゥラ）と同じように、我々を守って下さい。（九）プローチャナはドゥルヨーダナに命じられて、この燃えやすい家を作ったのだと私は思う。（一〇）あの邪悪で悪意に満ちた悪党は、国庫を握り仲間を持ち、常に我々を迫害する。（一一）そこであなたは努力して、我々をこの火から救って下さい。我々が焼死したら、スヨーダナの望みはかなうことになるでしょう。（一二）この邸宅は、退避できないように、あの悪党の完備した武器庫に近接して、その壁の際に建てられています。（一三）ヴィドゥラは彼のこの悪だくみを前もって知ったので、我々に警告したのでしょう。（一四）ヴィドゥラが事前に察知した災いが今やふりかかって来ました。プローチャナに気づかれぬように我々を救って下さい。（一五）」

掘り師は「承知しました」と約束して仕事にとりかかった。彼は溝を掘って、非常に大き

な穴を住宅の中央に作った。それは入口を小さく作ってあり、床と同一面に見えないように扉がついていた。(一六―一七) 更にプローチャナに見つからないように、入口を隠した。そのプローチャナは、邪悪な意図をもって、常に戸口で〔見張って〕いた。(一八) パーンダヴァたちはみな武器を持って、その地下壕の中で夜を過ごした。昼は、森から森へと、狩をしてまわった。(一九) 彼らは安心したふりをして安心せず、満足したふりをして満足せず、プローチャナをあざむきつつ、非常に苦労しながら過ごした。(二〇) 都の住人たちは誰も彼らの意図を見抜けなかった。ただ、ヴィドゥラの友であるあの優れた掘り師を除いては。(二一)

(第百三十五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼らは安心したかのように、満足して丸一年間過ごした。それを見てプローチャナは喜んだ。(一) プローチャナが喜んでいるのを見て、法(ダルマ)を知るユディシティラは弟たちに言った。(二)

「邪悪なプローチャナは、我々が安心し切っていると思って、悪党ながらすっかり騙されてしまった。今こそ逃げる機会だと思う。(三) 武器庫に火を放ってプローチャナを焼き殺してから、我々は〔身代りとして〕六人の者をここに置き、人に見られぬように脱出しよう。(四)」

そこでクンティーは、布施をするという口実のもとに、ある夜バラモンに御馳走をした。そこに婦人たちもやって来た。(五) 彼女たちは楽しんで過ごし、好きなだけ食べかつ飲んだ。そして夜も更け、みなはクンティーにいとまごいをして家に帰った。(六) ところが、たまたまニシャーダ族の女が、運命のいたずらから、五人の息子とともに、食物を求めてその宴会に来ていた。(七) 彼女は息子たちとともに酒を飲み、酔って意識が朦朧となり、すべての息子たちとともにその家の中で死んだように眠ってしまった。(八) さて、夜中、人々が眠った頃、激しい風が吹いた。その時、ビーマはプローチャナの寝ている場所に火を放った。(九) それから、火は燃え上がり、凄まじい音をたてたので、多くの人々が目を醒ました。(一〇)

市民たちは言った。

「ドゥルヨーダナに用いられたあの悪党は、愚かにも、あの家を作って燃やし、その結果、自らも身を滅ぼした。(一一) ああ、ドリタラーシトラの邪悪な心に災いあれ。大臣を使って、清いパーンダヴァ兄弟を焼き殺すとは。(一二) しかし、すっかり信用した、罪もない最高の人たちを焼き殺した、あの極悪人が焼死したということは、不幸中の幸いである。(一三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ヴァーラナーヴァタの住民たちは、このように嘆きつつ、その家を取り巻いて、夜じゅう立ち尽くしていた。(一四)

パーンダヴァの方は、母とともに、非常に苦労して、例の穴を用いて脱出し、密かに、人

に見つかることなく退去した。(二五) しかし、勇猛なパーンダヴァと彼らの母は、不眠と興奮のために、急いで進むことはできなかった。(二六) そこで、恐ろしく速くて強力なビーマセーナは、兄弟すべてと母とを運びながら進んだ。(二七) 力持ちの彼は母を肩にのせ、双子(ナクラとサハデーヴァ)を両腰にのせ、強力な二人の兄弟(ユディシティラとアルジュナ)を両手で持って運んだ。(二八) 威力ある狼腹(ビーマ)は力ずくで樹々を折り、両足で大地を裂き、風のように速やかに進んで行った。(二九)

(第百三十六章)／(第百三十七章略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。(一―五略)――

夕暮れ時、バラタの雄牛たちは、とある森に到着した。それは〔食用の〕根や木の実や水が少なく、猛禽や猛獣のいる恐ろしい森であった。(六) 黄昏は恐ろしく、鳥獣は猛々しくなった。すべての方角は、季節はずれの嵐で暗くなった。(七) クルの王子(パーンダヴァ)たちは、疲労と渇きに苦しみ、また眠気も募り、もう進むことができなくなった。(八) それからまた人気(ひとけ)のない大きな恐ろしい森に入り、ビーマは広い陰のある心地よいバニヤン樹に駆け寄った。(九) ビーマはそこでみなを下ろして言った。

「私は水を探して来ます。ここで休んでいて下さい。(一〇) あそこで、水に住む鶴(サーラサ)たちが甘く鳴いています。きっとあそこに大きな池があると思います。(一一)」

長男に「行きなさい」と許可されて、彼は水鳥の鳴いているところへ行った。(一二) ビーマはそこで水を飲み、水浴し、上衣に入れて水を持ち帰った。(一三) 母のいる方に向って急いで二キロほどもどったところ、母と兄弟たちが大地に眠っているのを見て、狼腹はひどく苦悩して泣いた。(一四)

(第百三十八章)

ちくま学芸文庫

マハーバーラタ1

二〇〇二年一月九日　第一刷発行

著　者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　株式会社積信堂
ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三

ISBN4-480-08601-3 C0198